南相馬市埋蔵文化財調査報告書　第20集

泉官衙遺跡

― 陸奥国行方郡家出土土器・木簡の報告 ―

２０１２．３

南相馬市教育委員会

南相馬市埋蔵文化財調査報告書　第20集

泉官衙遺跡

― 陸奥国行方郡家出土土器・木簡の報告 ―

２０１２．３

南相馬市教育委員会

序　　文

平成23年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う大津波は、東日本の太平洋沿岸の集落を一様に押し流し、多くの人命と財産を奪い去りました。河口から1.5kmの場所にある泉官衙遺跡においても、およそ半分程度の範囲に津波が押し寄せました。津波は、人家を打ち破り、瓦礫を漂着させ、田畑一面を海砂で覆うといった甚大な被害をもたらしました。

今回の地震と津波により、大きく注目を浴びることになったのは、平安時代に起きた、いわゆる貞観地震と津波、そしてその被害のことでした。泉官衙遺跡は、平成22年2月22日、陸奥国行方郡家跡の評価を得、国史跡の指定をいただいた遺跡ですが、貞観の津波はまさに、行方郡家が営まれていた時代に起きた事件でありました。

本遺跡での当時の津波の痕跡や被害等は、これまでの発掘調査では十分に検証できてはいませんが、今回のことが、千年以上の時間を越えて、自然災害の状況があまりにも酷似していることや昔の人々も自然の脅威の前にはなす術がなかったことを思いあぐねるばかりです。また、こうして２度の大きな自然災害を経た泉官衙遺跡を、私どもは後世に語り継ぐ責務があると感じているところです。

さて、本書は、これまでの発掘調査の成果の一部をまとめたものですが、多くの方々の目に触れ、活用されることを祈念しております。

最後になりますが、発掘調査を実施するにあたり、地権者の皆様をはじめ、多くの方々に多大なるご協力賜りましたことに厚く御礼申し上げますとともに、泉官衙遺跡調査・整備指導委員会、文化庁及び福島県教育庁のご指導・ご助言に、深く感謝申し上げます。

平成24年３月

南相馬市教育委員会
教育長　青　木　紀　男

例　　言

1．本書は泉官衙遺跡及び泉廃寺跡の調査成果報告である。掲載した内容は、平成６年度から平成22年度までに実施した発掘調査で出土した遺物のうち土器類・木簡についての報告である。

2．本書に掲載した発掘調査に係る調査経費は、試掘調査並びに内容・範囲確認調査は国庫補助金・県費補助金の交付を得、農業基盤整備事業に係る調査経費は福島県相双農林事務所及び旧原町市（現南相馬市）が負担し、原町市道改良に係る経費は旧原町市が負担している。

3．本書の印刷に係る経費は、国庫補助事業の対象としている。

4．調査を実施するにあたっては、泉官衙遺跡調査・整備検討委員会（旧名称　泉廃寺跡調査・整備検討委員会）を組織し、指導・助言を得た。委員は下記のとおり。

岡田茂弘（福島県文化財保護審議会長・元東北歴史博物館長）

鈴木　啓（元福島県考古学会長）

宮本長二郎・田中哲雄（元東北芸術工科大学）　小林敬一（元東北芸術工科大学）

今泉隆雄（東北大学）　佐川正敏（東北学院大学）　玉川一郎（福島県考古学会長）

5．本書に掲載した原稿は、第1章は荒　淑人、第２章・第３章は藤木　海が執筆した。

6．本書の編集は堀　耕平が行った。

7．本書では写真を掲載していない。別の機会に譲るものとする。

8．調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次
挿図目次
表　目　次

第1章　泉官衙遺跡の概要

第1節　泉官衙遺跡を取り巻く環境 …… 1
　第1項　地理的環境 …… 1
　第2項　歴史的環境 …… 1

第2節　泉官衙遺跡の概要 …… 6
　第1項　泉廃寺跡から泉官衙遺跡へ …… 6
　第2項　泉官衙遺跡の概要 …… 7

第2章　土器類

第1節　郡庁院跡（寺家前地区） …… 15
第2節　正倉院跡（旧福島県史跡指定地区） …… 38
第3節　館院跡（町池地区） …… 51
第4節　町地区 …… 79
第5節　館前地区 …… 99

第3章　木簡

1号木簡 …… 110
2号木簡 …… 111
3号木簡 …… 112
4号木簡 …… 112
5号木簡 …… 113
6号木簡 …… 115

挿図目次

第１図　南相馬市の位置 …… 1
第２図　遺跡周辺の地質図 …… 2
第３図　周辺の郡家遺跡 …… 3
第４図　泉官衙遺跡の位置 …… 6
第５図　泉官衙遺跡の地区割 …… 8
第６図　正倉院の様相 …… 9
第７図　郡庁院の様相 …… 10
第８図　寺家前北方官衙の様相 …… 11
第９図　町池地区の様相 …… 12
第10図　町地区の様相 …… 13
第11図　舘前地区の様相 …… 13
第12図　泉官衙遺跡全体図 …… 14
第13図　郡庁院出土土器① …… 28
第14図　郡庁院出土土器② …… 29
第15図　郡庁院出土土器③ …… 30
第16図　郡庁院出土土器④ …… 31
第17図　郡庁院出土土器⑤ …… 32
第18図　郡庁院出土土器⑥ …… 33
第19図　郡庁院出土土器⑦ …… 34
第20図　郡庁院出土土器⑧ …… 35
第21図　郡庁院出土土器⑨ …… 36
第22図　郡庁院出土土器⑩ …… 37
第23図　正倉院出土土器① …… 45
第24図　正倉院出土土器② …… 46
第25図　正倉院出土土器③ …… 47
第26図　正倉院出土土器④ …… 48
第27図　正倉院出土土器⑤ …… 49
第28図　正倉院出土土器⑥ …… 50
第29図　館院出土土器① …… 68
第30図　館院出土土器② …… 69
第31図　館院出土土器③ …… 70
第32図　館院出土土器④ …… 71
第33図　館院出土土器⑤ …… 72
第34図　館院出土土器⑥ …… 73
第35図　館院出土土器⑦ …… 74
第36図　館院出土土器⑧ …… 75
第37図　館院出土土器⑨ …… 76
第38図　館院出土土器⑩ …… 77
第39図　館院出土土器⑪ …… 78
第40図　町地区出土土器① …… 88
第41図　町地区出土土器② …… 89
第42図　町地区出土土器③ …… 90
第43図　町地区出土土器④ …… 91
第44図　町地区出土土器⑤ …… 92
第45図　町地区出土土器⑥ …… 93
第46図　町地区出土土器⑦ …… 94
第47図　町地区出土土器⑧ …… 95
第48図　町地区出土土器⑨ …… 96
第49図　町地区出土土器⑩ …… 97
第50図　町地区出土土器⑪ …… 98
第51図　舘前地区出土土器① …… 102
第52図　舘前地区出土土器② …… 103
第53図　舘前地区出土土器③ …… 104
第54図　舘前地区出土土器④ …… 105
第55図　舘前地区出土土器⑤ …… 106
第56図　舘前地区出土土器⑥ …… 107
第57図　舘前地区出土土器⑦ …… 108
第58図　舘前地区出土土器⑧ …… 109
第59図　１号木簡 …… 118
第60図　２号木簡 …… 119
第61図　３号木簡 …… 120
第62図　４号木簡 …… 121
第63図　５号木簡 …… 122
第64図　６号木簡 …… 123

表 目 次

遺物観察表
第13図郡庁院出土土器①観察表 ……124
第14図郡庁院出土土器②観察表 ……124
第15図郡庁院出土土器③観察表 ……125
第16図郡庁院出土土器④観察表 ……125
第17図郡庁院出土土器⑤観察表 ……126
第18図郡庁院出土土器⑥観察表 ……126
第19図郡庁院出土土器⑦観察表 ……126
第20図郡庁院出土土器⑧観察表 ……127
第21図郡庁院出土土器⑨観察表 ……128
第22図郡庁院出土土器⑩観察表 ……128
第23図正倉院出土土器①観察表 ……130
第24図正倉院出土土器②観察表 ……130
第25図正倉院出土土器③観察表 ……130
第26図正倉院出土土器④観察表 ……131
第27図正倉院出土土器⑤観察表 ……131
第28図正倉院出土土器⑥観察表 ……132
第29図館院出土土器①観察表 ……133
第30図館院出土土器②観察表 ……133
第31図館院出土土器③観察表 ……134
第32図館院出土土器④観察表 ……134
第33図館院出土土器⑤観察表 ……135
第34図館院出土土器⑥観察表 ……136
第35図館院出土土器⑦観察表 ……136
第36図館院出土土器⑧観察表 ……137
第37図館院出土土器⑨観察表 ……138
第38図館院出土土器⑩観察表 ……138
第39図館院出土土器⑪観察表 ……139
第40図町地区出土土器①観察表 ……140
第41図町地区出土土器②観察表 ……140
第42図町地区出土土器③観察表 ……140
第43図町地区出土土器④観察表 ……141
第44図町地区出土土器⑤観察表 ……141
第45図町地区出土土器⑥観察表 ……142
第46図町地区出土土器⑦観察表 ……142
第47図町地区出土土器⑧観察表 ……143
第48図町地区出土土器⑨観察表 ……144
第49図町地区出土土器⑩観察表 ……145
第50図町地区出土土器⑪観察表 ……145
第51図館前地区出土土器①観察表 ……147
第52図館前地区出土土器②観察表 ……147
第53図館前地区出土土器③観察表 ……147
第54図館前地区出土土器④観察表 ……148
第55図館前地区出土土器⑤観察表 ……148
第56図館前地区出土土器⑥観察表 ……148
第57図館前地区出土土器⑦観察表 ……150
第58図館前地区出土土器⑧観察表 ……150

第１章　泉官衙遺跡の概要

第１節　泉官衙遺跡を取り巻く環境

第１項　地理的環境

福島県南相馬市は、福島県太平洋岸の北部に位置し、人口約71,561人（平成23年３月11日現在）、面積約398.5㎢を有する。南相馬市が所在する福島県は、東北地方太平洋側の最も南に位置し、北には宮城県と山形県が、西には新潟県、南には茨城県と栃木県で県境を接している。

また、東に太平洋を臨み、西には阿武隈山地が南北に連なっており、ここから太平洋に向かって派生した丘陵間に、市街地の多くが形成されている。

第１図　南相馬市の位置

南相馬市内の地形は、西側の山地域と東側の海岸平野に２大別され、山地域である阿武隈山地の山々は、起伏が著しく、傾斜の強い斜面が形成されるが、連峰の頂は、高まりが揃ったなだらかな様相を呈している。市内には阿武隈山地から東流するいくつかの河川があり、この河川は低位丘陵間を流れ、所々で小規模な支流河川との合流を重ねながら、太平洋に到達している。

河川により形成される段丘は、河床の発達高度により、大きく低位段丘・中位段丘・高位段丘に区分されている。

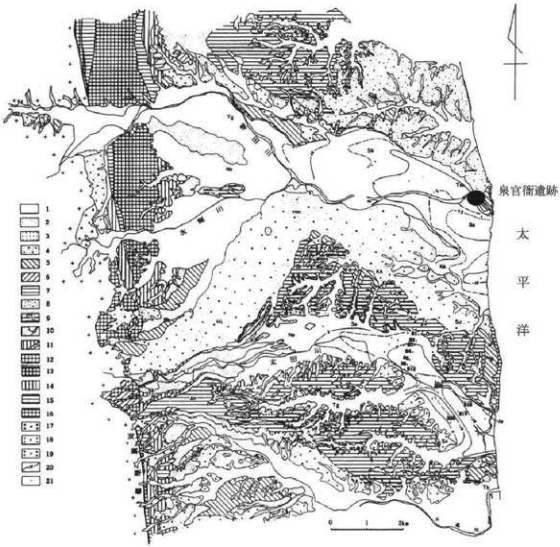
第２項　歴史的環境

泉官衙遺跡が造営を開始する７世紀後半から、廃絶を迎える10世紀前半までに位置付けられる遺跡には、官衙関連遺跡や集落遺跡、生産遺跡などがある。これらの各遺跡は当時の行政機構の中枢であった泉官衙遺跡とは決して無関係なものではなく、何らかの形で行方郡家の影響を受けていたものと推測される。

以下では、官衙関連遺跡、寺院遺跡、集落遺跡、そして生産遺跡を瓦と須恵器の生産に区分して、この時期の様相を概観する。

官衙関連遺跡

現在の福島県太平洋側で建評がなされた評家のうち、石城郡家に比定されている根岸遺跡では継続的な発掘調査が実施され、郡家の具体的な様相が判明している。行方郡家に隣接する郡



1："神積層"，2：第6段丘構成層，3：第5段丘構成層，4：第4段丘構成層，5：第3段丘構成層，6：第2段丘構成層，7：第1段丘構成層，8～11：竜の口層，8：同c層（砂岩），9：同c層（シルト岩・京塚沢凝灰岩），10：同b層，11：同a層，12～19：基盤岩類，12：塩手層，13：小山田層，14：富沢層，15：中の沢層，16：掛窪層，17：古生層，18：花崗岩類，19：鉄岩，20：竜の口層上面標高（m），21：ボーリング地点と孔番，Ah：畦原，Bb：馬場，Hi：鷹雀ヶ原，Hm：原町市街，Ht：東高松，Ka：菅浜，Kh：北原，Kk：片倉，Mg：間形沢，Mm：米々沢，Nn：長野，No：中太田，Om：大堤，Sd：寧，Se：下江井，Sk：下北高平，So：下太田，Ss：下浜佐，Tb：塚原，Tg：鶴谷，Tm：館前，Yg：横上

第2図　遺跡周辺の地質図

家の標葉郡と宇多郡の郡家（評家）所在地については、標葉郡家に双葉町郡山五番遺跡、宇多郡家には相馬市黒木田遺跡があてられており、その具体的な様相の把握は今後の調査の進展を待つしかないが、宇多評家に比定されている黒木田遺跡は、相馬市内を流れる宇田川北岸の微高地上面に立地し、幕末に奥州中村藩が編纂した地誌である奥相志には「川原宿　田圃　往古舟橋の西に駅あり　川原宿という。この地多く古瓦を出す　布目あり　蓋し神祠仏閣の跡か」と記されるように、古くから古瓦が出土することで知られており、中野廃寺跡と呼ばれること

もある。過去に、ほ場整備事業に伴う範囲確認のための試掘調査がなされた以外には本格発掘調査の経歴はなく、遺跡の具体的な様相については分からない。この時の調査では、瓦溜や掘立柱建物跡、礎石の残る建物基壇が確認されており、宇多郡家（評家）とそれに付属する寺院跡を内包する形で把握されていると考える意見が多い。

標葉評家に比定される郡山五番遺跡は、前田川の南岸に展開する郡山台地の上面にあり、古くから古瓦が出土することで知られている。これらの瓦には泉官衙遺跡から出土するものと同じ文様を有するものがある。遺跡は昭和52年から３ヵ年計画で発掘調査が行われ、五番地内では官衙風の掘立柱建物跡と、多量の瓦が出土している。堂ノ上地内では版築をもつ建物や、埋められた礎石・根石などが確認されている(註5)。このような状況を見ると、多量の瓦が出土する五番地内には寺院に関連する遺構が、字堂ノ前地内には掘込地業をもつ礎石建物による正倉が展開している可能性がある。いずれにしても、掘込地業や礎石建物の存在から、この遺跡が郡家としての条件を良く備えていると見て良いであろう。

第３図　周辺の郡家遺跡

寺院遺跡

現在、南相馬市において寺院跡もしくは推定地とされている遺跡には植松廃寺跡と横手廃寺跡がある。植松廃寺跡は新田川北岸に広がる河岸段丘の上面に位置する。古くから古代の瓦が出土することで知られており、寺院跡として考えられてきた。平成８年に開発に伴う小規模な試掘調査が行われた以外には、本格的な調査は行われていないため遺跡の内容については不明な点が多いが、この調査では建て替えが行われている掘立柱建物跡１棟と、ロクロ土師器・平瓦などが出土している。内藤政恒氏をはじめ過去の表面採取では、単弁四葉蓮華文軒丸瓦・有蕊弁蓮華文軒丸瓦・軒平瓦、粘土紐造りの丸瓦・一枚造りによる平瓦などが得られている。植松廃寺跡の瓦群は、後述する入道廹瓦窯で生産されていたことが明らかとなっている(註7)。

横手廃寺跡は、真野川北岸の河岸段丘縁辺にある寺院遺跡であり、昭和54年に福島県史跡指定を受けている。遺跡内には今でも数個の礎石が残存しており、古くから瓦が出土することで知られていた。これまで発掘調査の経歴はなく、遺跡の詳細については全く分かっていない。遺跡内から採取された瓦を見ると単弁八葉蓮華文鐙瓦が１種類と粘土紐造りの有段・無段の男瓦・一枚造りで凸面に平行・縄・樹枝状の各種タタキが見られる。このうち樹枝状タタキについては植松廃寺跡と同一のものである。

瓦と須恵器の生産

本地方で瓦の生産が確認されている遺跡は、泉官衙遺跡に供給したと考えられる京塚沢瓦窯跡・犬這瓦窯跡、植松廃寺跡に供給した入道迫瓦窯跡などが知られる。

京塚沢瓦窯跡は、泉官衙遺跡から直線距離で約３㎞の地点、阿武隈山地から東に延びる低位丘陵上にある。これまでに、泉官衙遺跡舘前地区から出土する瓦と同種のものが採取されており、泉官衙遺跡、つまり行方郡家に付属する寺院の所用瓦を生産した瓦窯と考えて良い。特に京塚沢瓦窯跡からは行方郡家の付属寺院創建段階、すなわち７世紀後半段階の花葉文軒丸瓦と重弧文軒平瓦が採取されており、瓦の生産は７世紀後半段階をもって操業を開始したと推測される。この段階では主に行方郡家所用瓦を生産していたと見られるが、８世紀第２四半期頃に位置付けられる単弁細弁蓮華文軒丸瓦は南に接する標葉郡家でも出土していることから(註10)、８世紀代には行方郡と標葉郡の両郡に用いられる瓦を生産していた可能性がある。犬這瓦窯跡は京塚沢瓦窯跡に近接する遺跡であり、京塚沢瓦窯跡に含まれると考えられる。目の大きな格子タタキを斜行線で区切るタタキ目が特徴的で、同様のものが泉廃寺跡でも出土する。

入道迫瓦窯跡は、新田川中流域北岸の低位丘陵に立地する。これまで植松廃寺跡と同類の瓦が出土することで知られている。昭和58年には発掘調査がなされ、３基の窯が確認、調査されたが、このうち瓦を生産していた３号窯は須恵器の生産も行う瓦陶兼業窯で、９世紀代に操業していたことが確認されている。

本格的な須恵器窯の調査例は少ないが、滝ノ原窯跡、京塚沢瓦窯跡、町池窯跡、玉貫古窯跡や、金沢製鉄遺跡群の鳥打沢Ａ遺跡、入道迫瓦窯跡などで須恵器の生産が確認されている。

鳥打沢Ａ遺跡には金沢製鉄遺跡内に築窯された須恵器窯であることは先に述べた。生産された製品には、杯・杯蓋・盤・高杯・平瓶・甕・横瓶・壺・硯・甕などがあり、その器種構成は豊富である。窯の創業は７世紀第３四半期に位置付けられ、鉄生産の導入期もしくは行方郡家創建頃に須恵器の生産が行われていることは興味深い。注目すべき遺物には中空円面硯があり、官衙遺跡と須恵器生産の関係を示すものとして重要である。

入道迫瓦窯跡から出土した遺物は、杯・壺・甕の３種に限られており、鳥打沢Ａ遺跡のような器種の多様性はない。杯は２種８類に分類され、回転糸切りが主体で、回転ヘラ切りを少量含む。再調整は未調整が多く回転ヘラケズリが伴う。壺は三段構成により頸部にリング状突帯が巡る長頸瓶で、８世紀末から９世紀前半に位置付けられている。

滝ノ原窯跡は窯体自体が削平を受けており、その構造的な特徴は把握されなかったが、灰原から出土した遺物には、杯・甕・長頸瓶が見られる。長頸瓶にはリング状の突帯が巡り、年代的にも入道迫瓦窯跡と近いが、報告がなされていないので詳述は控えたい。

このように、現段階で把握されている須恵器窯を見ると、陶窯単独で存在しているものは少なく、むしろ瓦窯や製鉄遺跡に内包される形で操業を行っていた可能性がある。製鉄ならびに瓦生産が公的機関主導で操業を行っていたとすれば、須恵器生産に関してもある程度の公的な性格があったものと考えられ、鳥打沢Ａ遺跡から出土した中空円面硯や多様な器種を生産していた存在は実に示唆的である。また、７世紀段階に位置付けられる窯跡は海岸部の近くで操業

が行われているが、９世紀代になると内陸部に操業の場所が移動する傾向が見られるが、これらの須恵器生産のあり方の解明は今後の検討課題である。

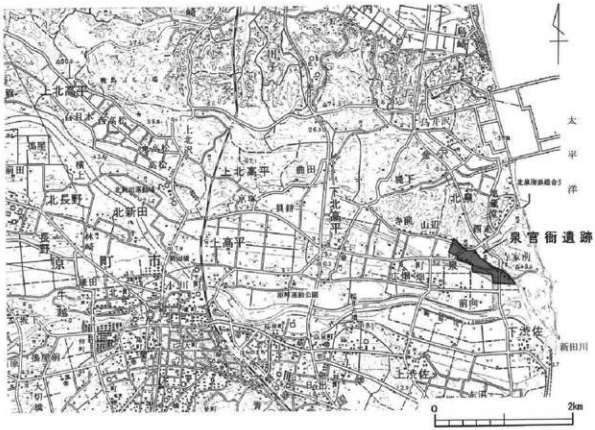
第２節　泉官衙遺跡の概要

第１項　泉廃寺跡から泉官衙遺跡へ

古くからこの地域には建物の土台となった礎石が残り、古瓦・焼米が採取されることで知られており、昭和30年に平安時代の寺院跡として、面積約49,000㎡が「泉廃寺跡」の名称で福島県史跡指定を受けた。更に採取された瓦・円面硯等は福島県指定の重要文化財となった。指定当時の遺跡範囲は、大字泉字宮前と寺家前の２地区としており、現在の泉官衙遺跡を構成している泉字町・町池・舘前の各地区は含まれていなかった。

しかし、平成６年以降、発掘調査の進展に伴い、泉廃寺跡とその周辺には多数の官衙建物が院を形成して計画的に配置されていることが把握されると、本遺跡が寺院遺跡ではなく官衙遺跡であると評価されるに至った。

そこで、南相馬市は、遺跡の重要性に鑑み、国史跡指定の意見具申を行い、平成22年２月22日、面積94,621.98㎡が「泉官衙遺跡」の名称で国史跡に指定された。ただし、福島県指定史跡範囲のうち、土地所有者から意見具申への同意が得られなかった部分については、県史跡名称である「泉廃寺跡」のままとなっており、今後、国史跡への追加指定が望まれる。



第４図　泉官衙遺跡の位置

第２項　泉官衙遺跡の概要

本遺跡については、平成６年から平成21年までに、24次にわたる発掘調査を市教育委員会が行っている。遺跡を構成する遺構群については、先に報告してあるので詳述は控えるが、これまでの調査により、本遺跡は東西約１km、南北約200mの範囲にいくつかの院を構成し造営されていることが判明しており、東西に広く南北に狭いという地形的な特徴を考慮し、院を配置しているものと考えられる。

ここでは、これまでの調査で確認された遺構群のまとまりから、大きく６つの地区に区分し、以下の報告を行う。なお、国史跡指定に際し、県史跡指定地で、同意を得られなかった事情から意見具申を行わなかった範囲については、県史跡「泉廃寺跡」の名称のままであるが、本書では、便宜的に泉官衙遺跡として地区区分している場合がある。

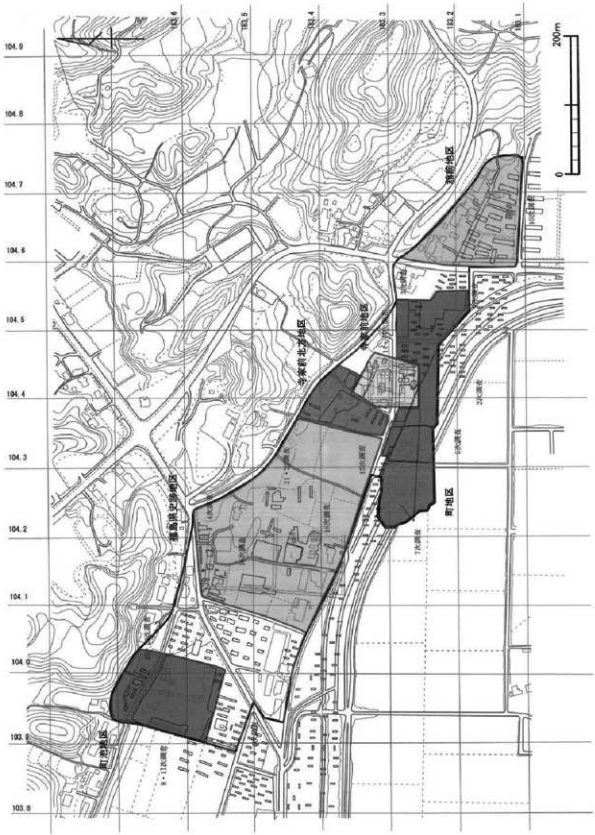
泉官衙遺跡では、遺構に一定のまとまり、すなわち寺家前から官前を中心とする「旧福島県指定地区」、寺家前の「寺家前地区」、その北側にある「寺家前北方地区」、遺跡南辺の「町地区」、遺跡西端の「町池地区」、遺跡東端に位置する「舘前地区」に区分して捉えている。以下、各地区の概要について記載する。

旧福島県史跡指定地区の概要

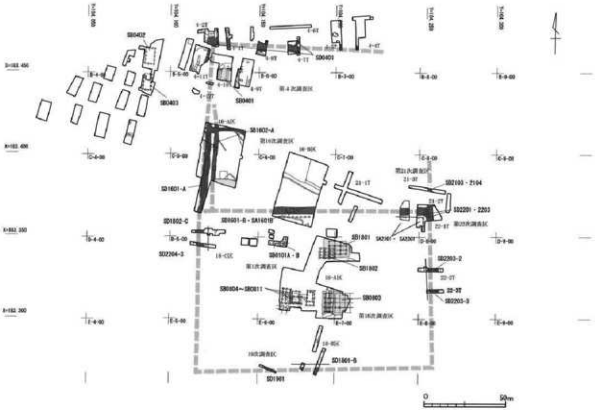
本地区は、遺跡全体から見るとほぼ中央部分にあたり、東西300m×南北250mの広がりを持つ。確認された遺構群の特徴としては、総柱建物を主体的に建設することにある。総柱建物は掘立柱式と礎石立ちの２種類があり、掘立柱式から礎石立ちへと変遷することが判明している。また、全体的な遺構造営を見ると、これらは大きく３時期の変遷を辿ることができる。最も古い時期の遺構群は、総柱式掘立建物を建設する時期であり、建物主軸方位を東に傾ける特徴を有する。これらの建物には明確な区画施設が伴わず、開放的な空間構成を呈している。２時期目の建物は当初の建物造営敷地を離れ、新たな敷地に前段階から続く総柱式掘立建物と新たに礎石建物を加えることで建物群を構成している。これらの建物は大規模な区画溝により囲繞され、周辺施設との明確な区別を図っている。また、この時期から建物主軸方位がほぼ真北を指すことを大きな指標とする。

最終段階は、２時期目の時点で成立した建物敷地を統合する時期である。区画内部に建設される建物は全て礎石立ちに変更がなされている。

前述したように、この地区の建物は総柱建物を主体的に建設することが大きな特徴である。また、これらの建物を大規模な区画溝で囲繞し、明確な造営計画ならびに管理体制のもとに維持されていたと考えられる。また、区画溝からは租税徴収にかかる木簡の出土もあることから、郡家正倉としての機能が与えられている。その造営時期は、本郡家創設の７世紀後半から10世紀前半までと考えられる。



第５図　泉官衙遺跡の地区割



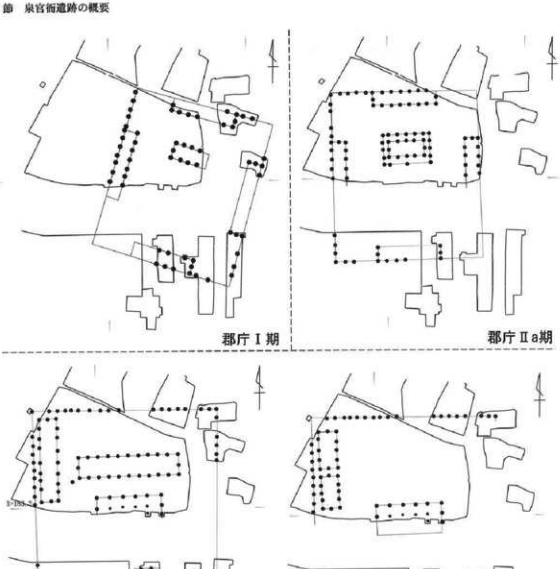
第６図　正倉院の様相

寺家前地区の概要

本地区は、旧福島県史跡地区の東側に隣接する。遺跡全体から見た場合、郡家中央のやや東側に位置し、西側隣接地には正倉院とされた旧福島県史跡地区が展開するという配置関係のもとで造営がなされている。

この地区に造営が行われた建物群は大きく３時期の変遷を辿ることができる。創建段階と２時期目の施設は掘立柱塀で４辺を囲繞し、各辺の中央に長舎構造の側柱建物を建設している。これらの施設で区画された敷地の中央やや北寄りには側柱式の東西棟建物を配置することで合計５棟の建物で構成する施設を完成させている。創建段階の建物は、施設全体の造営主軸線を東に傾けているが、２時期目にはこの建物造営基準線を真北に統一し、この計画線は最終段階の３時期目の施設まで継承される。３時期目の施設は、２時期目までの敷地面積をやや拡張させる形で造営が行われ、掘立柱塀による区画施設とその南辺に八脚門を構えている。区画内部中央やや北寄りに配置された東西棟の側柱建物を中心殿舎とし、この建物の西側と北側に長舎構造の側柱建物を加えて全体構成を完成させている。

これらの各時期に建設された建物は、寺家前地区から移動することなく一貫してこの場所で継続的に建物を造営する特徴をもっていることから、この地区に造営された施設は極めて強い継続性が求められた施設であったと考えられる。つまり、寺家前地区に造営された施設には、建物配置の様相から郡家郡庁としての機能が与えられ、区画中心にある東西棟が郡家正殿、区画４辺に付帯する各建物は前殿・後殿、そして東西両脇殿と評価できる。

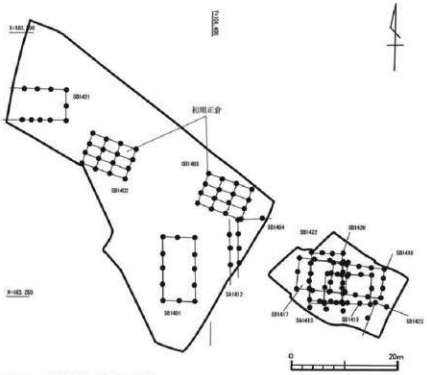


第７図　郡庁院の様相

寺家前北方地区の概要

寺家前北方地区と呼称する地区は、寺家前地区の北方および北西にあたる部分に位置する。遺跡の北側には低位丘陵が控え、西側には総柱式の礎石建物が多数確認された旧福島県史跡地区が展開し、南側の一部は町地区と接している。

このように、寺家前北方地区は泉廃寺跡を構成する官衙施設に囲まれた一角にあり、郡庁敷地ならびに正倉区画の外側にあることから、これらの施設群とは区別する形で把握されたが、建物配置の検討の結果、本地区の建物は郡庁院Ⅱ期の計画に組み込まれていた可能性が高まったことから、郡庁機能を補完する役割をもつ地区とし、行方郡家北方官衙と捉えた。



第８図　寺家前北方官衙の様相

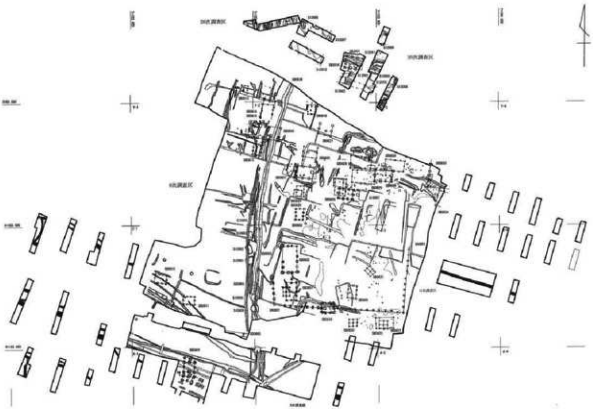
町池地区の概要

本遺跡の中でも最も西側にある町池地区は、他地区に比し、緩やかな傾斜を有する河岸段丘上に立地している。その広がりは東西約110m、南北約150mで、面積は約8,000㎡に及んでいる。調査では30棟を超える掘立柱建物と20軒近くの竪穴住居などが確認され、先述した正倉・郡庁とは異なった官衙施設が存在していることが判明した。これらの建物の時期区分については区分するための情報が乏しいが、現段階では、主体的に竪穴住居を造営するⅠ期と区画施設を伴う掘立柱建物を建設するⅡ期の２時期に区分することができる。

Ⅰ期の竪穴住居は南北に縦列配置をとる様相から、ある程度の造営計画があった可能性があり、一般的な集落とは異なるものと理解される。これらの竪穴住居には７世紀末の土器を伴い、また後続するⅡ期段階の西限の位置と一致することから、郡家造営に関連する居住施設の可能性がある。Ⅱ期には西限となる位置に溝を開削し、それに接するようにコの字に配置された掘立柱塀が巡り、その中央付近には南側からの入り口となる八脚門を構え、掘立柱塀による区画内部には掘立柱建物をＬ字形に配置した官衙施設を造営している。

この官衙施設の西側に掘削された溝は、施設の西限の位置を示すと共に、道路側溝の可能性も示唆されたことから、町池地区に造営された官衙施設は、交通施設に関連するものとの評価が与えられた。

町池地区の施設が有した機能については不明な部分も残しているものの、先述した正倉・郡庁とは異なり、居住形態を示す竪穴住居が掘立柱建物とともに建設がなされていること、掘立柱建物の中には低床貼の構造を示すものが加えられていること、そして日常什器形態を示す土



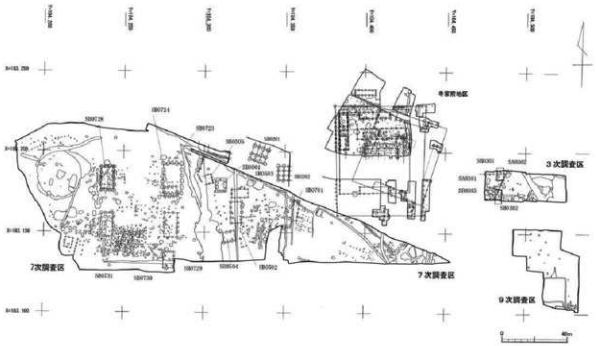
第9図　町池地区の様相

器類が多量に出土することなどの状況が、この施設の機能的特徴を示すものと考え、町池地区は郡家機能における「館」としての機能が想定されることとなった。

町地区の概要

本地区は、旧福島県史跡地区と寺家前地区を北に臨み、遺跡の南辺中央から東側の館前地区に及ぶ地区である。遺構は、河岸段丘面が沖積地に向かって傾斜を変える地点から沖積地内までの範囲に展開している。また、西端の遺構群は、遺跡南辺からやや張り出すような位置取りをしている。その範囲は東西約350m、南北約80mで、面積は約28,000㎡である。

本地区に造営された施設を特徴づける遺構としては、地区の西寄りで、郡庁院の西に構築された大規模な溝をあげることができる。この溝は旧河川が通過していた南側から郡家正倉に向かって開削され、その両岸には多数の掘立柱建物が造営されているといった特徴がある。これらの建物は、東西・南北方向に棟筋・妻筋を揃えるというように、非常に高度な造営計画の下で建設が進んでおり、明確な施設群を構成していた。したがって、大溝の機能としては、溝の底面には根元に伐採痕が残る大木が遺存していたことから、郡家経営に必要な物資の搬出入や物資貯蓄等の機能を有した運河機能を有していた可能性が示唆され、その両岸に建設された建物群は、物資の管理施設や運河を介在する人的移動の拠点となる館としての機能を想定することができる。



第10図　町地区の様相

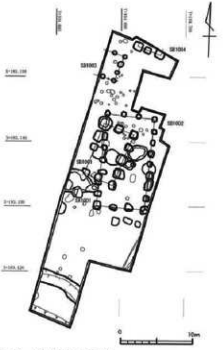
館前地区の概要

館前地区は、遺跡全体の中では最も東端に位置する地区である。遺跡の北側には、阿武隈山地から東に派生した東西方向の低位丘陵が控えているが、丘陵は、本地区の東端を起点に、やや南に向かって方向を変え、やがて太平洋に面する高さ約30～40mの海岸崖を形成する。館前地区は、このような地形に囲まれる地点にあり、東西約200m、南北約150mの三角形の地区として捉えられる。

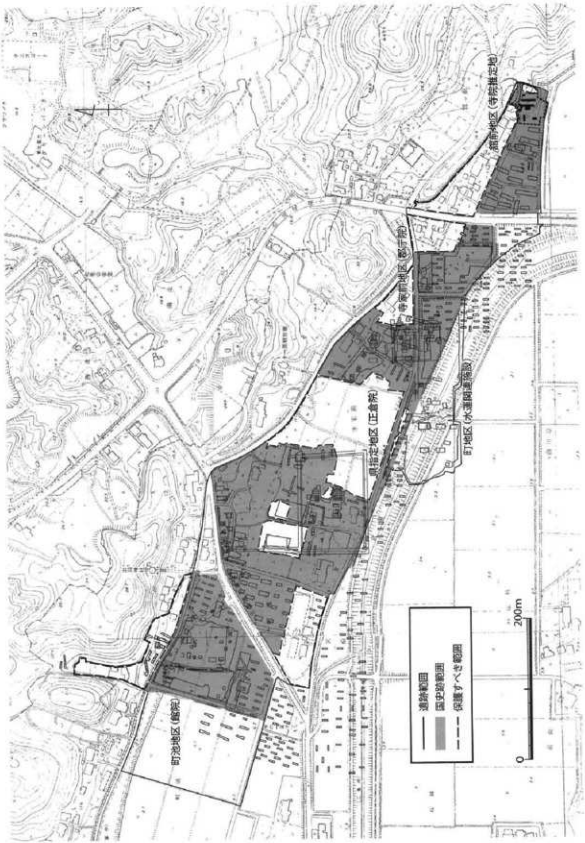
本地区で確認された遺構は、低位丘陵の裾部に広がる河岸段丘上にあり、新田川北側の沖積地までには広がることはない。２回の調査により、側柱式建物５棟、竪穴建物跡３軒が検出されたほか多量の瓦が出土している。

出土した瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・塼・鬼板、豊富な種類が認められており、この地区には塼積基壇を有する総瓦葺建物が造営されていたことが明らかとなった。これらの瓦の検討では、その初現となるセットの花葉文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦は７世紀末の年代が与えられ、最終段階の有蕊弁軒丸瓦は、９世紀後半の年代が与えられた。

このような様相を示す館前地区は、郡家における付属寺院としての機能を与えることができる。



第11図　館前地区の様相



第12図　泉官衙遺跡全体図

第２章　土器類

第１節　郡庁院跡（寺家前地区）

寺家前地区は、東西に長い遺跡範囲のなかで中央やや東寄り、字寺家前の東部を中心とする位置にある。郡家の中枢となった郡庁院跡が確認された地区である。

郡庁院の発掘調査は、平成７年の第２次調査で南西部、平成11・12年の第13・14次調査で北西部、平成13年の第17次調査で東部についてそれぞれ行われた。検出された遺構は、掘立柱建物跡21棟、掘立柱塀跡21列、土坑38基、玉石敷遺構、溝跡、性格不明遺構、ピットなどである。掘立柱建物跡、掘立柱塀跡はいずれも古代のものであるが、土坑や溝跡、ピットには、古代末～近世までのものが含まれる。

遺構の変遷からみて、郡庁院は、官衙創設期から廃絶期まで途切れることなく、同じ場所で建て替えられて、その機能を維持し続けたと考えられる。当遺跡において、こうした官衙の存続期間を通じた遺構変遷が、直接の重複関係に基づいて捉えられるのは当地区だけである。従ってその遺構変遷は、当遺跡における遺構期区分の軸となる。

郡庁院は、主軸方位や全体の建物配置計画、区画や建物規模など多くの点において、２度にわたる著しい改変が行われていることが判明している。これに基づいて、郡庁院の遺構期を大きくⅠ～Ⅲ期に区分した。すなわち主軸方位が座標北より16°30′前後東に振れるⅠ期、ほぼ真北を向くⅡ・Ⅲ期である。後二者は主軸方位を真北に向けるが、正殿の違いや区画の規模、全体の建物配置構造等に大きな改変がみられることから、それぞれⅡ・Ⅲ期として遺構期を設定できる。また、これら各時期には、同位置での建て替えを基本とした変遷があり、Ⅱ期はａ・ｂ期、Ⅲ期はａ・ｂ・ｃ期に細分される。従って遺構から、合計６時期の変遷を把握することができる。

Ⅰ期　建物の主軸方位が座標北より16°30′前後東に振れる時期である。郡庁域の西・東辺に８×２間に復元される脇殿（ＳＢ1701、1704）、南・北辺に７×２間の前殿（ＳＢ1705）、後殿（ＳＢ1707）を配置し、これらを柵列によって連結して東西43.0ｍ×南北49.8ｍの長方形の院を形成しており、院の中央北寄りに４×２間の正殿（ＳＢ1703）を配している。

Ⅱ期　Ⅱ期以降、施設の主軸方位が真北を向くようになる。Ⅱ期は４×２間の身舎の四面に庇をもつ建物ＳＢ1710を正殿とする時期で、正殿や柵列に同位置での建て替えが認められるため、ａ・ｂの２小期に区分できる。Ⅱ－ａ期の施設は、区画の中央北寄りに四面庇付の正殿、東・西辺に脇殿（ＳＢ1702・1408）、南・北辺に前・後殿（ＳＢ1705・1405）を配し、脇殿および前・後殿が柵列によって連結される構造である。建物の平面形式や配置、等間距離の設定の仕方など、Ⅰ期の構造をほぼ正確に踏襲していることから、Ⅰ期施設の施工原理をほぼ正確に踏襲し、方位だけを真北に変更して建て替えられたと考えられる。またこの時期は、区画内が玉

石敷となっていたと推定される。区画の規模は東西44.2m×南北50.9mである。Ⅱ－b期は、a期の正殿が建て替えられて存続するが、前殿・後殿・脇殿は伴わず、四辺に柵列をめぐらせた構造となる。区画の規模はa期とほぼ同様で、東西44.2m×南北52.7mを測る。

Ⅲ期　区画の規模や建物配置が大幅に改作される時期である。区画の規模は、柵列を巡らした東西55.5m×南北67.6mとなり、南辺中央に4×2間の門(SB1708)が取り付く。建物配置は、区画の中央に5×3間の正殿(SB1712)、その背後に10×2間の長大な後殿(SB1711)、北西側に西脇殿、南東側に東脇殿を配する略H字形ともいうべき配置をとる。棟間距離は、5.7mを基準尺とし、その倍数に設定されていたと考えられる。Ⅲ期は、正殿に少なくとも2時期、西脇殿や柵列に2ないし3時期の重複がみられることから、3小期に区分することが可能で、郡庁院はこの構造で最も長期間存続したものと考えられる。

なお、Ⅲ期の西脇殿を切って鍛冶炉跡が確認されており、この後詳細を報告する赤焼土器とともに、多量の鉄滓が出土していることから、Ⅲ期郡庁院が廃絶した後、その跡地を利用して鍛冶が行われていたと考えられる。

(1)　遺構出土の土器

SB1701出土土器

SB1701は、郡庁院Ⅰ期西脇殿である。図示した5点の遺物(第13図1～5)は、いずれも半截した西側柱列北第5柱の掘方埋土より出土した。須恵器瓶類の小片で、接合しないが器面にみられるロクロ回転を利用したヘラナデ痕やカキ目、胎土・焼成・色調の特徴が共通するため、同一個体と考えられる。残存部位から判断して平瓶の体部の可能性が高い。平瓶は7世紀後半に盛行し8世紀初頭に消滅する器種であり、本建物跡の年代を示す目安となる。

SB1409出土土器

SB1409は、郡庁院Ⅲ－c期西脇殿である。掘方内から出土した土器6点を図示した(第13図6～11、21、24)。本建物跡の上限を示す土器である。

6は須恵器坏である。直線的に立ち上がる体部は、外面にやや強いロクロ目を残し、底面に手持ちヘラケズリを施す。7は土師器坏で、非ロクロ整形だが平底で、内湾気味に体部が立ち上がるやや深身の器形である。内面にミガキ・黒色処理、外面はヘラケズリ後に粗いミガキが施されている。8は東側柱列南第2柱の掘方から出土したもので、ロクロ整形、内面にミガキ・黒色処理を施す、体部下端～底面に回転ヘラケズリが施されている。

9・10は北東隅柱の柱痕跡から出土した。9は土師器の小型甕ないし鉢で、短く外反する口縁部、膨らみの弱い胴部からなる。器厚は薄い。内・外面ともヘラナデを施した後にミガキを加え、内面に黒色処理を施す。10はロクロ整形・内面に黒色処理を施し、体部下端から底面にかけて手持ちヘラケズリがみられるが、一部に回転糸切痕を確認できる。また底面の一部に墨書とみられる墨痕を確認できたが、摩滅が著しく文字は不明である。

11は、8とともに東側柱列南第2柱の掘方埋土より出土したもので、ロクロ整形・内黒の坏

である。口縁部の小片であるが、墨書を確認できたため図示した。文字は半分以上が欠損するため内容は不明であるが、口縁部外面に正位で書かれており、残画は「厂（雁垂れ）」の一部とみられる。

21・24は南東隅柱の柱穴より出土した。21は赤焼土器坏で、体部は内湾し、口縁部が弱く外反する。底部に回転糸切痕を残す。24は須恵器の体部破片資料である。外面の一部に平行叩き目、内面に当て具痕をわずかに残すことから甕の体部とみられる。破損部の一部が研磨されて平坦になっており、また内面が摩滅し平滑になっている。内面には墨痕跡がわずかに残る。須恵器甕の体部破片を用い、割れ口を研磨して加工したうえで内面を硯面に利用した転用硯の可能性が高い。破損部の研磨は砥石として使用された結果とも考えられる。

ＳＢ１７１１出土土器

ＳＢ1711は郡庁院Ⅲ期に伴う後殿である。第13図12・13は柱穴掘方より出土した。12は須恵器坏の底部で、底面に回転糸切り痕を残す。内面が摩滅して平滑になっており、食器としての使用か硯に転用された可能性が考えられる。

13は土師器の小片であるが、線刻がみられるため図示した。内・外面ともに黒色処理が施された両黒の土師器で、器種は高台坏、出土した破片は底部のものと思われる。底面の中央に焼成後線刻で「今」の文字がみられる。こうした類例は金沢地区製鉄遺跡群大船廹Ａ遺跡の出土遺物にみられる。

ＳＢ１７１２出土土器

ＳＢ1712は郡庁院Ⅲ期に伴う正殿である。建物は建て替えにより２小期に区分され、第13図14はａ期、17はｂ期の掘方埋土から出土した。

14は土師器高坏で、坏部内面にミガキ・黒色処理、外面にヘラケズリが施されている。17は須恵器大甕の体部で、外面に平行叩き目、内面にヘラナデが施されている。内面は摩滅し平滑となっており、硯などに転用された可能性がある。

ＳＢ１４１３出土土器

ＳＡ1404はⅢ－ａ期郡庁院の西脇殿である。第13図15は北東隅柱の柱穴より出土した須恵器坏である。口径に対して底径が大きめで、器高の低い扁平な器形である。体部はやや内湾気味に立ち上がる。体部下半から底面にかけて回転ヘラケズリを施す。

ＳＢ１４１４出土土器

第13図16は柱穴内より出土した赤焼土器高台付坏の底部である。付け高台で端部は外に折れ平坦面をもつ。底部中央には回転糸切痕を残す。

ＳＡ１４０１出土土器

第13図18は南第６柱より出土した手づくね土器である。器厚の薄い粗雑なつくりで、器面をヘラナデで調整している。第13図19は南第２柱から出土した須恵器甕の体部破片資料である。外面に平行叩き目、内面にナデによる調整を施す。内面は摩滅し墨痕が観察できるため、硯に転用されたものと推定される。

ＳＢ１４０７出土土器

第13図26はＳＢ1407の南妻中央柱の柱穴より出土した、須恵器甕類の体部破片資料である。外面にロクロナデ調整、内面にヘラナデが施されている。内面は摩滅し平滑となっており、全面に墨痕がみられる。また、外面にも毛筆状のものが触れた際についたとみられる墨痕を確認でき、須恵器の体部破片が硯に転用されたものと思われる。

遺構検出時の出土土器

第13図20は須恵器甕の体部破片資料である。外面に平行叩き目、内面に強いカキ目状のヘラナデがみられる。第13図22・23・25はＳＢ1405の検出時に出土したもので、建物に伴うものではない。22は土師器坏、23は赤焼土器坏、25は須恵器甕である。22はロクロ整形、内面にミガキ・黒色処理を施す。全体に焼きが悪く、摩滅が著しいため、器面の状況が不明瞭であるが、体部下端には手持ちヘラケズリがみられ底面は回転糸切痕を残す。23は赤焼土器で、底面に回転糸切痕を残す。25は須恵器甕の口縁部破片資料で、内・外面にロクロナデ調整が施されている。

ＳＢ１４０１Ｂ（Ｂ区ＳＤ１）

第14図１は土師器甕の底部で、全体の器形は不明。底面に木葉痕を残す。２は須恵器壷の口縁部である。口頸部は短く口縁端部が下方へ下がり弱い口縁帯を形成する。内面には頸部と肩部以下を接合した合わせ目が残る。白色粒・黒色粒・赤色粒を含む精良・緻密な胎土で、会津大戸窯産と推定される。３は弱くカーブする棒状、断面は円形を呈する土師質の土製品である。砂粒が多く胎土は粗雑。把手の一部と思われる。

ＳＤ１７０２出土土器

ＳＤ1702は17－Ａ区南東部で確認された溝跡である。Ⅲ期郡庁院の正殿の北東部をめぐり、これを囲むような位置関係にあることから、Ⅲ期正殿に伴う排水溝のような性格を考えている。

第14図４は覆土より出土した土師器甕の底部である。底径はやや大きく安定している。外面の胴部下半にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。内面の底部と胴部の境界部分には指頭押圧痕が密に残る。円盤状の底部に輪積みで胴部を成形していった際の痕跡とみられる。

ＳＤ１３１２出土土器

第14図５は須恵器甕の体部破片資料である。外面に平行叩き目、内面に同心円当て具痕を残す。内面は摩滅しており、墨痕が確認できることから、硯に転用されたものと推定される。

ＳＫ１４０３出土土器

ＳＫ1403は、郡庁院のⅢ期正殿であるＳＢ1712の北西約10mで確認された長軸3.75m×短軸2.4m×深さ25cmの楕円形の土坑である。Ⅲ－ａ期に存在した後殿であるＳＢ1711の西妻と重複し、その中央柱の掘方を切って掘り込まれている。自然体積により埋没しており、底面や覆土から土器類が出土している。第14図６～17の12点を図示した。

６～９は土師器坏である。ロクロ整形で内面にミガキ・黒色処理を施す。体部下端～底面にかけて手持ちヘラケズリを施す。９は底面に「厨」の墨書がみられる。

10は土師器高台付坏で、ロクロ整形・坏部内面にミガキ・黒色処理を施す。分厚く短い貼り付け高台はやや外に開く。

11は円窓をもつ脚台部の資料と思われる。脚裾部は外に開き、下面に平坦面をもつ。内・外面には横位のヘラナデが施され、器面のヘラナデの後に外面から円窓が開けられている。第14図15に示した鉢につく脚部と推定した。

12・13・15は赤焼土器で、12は坏、13は皿、15は擂鉢である。15の擂鉢はロクロ整形で体部が大きく外傾し、口縁端部が上方と下方につまみ出されて口縁帯を形成する。

14・16・17は須恵器である。14は長頸瓶の口頸部で、口縁部が上方へ強く屈曲し口縁端部がシャープに尖る。16は甕の口頸部で、口縁部付近で急激に外反し、口縁端部が上方へ弱くつまみあげられて口縁帯を形成する。17は大型の甕の体部破片資料である。外面に平行叩き目、内面に縦位及び横位のヘラナデが施され、一部に無文の当て具痕を残す。無文の当て具痕が残る部分が平滑になっており墨痕も確認できることから、須恵器甕の体部を利用した転用硯と考えられる。14・16は緻密な胎土から在地のものではなく、会津大戸窯産のものと推定される。

18はミニチュア土器である。小さいが口縁部に横ナデを施し、外面にヘラナデを施した精巧なつくりのものである。鉢などの器種を模したものとみられる。

出土した土器のうち内面黒色処理の６～10は土坑底面より出土しており、「厨」墨書土器の存在から、官衙が機能している段階に使用された後、土坑内に廃棄されたものと考えられる。その年代は９世紀後葉であろう。赤焼土器は覆土からの出土で、埋没過程で混入したものと思われる。

ＳＫ１４０１出土土器

ＳＫ1401は郡庁院の区画の北西部で確認された大型の土坑である。ＳＢ1411やＳＢ1414に切られ、ＳＡ1409を切る。

出土した土器は第15図１～６である。１・２は赤焼土器坏、３は皿、５は土師器甕である。１はロクロ整形で外面の体部下端に強いロクロ目を残す。底面には太い沈線が同心円状に巡り、

ロクロから切り離す際の糸の痕跡が回転を利用したヘラナデとみられる。内面は黒く煤けている。3は皿で底部回転糸切、口縁部付近が肥厚し端部が摘み上げられて上を向く。4は底部のみを残す資料であるが、器形や焼き上がりの特徴から3などと同様の皿であろう。酸化焰だが硬質の焼き上がりで、焼成前に底部中央に円形の孔があけられている。5は土師器甕の底部で、全面にヘラナデが施されているが、底面にわずかに木葉痕を残す。

ＳＫ１４０２出土土器

ＳＫ1402はＳＫ1401の東側に位置する土坑である。Ⅲ期後殿にあたるＳＢ1711に切られる。

第15図7は須恵器長頸瓶の肩部で、外面には降灰が厚く付着する。白色粒・黒色粒・赤色粒を含む精良・緻密な胎土で、在地のものではない。会津大戸窯の製品と推定される。

ＳＫ１４０４出土土器

ＳＫ1404は郡庁院跡の北部で確認された円形の土坑である。Ⅱ－ａ期郡庁院の後殿にあたるＳＢ1405を切る。

出土した土器を第15図8～10・17に図示した。8は坏で、ロクロ整形、内面にミガキ・黒色処理を施す。底部は回転糸切り痕を残し、底径が4㎝前後と小さい。9も同様の内黒の土師器坏で、底部のみを残すが体部の立ち上がりが大きく外に開き、底径が小さい割に大きめの器形が推定される。

10は赤焼土器の高台付坏である。赤色粒を多く含む粗雑な胎土である。坏部をロクロ整形し、高台を貼り付けている。高台は外に開き端部の設置面が平坦となる。高台部内面の坏部との接合部に指頭押圧痕を残す。

17は須恵器甕の体部破片資料である。小片であるが、内面が摩滅し平滑となっており、砥石に転用されたものと考えられる。割れの形態も正方形を呈し、人為的に加工された可能性がある。

ＳＫ１４０８出土土器

ＳＫ1408は、Ⅲ期正殿であるＳＢ1712の西側で確認された円形の土坑である。Ⅲ期正殿に伴う雨落溝であるＳＤ1701と重複し、これより新しい。またⅡ期に伴う玉石敷を切って掘り込まれている。

出土土器は土師器坏、赤焼土器坏、須恵器長頸瓶各1点を図示した(第15図11～13)。11は土師器坏で、ロクロ整形、底部回転糸切で内面にミガキ・黒色処理を施す。体部がやや内湾する。12は赤焼土器の坏で、底部から体部にかけて全体に内湾する器形である。13は須恵器の長頸瓶で、体部下端に幅広に回転ヘラケズリを施した後に高台を貼り付けている。

ＳＫ１４１４出土土器

ＳＫ1414は、四面廂付のⅡ期正殿の北廂東第3柱の柱穴と重複する浅い掘り込みで、同建物

跡より新しい。図示した遺物は第15図14の赤焼土器皿１点のみである。酸化焔だが硬質の焼き上がりである。底部に雑な回転糸切痕を残す。

ＳＫ１４１５出土土器

ＳＫ1415は、Ⅱ期正殿の身舎の北東隅柱を切る円形の土坑である。赤焼土器皿１点を図示した(第15図15)。ロクロ整形で大きな凹凸のあるロクロ目は、ＳＫ1401出土の３と共通する。

ＳＫ１４０９出土土器

ＳＫ1409は、Ⅰ期郡庁院の後殿に西妻を検出した17－Ｂ区の東端で検出した土坑である。土師器甕１点を図示した（第15図16)。遺構検出時に上面から出土したものである。径の大きい安定した底部で、内面にはハケ目状の条線をもつヘラナデがみられる。

Ｐ１４０５

Ｐ1405は郡庁院の建物跡と重複し、これより新しい単独のピットである。赤焼土器２点、手づくね土器１点が出土した(第15図18～20)。郡庁院の廃絶段階の様相を示す遺構である。19は完形に近いもので、焼成時の歪みが顕著である。18は劣化が著しく、赤変しており２次的に火を受けた可能性がある。

ＳＸ１４０１出土土器

ＳＸ1401は17Ａ区西端で確認した遺構である。ＳＢ1409の西側柱列やＳＡ1402と重複し、これより古い。西側部分の覆土や立ち上がりはほとんど失われているが、残存する部分でみると、平面は2.5mほど直線的に走り直角に折れ曲がる２辺で構成される形態で、方形プランのコーナーと２辺が残存したものと解される。底面は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。覆土は自然堆積による。本遺構は、平面や断面の掘り込みの形状からみて、竪穴建物跡の一部である可能性が高い。

出土した土器を第16図１～４に図示した。遺構底面で土師器甕２個体が潰れた状態で出土したほか、覆土下層から須恵器甕、器種不明の土師器が出土した。１・２は土師器甕で、１は口縁部から胴部を残す資料、２は胴部から底部を残す資料である。１は胴部外面にヘラケズリを施した後、縦位～斜位のヘラナデを施す。胴部内面には横位のヘラナデがみられる。胴部の調整の後、口縁部の内・外面にヨコナデを施している。２は倒卵形の胴部にヘラナデを施す。内面は高さ６cmほどまでが横位のヘラナデ、以上が斜位のヘラナデとなり、両者の境界付近が肥厚し接合痕を残す。胴部の立ち上がりが高さ８cmほどとなった位置で成形を一度止め、一定の時間を置いてさらに上部を積み上げたものと思われる。自重で潰れないための工夫である。１・２は、ともに倒卵形の胴部で類似した器形と推定され、大きさがやや異なり、大・小の関係にあるものと思われる。土師器甕の特徴は、南小泉式の新しい段階か住社式の段階にみられるもので、古墳時代後葉頃のものであろう。

２は器種不明の土師器で、中実柱状の脚裾部を想定して図示したが、坏類の可能性もある。残存部は外面に弱い凹線が３重に巡る。

４は須恵器甕で、外面に平行叩き目、内面に無文当て具痕を残す。当て具には小口の年輪が現れている。白色粒・赤色粒を含む精良・緻密な胎土で硬質の焼きあがりである。内面の一部が摩滅し非常に平滑となっている。硯に転用されたものである可能性が高い。

玉石敷礫層中出土土器

第16図５は礫層を断ち割ったサブトレンチより出土したもので、礫層の上限を示す。図示したのは土師器高坏で、坏部内面にミガキ・黒色処理、外面にヘラケズリを施す。脚裾部は欠損するが短い脚部が想定される。

玉石敷直上の遺物包含層中出土土器

玉石敷上部に堆積した遺物包含層を除去し、玉石敷の上面を精査していた際に、玉石敷の直上より出土した土器である。

第16図６は須恵器坏底部の小片である。底面はヘラナデ調整され切り離し痕を残さない。やや大きめの底部が想定される。７も須恵器坏の底部である。小片であるため判然としないが、底径が小さく底面に回転ヘラ切りが用いられ、古い様相の坏であろう。８は長頸瓶の肩部である。頸部と肩部の境界に弱い凸帯をもつ。外面は降灰がみられ調整は不明瞭だが、弱い凹線が１条めぐる。内面はロクロナデが明瞭で、頸部と肩部との接合部に指頭押圧ないし指ナデの痕跡が残る。９は赤焼土器高台付坏で、直立する短い高台をもつ。

（２）　遺構外出土の土器

第17～19図には、郡庁院の西部を検出した第14次調査Ａ区の南端部で遺構検出のための掘り下げを行った際に、ＬⅡ層より出土した土器を図示した。この部分は、旧地表とこれを覆う玉石敷が確認されており、基本土層の残存状況が良好な部分である。ＬⅡはその上部に堆積した土層で、当時の地表面の直上に堆積した遺物包含層と位置づけられる。明確な出土分布は把握できていないが、主として郡庁院の廃絶前後に使用され廃棄されたものであった可能性が高い。

第17図１・２は、有稜丸底の須恵器模倣の土師器坏である。口縁部が直立する特徴から、住社式に位置づけられるものと思われ、古い時期の混入とみられる。

１は底部にヘラケズリ、口縁部外面から内面全面にヨコナデを施した後、内・外面ともに粗いヘラナデを施す。また内・外面とも黒褐色を呈し、黒色処理が施されたものとみられる。２は口縁部がやや内傾気味に直立する。須恵器坏身模倣の坏ともみられる。底部外面にヘラケズリ、口縁部外面から内面全面にヨコナデを施す。

３～５はロクロ整形で内面にミガキ・黒色処理の施された土師器坏である。ともに体部下端から底面に手持ちヘラケズリが施され、切り離し痕を残さない。平坦な底部から体部が内湾し

て立ち上がる。なお3点は胎土に白色針状物を含む。

6～23は赤焼土器で、6～16は坏、19～23は高台坏である。坏は底部回転糸切りで、6～9は糸切りのヘソが中央にある特徴的な切り方である。一方14・15はヘソが底面の外周付近に寄る一般的な糸切底である。このほか、底部の小片であるが、17・18は回転ヘラ切りを用いている。なお、17・18は酸化焔だがやや硬質の焼き上がりである。高台付坏は貼り付け高台で、高台はやや長く外へ開き、端部が外へ折れ平坦となるものと折れずに丸みをもつものがある。

なお、7の坏と20の高台坏は胎土が赤く発色し、スコリアとみられる赤色粒を含むやや密な胎土である。一方、6・9・12・13・16は褐色で砂粒の多い粗雑な胎土、8・23は淡い褐色ないし肌色を呈し焼きが悪い。21はやや赤みがかった灰褐色を呈し須恵器のような硬質な焼き上がりである。胎土や焼き上がりにそれぞれ特徴がみられる。

第18図1は土師器の小型甕で、口縁部が外に開いた後に端部が上方を向く受け口状で、内・外面の口縁部から外面胴部の口縁部ちかくにかけてロクロナデ、胴部中位以下は縦位のヘラケズリを施す。内面の胴部は横位のヘラナデを施す。2は非ロクロの土師器甕で、口縁部が大きく外反し、胴部は球胴である。内・外面ともにヘラナデが施される。

3は酸化焔焼成の土器で、非ロクロで器厚が厚く、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部に平坦面をもつ。椀ないし鉢のような器形を想定し図示したが器種は不明である。全体に器厚が厚く、粗雑なつくりであるが、口縁端部はヘラケズリにより平坦に仕上げられている。

4～10は須恵器である。4は坏で、焼成時の歪みが著しい。5～7は長頸瓶で、5は肩部、6は頸部、7は底部を残す資料である。5は頸部との接合部付近の内面に絞ったようなシワがみられる。凸帯はない。6は頸部がやや太く、肩部との接合部に凸帯を伴う。5・7は胎土の特徴から会津大戸窯産の可能性が高い。8は甕の底部で、外面に平行叩きの後、ヘラナデで叩き目を消す。内面にも細いハケ目状の条線を伴うヘラナデが密に施されている。9・10は壺・瓶など貯蔵形態の須恵器の体部で、内面が摩滅し平滑となっていることから、硯などに転用されたものとみられる。

第19図1・2はロクロ整形で内面に黒色処理の施された内黒の土師器で、1は坏、2は高台付坏である。

3～13は赤焼土器である。3～7は体部下端から底面にかけて手持ちヘラケズリを施すが、回転糸切痕を残すものもある。8・9は回転糸切り後の調整は施さない。10は高台付坏で、外に開く高台は端部がシャープに尖り内傾面をもつ。11・12は坏で、小片であるが外面に墨書がみられるため図示した。11は口縁部外面に正位で「椿」の文字がみえる。12は判読できない。13は擂鉢の口縁部破片資料である。

14・15は須恵器である。14は円面硯で、硯部が中央へ向かって高まる器形で、外堤と沈線による装飾のある脚部の一部が残る。15は甕の体部破片で、加工され砥石として使用されたものとみられるものである。

16・17はロクロ整形・内面黒色処理の土師器坏である。18の高台付坏は、ロクロ整形・内黒で、高台の端部が内傾面をもつ。19～22は赤焼土器で、20の坏と22高台付坏はやや硬い焼き上

がりである。

第20図1～13に図示した土器は、郡庁院の北部にあたる第14次調査B区内の掘り下げ時にLⅡより出土した。この部分も、一部で玉石敷が確認されており、LⅡはその上部に堆積した土層で、第17～19図に示した土器と同様の位置づけが可能である。

第20図1～4は赤焼土器坏、5～7は皿、8は高台付坏である。坏は底部糸切りで、1は糸切りのヘソが底面の中央、2～4は外周寄りに位置する。皿は6・7は回転糸切痕を残し、5が底面をヘラナデして切り離し痕を消す。4の坏と8の高台付坏は砂粒の多い粗雑な胎土、他はやや密な胎土である。

10はミニチュア土器で、ナデにより丸底の器形を丁寧につくっている。11は須恵器坏で、底部は回転ヘラ切りののちヘラナデを施す。12は長頸瓶で、頸部と肩部の境に凸帯をもつ三段構成のものである。黒色粒・白色粒を含む精良・緻密な胎土で、会津大戸窯の製品の可能性が高い。

第21・22図には、郡庁院地区の調査において表土や試掘段階のトレンチで出土した土器をまとめて図示した。

第21図1は土師器坏で、わずかに内湾し大きく外に開く口縁部と丸底の底部との間に弱い沈線上の量を有する器形で、内面にはミガキ・黒色処理を施す。栗囲式の坏である。内面の全面や外面の一部に漆が斑点状に付着している。

2～4は高坏である。2は坏部の内面中央に焼成後線刻で「×」印がつけられている。5～8はロクロ整形で内面に黒色処理の施された土師器坏、9は高台付坏である。6は口径9.5㎝、器高3㎝と小型で、体部下端から底面にかけて回転ヘラケズリが施されている。8は底部の切り離しを静止糸切りで行っている。

10は口径20.2㎝、器高6.3㎝以上と大型で、全体にやや内湾する深身の器形であり、大型の椀ないし鉢とすべきものである。ロクロ整形、内面にミガキ・黒色処理を施す。体部下端には回転ヘラケズリが施されている。

11～13は土師器甕で、11は口縁部を残す資料、12・13は底部を残す資料である。11・12は調整にハケ目の痕跡が認められる。12は胴部下位に最大径をもつ下膨れの器形が推定され、栗囲式の甕と思われる。13は底面に木葉痕跡を残す。

14～19は赤焼土器で、14～16は坏、17・18は高台付坏、19は皿とした。17は高台を貼り付け時に底面に放射上に指ナデを施している。18は坏部下位のロクロ目がやや強く稜のように見え、高台は長く外へ開く。14・18・17は砂粒の多い粗雑な胎土、15は赤く発色したやや密な胎土である。

第21図20～24、第22図には須恵器を図示した。第21図20～22は須恵器蓋で、20は天井部内面が摩滅し平滑となっていることから、硯等に転用されたものとみられる。つまみも人為的に打ち欠かれた可能性がある。白色粒・褐色粒を含む緻密な胎土である。21・22は口端部の破片資料で、端部が下方へ折れるタイプである。23は高台を伴う供膳形態の土器で、大型の器形が推定されることから盤とした。底部外面が摩滅しており、硯として転用された可能性がある。24

の坏は回転糸切り後に体部下端～底面外周に回転ヘラケズリを施している。

第22図１は高台付の甕、２は擂鉢の底部と思われる。３は口頸部と肩部との境界に凸帯をもつ三段構成の長頸瓶である。褐色粒を含む精良・緻密な胎土で、搬入品と思われる。会津大戸窯の製品の可能性が高い。

４～６は円面硯である。４は硯部外周に斜めに開く外堤、やや内側に短く直立する内堤をもち、脚部は端部がつまみ上げられて平坦面をもつ。また、脚部には雑に切り込まれた方形の窓が２箇所にみられる。位置関係から４方向であろう。５も破片の左端に窓とみられる切込みがあり、縦位のヘラ描き沈線が２条みられる。右端には斜位の沈線かとみられるヘラ描きの末端がわずかに残る。また、横位のロクロ沈線が中位と下位にみられる。硯の脚部を想定しているが、透しをもつ高坏の一形態かも知れない。６は縦位の沈線を数条引いて装飾を施した粗雑なつくりの脚部である。

７・８は甕で、７は口縁帯をもつもの、８は口縁帯がなく、口縁部が外に折れるものである。９は甕か広口壷、10はロクロ整形で体部下端に回転ヘラケズリの施された大型の鉢と考えられる。11～16には各種の口縁部破片資料を示した。13は口縁端部が平坦で外面に櫛描き波状文をもつ。瓶類の口頸部を想定している。14は坏で口縁部に内傾面をもつ。15は口縁部と底部との境界に弱い段をもつ善光寺３型式期の坏、16は長頸瓶である。

17～22は甕の体部破片資料である。このうち17・19～21は内面が摩滅し平滑となっており、硯に転用されたと推定される。

（３）　小結

寺家前地区の出土土器は、重複する古墳時代後期集落に伴うとみられる土師器が少量認められる以外は、いずれも古代に属するものである。

遺構期の年代

郡庁院は、遺構の検討からⅠ期・Ⅱ－ａ・ｂ期、Ⅲ－ａ・ｂ・ｃ期に区分され、大別３時期、細別６時期の変遷が明らかとなっている。しかし、これらの各期に年代的な定点を与えうる土器の出土は、極めて乏しいと言わざるを得ない。そのなかで、遺構に伴う少量の遺物を挙げ、各期の年代を推定する手掛かりとしてまとめておきたい。

まず、Ⅰ期西脇殿であるＳＢ1701の柱掘方埋土からは、須恵器平瓶とみられる小片が出土している。同一個体だが接合しない破片複数が出土していることから、意図的に埋められた可能性がある。器形の特徴はほとんど不明であるが、平瓶は７世紀後半～８世紀初頭頃までみられる器種であり、Ⅰ期官衙の造営時に埋められたものとすれば、Ⅰ期はこの器種の消滅以前まで遡ることになる。

Ⅱ期に敷設される玉石敷の礫層中からは、小片であるが栗囲式期とみられる高坏が出土している。８世紀代の所産であろう。

一方、Ⅲ－ａ期の後殿であるＳＢ1711の掘方埋土からは、須恵器坏の底部破片が出土してい

る。また、同建物跡の柱穴から「今」の焼成後線刻のみられる両黒の土師器が出土している。両黒の土師器は、金沢地区製鉄遺跡群大船迫A遺跡などに類例がある。また、Ⅲ－a期の西脇殿であるＳＢ1413の柱穴から出土した須恵器坏は、底径のやや大きい扁平な坏で、体部下端に回転ヘラケズリを施している。８世紀後葉頃の年代が推定される。Ⅲ－a期の年代は、おおよそこの土器の示す８世紀後葉頃と推定される。

なお、ＳＢ1711はＳＫ1403に切られ、ＳＫ1403に伴う土器はⅢ－a期の下限を示す。

土坑底面からはロクロ整形で内黒、体部下端に手持ちヘラケズリを施す土師器坏が、覆土からは赤焼土器が出土している。年代は９世紀後葉から10世紀前葉の土器の推移を示すものとみてよい。ＳＫ1403からは大戸窯産の長頸瓶が出土しており、その特徴は、８世紀末とされる南原33号窯から10世紀初頭の南原73号窯にみられる形態で、どの窯式か一概に言えないが、９世紀代の所産としておくのが無難であろう。

このほか、Ⅲ－c期の西脇殿ＳＢ1409からもロクロ整形で内黒の土師器坏が出土しており、Ⅲ－c期の上限は遡っても９世紀中葉と考えられる。そして、後述する赤焼土器の示す10世紀前葉～中葉頃を、郡庁院の下限と理解しておきたい。

寺家前地区の土器様相

出土土器は、土師器、須恵器、赤焼土器である。土師器は少量で、ほとんどが坏の整形にロクロを使用した表杉ノ入式期のものである。先述のＳＫ1403からは、この種の土師器坏が比較的良好な状態で出土している。そのうち１点は「厨」の墨書がみられることから、厨家から郡庁への供給に伴って使用された土器と考えられ、この時期までは郡庁や厨家などの官衙施設が機能していたことがわかる。須恵器も量が少ないが、そのなかで円面硯や須恵器甕の体部破片を用いた転用硯が目立つ点は注意される。郡庁院の実務官衙としての機能を反映する遺物と考えられる。

郡庁院は、遺構変遷からみると、官衙の存続期間を通じて、その機能を維持していると考えられるのに対し、出土した土器の大多数が、その最終段階ないし廃絶後の土地利用に伴って使用されたと推定される赤焼土器である点に、本地区の土器様相の特徴がある。

赤焼土器は、遺構検出時の遺物包含層や、郡庁院の遺構を切る土坑やピットから、鉄滓・フイゴ羽口など製鉄関連遺物とともに出土している。西脇殿の位置と重複して鍛冶炉とみられるＳＸ1402が検出されていることも考慮すると、官衙の廃絶後に郡庁院の跡地が鍛冶関連の生産活動を行う場となっていたと考えられる。赤焼土器は、この時期に伴って大量に使用されたと考えてよい。器種は坏・高台付坏・皿のほか、擂鉢がある。坏が多く、皿は少量である。焼成が悪く胎土が粗雑なものが多いこと、底部に焼成前穿孔がみられ儀器として使用されたとみられるものが含まれることから、日常什器として使用されたというよりは、何らかの儀礼に用いられたものであった可能性が高い。年代は、10世紀前葉～中葉の幅の中で捉えることができる。

寺家前北方地区

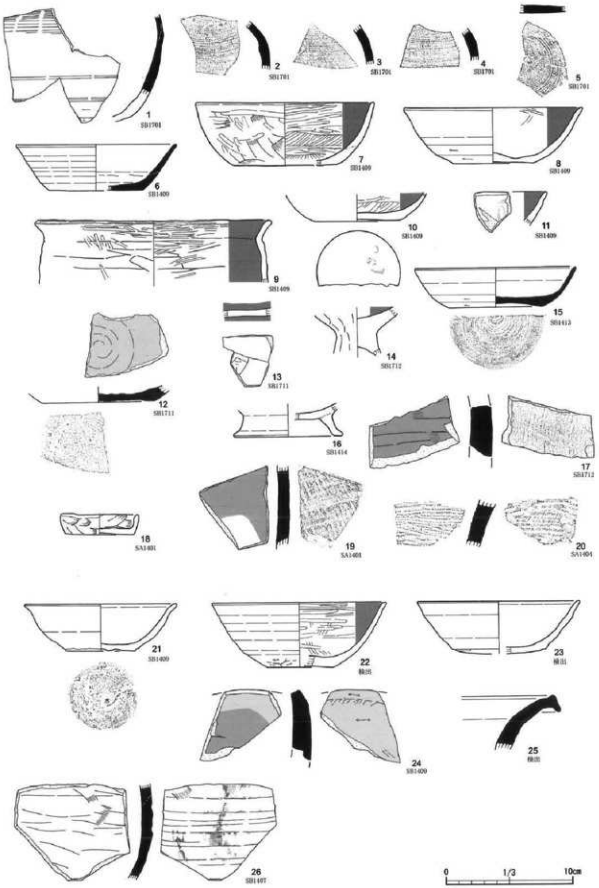
寺家前北方地区は、郡庁院の北部から北西部にかけて設定された調査区である。

ＳＢ１４１７出土土器

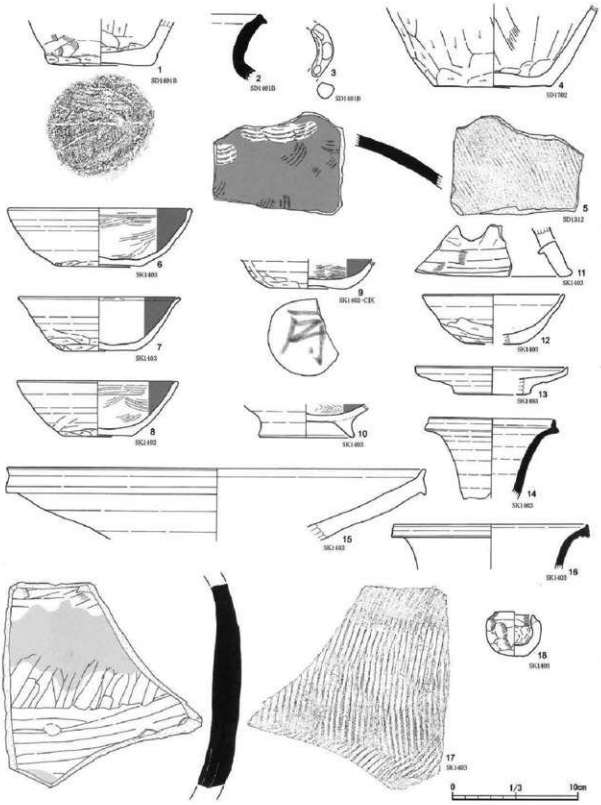
第20図14はＳＢ1417の柱穴掘方の埋土から出土した須恵器蓋である。リング状つまみがみられ、天井部内面が摩滅し平滑となっており、硯等に転用された可能性がある。８世紀前葉のものであろう。

ＳＤ１４０１出土土器

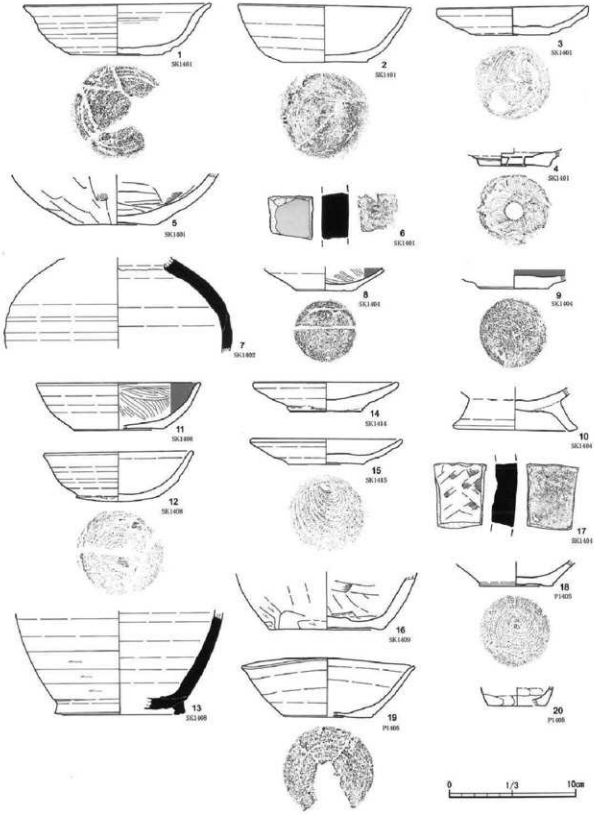
第20図15はＳＤ1401から出土した。須恵器甕の口縁部破片資料である。



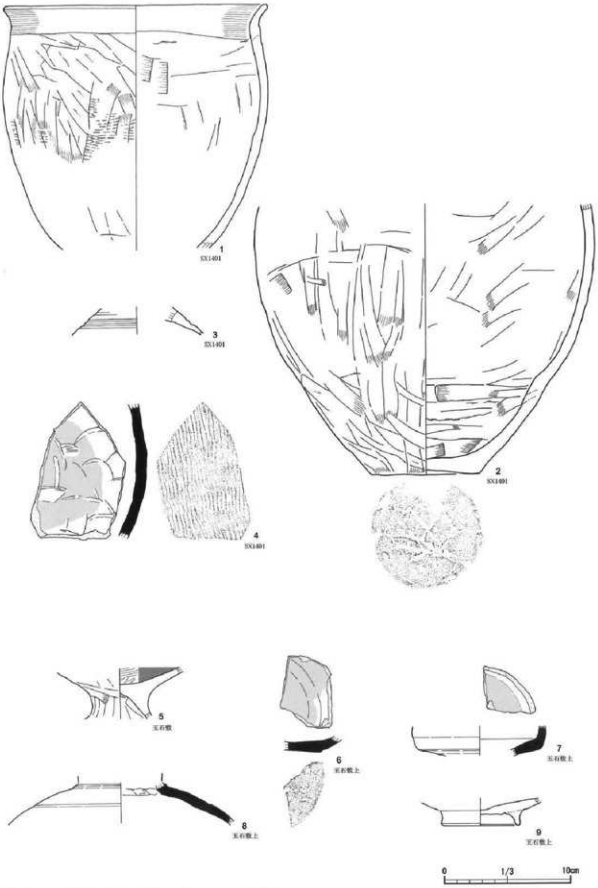
第13図　郡庁院出土土器①（SB、A区、B区）



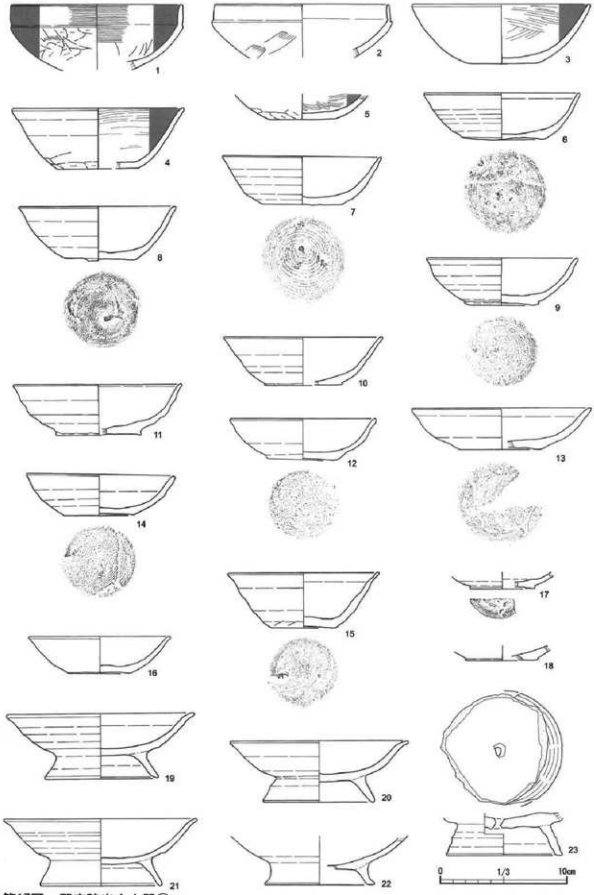
第14図　郡庁院出土土器②（SA、SD、SK）



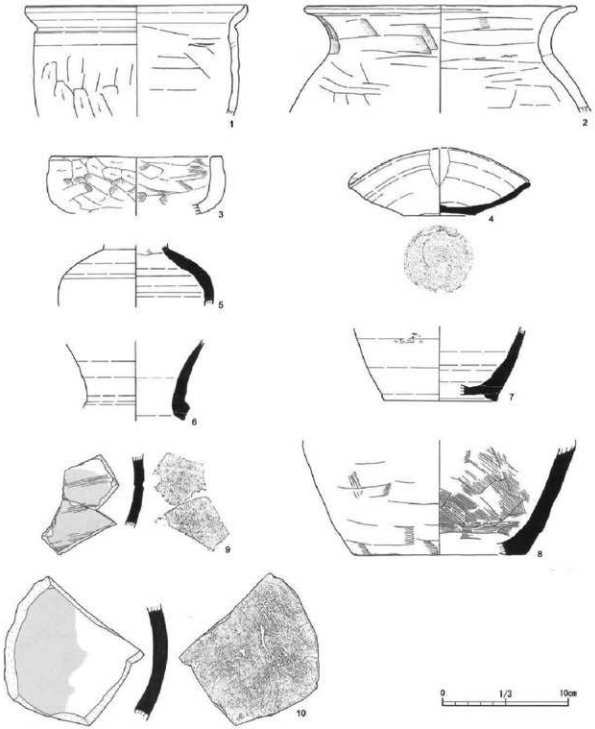
第15図　郡庁院出土土器③（SK、P）



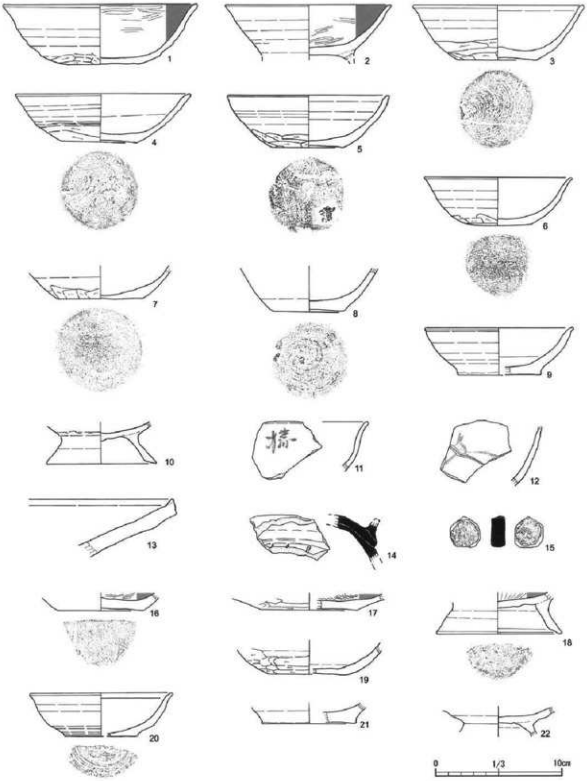
第16図　郡庁院出土土器④（ＳＸ、玉石敷）



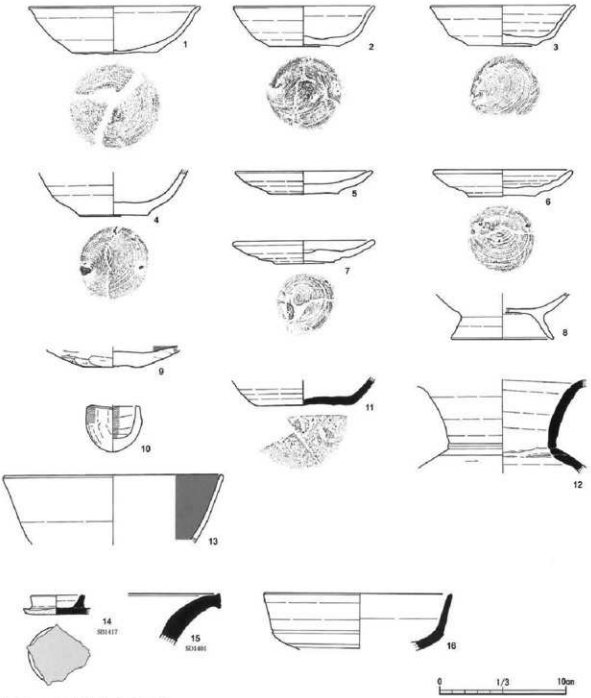
第17図　都庁院出土土器⑤



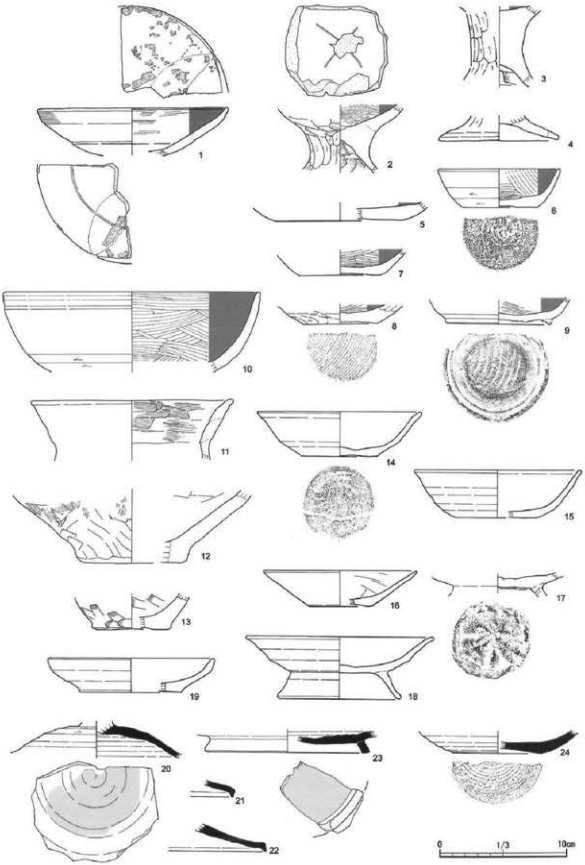
第18図　郡庁院出土土器⑥



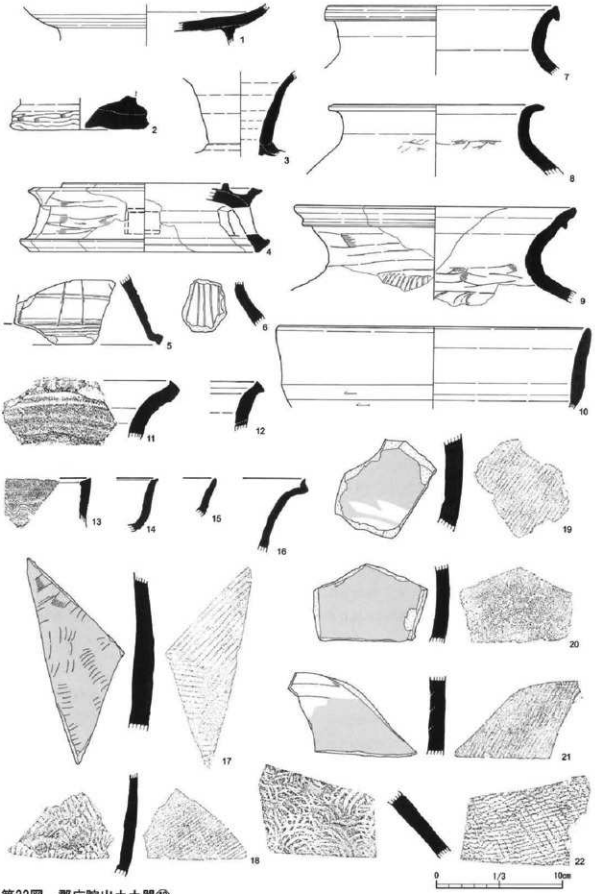
第19図　郡庁院出土土器⑦



第20図　郡庁院出土土器⑧



第21図　郡庁院出土土器⑨



第22図　郡庁院出土土器⑩

第２節　正倉院跡(旧福島県史跡指定地区)

正倉院は、昭和30年に県史跡指定を受けた範囲にほぼ相当する。本地区の調査は、これまでに、第１次調査(平成６年度)、第４次調査(平成８年度)、第16次調査(平成13年度)、第18次調査(平成14年度)、第21次調査(平成15年度)、第22次調査(平成16年度)の６回にわたって実施した。その結果、大規模な溝によって敷地を長方形に区画した院が存在していることが判明している。

第１次調査は、宅地造成に伴い院の中央部で実施したもので、掘立柱建物跡１棟、礎石建物跡１棟を確認している。第４次調査では院の北西部、第16次調査では西部から中央部、第18次調査では南半部、第21・22次調査では東部を画する区画溝を確認している。

区画溝には２時期の変遷がある。当初は、東西130m×南北88mの範囲を幅約４mの溝で区画し、その内側に一本柱塀をめぐらした構造の区画が成立する。その北側には、幅約２mのやや小規模な溝による南北98m×東西120mの区画が取り付き、２つの区画が南北に接する「日」字形の構造である。これを第１区画とし、南北に接する２つの区画をそれぞれ南部、北部とする。その後、第１区画南部の区画溝のうち北辺と、同北部のうち西辺の溝が埋め戻されるとともに、後者の外側約２mの位置を通り第一区画南部の西辺溝に接続する新たな溝が掘削される。その結果、東西130m×南北196mの縦に長い長方形の区画となる。これを第２区画とする。

また、以上のような、区画溝から把握できる２段階の変遷に加え、後述するように、新しい時期の区画と重複し、これより新しい礎石建物跡が確認されていることや、未調査であるが区画の東外側にも多数の礎石が分布していることから、さらに東側へ正倉域が拡大した時期があった可能性が高い。

溝による区画の内部では、建て替えも含め17棟の建物跡が確認されている。第１区画南部には、北辺ちかくに総柱式の掘立柱建物(ＳＢ0102、1802)が東西方向に配列され、後に礎石式の総柱建物(ＳＢ0101、1801)に建て替えられる。また、その南側20mの位置では建て替えにより３時期の変遷のみられる礎石建物(ＳＢ1803)が位置している。また、このＳＢ1803の西側には、掘立柱式の側柱建物が集中して造営されている(ＳＢ1804～1807・1810)。このほか第１区画の外側にあたる位置で掘込地業３基が確認されている(ＳＢ0401、1601、2201)。このうち、ＳＢ1601とＳＢ2201は第１段階に伴う第２区画の溝跡と重複し、これより新しい。ＳＢ0401も位置関係からみて第２区画の溝と重複するようである。したがって、第２区画内に造営されたこれらの掘込地業は、相対的に新しい時期のものと考えられる。

なお、第４次調査では、溝による区画の外側も調査しており、南北に並ぶ掘立柱建物跡２棟が確認されている。これを正倉院西方地区と呼び、出土の土器は本節で報告する。

（１）　遺構出土の土器

ＳＢ１８０１出土土器

ＳＢ1801は第18次調査１区(18－１区)で検出された礎石立て総柱式の建物跡である。

第23図１は、この地業を断ち割ったサブトレンチ内で、地業土中より出土した。ロクロ整形で、底部糸切り後に体部下端を手持ちヘラケズリで調整し、内面にミガキ・黒色処理を施す。底面に焼成前のヘラ描きで「×」の線刻がある。

ＳＤ２２０１～２２０３・１６０１－Ｂ出土土器

ＳＤ2201は第22次調査(22－１区)、ＳＤ1601－Ｂは第16次調査Ｂ地区(16－Ｂ区)で検出された、第１区画を構成する東西溝跡である。

第１区画は、東西130ｍ×南北88ｍの範囲を幅約４ｍの溝で区画し、その内側に一本柱塀をめぐらした南部と、その北側に幅約２ｍのやや小規模な溝によって南北98ｍ×東西120ｍの範囲を区画した北部からなり、２つの区画が南北に接する「日」字形の構造である。ＳＤ2201とＳＤ1601－Ｂは、この第１区画南部の北辺を画する。

この東西溝は、ある時期になると人為的に埋め戻されている。第22次調査区は、南区画の北東コーナー部にあたり、東西溝ＳＤ2201は南に折れ曲がり南北溝ＳＤ2202となる。また、このコーナー部には、北側から南北溝ＳＤ2203が接続し、ＳＤ2201～2203でＴ字状となっている。

第23図２はＳＤ2201の下層、16はＳＤ1601－Ｂの下層から出土したもので、埋め戻し前の自然堆積層から検出された。３・６～９は、ＳＤ2201の埋め戻し後の最上層からの出土。４・５はＳＤ2201～2203がＴ字状となるコーナー部の上層から出土した。これらの土器の年代までには、同溝の大部分が埋没していたと考えられる。17～19はＳＤ1601－Ｂからの出土である。

２は非ロクロ成形で丸底の坏の底部に高台のつくタイプであるが、全体の器形は不明である。16は土師器甕で、底部のみの資料であるが、残存部から下膨れの胴部が推定される。４はロクロ整形で内面に黒色処理の施された土師器坏で、底部に回転糸切痕を残す。５はロクロ整形・内黒の土師器高台付坏である。６～８は赤焼土器の高台付坏、６・７は胎土・焼成・色調の特徴や出土位置から同一個体と推定される。

９は須恵器の長頸瓶である。ロクロナデ調整のあと、体部の一部にナデ痕が認められる。黒色粒を含むやや緻密な胎土である。

16は土師器甕で、下膨れの胴部をヘラナデで調整し、底面に木葉痕を残す。

ＳＤ１８０２出土土器

ＳＤ1802は第18次調査区Ｃ区(18－Ｃ区)で検出された正倉院の西辺区画溝跡である。　この部分は、第１区画・第２区画で共有されていたと考えられる。第23図10・13は赤焼土器の坏で、その溝の大部分が埋没した段階の上層から出土した。

ＳＤ１６０１－Ａ・ＳＤ１６０２出土土器

ＳＤ1601－Ａ・ＳＤ1602は、第16次調査区Ａ地区で検出された南北溝である。ＳＤ1602は第１区画北部の西辺溝であり、これが埋め戻される一方、その西側２ｍの位置に、ＳＤ1601－Ａが掘削され、第２区画の西辺溝となる。

ＳＤ1601－Ａは、土層の検討の結果、掘り直しによりａ～ｃ期に区分できることが判明している。第20図11・12・14は、そのうちｃ期の堆積層中より出土したものである。

11はロクロ整形・内面黒色処理の土師器坏で、体部下端から底面に手持ちヘラケズリを施す。12は赤焼土器坏で底部に回転糸切痕を残す。14は赤焼土器の高台付坏である。

15はＳＤ1602の最下層から出土した。須恵器長頸瓶の肩部から体部にかけての資料である。肩の張る器形で、５枚葉の櫛歯状工具で体部に刺突文をめぐらす。長頸瓶としては古い特徴を残すものと考えられる。

ＳＤ０４０１・０４０３出土土器

第４次調査では、上述した第２区画の西辺溝ＳＤ1601－Ａと第１区画北部の西辺溝ＳＤ1602－Ａの北側延長部分が検出され、これらの南北溝が東へ折れ曲がることを確認している。ＳＤ1601－ＡとＳＤ1602－Ａは北側へ行くにつれて間隔を狭め、第４次調査区付近では両者が重複するかたちとなる。このため検出されたＳＤ0401は、掘り込みの形状が段をもち、複数の溝が重複している状況がわかるが、覆土からそれを仕分けることはできていない。ＳＤ0403は、ＳＤ0401のコーナー部に北から接続する南北溝で、覆土の最下層から土師器高台付椀が出土している。

第24図１・２・５は、ＳＤ0401の覆土下層から出土した土器である。１は須恵器甕の口縁部から肩部の一部を残す資料で、内面から外面の口縁部にかけてロクロナデ調整、頸部外面にヘラナデを施す。肩部以下は外面に平行叩きを施すが、叩き板の端が頸部に当たり、圧痕となって残る。２は須恵器長頸瓶である。口縁部と頸部から肩部にかけての破片があり、両者は接合しないが胎土・焼成・色調の特徴から同一個体と判断されるものである。頸部と肩部の境界に凸帯をもつ三段構成のものである。５は須恵器甕の底部破片資料で、外面に平行タタキ目が残る。内面は摩滅し平滑になっており、硯などに転用されたものと思われる。

第24図４はＳＤ0401の覆土上層から出土した。須恵器高台付坏で、大きめの底部に回転ヘラケズリを施し高台を貼り付けている。内底と底面が摩滅し平滑となっており、食器としての使用のほかに硯に転用され、坏部内面と底面が硯面として使用された可能性が高い。

第24図３はＳＤ0403から出土した土師器高台付椀で、底部の一部を欠くほかはほぼ完形で出土した。ロクロ整形、底部回転糸切り後に高台を貼り付け、ロクロナデ調整を施す。内面は底部に放射状、口縁部に横位、外面の口縁部から体部にかけては粗い横位のミガキが施されている。内面は黒色処理である。

ＳＫ１６０１出土土器

ＳＫ1601は、Ⅱ期正倉院北辺の区画溝ＳＤ1601－Ｂが埋め戻されて埋没した後に、その覆土を掘り込んで形成された土坑である。検出のみに留めたが、上面より土器が出土している。第24図６は須恵器広口壺の口縁部から肩部にかけての資料、７は須恵器甕の体部破片資料である。

ＳＸ１６０１出土土器

ＳＸ1601は第16次調査区Ｂ区の北西に位置する方形の浅い掘り込みで、調査区外へさらに延びる。覆土の上層は炭化米ほかの炭化物を含み、下層は白色粘土層・灰白色の砂層が堆積する。性格は判然としない。

第24図８は土師器高台付坏である。底部が大きく残るほか、口縁部の小破片が得られている。両者は接合しないが胎土・色調・焼成・器形・調整の特徴から同一個体と判断されるため、復元して図示した。ロクロ整形で全面にミガキ・黒色処理を施している。10は赤焼土器である。

第25図１～４は須恵器甕の体部破片資料である。１は外面に平行タタキ目を残し、内面は一部が摩滅し墨痕が残るため、硯に転用されたものと思われる。２は外面に斜格子タタキ目を残す。内面に顕著な摩滅はみられないが、内面・外面に一部墨痕が認められ、硯に転用された可能性がある。３・４は外面に平行タタキ目、内面に同心円文当て具痕を残す。

第26図１は外面に平行タタキ目を残し、「×」の記号が押印されている。第26図２は内外面にロクロナデが施されており、全体の器形は不明であるが、広口壺か鉢のような器形を想定した。

ＳＫ２２０１出土土器

ＳＫ2201は、第18次調査３区で検出された土坑で、自然堆積により埋没した覆土の中層で完形のものを含む丸瓦・平瓦が出土した。第24図９は土師器甕の底部破片資料である。

（２）　遺構外出土の土器

正倉院地区の遺構外出土の土器

第27図には、正倉院の区画内の調査区（第４次調査４－１～11・21・22Ｔ、第16・18・21・22次調査）で出土した土器類を図示した。

１は土師器坏である。丸底の底部と、大きく外に開くやや内湾気味の口縁部からなる。外面の口縁部と底部の境界には、不明瞭な段を有する。また内面の対応する位置も弱いくびれがみられる。口縁部外面にヨコナデ、底部外面にヘラケズリ、内面にミガキ・黒色処理を施す。栗囲式の坏で、段が弱く器高が浅く、扁平化の進んだ新しい様相のものである。

２・３はロクロ整形の土師器坏で、２は外面の体部下端から底面にかけて手持ちヘラケズリが施される。３は摩滅が著しいが、やはりヘラケズリによる調整が行われている。また両者とも内面にミガキ・黒色処理を施す。

4は土師器甕の底部である。器面の劣化が著しいが、胴部の下端は指でなぞったようなナデが施されている。

5～9は赤焼土器である。5・6・8は坏で、底部に回転糸切り痕を残す。8は径4.4cmの小さい底部をもつ。底面はヘラナデ調整が施されるが、わずかに糸切り痕を残す。

7・9は高台付坏で、9はやや堅い焼き上がりである。

10～13は須恵器蓋である。10・11は天井部を残す資料で、10はボタン状、11は宝珠形のつまみがみられる。12・13は口端部の破片資料で返りをもつ。

14は須恵器坏で、底部回転糸切無調整、体部はやや内湾気味に立ち上がる。また焼き歪みがある。15は長頸瓶の口頸部で、口縁部は外反したのち上方へ折れる。外面には緑色の自然釉が付着している。16は高台付坏、17は高台のつく長頸瓶の底部と思われる。

18は須恵器の長頸瓶である。口頸部を欠くが、体部～底部が完存する。また、底部に剥離面があり、高台が付くことがわかる。体部は中位やや上に最大径をもつソロバン玉状、頸部は破損部で計測して径4.3cmと細い。頸部の付け根には掻き目状の擦痕がみられる。また体部下半には回転ヘラケズリを施し、底部の高台との接合部には、接合をよくするために刻みがみられる。肩部にはロクロ沈線による横線を3本施文し、その間に10枚歯の櫛歯状工具による波状文を2段施文している。

19は須恵器甕の口縁部破片資料で、頸部には5枚歯の櫛歯状工具による波状文と横線文を交互に施文する。

20は須恵器坏の口縁部破片資料である。口縁端部に内傾面をもつ。21は高坏で、坏部と脚部との接合部が残る。22～24は須恵器甕の体部破片資料である。22は外面に平行タタキ目、内面に無文当て具痕を残す。23は内・外面ともナデ調整を施す。24は外面に矢羽状タタキ、内面にナデがみられる。3点はいずれも内面に摩滅がみられる。22は内面の中央部のみが摩滅している。24は一部に墨痕がみられ、硯として使用されたものと思われる。破片の形状も意図的に加工された可能性がある。

第28図1・2は、須恵器の口縁部で、体部外面に平行タタキ・内面に同心円当て具痕が見られる。また内面に一部輪積痕を残す。叩き整形の後に口縁端部を内・外面ともヨコナデしている。鉢のような器形を想定している。

3～10は須恵器甕の体部破片資料である。3～5・9・10は外面に平行タタキ目、6・8は外面に格子タタキ目がみられ、いずれも内面に同心円文当て具痕を残す。9・10は円盤状に加工された可能性がある。

11は手づくね土器で底面に本葉痕を残す。12は土錘である。

正倉院西方地区の遺構外出土の土器

第26図3～18には、正倉院区画の西外側で実施した調査(第4次調査4－12～20・23～28T、第12次調査)で出土した遺物を示した。

3は土師器坏で、非ロクロ整形、内黒で、底部は丸底だが平底化が進んでおり、段をもたず

口縁部がそのまま立ち上がる。口径14cmに対し器高3.2cmと扁平である。口縁部外面にヨコナデ、以下にヘラケズリを施すが、体部下端と底部の境界を意識している。国分寺下層式の坏である。

6はロクロ整形、内面黒色処理の施された土師器坏である。体部下端から底面に回転ヘラケズリ調整が確認できる。8はロクロ整形の土師器高台付坏である。器壁の表面がほぼ全面に渡って剥離しており、調整の内容は不明であるが、外面にわずかにミガキ・黒色処理の施された器面が剥離せず残っている。器形の特徴から、本来は内・外面とも黒色処理が施された両黒の高台付坏と考えられる。

4・5・7・9は赤焼土器である。4・7・9は皿で、4・9は底部に回転糸切痕を残す。7・9は口縁部付近が肥厚し端部が摘み上げられて上方を向く。両者はやや堅緻な焼き上がりも共通し、接合しないが同一個体の可能性もある。5は高台付坏で、摩滅が著しいが、ロクロ整形で底部切り離し後に高台を貼り付け、高台の内面を放射状にヘラナデする。

10・12は土師器甕である。10は胴部下端から底面までヘラケズリを施すが、12は木葉痕を残す。

11はかわらけの小坏である。ロクロ整形、底部回転糸切り無調整。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として用いられたものと確認できる。

13は土師器の甑である。無底式・長胴形で、口縁部の大部分を欠くが、胴部以下はほぼ完存する。被熱により外面の全体が劣化しているが、胴部外面に単位の太いヘラナデ、内面に単位の細いヘラナデを縦位に施した後、内・外面口縁部に強いヨコナデ、胴部下端に横位のヘラケズリを施す。外面は大半が黒く煤けている。

14・15は須恵器蓋である。14は口端部やつまみを欠くため、器形の特徴を把握できないが、天井部外面に回転ヘラケズリを施す。内面が摩滅しており、硯に転用された可能性がある。15は返りをもつ口端部の破片資料である。返りは低く、口端部の内側でおさまる。外面の天井部に近い位置に、回転を利用しヘラ状工具を用いた擦痕がみられる。

16は坏で、底部に回転ヘラ切り痕を残す。17は高台付坏である。口縁部を欠くが、口径の割に器高が高く、やや深身の器形が想定される。外面の体部と口縁部の境界には、きわめて弱いながら稜がある。高台は大きく外に開く。なお、内面がやや摩滅し、底部の破面にも研磨面を確認できる。砥石か硯に転用された可能性がある。18は須恵器の口縁部破片資料で、体部外面に平行タタキ・内面に同心円当て具痕が見られ、内面に輪積痕を残す。

また叩き整形の後に口縁端部を内・外面ともヨコナデしている。鉢のような器形を想定する。

（3）　小結

土器の様相と遺構の年代

出土土器は、土師器、須恵器、赤焼土器である。正倉院にあたる本地区で出土した土器は、郡庁院とともに少ないが、土師器では栗囲式期から赤焼土器までの年代幅があり、これが本地

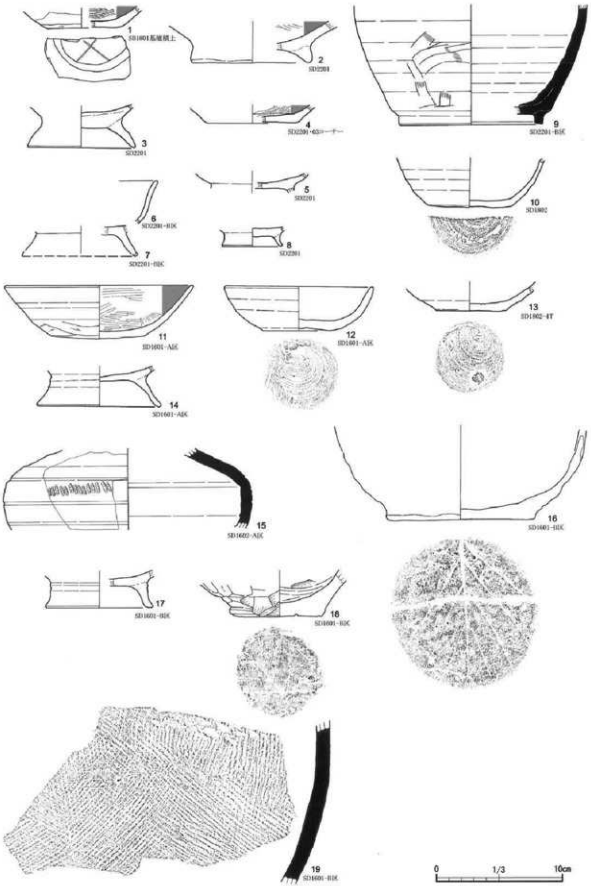
区の施設の年代幅を概ね示していると考えられる。本地区では、主軸方位が東に振れる１期官衙にともなう施設は確認されておらず、上記した土器の年代幅は、本地区に正倉院が造営され存続した官衙Ⅱ・Ⅲ期の年代を示すものと解される。

埋め戻しにより２時期の変遷のみられる正倉院の区画溝跡からの出土土器については、埋め戻し前の最下層の土層から土師器高台坏や甕が出土している。全体の器形が判明するものはなく、型式や年代は判然としないが、高台坏は土師器の整形にロクロが用いられる以前のもので、かつ高台付の器種が出現して以降の限定された時期のものである。８世紀前半頃の年代と思われる。この年代観と、同じ層から出土した郷里制段階に作成・使用された５号木簡から与えられる実年代とに矛盾はない。溝の埋め戻しは、この時期以降ということになる。

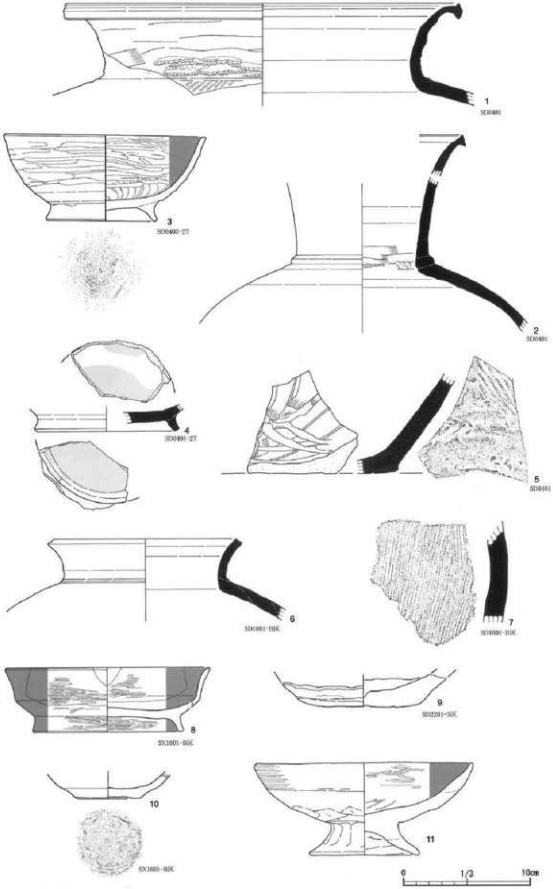
区画溝のうち、埋め戻しが行われた部分以外は、以降も存続したと考えられるが、いずれも上層から赤焼土器が出土しており、この時期には区画溝が上層まで埋没し、ほぼ機能を失っていたと考えてよい。なお、18－１区では、正倉院関連の遺構と直接の切り合いはないものの、鍛冶炉とみられる炉跡が確認されている。正倉院の区画内にこうした施設が入り込んでくる時期には、正倉院は廃絶していたと考えられ、その時期は上述した赤焼土器に対応する可能性が高い。この点は、郡庁院の廃絶時期とほぼ一致している。

こうした正倉院の区画内には、特に第一区画南部で掘立柱式の総柱倉庫から礎石式の総柱倉庫への変遷が確認されているほか、掘立柱式の側柱建物も複数の時期が重複している状況が確認されている。しかし、これらの建物の年代を示す土器はほとんどない。

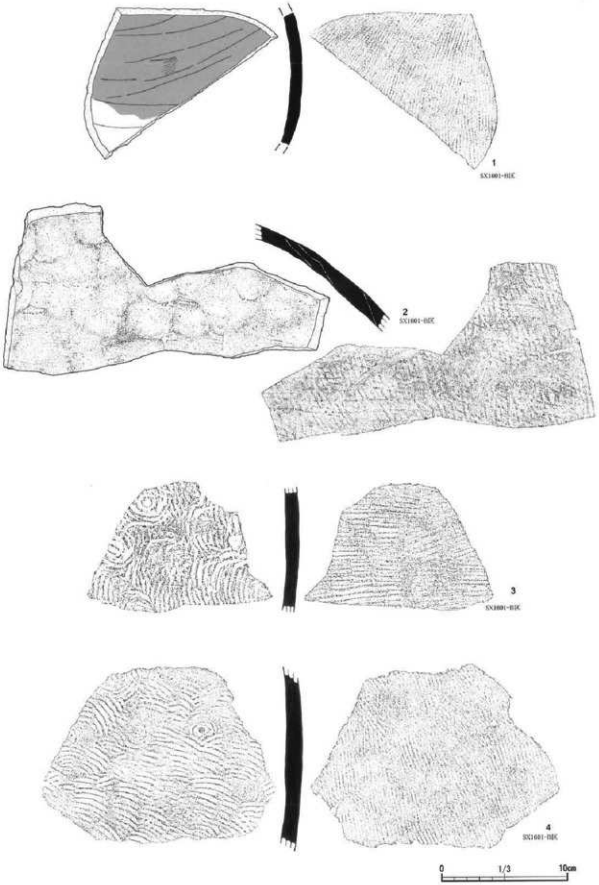
そうしたなか、ＳＢ1801は、掘立柱式の総柱建物ＳＢ1802を建て替えた礎石式の総柱建物で、基壇積土中から土師器坏が出土している。第23図１の坏はロクロ整形、内黒で、底面に糸切り痕を残し、体部下端に手持ちヘラケズリを施す。小片であるため、年代ははっきりしないが、９世紀代であることは間違いなく、ＳＢ1801の上限を示すものである。



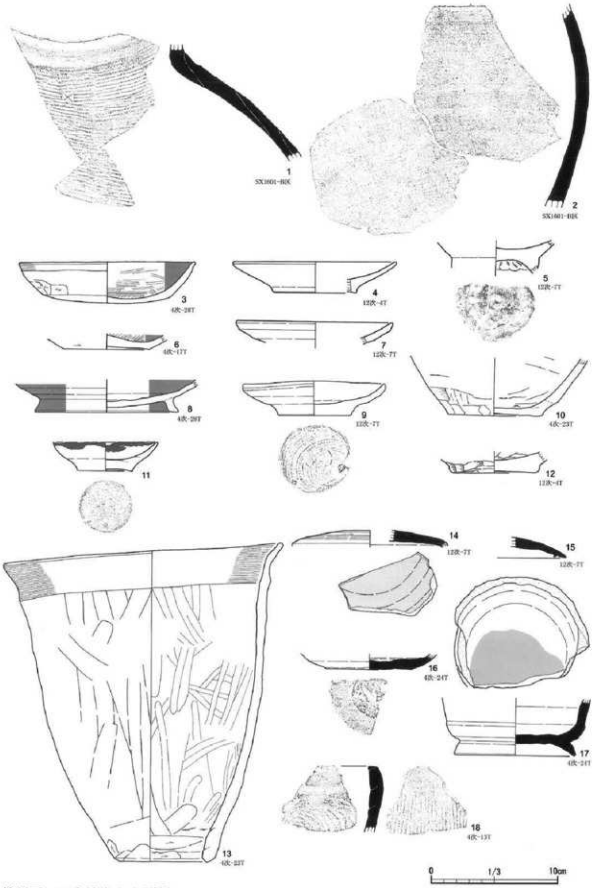
第23図　正倉院出土土器①



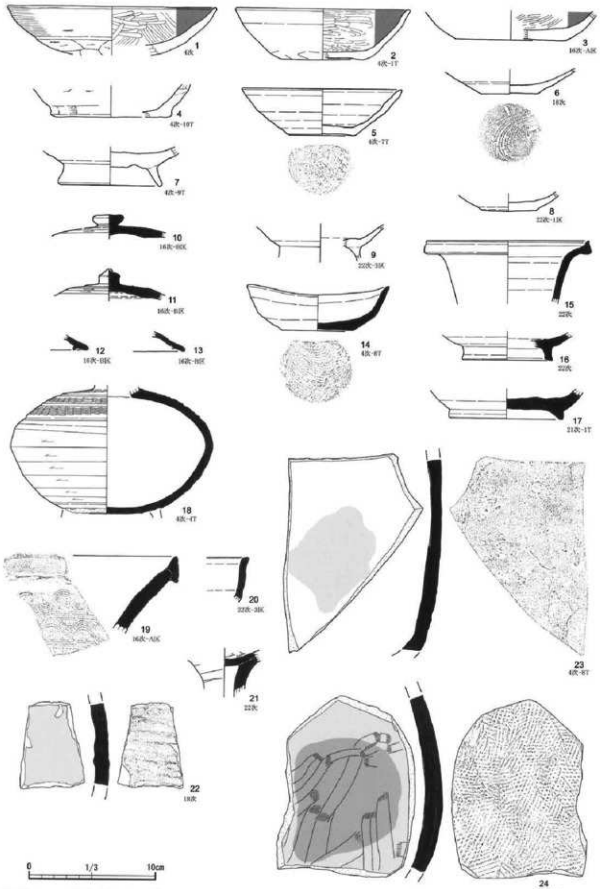
第24図　正倉院出土土器②



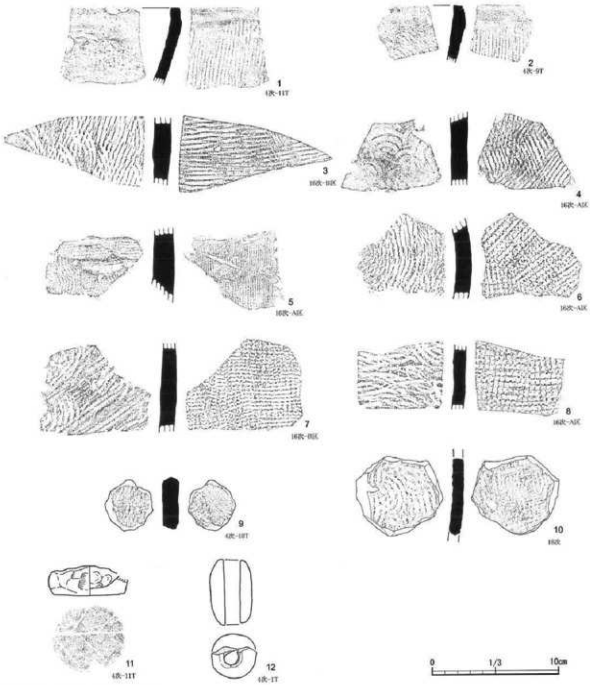
第25図　正倉院出土土器③



第26図　正倉院出土土器④



第27図　正倉院出土土器⑤



第28図　正倉院出土土器⑥

第３節　館院跡(町池地区)

遺跡西端にあたる字町池を中心とした地区である。平成９年度に実施したトレンチによる第６調査、平成10年度には第６次調査とおなじ対象範囲について面的に実施した第８次調査、第８次調査区の北側で平成15・16年度に実施した第20・23次調査である。これらの調査合わせて、掘立柱建物跡34棟、竪穴建物跡13棟のほか、定型的な方形の平面プランをもたず、カマドを伴わない竪穴状の遺構６基、また、これらの竪穴状遺構と重複し、これより新しい複数の溝跡などが確認されている。

遺構の重複関係や、掘立柱建物跡の配置の関係性などから、本地区の建物群はＡ～Ｃ期に区分されている。Ａ期は、竪穴状遺構(ＳＩ0801～0806)と、地区の北端寄りに建てられた東西棟の掘立柱建物群(ＳＢ0813～0817、0824、0726～0830)で構成される。Ａ期とする建物同士にも、近接するため同時に存在したとは考え難いものもあり、小期が存在するものと思われる。

遺構の重複関係上、これより新しいＢ期は、八脚門跡(ＳＢ0810)とこれに取り付く掘立柱塀(ＳＡ0801)で南側を区画し、区画内に東西棟・南北棟の建物(ＳＢ0801～0803、0805～0807、0825)を配置する段階である。区画内の建物配置は、北部に東西棟を、西部に南北棟を配する逆Ｌ字形を基本とする。建物規模から見て、中心となる建物は区画南西部に位置する５×３間のＳＢ0802と考えられる。なお、北部の建物群には竪穴建物跡１棟が伴う(ＳＩ0807)。

この段階の建物跡の幾つかは、平側ないし妻側のいずれかの柱列と、これに隣接する他の建物のいずれかの柱列との距離が、10.5ｍもしくはその倍数とされていることが判明している。そうした関係性を見出せる建物は同位置で建て替えられている場合が多い。建て替えられた後の段階をＣ期としているが、Ａ期のなかに小期が想定されるのと同じように、Ｂ期のなかの小期と理解する方が妥当であろう。

これらの建物群の西側では、複数の溝跡が重複して確認されている(ＳＤ0836、0838、0865)。溝は竪穴状遺構を切って掘り込まれており、繰り返し掘り直されて長期間維持された溝であったと考えられる。溝跡群は建物群を囲繞するものではなく、本地区の北と南へ長く続いている。第８次調査区の北側に位置する丘陵緩斜面で実施した第23次調査では、その北側延長部分が確認されている。また、溝跡群の西側は建物跡の分布が途切れ、溝に沿って空白地帯が存在する。第23次調査では、溝跡群の北側延長部分とともに、その西側で、地山にマンガンが沈着した硬化面を確認したことから、溝跡群を側溝とし、西側の空白帯を路面とする道路遺構の存在を想定している。

また、第23次調査のすぐ東側、第８次調査区の堀立柱建物群の北側に位置する斜面では、竪穴建物跡12棟が集中して確認されている(ＳＩ2001～2012)。これらは、重複ないし近接して営まれていることから、全てが同時に存在したのではなく、一定の時間幅のなかで順次造営され、廃絶したものとみられる。

(1)　遺構出土の土器

ＳＢ０８０６出土土器

ＳＢ0806は、掘立柱建物群の北部に位置する東西棟建物である。ＳＢ0830と重複し、これより新しい。第29図１・２は柱穴内より出土した。

１は須恵器蓋の口端部破片資料で、内面にシャープだが短い返りをもつ。２は壺の体部破片資料である。外面に自然釉が濃く付着している。

ＳＢ０８０７出土土器

ＳＢ0807は、掘立柱建物群の北部を構成する東西棟建物のうち西端に位置する建物である。第29図３は柱穴内より出土した。須恵器短頸壺の体部破片資料である。内面はロクロナデ調整、外面は上半と下半の境界に弱い沈線がみられ、下半にヘラケズリが施されている。

ＳＢ０８１６出土土器

ＳＢ0816出土土器は、第29図４に示した須恵器甕の口縁部破片資料である。

ＳＢ０８２２出土土器

ＳＢ0822は、八脚門を伴う柵列の外側で検出された東西棟の掘立柱建物である。第29図５は柱穴より出土した土師器甕の体部破片資料である。胴部下半の破片と思われる。外面には縦位のハケ目、内面には横位のハケ目が施されている。

ＳＢ０８３０出土土器

ＳＢ0830は第８次調査区内で検出された掘立柱建物群のうち、北端に位置する東西棟建物の一つである。ＳＢ0806と重複し、これより古い。

第29図６は柱穴内より出土した。土師器蓋の口端部で、内湾気味の天井部からそのまま口端部にいたる器形で、内・外面ともにミガキ・黒色処理が施される。外面に焼成後線刻で「労」の文字が確認できる。

ＳＤ０８０１出土土器

ＳＤ0801は掘立柱建物群の南西部を東西に走る溝跡である。

第29図７は須恵器高台付坏である。底部を残す資料で、底部はやや内湾して下がる。高台はやや高く、わずかに外傾し、先端は平坦である。

ＳＤ０８３０出土土器

ＳＤ0830はＳＤ0839と交差して東西に溝で、東側は枝分かれする不整な掘り込みで人工的な溝かどうかは不明。

出土した第29図11は脚部であるが器種は不明。短く断面が扁平な長方形を呈する脚で、全面にヘラケズリが施されている。

ＳＤ０８３１出土土器

第29図８は坏で、底部を欠くが底部が内湾気味で高台の付く器形と思われる。底面に回転ヘラケズリが施されている。９は須恵器蓋の口端部破片資料である。口端部内面の返りは短く内傾する。10は須恵器甕の体部破片資料で、外面に平行タタキ目、内面に目の細かい格子タタキ目を残す。

ＳＤ０８３３出土土器

第29図12は土師器高坏である。坏部は欠損するが、脚部は中空の短い柱状部から裾部が折れて外に開く形態である。坏部内面にミガキ・黒色処理が施されている。

ＳＤ０８３６・０８３８・０８６５出土土器

掘立柱建物群の西側を通過する溝跡群である。複数の溝跡が相接して掘り込まれており、一部は重複する。すべての先後関係は捉えられていないが、ＳＤ0837はＳＤ0838より古く、ＳＤ0865はＳＤ0866より新しい。溝跡群の西側は、無遺構地帯となっており、本溝跡群を側溝とし、無遺構地帯を路面とした道路跡の存在を想定している。

これらの溝跡群は、竪穴状遺構ＳＩ0801～06を切っており、竪穴状遺構からは土器が比較的まとまって出土していることから、溝内から出土した遺物も、本来は竪穴状遺構に属するものが、溝の掘削にともなって混入した可能性がある。

ＳＤ0836の出土土器は第29図13、14である。13は須恵器蓋で、天井部から口端部までが直線的に外へ開く。口端部内面の返りは欠損している。14は須恵器の円面硯である。圏脚円面硯の脚部の破片資料で、硯部や脚端部は欠損するが、上端には上方を向く突帯がみられ外提とみられる。外面には縦位の沈線が３条みられ、また方形とみられる透かしの存在を確認できる。外面はヘラナデ、内面はロクロナデ調整である。

ＳＤ0838の出土土器は第29図15・16に示した。15は土師器甕の底部である。全体の器形は判然としないが、胴部の立ち上がりが大きく外に開くことから、下膨れの胴部が推定される。外面の調整はヘラナデによる。なお内面は全面が黒く煤けている。16は須恵器の壺ないし甕である。肩部破片資料でロクロナデ調整、体部外面に平行タタキ目を残す。

ＳＤ0865出土の土器は第29図17・18・19である。17は土師器坏である。丸底だが平底気味の底部から体部が内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る半球状の器形である。底部外面にヘラケズリ、口縁部にヨコナデを施すが、両者の間は未調整部分が残る。このため、外面には成形時の粘土紐巻上げ痕が確認できる。内面はミガキ・黒色処理が施されている。国分寺下層式期に位置づけられるものである。

18は円面硯の脚部を想定して図化した。表面が剥離しており器形や装飾、調整の特徴は不明

である。分厚く先端の平坦な脚部で、内・外面ともにヘラナデを施す。

19は須恵器の破片資料で、器種は不明である。上半は内傾気味に立ち上がる、下半は大きく屈曲し外に開く。上半は外面に強いロクロ沈線を施して、その間に３条の突帯が形成される。下半には櫛描波状文を確認できる。残存部から器種を特定できないが、壺類の頸部～肩部にかけての資料、ないし円面硯の脚部、器台などの可能性があろう。

ＳＤ０８４３出土土器

ＳＤ0843は第８次調査区の北東墨部を東西に走る溝である。第29図20は須恵器蓋である。天井部を残す資料で、つまみは上面の平坦なボタン状と推定されるが、周囲が欠損し台形状となっている。人為的に打ちかかれた可能性もある。21は壺の肩部である。内・外面にロクロナデが施されている。

ＳＤ０８６１出土土器

ＳＤ0861はＳＤ0838の東側3.5mの位置を並行する溝跡である。北側はＳＤ0839に連続する一連の溝と考えられる。

第29図29は須恵器の提瓶である。胴部内面にロクロナデ、外面にカキ目を施している。肩部の取っ手は欠損するがボタン状の取っ手がつくものと思われる。焼成は堅緻で胎土は精良・緻密、黒色粒を含む。在地のものではなく搬入品であろう。

ＳＤ０８６２出土土器

第29図23はＳＤ0862出土の須恵器蓋で、口端部の破片資料である。口端部が短く下方へ折れる無返り蓋である。

ＳＤ０８６８出土土器

ＳＤ0868はＳＤ0838を中心とした溝跡群の西側で検出された小規模な溝跡である。

第29図24は円面硯と推定して図化した。脚端部は丸みをもち、全体に器厚の厚い粗雑なつくりである。脚部外面の下位に凸帯をめぐらす。

ＳＤ０８７３出土土器

ＳＤ0873は、先述の溝跡群の西側約８ｍの位置を平行に走る溝跡である。ＳＫ0812と重複するが、先後関係は不明。

第29図25～27に出土遺物を図示した。25は土師器坏ないし椀で、直立する口縁部からそのまま丸底の底部にいたる半球状、やや深身の器形である。口縁部外面にヨコナデ、体部～底部にヘラケズリ、内面にミガキ・黒色処理を施す。

26は須恵器硯である。残存部から中空円面硯を想定して図化した。直径は9.6cm、器高は３cmほどである。丸底で硯部の外周に短く斜め上方を向く外提がつく。硯部は欠損するが、残存

部から平坦であったと推定される。

27も須恵器の硯を想定して図化した。圏脚円面硯で、硯部は剥離している。分厚いつくりで脚端部は平坦、脚部外面に突帯２条を間隔をあけてめぐらす。外面はロクロ内面はヘラナデを施す。

ＳＤ０８７５出土土器

ＳＤ0875は掘立柱建物群の西側を走る溝跡群の西約20mの位置をやや蛇行して走る溝跡である。本溝は先述したＳＤ0838をはじめとする溝跡群に対応する道路側溝の可能性がある。

第29図28は須恵器蓋である。口端部を残す資料で、天井部付近は内湾するが、口端部はつまみ出されて屈曲し外反する。内面には下方へ伸びるやや明瞭な返りがみられる。器形の特徴は善光寺４型式にみられるものである。

ＳＤ０８９２出土土器

第30図５はＳＤ0892から出土した土師器甕の底部である。分厚い底部から胴部が大きく外に開く。内面には丁寧なヘラナデが施されている。

ＳＤ０８９９出土土器

ＳＤ0899は掘立柱建物群の北側で確認された溝跡である。ＳＩ0808、0809竪穴状遺構と重複する。

第30図６は須恵器甕の肩部破片資料である。外面は平行タタキの後ロクロナデ調整、内面には同心円文当て具痕を残す。７は須恵器円面硯の脚部である。器厚が厚く、脚の端部が平坦で、外面に突帯を巡らす特徴が、第29図27などと共通する。

ＳＤ０８１００出土土器

ＳＤ08100はＳＢ1801と重複して弧状にめぐる細い溝である。

第30図１～３は甕である。１は球胴形で口縁部が強く外反する。口縁部は内・外面ともヨコナデ、胴部外面はヘラケズリののちヘラナデ、内面は横位ヘラナデを施し、一部に輪積み痕が残る。２は口縁部が外反し、胴部は膨らみをもたず真っ直ぐ落ちて底部に至る。口縁部外面はヨコナデ、胴部外面の中位に小口を用いたハケ目状の粗いヘラナデを施す。胴部の下位と上位には輪積み痕が残る。内面は口縁部から胴部上半にかけて横位のヘラナデにより平滑に仕上げられている。下半には輪積み痕が残る。３は口縁部が外反し、胴部があまり膨らまない器形で、２に近い。胴部外面に縦位の粗いヘラナデののち、口縁部外面に強いヨコナデを施す。内面は胴部に斜位のヘラナデ、口縁部に横位のヘラナデを施す。

４は須恵器蓋である。つまみを欠く以外は完存する。欠損部の大きさからみて、つまみは宝珠形であろう。人為的に打ち欠かれた可能性もある。天井部は丸みをもち、口端部だけが外に開く。口端部内面に返りをもつが、あまり下方へ伸びず不明瞭である。口径11.2cm、つまみを

除いた高さは1.9cmを測る。

Ｐ１８出土土器

第30図11・12は第８次調査区で検出された小柱穴Ｐ18より出土したものである。11は須恵器の蓋で、天井部に丸みのあるボタン状のつまみが見られる。天井部外面に焼成後線刻とみられる痕跡を認めたが、判読はできない。12圏脚円面硯の脚部破片資料で、脚端部や硯部を欠くが、上端には斜め上方を向く外提と海部の一部を残す。透かしは十字形で、残存部のなかで上・下に段違いに２箇所設けられているのを確認できる。また横位の沈線がみられる。

ＳＫ０８０２出土土器

ＳＫ0802は第８次調査区南西部、Ａ１－25グリッドに位置する土坑である。覆土より須恵器蓋(第30図８)が出土した。口端部内面に内傾する鋭い返りをもつ蓋である。外面には自然釉が濃く付着している。

ＳＫ０８１１出土土器

ＳＫ0811は、第８次調査区の西部、Ｚ２－60・70グリッドに位置する。ＳＤ0865に切られる不整形の土坑である。出土した遺物は少ない。第30図９は土師器坏で、丸底から口縁部にそのまま至る半球状の器形から、国分寺下層式期のものである。10は須恵器の長頸瓶の肩部と思われる破片資料である。外面に２段の櫛描波状文がみられる。

ＳＸ０８０１出土土器

第30図13・14は高坏の脚部である。13は柱状部が長く、裾部は欠損している。14は柱状部が短く裾部が外に屈曲し開く。15は土師器甕である。長胴形で下膨れの胴部には縦位のヘラナデが施される。

Ｓ１０８０１出土土器

第８次調査区西部では竪穴状遺構４棟が、１～２ｍの間隔をおいて南北に直列して配置されているのが確認されている。Ｓ１0801はその南端にあたり、Ｚ１－28グリッドで確認された。ＳＤ0863・0864・0865に切られるため、遺構の形状は不明な点もあるが、平面形は東西3.3ｍ×南北3.7ｍの不整方形で、北東コーナー部が北側へやや突出する。検出面からの深さは20～25cmほど、底面は平坦で壁が緩やかに立ち上がる。覆土は壁際から中央へ向かって三角堆積がみられ、自然堆積による覆土である。

東壁際床面の東西1.4ｍ×南北1.7ｍの範囲に炭化物の分布があり、その下層の床面は長軸75cm×短軸50cmほどの楕円形の範囲が被熱・還元して赤紫色となっている。

遺物は、第31図２が遺構の床直および床面からやや浮いた覆土最下層より出土。第31図１は覆土より出土した。

１は須恵器蓋坏の蓋である。古墳時代的な様相を残す坏Ｈに伴う蓋で、内・外面に強いロクロ目を残し、口縁端部が丸く肥厚する。天井部外面に回転ヘラケズリが施されている。２は土師器坏である。口縁部からそのまま底部にいたる半球状の坏で、外面口縁部にヨコナデ、底部にヘラケズリを施し、内面にはミガキ・黒色処理を施す。国分寺下層式期のものである。３は土師器甕である。口縁部から胴部上半までが残る資料であるが、外反する口縁部から胴部が下方へ向かって開き、下位に最大径をもつ下膨れの胴部が想定される。胴部外面に縦位の粗いヘラナデを施した後、口縁部にヨコナデ、胴部内面は横位のヘラナデで平滑に仕上げている。

ＳＩ０８０２出土土器

ＳＩ0802は、ＳＩ0801の北約１ｍの位置に近接する竪穴状遺構である。ＳＤ0865に切られるが、平面形は東西2.5ｍ×南北3.8ｍの不整長方形を呈する。検出面からの深さは10cmほど、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。覆土は褐色土で自然堆積による。

遺物は、第31図５の須恵器蓋が床直、12の土師器甕が床面より５～10cmほど浮いた状態で出土した。他は覆土中であるが、いずれも床に近い位置からの出土である。なお、13は、本遺構から出土した破片と、後述するＳＩ0809出土の破片が接合している。

第31図４・５は須恵器の蓋で、口端部内面に返りをもつ。４はシャープで明瞭な返りをもつ。５は器厚が厚い。いずれも善光寺４型式併行であろう。

６は土師器坏である。半球状を呈する坏で、内黒、国分寺下層式期のものである。７・８は口径17cm前後に対し器高７cm以上と深身であることから椀とした。口縁部から丸底の底部に至る半球状の椀で、７は口縁部外面にヨコナデ、８は口縁部外面に横位ミガキ、体部以下に斜位のヘラナデを施す。また両者ともに内面にはミガキ・黒色処理を施す。

９～11は土師器高台付坏である。いずれも非ロクロ整形・内黒の坏に高台を貼り付けたものである。９は高台がハの字に開き、端部は細く尖る。10は平底に端部の平坦な低く直立する高台がつく。11は短いが外に開く分厚い高台である。

12は土師器甕の胴部下から底部にかけての資料である。劣化し摩滅が著しいため調整は不明。

13は直径15.8cmの円盤状の遺物で、中央に高まりをもち全体に外湾する形状で、外周が上方につまみ出されて堤状となる。上面は丁寧にヘラケズリされて器厚が整えられている。側面や下面はロクロナデ調整が施されている。下面の中央には剥離面がみられ、キザミが施されているのが観察できる。もとは突起状のものが接合されていたと推測される。本遺物は器種不明であるが、高まりのある中央部を陸部とし、外周の低い部分を海部、堤状につまみ出された部分を外堤とした無脚の円面硯の可能性が高い。下面中央の剥離面には、支柱のようなものが接合されていたのであろう。上下逆の状態でロクロ上で整形・調整された後、ひっくり返してロクロに接合されていた部分をヘラケズリし、硯面として整えたと推測される。なお、本遺物は14の圏脚円面硯と胎土や焼き色が同じで、14の上面に13を乗せると、13の外周が14の海部にピッタリ収まる点から、両者がセットで製作され、組み合わされて使用されたものであった可能性も付言しておきたい。

14は須恵器の円面硯である。硯部径17.4㎝、陸部径13㎝、脚部径18.2㎝、器高6.7㎝を図る。陸部と海部は細い内堤で仕切り、硯部の外周にはやや高い外堤が立ち上がる。脚部はわずかに外に開き、端部は細く丸く収まる。上端やや下と下端やや上に突帯を巡らす。外面に方形透かしは４箇所と推定され、その間には縦位の沈線を５条施す。13と同様の黒灰色で堅緻な焼き上がりである。

15は須恵器甕の体部破片資料で、外面に格子タタキ目、内面に同心円文当て具痕がみられる。砥石に転用されたもので、内・外面および破面が著しく摩滅し平滑となっている。

ＳＩ０８０３出土土器

ＳＩ0803は、ＳＩ0802の北約２ｍの位置で検出された竪穴状遺構である。ＳＤ0865に西部を切られるため形状は不明であるが、東西1.8ｍ以上、南北3.5ｍで、他の竪穴状遺構と同様の不整長方形と推定される。検出面からの深さは最大で10㎝ほど、底面は平坦で壁が緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土で自然堆積による。

比較的多くの土器のほか、筆とみられる木製品や礫が出土しているが、覆土の残りが悪いため、出土したものはいずれも床直かそれに近い最下層に含まれるものとみてよい。

第31図16～18は土師器坏である。口縁部から内湾して底部にそのまま至る器形で、国分寺下層式期のものである。いずれも口縁部外面にヨコナデ、内面にミガキ・黒色処理を施す。16・17は体部下端と底部のヘラケズリを分けて、平底を意識している。18は丸底だが扁平化が進んでいる。

19は土師器高坏で、内湾する坏部に短い脚部が付く。脚端部は欠損しているが、脚端部は屈曲し外へ開く。坏部内面はミガキ・黒色処理、坏部外面から脚部外面にかけては指ナデが施される。

20～22は土師器甕である。20は底部を、21は口縁部から胴部を残す、小型の甕である。21は外面に輪積み痕を明瞭に残す粗雑なつくりである。22は長胴型の甕の胴部下半から底部にかけての資料である。胴部外面に縦位の粗いヘラナデないしハケ目、内面は横位のヘラナデで平滑に仕上げる。底面に木葉痕を残す。被熱による表面の剥離が著しい。

ＳＩ０８０４出土土器

ＳＩ0803の北約２ｍの位置で検出された。ＳＤ0865に西側を、ＳＤ0863に東側を切られるため、北壁・南壁の一部が遺存するのみである。したがって平面形や規模は不明な点が多いが、東西1.6ｍ以上×南北4.6ｍで、他と同様の不整長方形と推定される。検出面からの深さは大部分が10～20㎝ほどであるが、南部が土坑状に落ち込み、その部分のみ30㎝ほどの深さがある。底面は、土坑状の落ち込みを除くと概して平坦で、壁が緩やかに立ち上がる。覆土は褐色～暗褐色土で、自然堆積による。遺物の出土は少ない。

第32図５は須恵器短頸壺の体部破片資料である。ロクロナデ調整、体部の上半と下半との境界に弱いロクロ沈線を施し、下半にはヘラケズリ施す。

６は須恵器圏脚円面硯の脚部破片資料で、脚端部は細く丸く収まる。方形とみられる透かしと縦位の沈線、端部やや上に細い突帯による装飾がみられる。端部の形態や装飾のほか、胎土や焼き上がりも第31図14に共通し、接合しないが同一個体の可能性がある。

ＳＩ０８０６出土土器

第８次調査区南西部に位置し、ＳＩ0801～0804からやや離れたＺ２－60グリッドで確認された竪穴状遺構である。北側に同様の竪穴状遺構ＳＩ0805がある。中央部をＳＤ0847・0838に切られるため、不明瞭ながら、平面形は東西3.3m×南北3.1mの不整形ないし不整方形、検出面からの深さは30cmほど、底面は平坦で壁がやや急な傾斜で立ち上がる。北壁の一部に地山が削り残された張り出しがある。覆土は暗褐色～黒褐色の砂質上で、壁際に三角堆積がみられることから自然堆積によると思われる。底面直上には、グライ化した黄色褐色土が薄く堆積している。

出土遺物は少ない。第32図14に図示した須恵器甕の破片資料は、ＳＩ0806の覆土および重複するＳＤ0838出土の破片が接合している。遺物は肩部の資料で、外面に格子タタキ目、内面に同心円文当て具痕を残す。

ＳＩ０８０７出土土器

第８次調査区の北部で検出された竪穴建物跡である。この部分には、館を構成する東西棟の掘立柱建物跡が多く検出されている。本建物跡は、東側を削平により失われているが、一辺４mほどの正方形を呈し、北壁にカマドをもつ、ごく一般的な規模・構造の竪穴建物跡である。しかし、周囲に位置する掘立柱建物跡と混在するが重複することなく営まれていること、掘立柱建物と同様に主軸方位を北に向けること、特にＳＢ0805の東側に接し、壁の位置を揃えるように配置されていることから、これらの建物跡と同時ないし相前後して営まれたもので、その機能の一部を担った建物と考えられる。

検出面からの深さは15cmほど、覆土は自然堆積による。覆土の残存状況が悪いことから、遺物は概ね床直か床面に近い最下層からの出土としてよい。カマド周辺からの出土が多く、カマド左ソデの前面から瓦片が、カマド左脇の床直で第32図２の小型甕が、第32図３の甕がカマド内から出土した。３はカマド内から倒立した状態で検出されており、カマドにかけられているものが天井の崩落でカマド内に落ち込んだか、上半を打ち欠いて支脚に転用、倒立させた状態で設置されていたかのいずれかであろう。このほか第32図１の坏は覆土最下層より出土している。

第32図１は半球状の土師器坏で、口縁部外面にヨコナデ、底部外面にヘラケズリ、内面にはミガキ・黒色処理を施す。口縁部がやや波打っており、粗雑なつくりである。２は土師器甕である。口径13.2cm、器高13.6cmと小型の甕で、外反する口縁部から膨らみのない胴部が真っ直ぐ下方へ落ち、丸底気味の底部に至る。全面が被熱により劣化し、器面調整はほとんど不明であるが、外面には縦位のヘラケズリ・ヘラナデをわずかに確認できる。３は土師器甕の胴部下

半から底部にかけての資料である。長胴甕で、胴部外面に縦位、下端のみ横位のヘラナデ、胴部内面は横位～斜位のヘラナデで平滑に仕上げる。底面には木葉痕を残す。

４は須恵器の円面硯の硯部～脚部の破片資料である。硯部の外周には短く上面の平坦な外堤がみられ、脚部やや外反し端部は肥厚し平坦面をもつ。方形とみられる透かしがあり、脚部の上端と下端やや上に弱いロクロ沈線による装飾がみられる。

ＳＩ０８０８

ＳＩ0808は、第８次調査区北端中央、Ｚ22－28グリッドで検出された。東約１ｍにＳＩ0809が位置する。遺構は東西５ｍ×南北1.84ｍの長楕円形を呈する。当初は竪穴状遺構を想定してＳＩ番号を付して調査を行ったが、土坑の可能性もある。

遺構内より土器類をはじめとする比較的多くの遺物が出土している。

第32図７～９は土師器坏で、いずれも非ロクロで丸底から内湾してそのまま口縁部にいたる半球状の坏で、国分寺下層式期のものである。細部では９の口縁部がやや外反し、８では上を向くなどの違いがある。

10～12は土師器甕である。10は口縁部～胴部上半を残す資料で、口縁部は外反し、胴部は下半を欠くがやや外に開き真っ直ぐ下方へ向かう器形で、下膨れの胴部が想定される。大きさからも後述する12と同様の器形であろう。胴部外面に縦位のハケ目ないし粗いヘラナデが施されている。11は底部を残す資料で、内面の底部と胴部の境界に接合痕を明瞭に残す。

12は胴部下半の一部を欠損するが、口縁部から底部までが残り、全体の器形がわかる。口縁部は外反し、胴部は長胴で体部下半に最大径をもつ下膨れの形態、底部は平底である。胴部外面に縦位のヘラナデ、内面に横位のヘラナデを施した後、内・外面とも口縁部に横位のヘラナデを施す。胴部のヘラナデは弱く、内・外面ともに輪積み痕が明瞭に残る。底面にもヘラナデが施されるが、木葉痕の葉脈とみられる痕跡がわずかに確認できる。

13は土師器の甑である。無底式で、口径26.6㎝、器高23.6㎝、口縁部に最大径をもち、胴部は全体に上方へいくにつれ外に開き、口縁部が弱く折れて外傾する。大型、深鉢形の甑である。胴部下端に１箇所、直径８㎜ほどの穿孔がみられる調整は、横位・縦位のヘラナデを施すが、単位は不明瞭である。一部に輪積み痕を残す。

ＳＩ０８０９

ＳＩ0809はＳＩ0808の東約１ｍの位置で検出された遺構である。東西4.8ｍ、南北2.6ｍの東西に長い長楕円形で、北側にやや小規模な楕円形の掘り込みを伴うなど、ＳＩ0808と特徴が似ている。両者が近接する位置に並列することからも、両者の密接な関連が考慮される。ＳＩ0808と同様、当初は竪穴状遺構を想定したが、性格を明らかにすることはできなかった。覆土より土器が多量に出土しており、廃棄遺構となっていたものと思われる。従って出土した土器は、南側に展開する掘立柱建物との関連で理解する必要がある。

第33図１～３は丸底から内湾してそのまま口縁部に至る半球状、内黒の土師器坏である。１・

２はやや平底気味。２は外面に巻き上げ痕を残す。

４・５は口径18cmほど、器高６cm以上で大型の坏もしくは椀とすべきものである。いずれも半球状の器形で、内面に黒色処理が施される。坏と同様、国分寺下層式期の特徴をもつ。

６は丸い底部から長い口縁部がまっすぐ外傾するやや深身の坏である。体部外面に指頭押圧が施され、器形がややくびれる。底部外面はヘラケズリ、体部は指頭押圧のみで一部に輪積み痕を残す。内面は内黒である。

７は非ロクロの坏であるが平底で、口縁部がやや内湾して立ち上がる。外面の調整は不明瞭であるが、底面にはヘラケズリが施されている。内面にはミガキが認められるが、黒色処理は施されていない。赤色の粘土に一部白色粘土がマーブル状に混ざり、赤色粒を多く含む粗雑な胎土である。

８・９は高台付坏である。非ロクロ整形で内黒、丸底の坏にハの字に開く短い高台がつく。９は口縁部と底部との境界に稜をもつ。有段丸底の栗囲式の坏に高台を付けた器形が想定される。

10～19は高坏である。10・11は坏部を残す資料である。10は大きくハの字に開く坏部で、口縁部にヨコナデ、内面にミガキ・黒色処理を施す。11は浅く、高盤とすべきものである。大きく外に開く坏部は口縁端部が上方へ短く折れる。内面にはミガキ・黒色処理が施される。脚部が剥離しており、接合部には半球状の突出がみられる。坏部の整形の後、底部中央に玉状の粘土を貼り付けたうえで脚部を接合した技法が観察される。12はやや深身で半球形の小さい坏部と、柱状部が短く接合部からそのまま外反する低い脚部が残る。13はやや短い柱状部から裾部が大きく外に開く。14は柱状部がやや長く、全体に緩やかに外反して柱状部に至る。15はやや長い柱状部に楕円形の透かしを２方向に設ける。裾部は外へ真っ直ぐ開く。19はやや長い柱状部から強く外反する裾部へ至る脚部、大きく外に開く坏部からなる。口縁部は欠損するが、盤状の坏部が想定される。

20は鉢とした。口径12.6cm、器高7.2cmで、分厚い平底から口縁部が内湾して立ち上がる。口縁部外面にヨコナデ、他はヘラナデを施すが、特に外面の調整が弱く、輪積み痕を明瞭に残す。底部の粘土塊が一部剥離している。

21～25、第34図１～９は土師器甕である。21～25・第34図１は口縁部付近を残す資料、第34図２～９は底部を残す資料である。

21・23・24は、小型の甕である。口径11cmほどで、口縁部は外反し胴部は丸みをもつ。22・25は長胴甕で、口縁部は外反し、胴部は下膨れの器形が想定される。25は胴部に縦位のハケ目を施す。

第34図１は口縁部が外反せず真っ直ぐ上方へのびる筒形の土器である。口径15.6cmを測り、上端の高さ8.1cmほどが遺存するのみで全長はわからないが、外面はナデ調整、内面には輪積み痕が明瞭に残る。こうした特徴は、「筒形土製品」ないし「異形土製品」と称されるものと一致し（丹治2001）、本遺物もその一例となるものと思われる。

第34図２～９は甕の胴部下半から底部で、６や９のように長胴形の胴部をもつものと、２・

４・５のように丸みをもつ短い胴部のものがある。

10は無底式、長胴形の甑で、胴部外面にヘラケズリ・ヘラナデ、内面にミガキもしくは単位の細いヘラナデを施す。

11～15は須恵器である。土師器の出土量に比して少ない。11は坏で、口径に対して底径が大きめで、口縁部は外反する。底面には回転ヘラケズリを施す。底面の中央には焼成後線刻で「労」の文字がみられる。

12・13は高台付坏である。12は口縁部が外反し、体部に移行する部分で屈曲して外面に稜を形成する。体部は内湾気味に下がって平坦な底部へと移行し２次底部面を形成する。２次底部面と平坦な底部との境界に高台がつく。高台は剥離しているが、２次底部面から底部の外周にかけて回転ヘラケズリを施したうえで高台を貼り付けた状況が観察される。底面の中央には回転ヘラ切りの痕跡を残す。13も同様の器形で、口縁部と体部の間に弱い稜がある。平坦な底部と２次底部面との境界に、やや外に開く短い高台がつく。内面は摩滅が顕著で、硯としての使用が想定される。

14・15は蓋を想定した。外面は須恵質だが内面は褐色を呈し、砂粒の多い粗雑な胎土や外面の櫛描波状文から、２点を同一個体と想定して図化した。平坦な天井部から強く屈曲して内湾する口端部が立ち上がる。口端部は先端が丸く収まる。口端部の外面に櫛描波状文を施文している。

（２）　遺構外出土の土器

町池地区で実施した調査は、遺構の有無を確認するためのトレンチ調査である第６次調査と、同じ場所を面的に調査した第８次調査がある。遺構外出土の遺物については、前者はトレンチ毎に、後者は５ｍ四方のグリッド毎に取り上げている。以下では前者と後者を分けて報告する。

ａ）　第８次調査

第35・36図には、第８次調査の際に遺構外から出土した土器を図示した。

第35図には土師器を示した。１は土師器蓋である。ロクロ整形で内湾する天井部には中央部を強く窪ませた径の大きなボタン状のつまみがみられる。口端部は欠損する。黒色処理を施しておらず、当該期の土器としては特殊なものである。内・外面に黒褐色の皮膜状の物質が斑点状に付着している。

２～４は土師器坏である。２は有段で栗囲式の坏、３・４は半球状で国分寺下層式期の坏である。

５～７は高台付坏で、非ロクロ・丸底の坏の底部に、外に大きく開く高台を貼り付けたものである。

８は鉢とした。大振りな底部から体部が内湾して立ち上がる。外面に縦位のヘラケズリ、内面にミガキ・黒色処理を施す。

9～11は高坏である。9は坏部が大きく中空の脚部は柱状部が長い。大型の高坏である。10は柱状部が短く坏部は小さい。11は脚裾部が強く外に折れて開く。

12～14は土師器甕の底部を残す資料、15は外面にタタキ目、内面に同心円当て具痕を残す叩き整形の土師器甕である。

16～19は無底式の甑、20～23は手づくね土器である。

第36図には須恵器を示した。1～7は蓋である。1～3は天井部を残す資料で、宝珠形のつまみを伴う。2・3はつまみが大振りで器厚が厚く、大型の坏ないし盤に伴う蓋であろう。4～7は口端部を残す資料で、いずれも内面に返りをもつ。4の返りはシャープだが短く内傾し口端部内面に収まる。5は返りの削り出しが弱く、凹線状となっている。

8～10は坏である。8は口縁部がやや外傾し、体部が折れて2次底部面を形成する。丸底風の底部はヘラ切り後にヘラナデで調整を施す。善光寺4型式併行であろう。9は口縁部が真っ直ぐ外傾する箱形の坏である。10は平底で内湾する体部が立ち上がる。底面から体部下端に回転ヘラケズリを施す。精良・緻密で黒色粒を多く含む胎土は在地のものではなく、搬入品であろう。

12・13は高台付坏である。12は高台のみが剥離した資料である。剥離面から坏部は底部の窪む器形とみられる。13は平坦な底部に外に踏ん張る細く短い高台がつく。

14は短頸壺である。丸みをもつ底部、上位に最大径をもち肩の振る体部、短く直立する薄い口縁部からなる。肩部にロクロ沈線を施す。また体部下端から底面にかけてヘラケズリを施して丸底風に仕上げている。

11・15～17は長頸瓶である。11は口縁部、15は肩部、16は頸部～体部を残す資料である。16は細い頸部と算盤玉状に潰れた体部からなり、肩部には8枚歯の櫛歯状工具の刺突による列点文を2段施文し、下部をロクロ沈線で区画する。体部下端にはヘラケズリを施す。

17は肩部破片資料で、櫛描波状文とロクロ沈線を交互に施文している。

18はやや外反し端部に平坦面をもつ口縁部の破片資料で、器種は不明だが、壺の一種とみられる。外面には櫛描波状文を施文している。

19～23・25～27は甕である。19・21は頸部～肩部を残す資料で、外面に平行タタキを施した後、頸部をロクロナデで調整している。20・23は頸部に櫛描波状文を施す。

24は真っ直ぐ立ち上がる口縁部の破片資料で、端部に平坦面をもつ。器厚は薄い。器種は判然としないが、壺類の口頸部かコップ形土器の可能性がある。

25・26は甕の体部破片資料で、外面に平行タタキ目、内面に3㎜角の格子目のみられる特徴的な当て具痕を残す。

27は器種不明であるが、壺・甕類の底部であろう。底面に当たる部分が摩滅し平滑となっており、砥石ないし硯に転用された可能性が高い。

b）第6次調査

第37図には第6次調査の際に出土した遺物を図示した。1～3は土師器坏である。1は口縁

部と底部の境界に弱い稜を有する栗囲式のものである。２は半球状の器形で国分寺下層式とみられるが、口縁部外面を幅狭くヨコナデ、底部をヘラケズリし、両者の間は未調整部分を幅広に残す。このため、底部に移行する部分がわずかに括れ、栗囲式の遺制を残した器形ともみられる。３はロクロ整形で、表杉ノ入式の坏である。体部下端～底部にかけて回転ヘラケズリを施す。

４～７は土師器の高坏である。４は中実柱状の脚部をもち、脚裾部が外反する。裾部を強くヨコナデするため、柱状部と裾部との境界に稜がある。５は中空の脚部で、柱状部が裾部へ向かって細くすぼまる。柱状部を縦位ヘラケズリ、裾部をヨコナデし、両者の間に稜が形成される。７は脚部内面がきれいな円形で、棒状のものを芯として脚部を成形したか、中実に脚部を成形した後、棒状の工具を刺突して中空にした可能性が考えられる。

８～11は甕の底部である。８は外面に縦位のハケ目の後に横位のヘラナデを施し、底面に葉痕が残る。下膨れの胴部が想定され、栗囲式の伴う甕であろう。

12は扁平な皿状の土器で、短く外傾する口縁部は端部に平坦面をもつ。内面にはミガキ、黒色処理が施されている。また内・外面および破面に漆状の付着物がみられ、パレットとして使用された可能性が高い。小片のため判然としないが、底部の形状が直線的で、円形ではないようであり、角形の皿状器形を想定している。

13～16は手づくね土器である。13・14は底部に木葉痕を残す。15は内面に漆かタール状の付着物がみられる。16は内面を強いヘラナデで調整している。

17～29は須恵器である。17・18は蓋で、17は天井部を残し、頂部の扁平な小さいボタン状のつまみがみられる。18は天井部から口端部を残す。口端部は外面からナデ押しするため内面側が尖るが、下方へ折れない。口径15.6cmに対しつまみを除いた高さが1.8cmと扁平な器形である。

19は坏の口縁部破片資料、21は底部を残す資料である。19は丸底ないし体部下端に２次底部面をもつ器形とみられる。20は平坦な底面を回転ヘラケズリで調整しており、ヘラの当たっていない外周の幅３mmほどがわずかに立ち上がる。削り出し高台を意図した高台付坏と考えられる。

22は圏脚円面硯の脚部である。ロクロ整形で、脚端部は平坦、端部やや上に２条のロクロ沈線を施して両者の間を突出させ、突帯を意図したものと思われる。

23～25は甕の体部破片資料である。25は、外面に同心円文の叩き目、内面に同心円当て具痕が残る珍しい資料である。外面の叩きに同心円文の当て具を利用した可能性もある。同心円文が明確に残るが、内面のものは重なりつぶれている。

26は甕の口縁部破片資料で、頸部に櫛描波状文がみられる。27は櫛歯状工具により肩部に列点文を施した長頸瓶の肩部破片資料である。

28は大型の長頸瓶の体部下半から底部を残す資料である。高台は剥離しており、外部下端から底部にかけて回転ヘラケズリを施した後、キザミを施したうえで高台を貼り付けていることがわかる。

29は擂鉢の底部で、外周に手持ちヘラケズリ、底面に刺突痕がみられる。

（３）　町池北方地区出土の土器

館院が検出された第８次調査区の北側に位置する裾の緩斜面では、第20・23次調査で掘立柱建物跡・竪穴建物跡・溝跡などが確認されている。これらの調査区が位置する部分を町池北方地区としているが、南側の町池地区との関連が深い。以下に出土土器を報告する。

ＳＢ２００１出土土器

ＳＢ2001は３×２間の東西棟の掘立柱建物跡である。館院と同時期の建物跡と考えられる。ＳＩ2001・2010と重複し、これより新しい。

第38図１は、南西隅柱の掘方埋土から出土した土師器坏である。南西隅柱の掘方はＳＩ2010の覆土を切って掘り込まれているため、同竪穴建物跡からの混入である可能性が高い。非ロクロ整形、平底気味の丸底から内湾してそのまま口縁部に至る器形で、口径は12.8㎝、器高3.4㎝とやや小さく浅い。内面にミガキ、黒色処理が施された国分寺下層式期の坏である。

ＳＩ２００１出土土器

ＳＩ2001は竪穴建物跡である。ＳＢ2001に切られる。北カマドで、覆土は人為的な埋め戻しによる。カマドは地山の削り出しにより裾部などを構築しているが、ほぼ崩壊した状態で検出されている。遺物は、おもにカマド周辺で出土している。第38図２・３はカマドの崩壊土中より、４はカマド前面の床面で倒立した状態で出土した。

第38図２は須恵器坏である。口径10㎝ほど、口縁部が真っ直ぐ外傾し、口唇部に内傾面をもつ。３は土師器鉢で、平底から体部が内湾して立ち上がり、口縁部が真っ直ぐ外傾する。外面全面が２次的な被熱で赤化している。被熱による劣化が著しいこと、カマド前面の火床近くで倒立して出土したことから、本来は共膳形態の土器であるが支脚などに転用された可能性がある。４は土師器甕で、長胴形の胴部に外傾する長い口縁部がつく。

ＳＩ２００５・２００７・２０１０・２０１２出土土器

ＳＩ2005・2007・2008も竪穴建物跡である。プランの検出のみに留めたため、出土遺物はいずれも上面の精査時に出土したものである。ＳＩ2010はＳＢ2001に切られる。

第38図５は土師器甕で、ＳＩ2005から出土した。ＳＩ2005は調査区内に北壁がかかったもので、北側に煙道が延びることから北カマドと推定される。５はカマド左脇に位置する部分から潰れた状態で出土した。遺物を取り上げたところ床面が露出したことから、竪穴の覆土は最下層のみが遺存したものと思われ、層位的にはほぼ床直に近い位置と考えられる。球胴形の胴部に外反する口縁部が付く甕で、器厚が薄く、全面が２次被熱により赤化している。

７はＳＩ2007、８はＳＩ2010からの出土。土師器甕の口縁部破片資料である。８は口縁部が外反せずまっすぐ立ち上がり、内面はヘラナデ、外面には輪積み痕を残す。９はＳＩ2012から

出土した土師器甕の底部で、底面に木葉痕を残す。

ＳＤ２００６出土土器

ＳＤ2006は、第20次調査区の西端を南北に走る溝で、位置関係や規模・断面形状などから、ＳＤ0838の北側延長部分と考えられる。第38図10～13は覆土上層より出土したものである。10は須恵器甕の体部破片資料、11は長頸瓶の頸部、12は高台の付く底部の破片資料である。13は甕の体部で内面に同心円文当て具痕を残す。外面には別個体の甕の破片や礫が焼成時に溶着している。

ＳＤ２０１０出土土器

第38図14は須恵器甕の体部破片資料で、内面に同心円文当て具痕を残す。外面は摩滅により叩き目等は不明。焼きが悪く灰白色を呈する。

２Ｔ遺物包含層・遺構外出土土器

第20次調査区２Ｔでは、地山の黄褐色土層の直上で丘陵斜面からの流出土と推定される黒褐色土層が検出された。第39図１～３は、この土層を断ち割った際に出土したものである。斜面上位側の竪穴建物等で使用されていたものが、土砂の流出にともなって混入した可能性が高い。１は土師器高坏の脚部、２は小型の土師器甕、３は須恵器蓋の天井部である。なお、４～７は、各トレンチの表土からの出土した土器である。

（4）　小結

町池地区は、土器類の出土が他地区に比べ豊富である。

土器形態としては坏・台坏・椀など供膳形態(土師器、須恵器)、甕・甑など煮沸形態(土師器、須恵器)、須恵器の壺・甕・瓶など貯蔵形態がある。このほか、硯などの文房具が比較的豊富に出土している点にも注意する必要がある。

遺構出土土器の出土状況

第８次調査区西部で検出されたＳＩ0801～0806などの竪穴状遺構からの出土が多い。また、北部の掘立柱建物群の背後に位置するＳＩ0809から多量の土器類が出土しており、廃棄遺構としての性格が考えられる。

竪穴状遺構は、Ｂ期に属する溝跡群に切られていることから、本地区の遺構期区分のなかで、八脚門を伴う官衙施設が成立するＢ期より古いＡ期に属す。また、廃棄遺構と推定したＳＩ0809も、Ａ期に属する掘立柱建物群に近接し、これに関連して機能した可能性が高い。

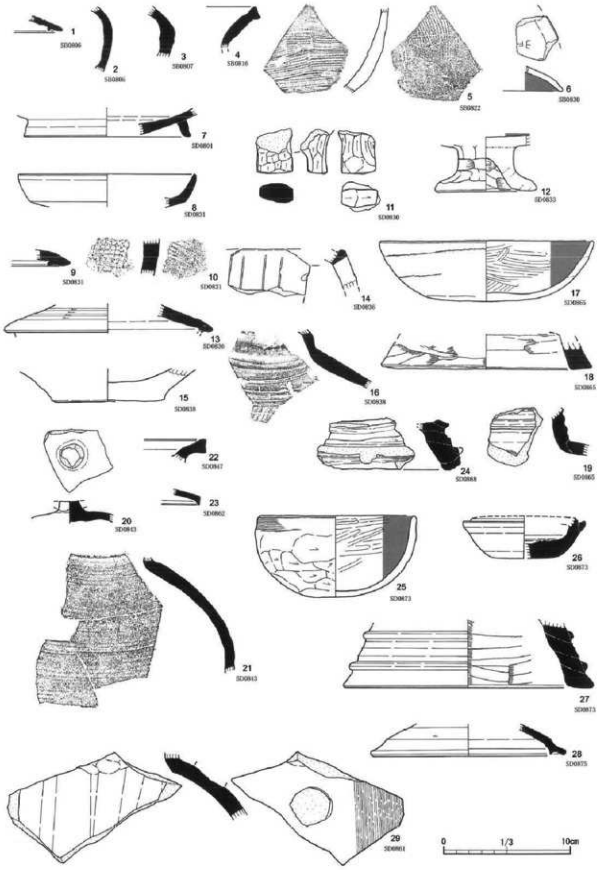
このほか、掘立柱建物跡の柱穴や土坑・溝跡からも少量の遺物が得られているが小片が多い。調査区西部を走るＳＤ0836・0838・0865については、Ｂ期に属し、さきの竪穴状遺構を切って

掘り込まれていることから、出土した土器には、もともとＡ期の竪穴状遺構に属する遺物が、溝の掘削に伴って混入したものが含まれると思われる。

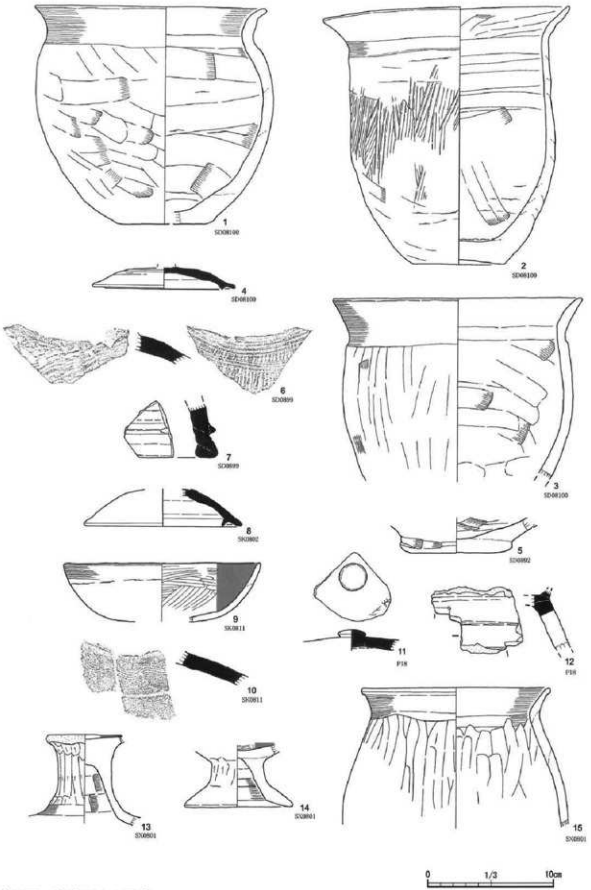
なお、ＳＢ0801建物跡に切られるＳＤ08100からは、土師器甕や須恵器蓋が比較的良好な状態で出土しており、特筆される。

町池地区の土器様相

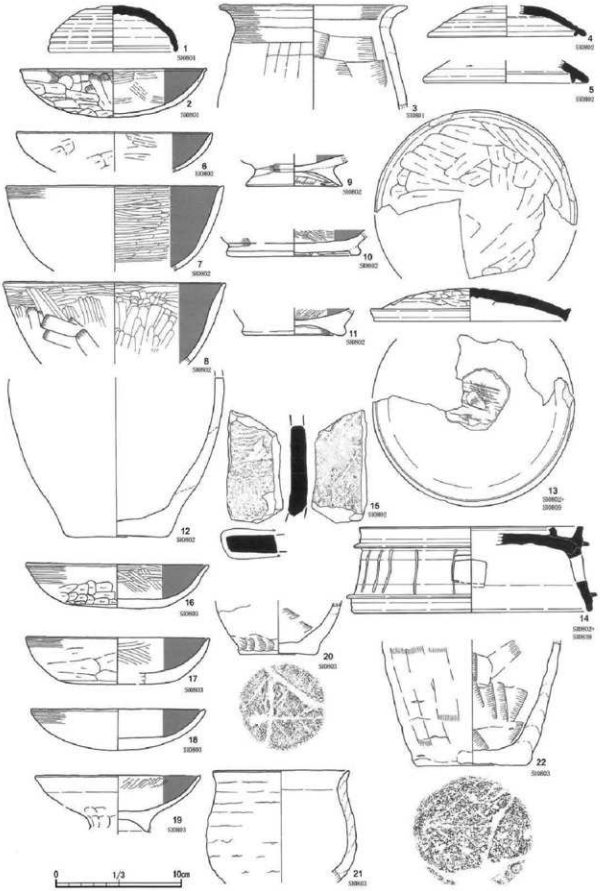
比較的豊富な土器が得られているが、本地区の土器様相は限定的なものである。すなわち、土師器坏は非ロクロ整形で無段のものにほぼ限られる。須恵器の蓋も口端部内面に返りをも伴うものが大多数を占める。



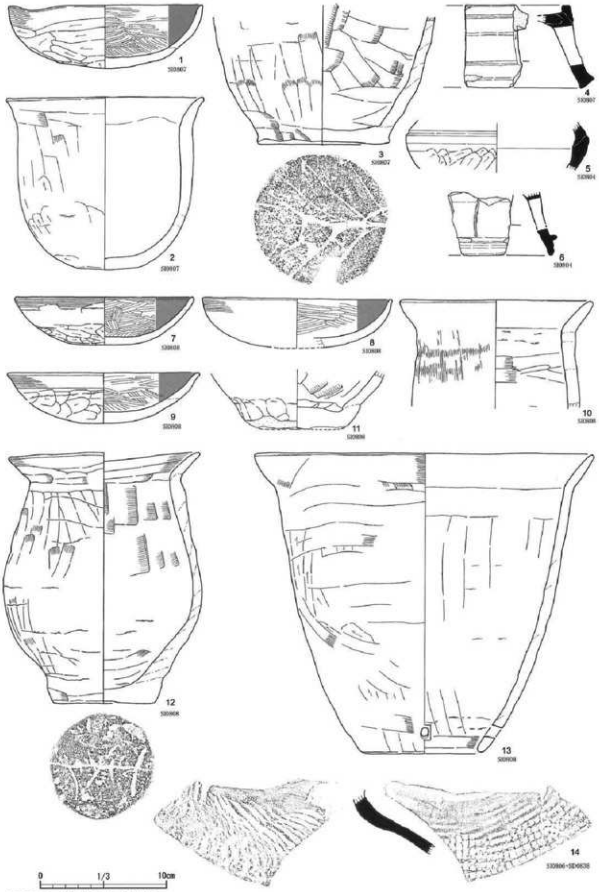
第29図　館院出土土器①



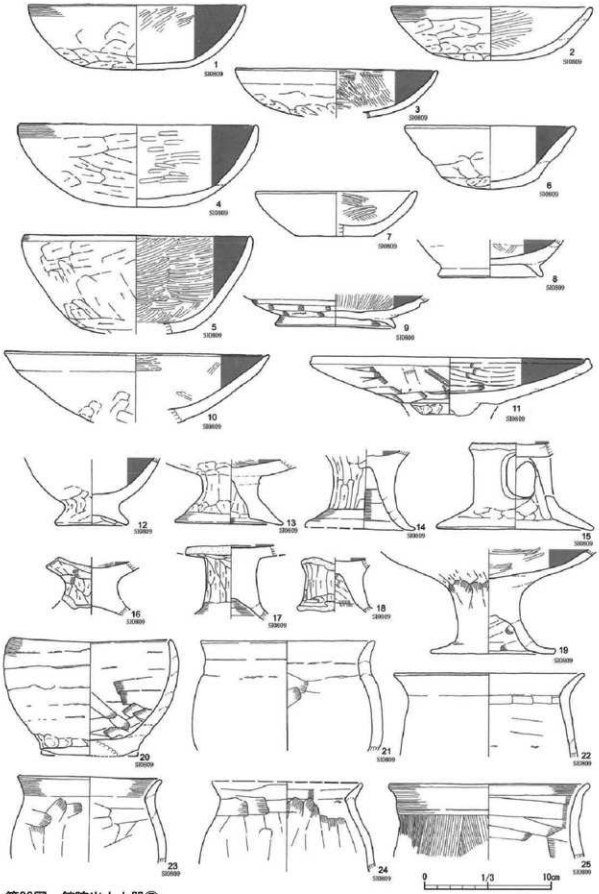
第30図　館院出土土器②



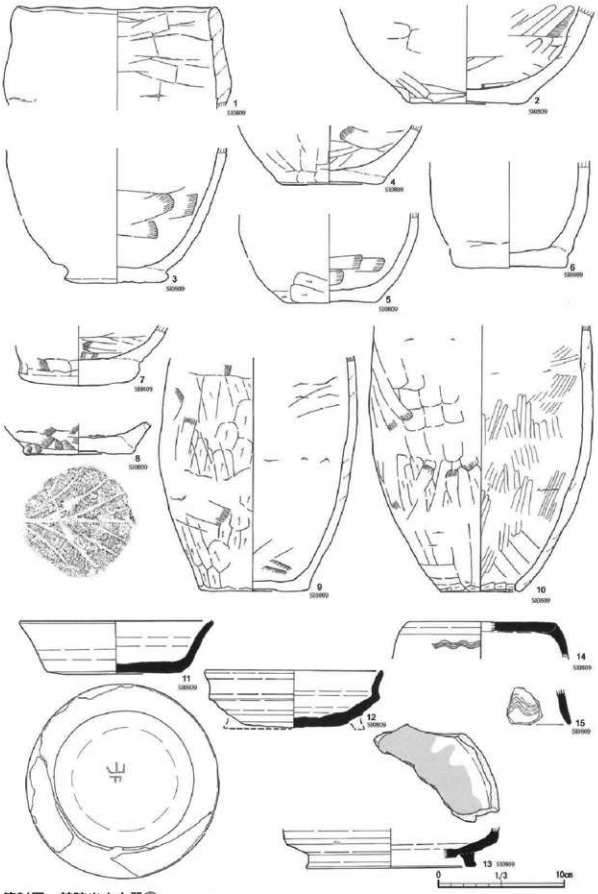
第31図　館院出土土器③



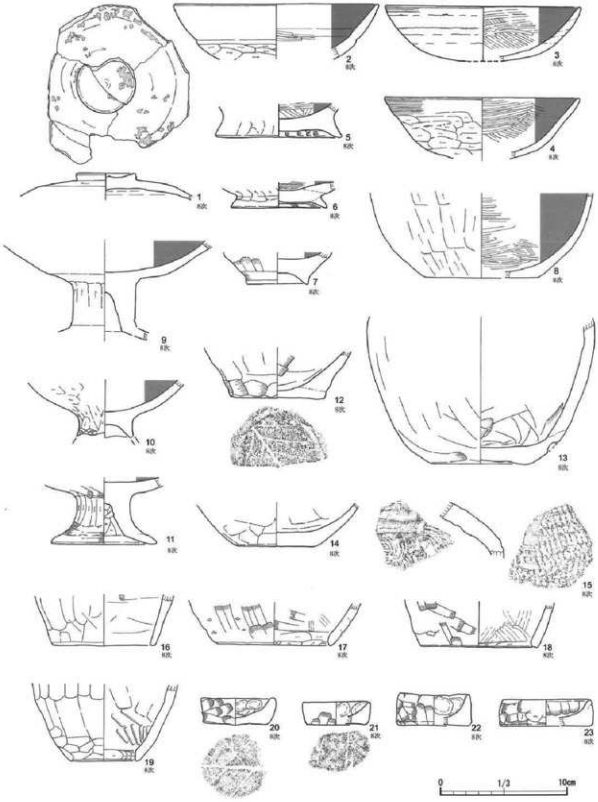
第32図　館院出土土器④



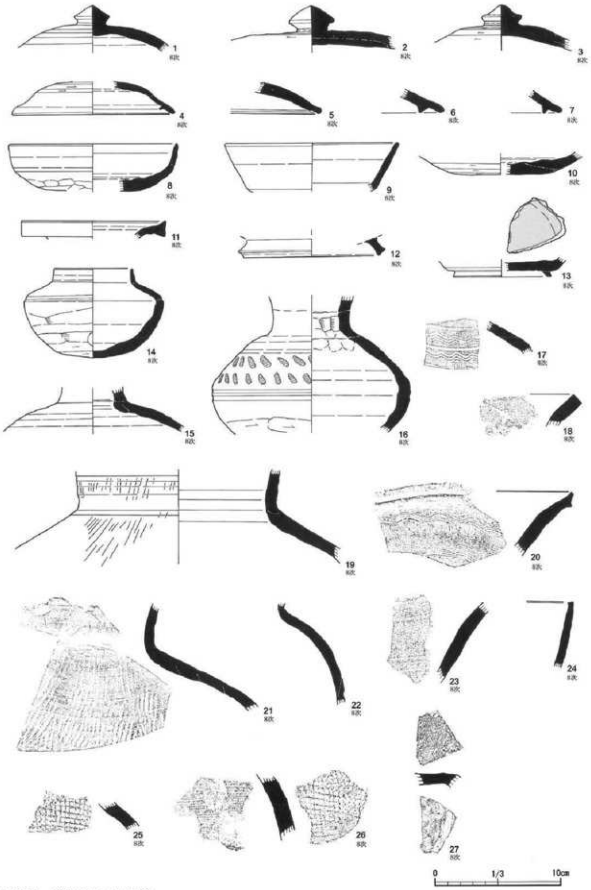
第33図　館院出土土器⑤



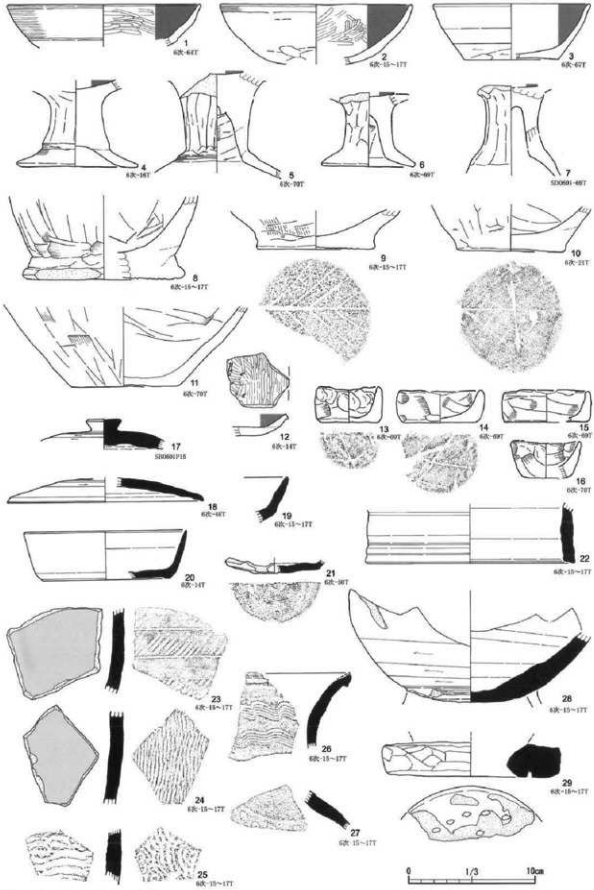
第34図　館院出土土器⑥



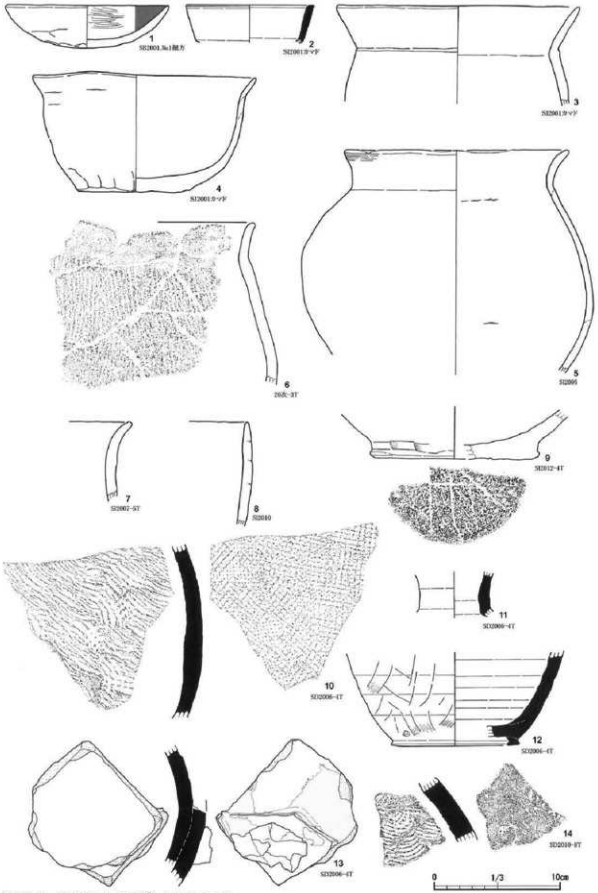
第35図　館院出土土器⑦



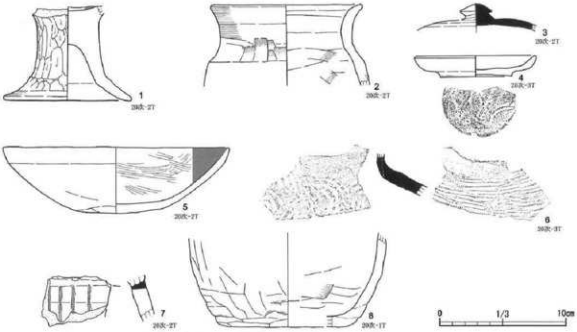
第36図　館院出土土器⑧



第37図　館院出土土器⑨



第38図　館院出土土器⑩（北方地区）



第39図　館院出土土器⑪　北方地区

第4節　町地区

東西に長い遺跡範囲の中央南側に位置し、先述の正倉院、郡庁院の南に接する地区である。本地区は、遺跡範囲の南部を構成する広い範囲にわたる。第3次調査(平成8年度)、第9次調査(平成10年度)で東部を、第5次調査(平成9年度)、第7次調査(平成9年度)、第15次調査(平成12年度)で西部を調査している。いずれも、圃場整備事業に伴って実施した本調査である。

遺跡は、丘陵裾の低位段丘が沖積低地へと移行する部分を南限とする。第3・5・7・9次調査区は、この低位段丘の縁辺から沖積地にかけて位置している。一方、町地区の西端部にあたる第7次調査区(糠塚地区)は、低位段丘の南に接して島状に残る東西約100m×南北約70m、標高4mの沖積地内微高地上に立地し、周囲の沖積地とは現況で0.5～1m前後の比高差がある。

これらの調査で確認された古代の遺構の分布は、西半の第7次調査区糠塚地区・第5次調査区にかけて広がる掘立柱建物群と、東半の第3・9次調査区で検出された掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡など遺構群にまとめることができる。

前者では、南北に走る幅3～10m、深さ0.9m～1.1mの大溝(SD0501)が確認され、運河と推定されている。また、大溝の周囲では掘立柱建物群が確認されている。掘立柱建物群は、重複関係・主軸方位から、①東に振れる建物が散在する1期、②やや西に振れる小規模な建物が散在する2期、③大溝の東側と西側に大型の建物が整然と配置される3期に大別される。1期建物の性格については不明な点が多いが、SB0201は総柱建物であり、寺家前北方地区の2棟の総柱建物とともに、この時期の正倉院を構成する倉庫であった可能性が高い。2期は、3×2間で近似した規模の建物3棟が配置される。なお、大溝は、2期の建物を切っていること、主軸方位や建物跡との関係から、3期に伴うものと推定される。1期が東に振れる点や、3期に同位置での建て替えが多い点から、郡庁院の遺構期区分におけるⅠ～Ⅲ期に対応するものと思われる。

一方、本地区の東部に位置する第3次調査区では、掘立柱建物跡3棟、一本柱塀跡2条、溝跡1条などが検出されている。このうちSB0303とSA0302は主軸方位を北より26°30'東に振るもの、SB0301・0302、SA0301、SD0302は主軸方位を真北にとるものである。なおSB0302とSD0302は重複するが、前後関係は不明である。他の地区と同様、主軸方位を東に振るものが古く、新しい時期に真北方位をとるようになると考えられる。第3次調査区の南側に位置する第9次調査区では、南北に走る溝跡と井戸跡が確認されている。

このほか、本地区では古墳時代後期の円墳、中世のピット群も確認されており、それらの時期に伴う遺物も出土している。

以下では、調査区毎に出土土器の詳細を報告する。

（1）　遺構出土の土器

ＳＸ０３０１出土土器(注記はＳＫ４)

ＳＸ0301は第３次調査区の東端で検出された不整形の掘り込みをもつ遺構である。自然堆積による覆土から土師器・須恵器が出土している。

第40図１・２は土師器蓋である。平坦な天井部にやや外反する口端部が伸び、端部は下方へ短く折れる。全面にミガキ・黒色処理のほどこされたいわゆる両黒の土師器である。同様の特徴をもつ蓋は遺構外からも出土しており、リング状のつまみがつくものと思われる。

３～５は内黒の土師器坏である。３は平底だが非ロクロで、外面の底部と体部の口縁部近くまでヘラケズリを施す。４・５はロクロ整形の土師器坏である。４は口径に対して底径が大きく器高が低い扁平な器形である。体部下端から底部に回転ヘラケズリを施す。５は底径やや小さく深身である。

６は高台付坏で、全面にミガキ・黒色処理が施されている。口縁部を欠くため口径は不明だが、１・２のような蓋とセットとなるものと思われる。

７は高坏である。坏部は内黒、脚部は裾部へ向かってまっすぐ外へ開く形態で、柱状部は中実である。

８～11は甕である。８は胴部中位に最大径をもつやや短い胴部に外傾する口縁部がつく。胴部外面は縦位のハケ目ないし粗いヘラナデ、胴部下端にヘラケズリを施す。口縁部は内・外面ともヨコナデ、胴部内面はヘラナデを施す。底面には木葉痕を残す。９は口縁部から胴部上半が残る資料で、胴部の膨らみの割に口縁部はあまり外傾せずに短く立つ。10・11は底部を残す資料である。

12はロクロ整形の高台付坏で、内面にミガキ・黒色処理を施す。

13は須恵器甕である。体部外面に平行叩き目、内面に無文当て具痕もしくは強い指頭押圧痕を残す。口縁部～頸部はロクロナデ調整を施している。

ＳＤ０３０１出土土器(注記はＳＫ２２)

ＳＤ0301は第３次調査区の中央部を走る幅５ｍほどの溝跡である。第41図１～７は覆土から出土した。

１は蓋で、口端部やつまみを欠くが、ＳＸ3301や遺構外から出土しているものと同様の両黒の土師器蓋と思われる。２は坏で、非ロクロ・丸底で口縁部と底部との境界に稜をもつ栗囲式の坏である。３～５は高坏である。３は浅い皿状の坏部、中実柱状の短い脚部からなる。脚裾部は欠損するが、大きく外に開く。４・５は中実柱状の長い脚部である。６・７は甕の底部を残す資料である。７は胴部に縦位のハケ目、後にヘラナデでハケ目を消す。底面には木葉痕を残し、栗囲式の甕と思われる。

ＳＫ０３１９・０３２１・０３３６・０３３７出土土器(注記はＳＫ２６・３０)

ＳＫ0319・0321・0337は土坑で、掘り込み面から中世以降のものと推定されている。第41図８はＳＫ0319から、９～12はＳＫ0321、13はＳＫ0336、14・15はＳＫ0337から出土した。

８～11 はロクロ整形の土師器坏で、８は底径が11.4cmと大きく、体部下端から底面に回転ヘラケズリが施されている。13は須恵器坏、14・15は赤焼土器坏である。

ＳＸ０７０１出土土器

ＳＸ0701は、第７次調査区塘塚地区の西部で検出された塚状の遺構である。積土は、中・近世の土塁などが構築される際の土取りや宅地造成に伴う削平で削り取られ、現況で東西1.5m×南北23.5mの楕円形状を呈し、1.8mの高さが遺存していた。積土の下層で検出した旧表土が円形に遺存すること、その周囲に幅1.5～9.2m、深さ50cmの溝が円形にめぐり、塚を構築するために掘り込まれた溝とみられることから、塚は本来、直径23mの円形であったと考えられる。なお、中央部に攪乱を受けているため埋葬主体部とみられる施設は確認されなかった。

周囲をめぐる溝の底面から、第42図１～３の須恵器横瓶２個体のほか、須恵器甕が出土したことから、古墳時代終末期に築かれた円墳と考えられる。周囲をめぐる溝は周溝とみてよい。

第42図１・２は須恵器横瓶である。１は頸部から口縁部にかけてまっすぐ立ち上がり、口縁端部に平坦面をもつ。２は頸部殻口縁部が外反し、口縁短部が上方へ弱くつまみ上げられている。ともに俵状の体部の外面に格子タタキ目、内面に同心円当て具痕が観察される。３は須恵器甕である。

ＳＤ０７１０出土土器

ＳＤ0710は、古墳時代後期の円墳ＳＸ0701の周溝とみられる溝と重複する溝である。

第43図１は土師器の高坏で、坏部内面はミガキ、中空の脚部柱状部には縦位のヘラケズリを施す。古墳時代後葉のものと思われる。２は小型の甕、３～５は大型の甕である。３は球胴形の胴部に「く」の字に外反する短い口縁部がつく。胴部は縦位のハケ目が施されている。４は球胴か下膨れの長胴形と考えられる胴部から底部にかけての資料である。５の口縁部は長く伸び、「コ」の字状に弱く屈曲し外反する。口縁部にヨコナデ、胴部に縦位のヘラナデを施す。

ＳＤ０７１１出土土器

ＳＤ0711は、古墳時代後期の円墳ＳＸ0701の周溝とみられる溝と重複する。

第43図６は高坏の脚部、７・８は甕の底部である。

ＳＤ０７１２出土土器

第43図９は甕の口縁部～胴部にかけての資料で、外面に縦位のハケ目がみられ、長胴形・下膨れの胴部が想定でき、栗囲式期のものである。

ＳＤ０７０５・０７０９出土土器

ＳＤ0705とＳＤ0709は、第７次調査慊塚地区の北東端で検出された溝跡である。両者は重複し、前者が後者より古い。遺物は覆土から出土したものである。

第43図10は赤焼土器の高台付坏、11は須恵器の高坏である。後者は三角形の透かしを２段設けている。

土坑出土の土器

第７次調査区では、性格の不明な土坑が複数検出されている。第43図12～17、第44図１～10は土坑出土の土器である。

第43図12はＳＫ0705から出土した須恵器盤の口縁部破片資料である。脚のつく器形と推定される。13～15はＳＫ0709から出土したものである。13・14は土師器坏で、非ロクロ・丸底で無段の国分寺下層式期のものである。15は土師器の高坏で、中実柱状の脚部と、内湾する内黒の坏部の一部が残る。16・17はかわらけである。

第44図１はＳＫ0712、２・３はＳＫ0717出土の土器である。１・２は高坏で、１は半球状の坏部、中空で全体に外に開く脚部がみられる。２は脚部を残す資料で、柱状部と裾部との境界に段をもつ。坏部の有段と推定される。３は須恵器蓋として図示した。

４はＳＫ0720出土。丸底・内黒で、大振りで深身の椀ないし鉢であろう。５・６はＳＫ0723、７はＳＫ0725からの出土。７は須恵器ハソウの口縁部と思われる。９はＳＫ0729、10はＳＫ0735から出土した。栗囲式の土師器甕である。10はラッパ状に開く大型の椀ないし鉢で、古墳時代後期の特徴をもつ。

掘立柱建物跡出土の土器

ＳＢ0730・0731・0732・0734は、いずれも第７次調査慊塚地区で検出された掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡は、主軸方位が座標北より16°前後東に振れる時期（ＳＢ0731・0734）、６°西に振れる時期、ほぼ真北を向く時期（ＳＢ0730・0732）に区分され、この順序で変遷したと考えられる。

第44図11はＳＢ0731から出土した。須恵器の壷類と思われる。体部下端から底部にかけての資料である。内面はロクロナデ調整、外面には底面から体部にかけてヘラケズリが施されている。内面の体部下端には、成形時に生じたとみられる亀裂が走るが、外面にはみられない。また、破面を観察すると、この部分に外面側から粘土が足されており、器厚が厚い。体部下端に生じた亀裂を外側から粘土を足して塞ぎ、ヘラケズリで整えたものと思われる。内面の亀裂がそのままにされているのは、袋物の器種であり、頸部を接合した後の段階で、手を入れられなかったためと推定される。なお、底面には焼成前にヘラ記号で「×」と記されている。

12はＳＢ0730から出土。高坏の脚部で、短い柱状部にはヘラ状の工具で２方向から刺突された三日月状の刺突痕がみられる。刺突は貫通していない。須恵器高坏の脚部にみられる透かしを意図したものと思われる。

13・14は有稜丸底・内黒の栗囲式の坏である。やや扁平な器形である。15はＳＢ0734出土の土師器甕で、栗囲式期のものとみられる。

ＳＤ０９０１出土土器

ＳＤ0901は第９次調査、H13－43グリッドで検出した南北溝である。上部に掘削を受け、底面近くがかろうじて検出されたのみである。このため、覆土中から出土した遺物は、溝の最下層に近い土層に属するものとみてよい。第45・46図に出土土器類を示した。

第45図１は土師器蓋である。全体に弱く内湾し、口端部が短く下方へ折れる。内・外面にミガキ・黒色処理の施された、両黒の土師器である。

２～４は非ロクロ・丸底の土器で、口径が16～20cmほどと大きく、器高が高く深身である。２は丸底からそのまま口縁部に至る半球状の器形から大型の坏とすべきものである。３は平底気味の丸底から口縁部がわずかに内湾してまっすぐ立ち上がる。口径17cmに対し器高が8.7cmで深身の椀である。４は口縁部を残す資料で器高は分からないが、丸底で口縁部がやや内湾するボウル形の椀であろう。

５～11は非ロクロの土師器坏で、８・11以外は内黒である。いずれも丸底からそのまま口縁部へ至る半球状の坏で、底部を欠くため器高の不明なものが多いが、残存部から推定してやや扁平なものが多いようである。５は平底気味で口縁部が弱く外反する。８も同様の器形であるが、内面にミガキ・黒色処理を確認できない。器面は２次的な被熱により赤化が著しいことから、一度吸着させた炭素が飛んでしまった可能性もある。内面には漆が付着している。11も半球状の坏で、内面にミガキが施されているが、黒色処理は行われていない。

12は、ロクロ整形の坏である。体部下端～底面に回転ヘラケズリが施されている。13・14は高坏である。14は中空でやや長い柱状部から裾部が真横に開く。

第45図15～17、第46図１～10は土師器甕である。

第45図15は長胴形の甕で、口縁部は短く外反する。胴部は中位に最大径をもち、縦位のハケ目が施されている。16は球胴形の甕で、口縁部が短く外傾する。17も球胴と思われる。胴部内面に輪積痕を顕著に残す。

第46図１は器高が15cmほどで胴部が短い。外面には粗いハケ目が施されるが一部に輪積痕をのこす粗雑なつくりの甕である。３～10は底部のみを残す資料である。

11～13は赤焼土器で、11は坏の底部、12・13は高台付坏である。

14～23は須恵器である。14～17は蓋で、14はボタン状のつまみを伴うやや内湾する天井部から口端部へ向かってやや外反し、端部は短く下方へ折れる。15～17は口端部を残す資料で、口径や口端部の器形は14と同様の無返り蓋である。

18～23は高台付坏である。18・19は口縁部がまっすぐ外傾するが底部は丸みを持ち、底部から口縁部へ移行する部分が強く屈曲し、高台はこの屈曲部の内側に貼り付けられている。18は底面に焼成後線刻で「労」の文字がみられる。

20は平坦な底部からまっすぐ外傾する口縁部へ丸みをもって移行する。高台は底部のやや内

側につき、端部が内傾面をもつ。21は口縁部のみを残す資料であるが、器形からやはり高台のつく器種である可能性が高い。

22・23は瓶類の口縁部から頸部を残す資料である。22は口縁端部がやや強く外傾し、23は頸部から口縁部にむかって緩やかに外反する。いずれも口縁端部に折り返しを持たない。23は内面前面に漆と見られる皮膜がベッタリと付着し、一部外面に垂れている。漆容器として使用された平瓶の可能性が高い。接合しないが同様の付着物がみられ胎土や焼き上がりから同一個体とみられる体部の破片が出土している(第47図21)。

土坑出土の土器

第9次調査区では、土坑17基が確認されている(ＳＫ0901～0917)。このうち、ＳＫ0901・03・04・07・08・09は平面円形で垂直に掘り込まれたもので、調査の時点で、既に地山が大きく削平されていたにもかかわらず、深さ１ｍ以上が残存していたことから、覆土の掘り下げ途中で調査を停止したものも多い。掘り込みの形状から、井戸跡の可能性の高い遺構と考えている。

ＳＫ0906・14は小規模なピット状の掘り込みで、柱穴の可能性もある。ＳＫ0913は円形・方形の掘り込みが重なった状況で確認されている。これらの遺構の性格は不明である。

上記の遺構から出土した遺物を、第47図に示した。

１はＳＫ0901から出土したかわらけである。２はＳＫ0906から出土した土師器高坏で、短く太い中空の脚部を残す資料である。３・４はＳＫ0908から出土したもので、３は土師器坏、４は赤焼土器の高台付坏である。

５～14はＳＫ0913から出土した。５～７・13は非ロクロで内黒の土師器坏である。５・７は丸底から内湾してそのまま口縁部に至る半球状の坏である。７は底部と口縁部との境界に粘土紐巻上げないし輪積痕を明瞭に残している。内面を指でなぞると、外面の接合痕に対応する位置にごく弱いくびれがあり、半球状だが有稜丸底の遺制を残す器形と思われる。６は平底気味で口径に対して器高が浅く、扁平で浅い皿状の器形である。口縁部外面から体部下端までヨコナデ、底部外面にヘラケズリを施す。13は外面に弱い段がみられるもので、全体の器形は不明であるが、栗囲式の特徴と思われる。

８～12は非ロクロ・丸底の土師器坏であるが、内面に黒色処理がみられない。丸底から内湾して口縁部に至る半球状の器形で、口縁部が弱く折れるものと、そのまま口縁部に至るものとがある。また、これらはいずれも砂粒の多い粗雑な胎土である。５～７のような国分寺下層式期の土師器と共伴すること、法量や器形の特徴もこれとほぼ同じであることから、同期に併行するものと考えてよく、非内黒の特徴から、外来の土器である可能性が高い。

14は非ロクロ・内黒の土師器で、平底から体部が内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。口径16.5㎝に対し器高4.9㎝で、やや大振りな椀ないし鉢と考えられる。15は全体の器形が不明だが、口縁部に最大径をもつ深みの鉢と推定される。

16はＳＫ0914から出土した土師器甕の胴部から底部を残す資料である。長胴形で、内面の調整はロクロを使用している。

17～19はＳＸ0901から出土した。17は非ロクロ・内黒の土師器椀で、平底気味の底部から内湾する体部が立ち上がり、そのまま口縁部に至る。外面に輪積痕を明瞭に残す。18は、外反する口縁部に口縁帯をもつ土師器で、甕ないし鉢が想定される。19は須恵器甕である。

（２）　遺構外出土の土器

第３次調査の遺構外出土土器

第３次調査遺構外出土の土器を第48・49図に図示した。

第48図１～４は内・外面ともミガキ・黒色処理を施した両黒の土師器蓋である。１～３はリング状のつまみが残る。４はつまみを欠くが口端部を残す資料で、全体の器形を把握できる。つまみは１～３のようなリング状と推定される。平坦な天井部からやや外反する口端部がのび、端部は下方へ短く折れる。天井部から口端部への変換点には、外面に明確な稜線が形成されている。こうした稜線の形やつまみの大きさからみて、３のようなやや小型のものと、４のようなやや大きめのものに分けられる。

５～15は坏である。５～９は非ロクロ、10～15はロクロ整形で、いずれも内黒である。５は平底風の丸底から口縁部がまっすぐ外傾して立ち上がるが、端部がやや内傾して立つ。６・８は半球状の器形である。９は平底風の丸底から口縁部が開く。口縁部は弱く内湾するため、体部下端がくびれる。５・９は楕囲式の器形にともなう稜が下に下がり、平底化が進んだ同型式最終段階の器形であろう。６・８は半球状の器形で国分寺下層式のものである。

一方、７は非ロクロ整形であるが非内黒の坏である。小さい平底から口縁部が内湾して立ち上がる。口縁部にはヨコナデ、体部下端と底面にはヘラケズリが施され、両者の間には指頭押圧のみの未調整部分が幅広に残る。内面にはミガキが施されている。こうした特長から、在地のものではなく、他地域からの搬入品か、後述する付着物との関連から、特殊な使用形態が想定される。

７は内面と外面の一部に緑灰褐色を呈する液状の物質が付着している。内面はほぼ全面に、外面は底部と、口縁部から垂れた状態での付着である。付着物は漆の可能性が高い。

９は底部の中央に径２㎝ほどの円形の焼成後穿孔がある。内面全面および外面の大部分に液状ないしゲル状の物質が固まった付着物がみられる。付着物は、褐色を呈する液状の物質が坏内・外面の全面を覆い隠すように付着し、その上から黄褐色を呈するやや粘り気の強い物質が径11㎝ほどの円形に付着している。後者は一定方向に掻き取られたような状態で残っている。これらの付着物は漆の可能性が高く、円形に付着した黄褐色のものは、漆容器に坏が被せられた際に、内容物が漆容器の口縁部の形に付着した結果と考えられる。従って本遺物は、漆容器の蓋として転用されたもので、底部にみられる穿孔もこれに関連する通気孔として転用に際して開けられたのであろう。漆は孔の部分にも付着している。漆容器は、円形に付着した物質の直径から推定して瓶類であろう。

16～18はロクロ整形で底部のみを残す資料であるが、大きく分厚い底部の特徴から大型の器

形であるため椀とした。いずれも内黒で、17・18は体部下端から底面に回転ヘラケズリを施す。

19・20は高台付坏である。19は非ロクロ・丸底の坏の底部に大きく外に開く高台を貼り付けたもの、20はロクロ整形の坏に短い高台がつく。

21・22は高坏である。21は栗囲式の特徴をもつ坏部に長い中実柱状の脚部がつく。脚裾部は坏部の口縁と同様にヨコナデされ、稜を形成する。22は脚裾部のみを残す資料であるが、これと同様の特徴をもつ。

23～28は赤焼土器である。23・24は坏、25・26は高台付坏、27・28は皿である。

第49図には須恵器を示した。1～6は蓋である。1～3はボタン状のつまみ、4はリング状のつまみをもつ。3はつまみの径が大きく器厚が厚いことから、大型の坏や盤に伴う蓋であろう。5は天井部から口端部を残す資料で、口端部が短く下方を折れる無返り蓋である。6は天井部外面にヘラ記号「×ヵ」がみられる。7～11・13 14は坏である。7は口径が大きく口縁部から底部が内湾する器形で、高台の付く器種の可能性もある。8は底部に糸切り痕を残す。9～11の底面はヘラナデ調整されている。13は大きめの底部をもち、体部下端～底面に回転ヘラケズリを施す。14は平底から傾斜の急な体部がまっすぐ外傾して立ち上がる箱形の器形で、体部下端から底面に手持ちヘラケズリを施す。内面にはタール状の付着部物がみられる。

12は稜椀で、体部中位の稜を境に口縁部が強く外反し、底部が内湾する深身の器形をもつ。底部には高台がつくものと思われる。

15・16は高台付坏で、15は口縁部と底部の境が強く折れ、口縁部がまっすぐ外傾して立ち上がる。16は底部から緩やかに内湾して口縁部へ至る。

17・18は長頸瓶で、17は高台の付く底部、18は口縁部から肩部にかけての資料である。

19は高台のつく大振りな坏部から、高台付きの盤と推定される。20は坏が大型化したような器形で、鉢とした。内面が摩滅し平滑となっており、擂鉢としての使用が考えられる。

21は受け口状の口縁部で、ロクロ整形の土師器甕と同一の器形の長胴甕と推定される。22は長頸瓶、23は鉢、24は甕の口縁部破片資料である。

25・26は硯である。25は圏脚円面硯で、硯部は陸部が海部より一段高く作られ、外周には陸部と同じ高さの外堤が短く立つ。脚部は欠損するが、硯部との境界に突帯をめぐらし、脚部には十字透かしがみられる。硯部の側面には山形文を意図したとみられるヘラ沈線がみられる。

27は風字硯とみられる。平坦な硯部の端から外包が立ち上がる。裏面は丁寧なヘラケズリが施されている。硯面は使用により摩滅が著しい。

第7次調査の遺構外出土土器

第50図1～21は第7次調査区鞠塚地区で出土した土器である。

1～4は土師器坏である。1・3・4は非ロクロで、1は有稜・丸底の栗囲式のもの、3は稜のないものである。4は口縁部外面を幅狭くヨコナデ、底面にヘラケズリを施し、両者の間には未調整ないしナデのみの部分が幅広に残る。この部分にはごく弱い沈線状の窪みがみられ、稜を意図したものとみられる。内面にはミガキが施されている。なお、内・外面の口縁部付近

がやや黒くなっているが、底部付近は通常の褐色を呈し、黒色処理が弱いか、あるいは行われていない可能性がある。

２はロクロ整形の坏で、底面に墨書がみられるが文字は判読できない。

５は土師器蓋で、口径が9.8cmと小さく、口端部が僅かに下方へ折れる。

６は口縁部がラッパ状に開き、口縁部と底部との境界に段をもつ。小ぶりでやや深身の坏である。内面全面から口縁部外面にかけてヨコナデ、底部外面にヘラケズリを施す。栗囲式以前の住社式期の土師器である。

７～９・11は土師器甕で、７は口径10.3cmと小型の甕、８は球胴の胴部にハケ目、外反する口頸部にヨコナデを施す。

10は土師器の壷である。小型の壷で、体部外面はヘラナデで調整されるが、一部に縦位のハケ目が残り、下端にはヘラケズリが施されている。内面には輪積痕を明瞭に残す。また口縁部の２箇所に、焼成前に行われた径３mmの穿孔がみられる。

12～21は須恵器である。12～14は蓋で、14は算盤玉状のつまみをもつ天井部、12・13は返りのある口端部を残す資料である。15・16は口径８～９cmほどの小型の坏である。口径からみて、12～14の蓋と組み合うものと思われる。17・18は高坏の脚部で、17は三角形の透かしを２方向から２段設け、上下の透かしの間にはロクロ沈線が巡る。18は裾部の残す資料で、胎土や焼き上がりから、17と同一個体の可能性がある。

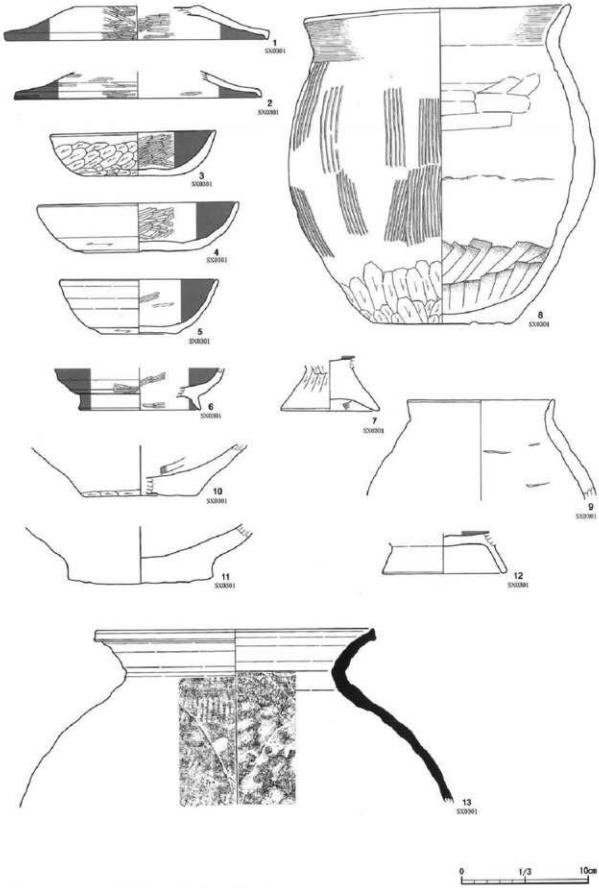
19は丸底でロ縁部が外反する深身の器形、20は口縁部が内湾し口縁端部に内傾面をもつもので、いずれも鉢と考えられる。21は長頸瓶の頸部～肩部にかけての資料で、接合部に２状の突帯がめぐる。

22～27は第７次調査区Ｂ地区で出土したものである。22・23は栗囲式の土師器坏、24・25は須恵器の円面硯である。26・27はかわらけである。

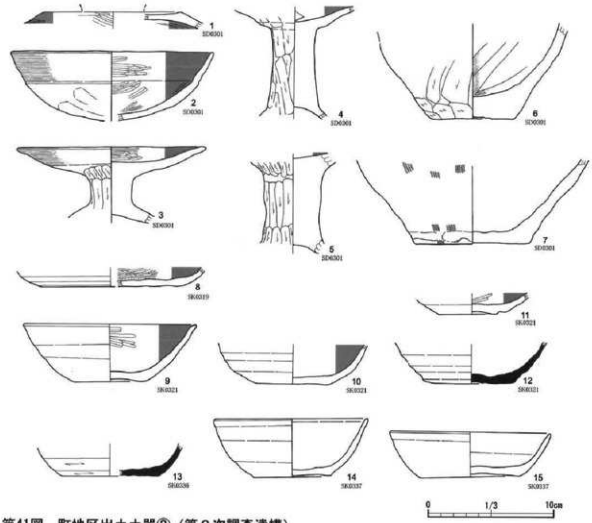
24は硯面が中央に向かって高まりをもつ無堤式の硯で、硯部の外周には外堤が設けられ、脚部外面の上端には突帯が巡る。突帯の下にはヘラ状工具による山形文が施文される。

第９次調査の遺構外出土土器

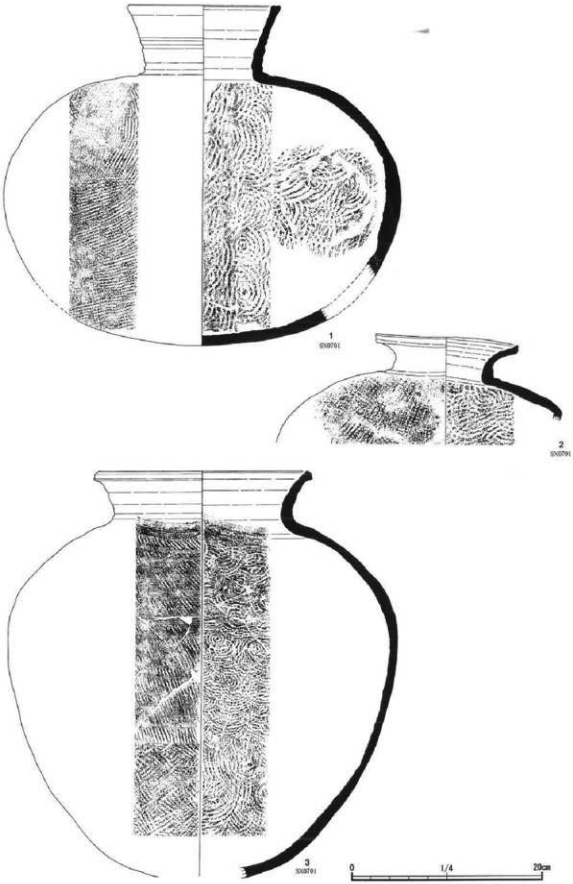
第47図20は土師器甑である。無底式の甑で、内面に縦位の密なミガキ、外面に縦位のハケ目が観察される。21は平瓶の体部破片資料である。内面の全面から破面にかけてべっとりと漆の付着がみられる。外面にも一部、垂れた状態で付着している。表土より出土したものであるが、付着物の特徴や器形・胎土・焼き上がりの特徴から、第46図23に示した平瓶の口頸部と同一個体の可能性が高い。



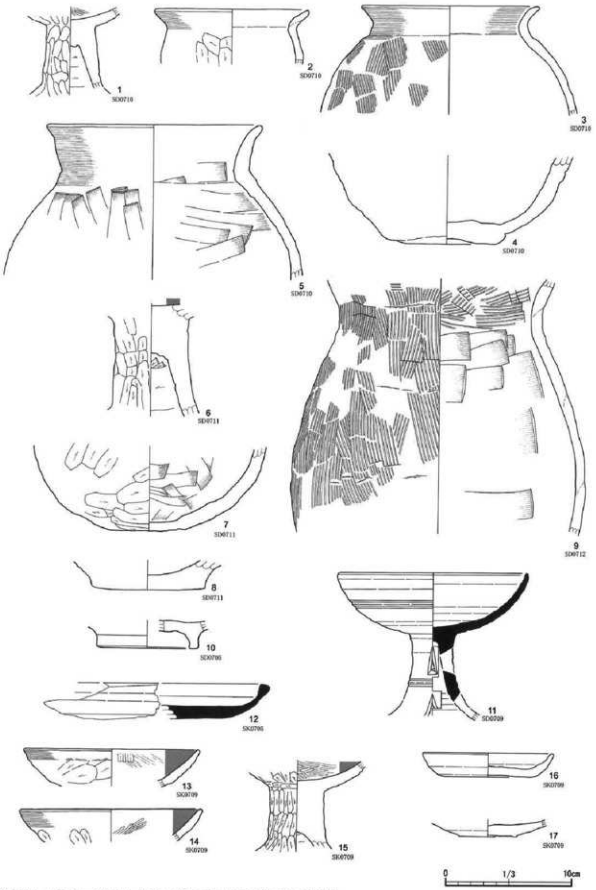
第40図　町地区出土土器①（第３次調査遺構）



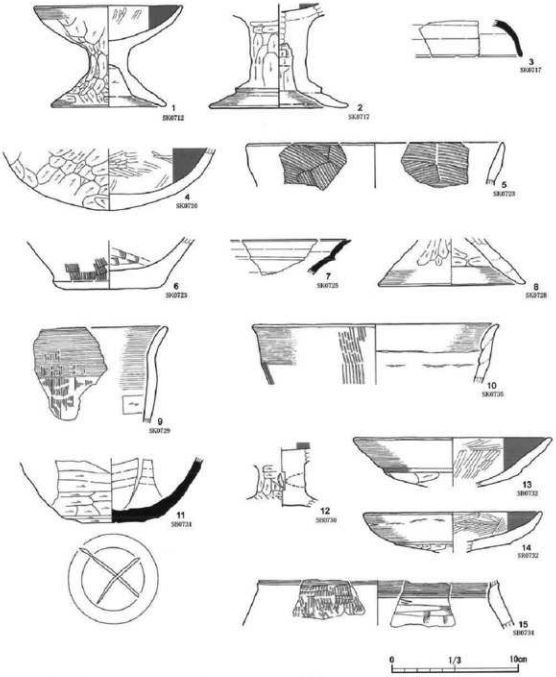
第41図　町地区出土土器②（第３次調査遺構）



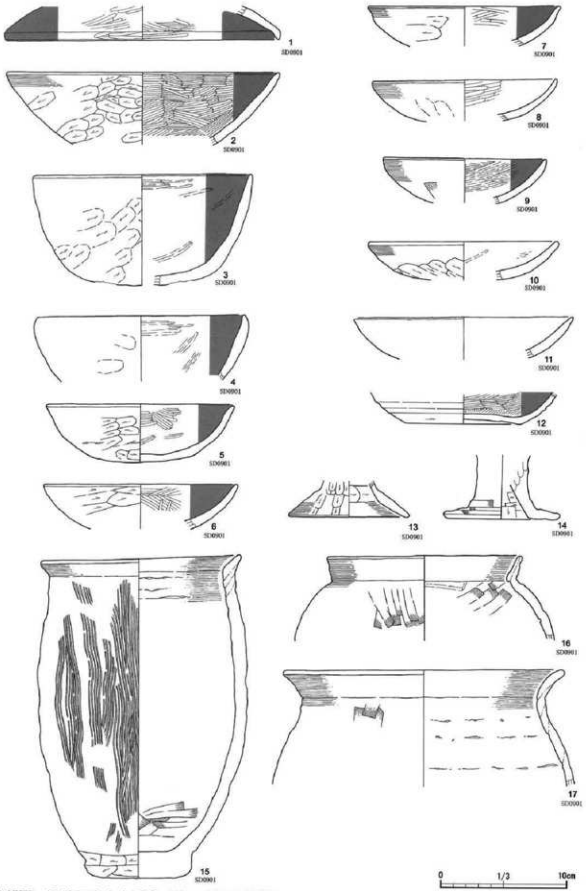
第42図　町地区出土土器③（第７次調査鞆塚地区遺構）



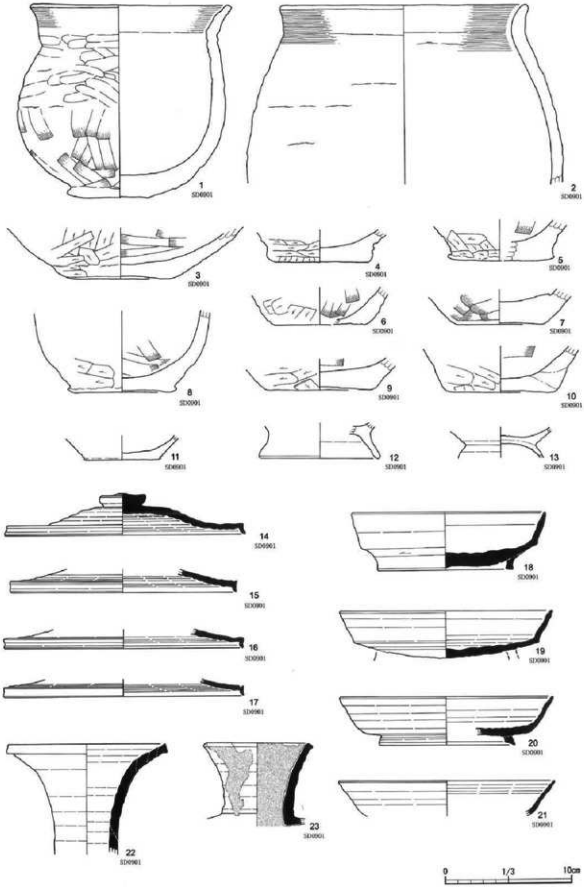
第43図　町地区出土土器④（第７次調査糠塚地区遺構）



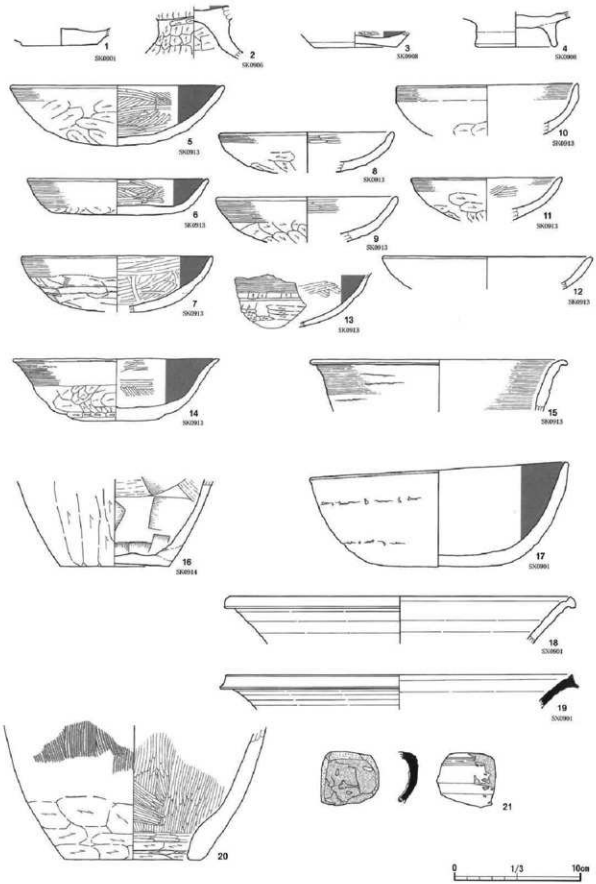
第44図　町地区出土土器⑤（第７次調査軸塚地区遺構）



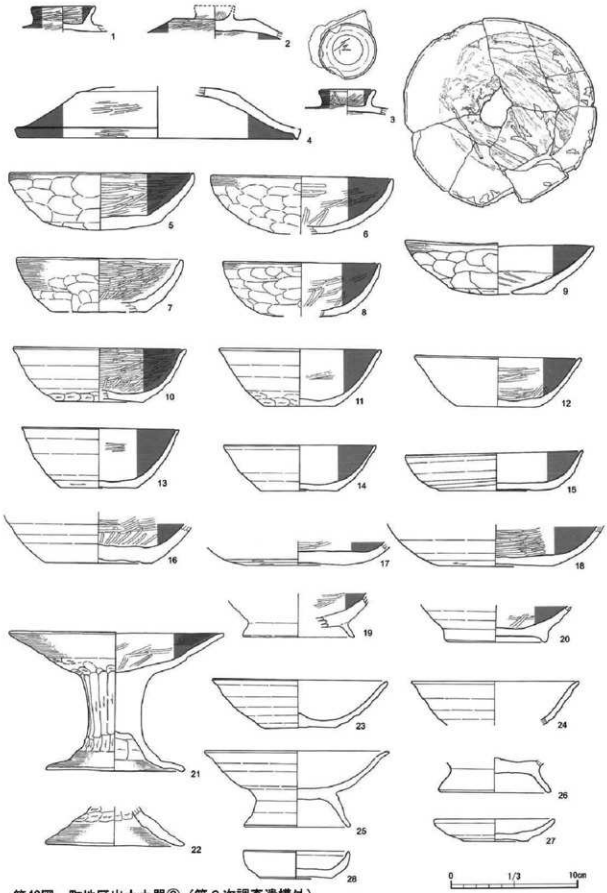
第45図　町地区出土土器⑥（第９次調査遺構）



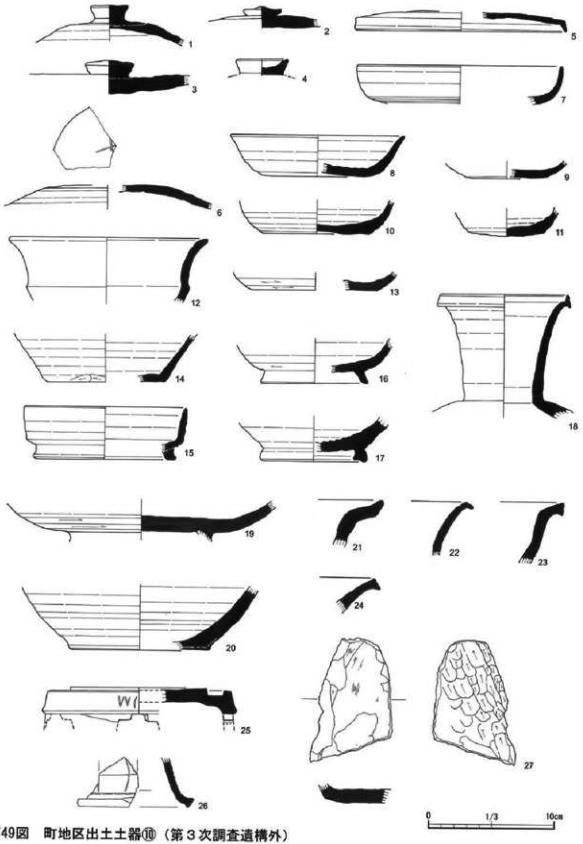
第46図　町地区出土土器⑦（第９次調査遺構）



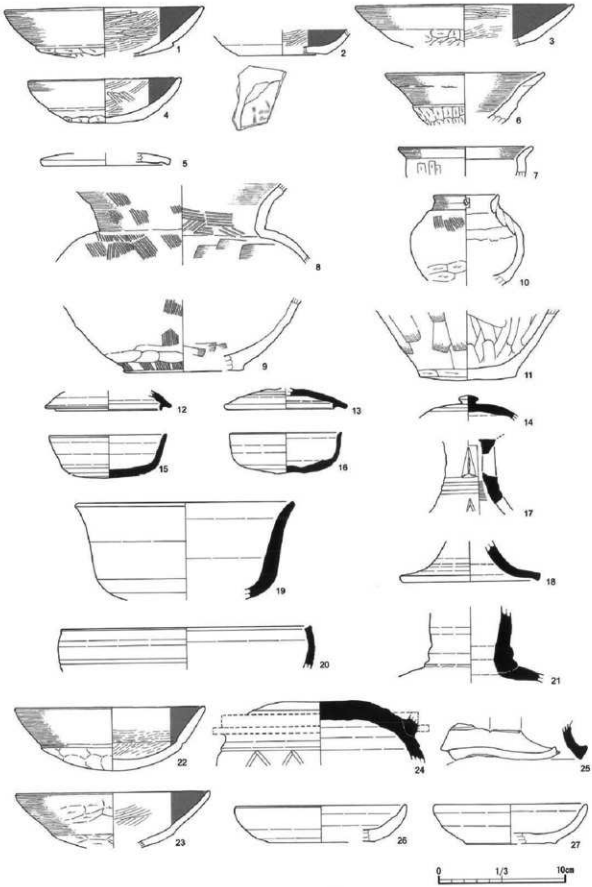
第47図　町地区出土土器⑧（第９次調査遺構）



第48図　町地区出土土器⑨（第３次調査遺構外）



第49図　町地区出土土器⑩（第３次調査遺構外）



第50図　町地区出土土器⑪（第７次調査轡塚地区遺構外）

第５節　舘前地区

舘前地区出土土器類のうち、古代に属する土師器・須恵器は少ない。遺構に伴って出土したもののなかに特筆すべきものは少なく、遺構外より出土したものが多い。

第51図には土師器を示した。１～３は第24次調査で検出されたＳＩ2401から出土した。覆土が床面付近しか遺存していないことから、出土した遺物はいずれも覆土最下層ないし床直に属するもので、１は周溝内、２は２時期目のカマドと推定した焼土中より出土した。土師器坏は９世紀後半のものと推定される。１は赤焼土器で、口径10.5cm・器高3.2cmと小型の坏である。内面に油煙の付着がみられ、灯明皿として使用されたものである。

２・３はロクロ整形の坏である。２は体部下端に回転ヘラケズリが施されている。

４～９は遺構外出土のもので、４～７はロクロ整形・内黒の土師器坏、８・９は高坏で、９は脚部柱状部にヘラ状の工具による刺突がみられ、須恵器の高坏などにみられる透かしを意図したものと思われる。

10・11は、第10次調査５Ｔで検出された土坑ＳＫ1001より出土したものである。ＳＫ1001は長軸2.7m×短軸1.8mの楕円形で、浅い皿状の掘り込みをもち、底面の中央に被熱した礫や白色粘土が検出されている。11の甑は、この礫の周囲で潰れた状態で出土した。10の甕などの出土からみても、カマドや炉に関連する施設の可能性が高いが、性格は不明とされる。

10の土師器甕は、胴部下半が欠損するが、下膨れと推定される長胴形の胴部とまっすぐ外に折れる口縁部からなる。口縁部はヨコナデ、胴部外面には縦位のハケ目ののちヘラケズリが施されている。11は無底式の土師器甕で、長胴形の器形が推定される。胴部外面縦位ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

第52～53図には須恵器を示した。第52図20・21、第54図２・３はＳＤ1005、第54図１はＳＤ1003からの出土、それ以外は遺構外出土である。

第52図１～８は須恵器蓋である。１～７は口端部内面に返りのある蓋、８は口端部が短く下方に折れる無返り蓋である。９～11は坏で、９は底部ヘラ切り、10は糸切り無調整、11は切り離し後に体部下端から底面に回転ヘラケズリを施す。12は口縁部がまっすぐ外傾し、口縁端部に平坦面をもつ。回転ヘラケズリの施された底部は中央へ向かって下がる形態で、２次底部面を形成している。こうした器形から高台のつく器種である可能性が高い。高台付坏か、やや深身の椀であろう。口縁部外面には２条のロクロ沈線がみられる。

13は擂鉢の底部から体部にかけての資料である。内面は使用のため摩滅が著しい。14・15は鉢の口縁部破片資料である。16・17は甕の口縁部で、16は口縁部が短く外へ折れ、17は不明瞭な突帯をもつ。18は器形からハソウの口縁部であろう。19は甕の頸部から肩部にかけての破片資料である。

20～23、第53図１～８、第54図１～７は須恵器甕の体部破片資料である。第52図22・第53図２は外面に平行タタキ目、内面には特徴的な樹枝状の当て具痕を残す。第53図１は外面に平行タタキ目、内面は楕円形状を同心円文当て具痕がみられる。４は外面に平行タタキ目、内面に

はこれと異なる原体による平行線文が観察される。平行線の文様を刻んだ当て具、もしくは叩き板を当て具として用いたことによる圧痕の可能性がある。５の外面には、平行線の一本に数条の平行線が斜行してぶつかる片側のみに羽をもつ矢羽のような特徴的な叩き目が観察される。３・７は、細い撚り糸状の圧痕が平行する叩き目で、撚り糸を巻きつけた叩き板を用いた可能性が高く、類例の増加を待ちたい。

第54図には須恵器甕の体部破片のうちで、２次的な転用が確認できるものを図示した。１・２・４・７は内面のみに摩滅がみられ、硯などに転用されたものと思われる。３・５は内・外面のほか破面にも摩滅が顕著にみられ、砥石に転用された可能性が高い。６は外面に摩滅がみられ、やはり砥石として用いられたと推定される。

中近世の土器・陶磁器類

第10次調査では中世の整地跡が確認されており、当地区では、中世のかわらけ、陶磁器類の資料が比較的多く出土している。

第55図には、かわらけを図示した。８は６Ｔで検出されたＳＤ1005からの出土、それ以外は遺構外出土である。後者のほとんどは１ＴのＬⅡ層より集中的に出土し、ある程度の一括性をもつものと考えられる。

１は手づくね成形のかわらけである。口縁部外面から内面全面にヨコナデ、底部外面に指頭押圧痕を残す。

２～20はいずれもロクロ整形、底部糸切りの小皿で、法量に大・小がある。３・４は口径12～13.7cm、底径８cm前後、器高3.5cm前後であり、見込みに工具による渦巻き状のナデを施す。底部のみが残る７～11も同様の特徴をもつ。一方、12～20は口径８cm前後、底径５cm前後、器高２cmほどとやや小型のものである。工具で内面の口縁部と底部の境をロクロナデしているため外周がくぼみ、中央へ向かって肥厚し盛り上がる。口縁部は内湾気味に短く立ち上がる。法量の大小を除くと、ほぼ同じ手法で製作されたとみてよい。19のみ体部下端から底面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。なお、12・16は口縁部に油煙が付着し、灯明皿として使用されたことが分かる。

これらは、器形からみて福島県考古学会中近世部会によるかわらけ編年３期(12世紀末～13世紀)のものとみられる。

第56～58図には陶磁器を図示した。大きく中国産陶磁器と国産陶磁器に分かれ、後者は尾張瀬戸窯産の古瀬戸と常滑焼の甕が中心となる。また図示できるものは少ないが、東北在地産とみられる陶器も一定量出土している。このほか瀬戸大窯期、唐津・伊万里など17世紀代の近世陶磁器も合わせて図示した。

古瀬戸は２・３Ｔで多く出土する傾向があり、常滑は４Ｔに集中して出土している。

中国産陶磁器は12世紀後葉～13世紀頃と推定されるもので、かわらけの年代観と一致する。常滑は口縁部の形態から赤羽・中野編年３～６期、13世紀～14世紀のものと推定される。古瀬戸もこれと重なる13世紀代のものから、やや新しい後期様式までがあり、年代に幅がある。

第56図１～７は中国産陶磁器である。１は白磁の皿、２・３は青白磁の合子の蓋と身である。２・３はともに２次的な被熱で釉薬に気泡が生じている。蓋は天井部外面に型押しによる文様がみられる。４は龍泉窯青磁の椀である。外面に片切り彫りの蓮弁文がみられる。５～７は緑釉陶器の瓶子である。胎土から同一個体の可能性が高く、５・６は陰刻による文様が見られる肩部の資料、７は体部下半の破片資料と思われる。外面全面に緑釉を施釉するが、一部に褐釉がみられるため三彩の可能性もある。内面は無釉で強いロクロ目を残す。灰色と灰褐色の緻密な胎土がバームクーヘン状に見られる。

８～35は尾張瀬戸窯産の陶器で、８～28は「古瀬戸」、29～34は大窯期のものである。

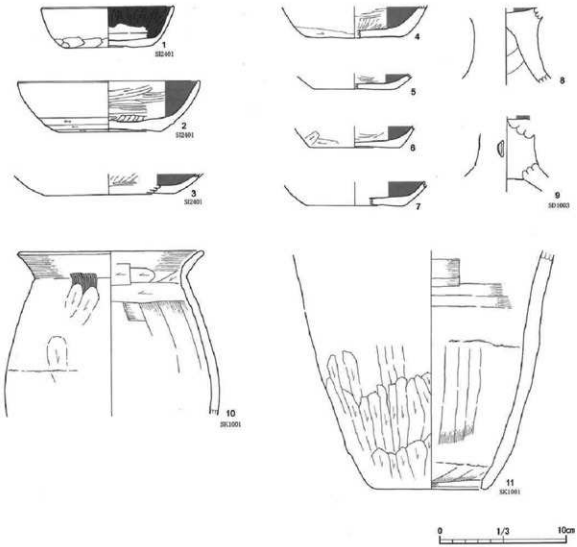
８は古瀬戸の平椀で内面にトチン跡がみられる。９～13は卸皿で、９はツケガケで鉄釉を施釉、他は灰釉を施釉する。14・15は折縁深皿、16～19は灰釉皿である。20は縁釉小皿で、内面には黒色の付着物がみられる。22～24は瓶子、25は鉄釉を施した花瓶、26～28は入子である。

29～35は瀬戸大窯期の製品、36～38は初期伊万里、39・40は志野、41は唐津の椀である。

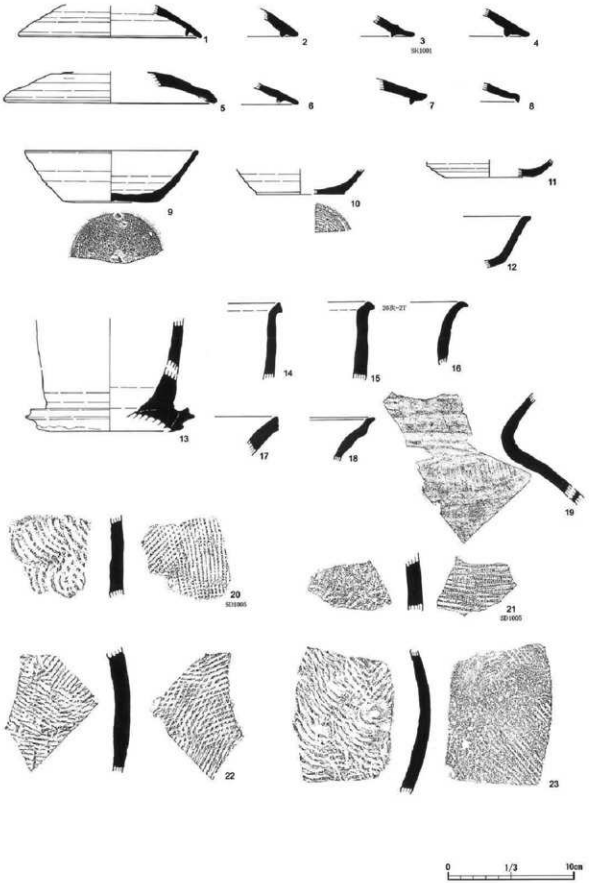
第57図には常滑焼をまとめて図示した。１～５は甕ないし広口壷の口縁部が残る資料である。受け口状の口縁が発達しており、13世紀後葉から14世紀前葉にかけての資料と思われる。６は長方形の格子タタキ目が残る体部の破片資料、７は底部の資料である。８～13は片口鉢である。12・13は高台のつく山茶椀系のもの。

14は壷である。肩部と胴部との境界に段があり、この部分にツノ状の突起がつけられている。突起は細い棒状の工具で刺突され、刺突孔は内面まで貫通しており、注口のようになっている。

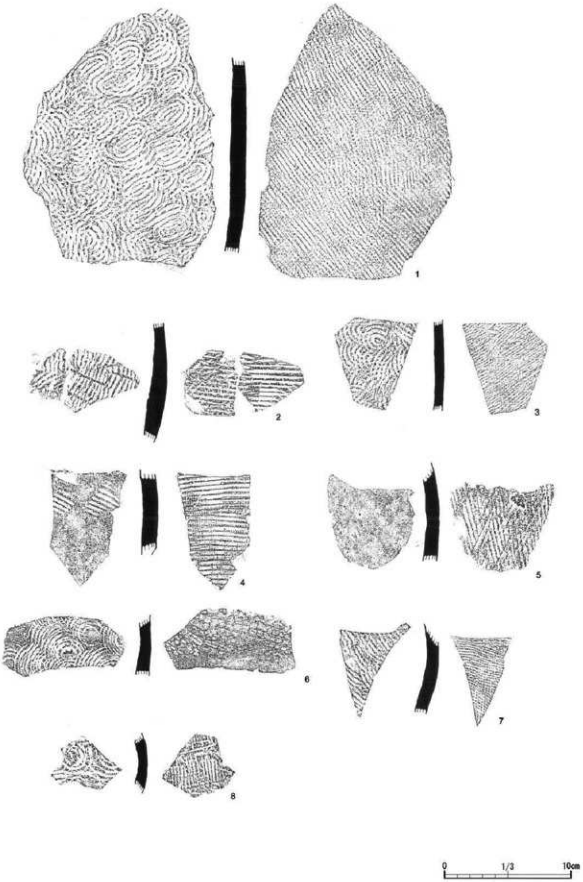
第58図には東北の在地系陶器とみられるものを図示した。無施釉で胎土は赤褐色を呈する。１～３は大甕、４は鉢、５は片口鉢の口縁部破片資料で、内面に卸目がつく。白石市白石窯跡に類例をみとめられ、14世紀前葉と推定される。先の常滑とほぼ併行する時期の所産であろう。



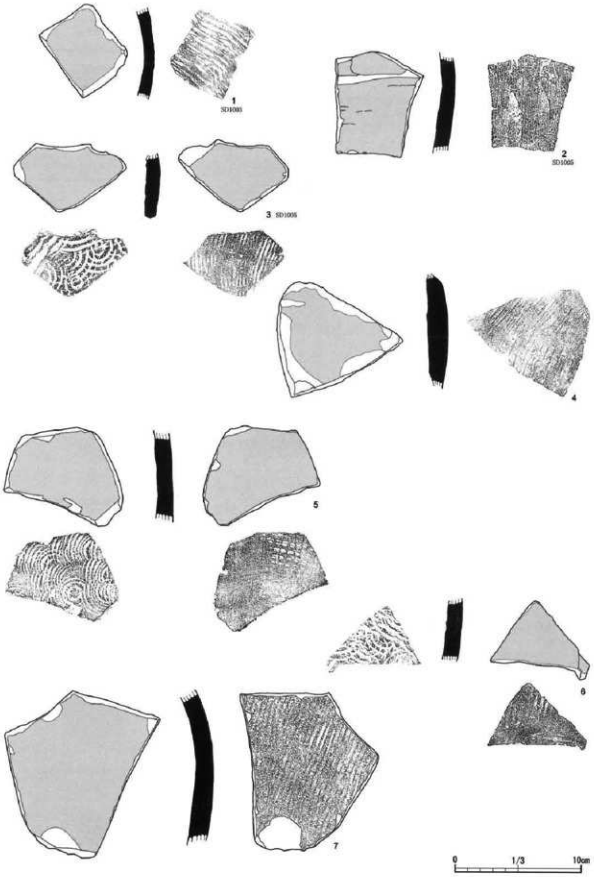
第51図　館前地区出土土器①



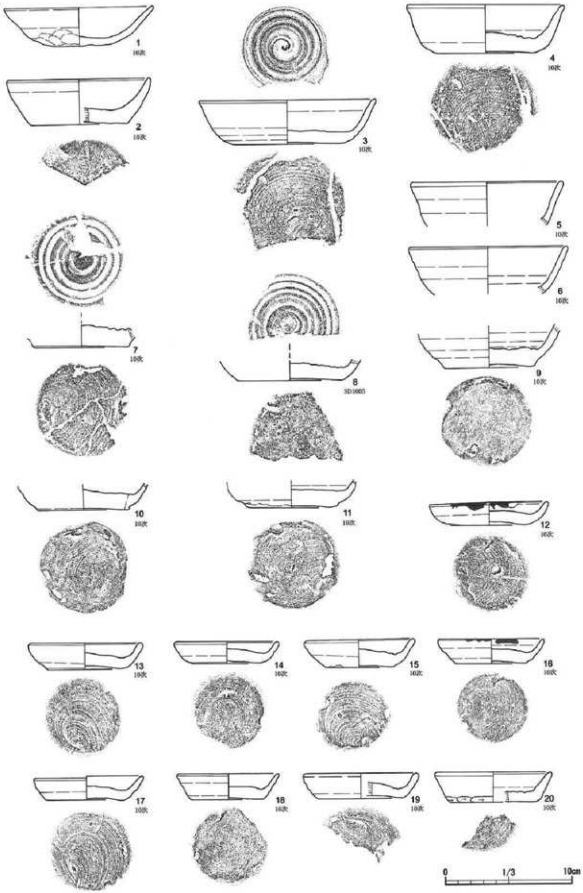
第52図　館前地区出土土器②



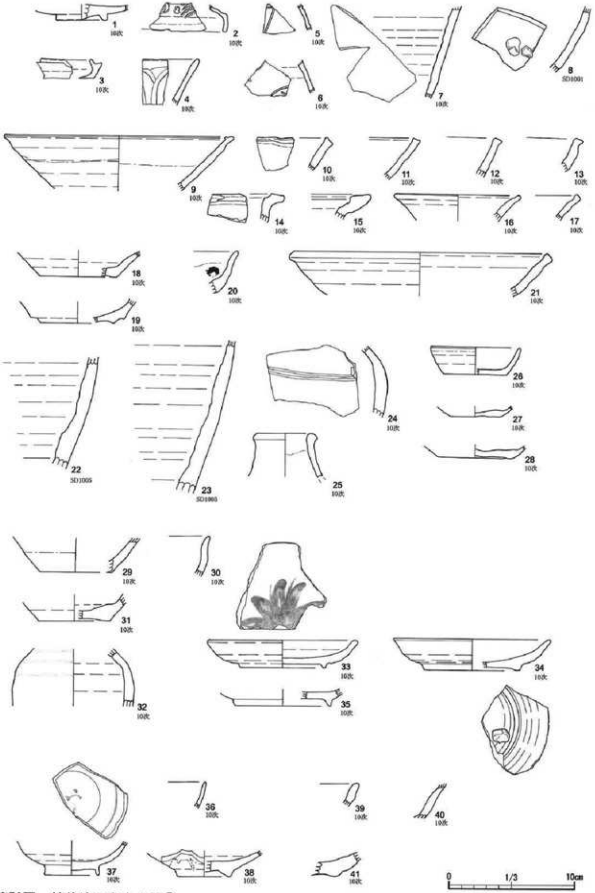
第53図　館前地区出土土器③



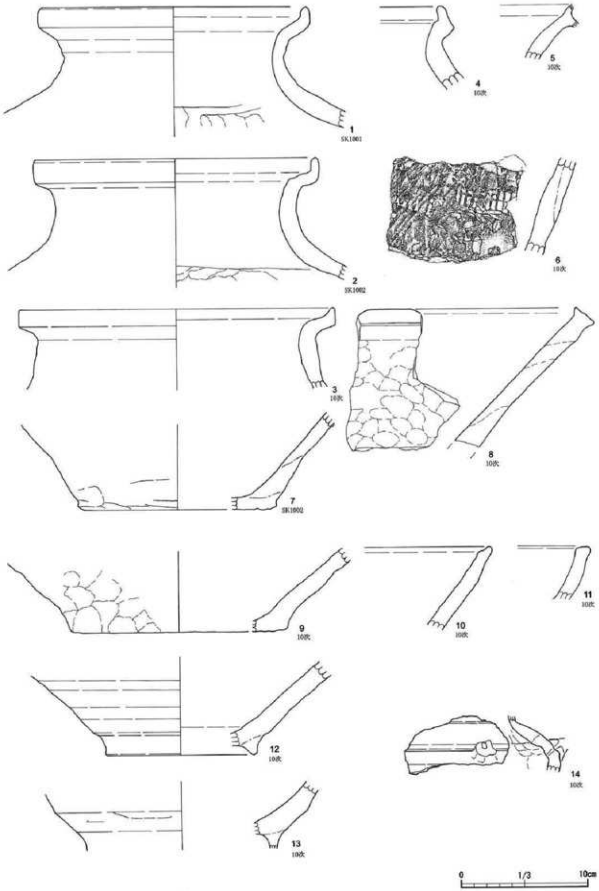
第54図　館前地区出土土器④



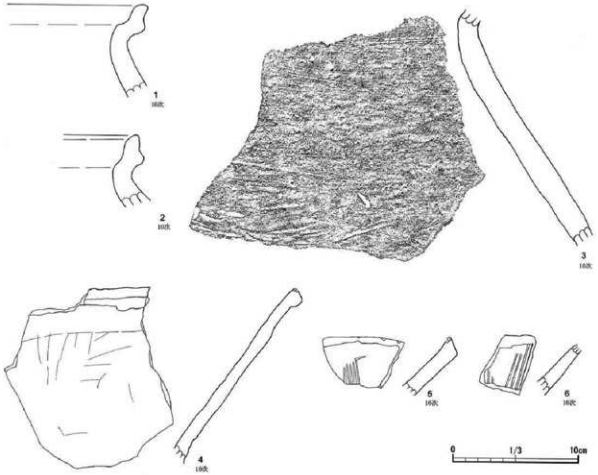
第55図　館前地区出土土器⑤



第56図　館前地区出土土器⑥



第57図　館前地区出土土器⑦



第58図　館前地区出土土器⑧

第3章　木簡

本遺跡のこれまでの調査で、木簡が6点出土している。以下、1～6号木簡と称し、出土状況について記述したのち、各々の遺物について解説する。

1号木簡は、第10次調査14Tの北西隅で検出されたＳＥ1001で出土した。ＳＥ1001は平面円形の素掘りの井戸で、覆土は灰褐色粘土・黒色土・緑白シルトなどがレンズ状に自然堆積した土層である。木簡は地表下2.0mほどの覆土中から出土した。他に、平瓦・鹿角、骨(鹿または鯨ヵ)などが出土しており、それらとともに井戸内へ投棄されたものと考えられる。

14Tは、掘立柱建物跡や瓦溜(ＳＸ1001)が検出された５Ｔの東側に隣接する。第10次調査では、古代に属するこれらの遺構のほか、主に調査対象地の西半に位置する１～３Ｔや８・９Ｔなどで中世のピット、整地層が検出されているが、５Ｔや14Ｔの位置する東半部では中世の遺構は希薄となる。 14Ｔで検出されたＳＥ1001も古代に属する可能性が高いが、遺構の年代を明証する遺物に乏しく、遺構の時期は不明である。

2号木簡は第16次調査ＳＤ1601－Ｂ出土、３～６号木簡はＳＤ2101出土である。2時期の変遷のある正倉院の区画溝は、その古い時期(第１区画)には「日」字形の構造で、区画を南部・北部に分かつ東西溝がある。この東西溝のうち、第16次調査区(Ｂ地区)検出分をＳＤ1601－Ｂ、第21次調査区検出分をＳＤ2101と称しているが、これらは一連のものである。

この東西溝は、これらの検出地点で同じ体積状況を確認している。すなわち、最下層には、植物遺体などに由来するグライ化した黒灰色粘土が堆積し、中層から上層にかけては黄褐色～黄白色粘土のブロックを主体とする人為的な埋土、最上層には埋め戻し後の窪地に自然堆積した白褐色・黒褐色粘土が認められる。２～６号木簡は、上記の調査地点において、溝跡の土層断面を観察するため、幅１ｍほどのサブトレンチを掘り下げた際に出土したものである。したがって平面的には出土分布の特徴を捉えにくいが、溝内の広い範囲にわたって、他の木質遺物とともに、散在的に分布しているものと思われる。出土層位はいずれも最下層、底面に近い位置である。

1号木簡

出土遺構：ＳＥ１００１

　　材　：不明

木　　取：柾目

形　　状：上部を折損するが、下部は方頭。019型式。

残存状況：上部を折損するが、下端と両側端は残る。表裏とも数箇所に傷・剥離が見られる。表目下端の２箇所に刃物による傷が認められる。摩滅により木目が浮き上がっている。

法　　量：残存長118㎜×幅35㎜×厚さ５㎜

成形・調整：摩滅が著しく不明。

墨　　書：表・裏ともに１行の墨書がみられる。墨痕はほとんど失われているが、墨により保護され風化しなかった部分の浮き上がりにより、表面に２文字、裏面に３文字を確認できる。裏面３文字目のみ判読できる。表面２文字目の下には約80㎜、裏面３文字目の下は約60㎜の余白がある。

〔釈文〕

・□□」

・□□位」

備　　考：ほとんどの文字が判読できず、また出土遺構の性格も不明な点が多いことから、記載内容や年代などは不明とせざるを得ない。なお、表面は剥離により文字の中央部が失われている。廃棄時に表面を粗く削るなどの行為が行われた可能性がある。上部の折損も廃棄時の可能性があるが、判然としない。

２号木簡

出土遺構：ＳＤ１６０１－Ｂ

材　　：不明

木　　取：板目

形　　状：下端と右側面を欠損するが、上端と左側面は残り、上端は方頭である。019型式。もとは短冊形の木簡であったと推定される。

残存状況：下端と右側面を欠損。後述するように、文字が半分以上失われていることから、縦方向に半載されたものとみられ、使用時には残存幅の倍以上の幅があったと推定される。下部は折れているが人為的かどうか不明。また中央やや下よりに折れがみられる。

法　　量：残存長151㎜×残存幅20㎜×厚さ３㎜

成形・調整：表面全面にカットグラス状ケズリがみられる。

墨　　書：文字は片面のみに確認できる。天地両方向から文字が書かれており、両者は墨の濃淡に違いがある。最初の使用の後にケズリにより文字を消した上で再利用され、異筆で逆方向から文字が記されたものと思われる。２度目の使用に伴う墨痕は、ケズリなどが行われておらず、比較的濃く残る。

〔釈文〕

□　□□

『大伴マ』

２次目の使用に伴う文字は比較的大きく書かれているが、いずれも半分以上を欠損する。１文字目はやや大きな左払いで、２文字目との間に若干の空白がある。２文字目は手扁（てへん）と左払いの一部、３文字目は長扁（ながへん）の残画と判読できる。これらの残画のみから文字を断定するのは困難であるが、記載様式を考慮したうえで１文字目を人冠（ひとかんむり）の残

画、２文字目を手扁と人冠(人冠)の残画と推定すると、１文字目を「合」、２・３文字を大字の数字「拾」(十の大字)、「肆」(四の大字)と考えれば、何らかの合計を記した記録簡の可能性がもっとも高い。特に集計部分の記載に大字を用いる例がある。

１次目の使用に伴う文字は、３文字が判読できる。文字は木簡の残存幅に収まるが、２次目の利用に伴って表面を削られ墨痕がきわめて薄く、１文字目「大」の右払いや２文字目「伴」の人偏(にんべん)の墨の残りは確認できない。３文字目は片仮名の「あ」や「マ」に近い字形で、「部」の略体字である。

なお、判読できた３文字の前にも墨痕を確認でき、前後に文字が続く可能性が残る。

備　　考：「大伴部」はウジ名で、大伴氏は弘仁14年(823)に伴氏に改姓することが知られ、本木簡は、それ以前に記載されたものということになる。『続日本紀』神護景雲３年(769)３月13日条、陸奥大国造道嶋嶋足の申請による陸奥国人の一括賜姓の記事のなかに、「行方郡人外正六位下大伴部三田等四人」が、「大伴行方連」の姓を賜ったことが示されている。

３号木簡

出土遺構：ＳＤ２１０１

材　　：不明

木　　取：板目

形　　状：もとは厚さ5.5㎜ほど、幅33㎜以上の板材であったと推定されるが、２次整形が加えられ、形状は三日月形ないし鉤形を呈する。２次整形は、木目に沿って割いた部分と、木目に直行するキリが行われた部分とがある。

法　　量：残存長82㎜×最大幅33㎜×厚さ5.5㎜

成形・調整：表面がやや摩滅しており、調整は不明。ケズリの単位は認められない。

墨　　書：２行以上の墨書が片面のみに認められる。墨痕は比較的明瞭に残るが、完全に残る文字は無く、判読には至らない。ただし、文字は同じ文字の残画である可能性があり、繰り返し同じ文字が記されたと推定される。

備　　考：本遺物は、板状の材の片面に墨書が認められる。残存部分にみられる墨書は、同じ文字が２行以上にわたって繰り返し記された可能性が高く、当初は習書木簡として使用されたものと考えられる。木簡として使用された後、２次整形をして何らかの部材に２次利用されたものと推定される。

４号木簡

出土遺構：ＳＤ２１０１

材　　：不明

木　　取：板目

形　　状：短冊形。015型式。上端から19㎜（孔の中央で21㎜）の位置に長軸3.5㎜×短軸３

㎜の円形の孔が見られる。孔の内壁には焼けが認められないことから、錐で穿孔したものと思われる。孔は真直ぐ貫通しており、双方向からの穿孔を示す食い違いは認められない。また、一方の口が他方よりも大きいということもなく、どちら側から穿孔したか判断し難い。

残存状況：完形。上端から約５㎜の位置に、右側角から斜め下方へ向かってキリ、約75㎜の位置に、左側角から斜め下方へ向かってキリが行われている。

法　　量：長180㎜×幅17㎜×厚さ８㎜

成形・調整：表面は全面にカットグラス状ケズリが認められる。裏面はハギトリ状ケズリの後にカットグラス状ケズリが施されている。側面は平滑でケズリの単位は認められない。端面は、いずれも平滑に仕上げられている。上端面表面寄りに一部カットグラス状ケズリが認められるが、他の部分でケズリの単位を識別できない。

墨　　書：肉眼では確認できない。赤外線カメラで、表面にごく僅かな墨痕を確認したのみである。

備　　考：表・裏の全面に及ぶカットグラス状ケズリは、廃棄時に墨書を消す目的で行われたものと推定される。また、表面に見られる２箇所のキリも廃棄時のものと思われる。

本木簡は、長さ180㎜（６寸）で上端から21㎜（７分）の位置に穿孔がみられ、特に長さと穿孔位置において一定の規格が存在したものと推測される。側面に孔のある015型式の木簡は、役人の考課や兵士歴名といった用途に使用されるものである。しかし、長屋王邸跡出土015型式の木簡には銭の付札として使用されたものがあり、本木簡も付札であった可能性がある。

５号木簡

出土遺構：ＳＤ２１０１

材　　：不明

木　　取：柾目

形　　状：荷札形。032型式。長方形の材の左右に切り込みがつけられている。

残存状況：完形。裏面の上端部に欠けが見られるが、残存状況は良好である。

法　　量：長158㎜×幅21～17㎜（下方へいくにつれて幅狭になる）×厚７～5.5㎜（下方へ行くほど薄くなる）。

成形・調整：切り込み部分の整形はキリオトシ技法による。右側面は、まず側面に対して直角に近い角度で切り込みを入れ、次にその下方から上へ向かって角度をつけて切りおこしており、高さ２㎜ほどの切込底が残る。はじめに行われた切り込み上部のキリは１度に行われているが、切り込み下部のキリオコシは、木簡に厚みがあるため数回に分けて行われている。左側面も数回に分けて切り込みがつけられている。側面の表面寄りから中央にかけては切込底がみられず、キリ・カキ技法によ

るが、裏面よりには低く幅狭の切込底が認められる単位があり、この部分だけキリオトシ技法によると考えられる。

平面の調整は、表裏とも摩滅により木目が浮き上がっており不明である。側面は平滑で、ハギトリ状ケズリが施されたものと思われる。右側面は全面を一度のハギトリ状ケズリによって平坦に調整し、さらに上半部の表面側付近のみに幅1㎜ほどのハギトリ状ケズリを施している。

端面は上・下端ともケズリにより調整されているが、上端面では中央部に幅3㎜ほどの折りの痕跡が僅かに残り、木簡原材の採取はキリ・オリ技法によったと思われる。上端面は平面ケズリ技法により調整されるが、表面寄りにやや幅広の面取りがなされている。下端面の調整も平面ケズリ技法によるが、表面寄りを幅狭く一度に、裏面側はやや幅広く2回に分けてケズリを施している。下端面は、やや丸みをもつ。

墨　　書：表面に10文字、裏面に8文字を確認できる。表面は、切り込みやや下から書き始められ、木簡の幅いっぱいに1行のみ文字を記している。第1文字目の「嶋」の上半部のみ墨痕が濃く残り、他は削られているため木の繊維の間に染み込んだ墨が僅かに残るのみであるが、その状況は肉眼でも観察できる。2文字目はほとんど読めないが、3文字目「郷」、6文字目「里」はかろうじて判読でき、郷里名が記されていると考えられる。「里」の前の文字は残画から「成」の可能性がある。9・10文字目は「白人」で、比較的明瞭に読める。これは人名と考えられ、その前の文字は残画から「部」の可能性が高い。「人」の下は17㎜ほどの余白が残る。

裏面も表面と同様に、文字を1行のみ記す。墨痕は極めて薄い。肉眼で木の繊維に染み込んだ墨が僅かに確認できるが、第4文字目と5文字目はほぼ完全に失われている。2・3文字目は「一石」で、1文字目は「米」の可能性が高い。6・7・8文字目は「十一日」と読め、その前の2文字は「某月」の可能性が高い。

〔釈文〕

(成ヵ)　(部ヵ)

・「V嶋□郷□□里□□白人」

(米)

・「V□一石□□十一日」

表・裏あわせて、地名(郷里名)＋人名(貢進者名)＋品目＋数量＋年月日の記載である。

備　　考：表面には、「嶋□郷□□里」の文字が見え、8世紀前半の郷里制段階に作成された木簡と考えられる。また、郷名から書き始められている点から、「嶋□」は行方郡内の郷名である可能性が高い。『和名類聚抄』に記載された行方郡の郷は吉名・大江・多珂・子鶴・真吹・真野の6郷がみえ、「嶋某」なる郷名はみられない。従って、『和名類聚抄』が編纂された10世紀段階には消滅していた郷が、8

世紀段階には存在していた可能性がある。

また、裏面の第２・３字目は「一石」と読め、「石」は脱穀された状態の穀類を示す単位であることから、備蓄を建前とした正倉に収められる稲穀の形態と合致する。郡内の郷から収取された穀が正倉建物に収納される段階で荷札が取り外され、区画溝内に廃棄されたのであろう。

６号木簡

出土遺構：ＳＤ２１０１

材　：不明

木　取：板目

残存状況：保存状況不良。上端はキリ・オリ、下端はキリの痕跡が認められ、側面も木目に沿って割れている。裏面から上端は、斜めの切り目が入れられ、この部分で折れている。したがって、表面側にはオリによる木質の凹凸がみられる。下端は大部分が割れているが、一部に斜め方向のキリの痕跡が認められ、切断されたことが分かる。側面はいずれも木目に沿って割れている。

形　状：板材であるが上・下端、側端ともに欠損するため型式は不明。

法　量：残存長105㎜×残存幅29㎜×厚さ５㎜

成形・調整：摩滅が著しく調整不明。

墨　書：肉眼では観察できない。赤外線カメラで片面にわずかな墨痕を確認したのみである。

備　考：文字が判読できないため、本木簡の性格は不明とせざるを得ない。上・下端ともに切りが加えられており、２次利用を防ぐため比較的丁寧に処理されたうえで廃棄されたとみられる。

小結

以下、本遺跡出土の木簡の意義について簡単に触れ、まとめとしたい。木簡は、１号木簡を除くと、いずれも正倉院を区画する大溝のうち、Ⅱ期正倉区画の第１区画北辺を画する一連の溝から出土したものである。この区画溝は、ある段階に埋め戻されており、木簡はその最下層から出土した。沖積地のグライ化した土壌を掘り込んだ大溝内には、最下層に有機質の土壌が薄く堆積し、この上に地山の粘土ブロックを主体とする土が埋め戻され、 最下層がパックされていたため遺存したと考えられる。

５号木簡の形状はいわゆる付札木簡であり、地名＋人名＋品目＋数量＋年月日の書式や、穀物の単位である「一石」の文字が見えることから、穀米を貢進する際に付けられた荷札と考えてよい。租税として徴収した穀類が収納された郡衙正倉の性格・機能と、直接結びつけて考えることのできる内容をもつものである。５号木簡に見える「一石」の表記は、実際に正倉院への租税の納入が穀稲の形状で行われていたことを示している。こうした事例は静岡県藤枝市郡

遺跡・徳島県徳島市観音寺遺跡・福島県いわき市根岸官衙遺跡出土の木簡にみられる。

山中敏史氏は、令の規定では田租の納税額が穎稲の単位である「束・把」で表記されているが、『延暦交替式』和銅元年(708)閏8月10日の太政官符で、稲を備荒備蓄する不動倉の設置政策がとられ、『続日本紀』和銅7年(714)4月26日条の太政官奏には、租を納める倉の規模が大：4千斛、中：3千斛、小：2千斛と穀の単位で規定されていることから、田租を穀納する施策が進められていたと推定している(山中1994)。また山中氏は、こうした穀稲が「裹薦」(藁を編んで作ったカマスのような袋)に入れて収められたこと、「裹薦」1袋は1石入りが標準であったと推定している(山中、前掲)。

5号木簡は、このように袋詰めの状態で正倉院に搬入された穀稲に付けられていた荷札であったと考えられる。「嶋□郷」との郷名から書き始められていることから、郷の段階で作成され、郡衙正倉へ運ばれた後、廃棄されたものであろう。すなわち、穀稲を正倉建物(高床倉庫)へバラ積み収納するため袋が開封され、その際に荷札は外されて、納入額などを確認し帳簿などに記録された後に、木簡は区画溝内に廃棄されたと推定される。

4号木簡は015型式であり、その類例のほとんどは式部省をはじめとした都城出土のものであるが、地方官衙では宮城県多賀城跡、同市川橋遺跡、島根県松江市出雲国庁などで出土例がわずかにある。多賀城跡の例では兵制に関わる歴名作成用木簡、平城旧宮跡や市川橋・出雲国庁の例でも主として選叙・考課関係に使用されている。ただし、長屋王家木簡のなかに銭の付札として用いられた例がみられる。本木簡も、官衙施設の性格を考慮すると、収納・保管された税物に関わる付札である可能性の方が高いであろう。

2号木簡は、何らかの集計を示した記録簡として使用された可能性が高い。総じて、正倉院区画溝出土のこれらの木簡は、税物を徴収し、集積・管理した正倉院で行われた実務を具体的に示し、その性格をよく反映する内容をもつものと言えよう。

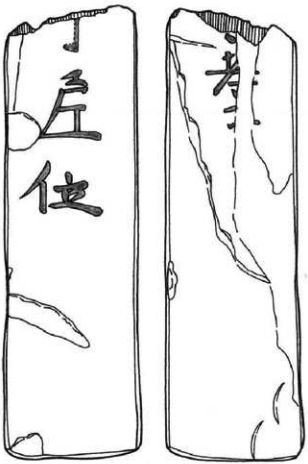
さて、その他に、木簡の記載内容等から、付随する問題を挙げると、まず5号木簡にみえる「嶋□郷」は、郷名から書き始められていることから、郡内に存在した郷とみられる。しかし、10世紀に編纂された『和名類聚抄』には、「吉名」・「大江」・「子鶴」・「高」・「真歌」・「真野」の6郷がみえるが「嶋□郷」に該当する郷名は記載されていない。周辺の郡にも該当しそうな郷が見えないことから、8世紀前半に存在し、10世紀までに消滅した「嶋□郷」なる郷が知られることとなった。

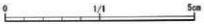
また郷・里の記載が見えることから、本木簡は郷里制が施行されていた養老元年(717)～天平11年(739)頃までに使用されたものと判明する。郡衙の遺構期区分において、確実な定点を与えるものと言えよう。すなわち、行方郡衙の正倉は、当初、主軸方位が東に偏するⅠ期に伴って別地点に造営されるが、その直後のⅡ期には真北方位をとる区画が成立し、その後、区画溝の一部が埋め戻されるなどの変遷がある。5号木簡は真北方位をとる区画のなかで、埋め戻しの行われた相対的に古い時期の溝から出土していることから、真北方位の正倉区画の成立が、8世紀第1四半期後半～第2四半期前半以前に遡ることが確定できる。

2号木簡は、1次目の使用に伴って記載された「大伴部」のウジ名が注目される。『続日本

紀』神護景雲3年(769)3月13日条の陸奥国人の一括賜姓の記事のなかに、陸奥国行方郡の人「外正六位下大伴部三田」ら4人が、「大伴行方連」の姓を賜ったことがみえる。このような郡名を含む姓を賜った氏族は、郡の譜代郡領氏族であることを公的に認定された氏族であったとされる(熊谷1992)。2号木簡は、大伴を冠する氏族が、行方郡衙における実務に深く関与していたことを、出土文字資料から初めて傍証したという点で、貴重なものと思われる。

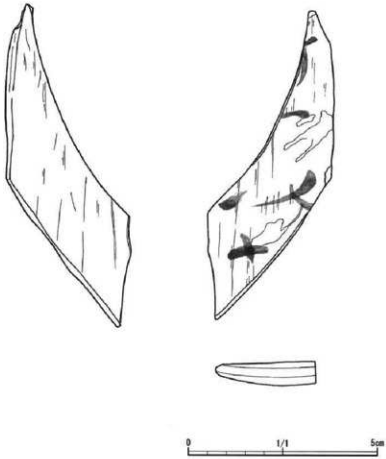
正倉院区画溝跡を検出地点で部分的に断ち割ったわずかな範囲のなかで、上述した内容をもつ木簡が出土したことは、本地区において、郡衙における穎穀収取の実態や、この時代における行方郡の様相について、さらに多くの情報をもった資料が埋蔵されていることを予想させるに十分である。





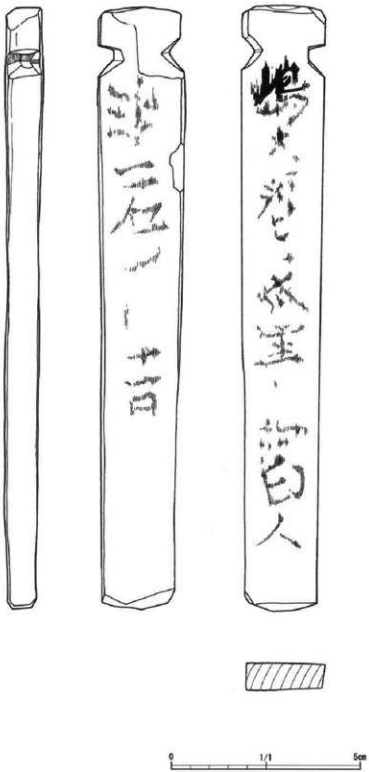
第59図　1号木簡

第60図　2号木簡

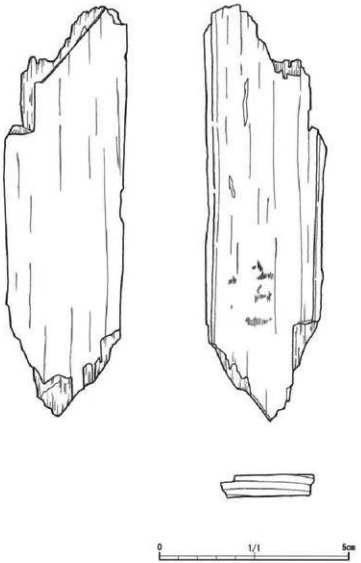


第61図　３号木簡

第62図　4号木簡



第63図　5号木簡



第64図　６号木簡

第13図都庁開出土土器①観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁指数	口底指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	SB1701 No.11個方	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚0.7		—	—		オリーブ黒	7.5Y3/1	堅緻	精良・緻密 白色砂粒少量	内外面ロクロナデ、外面体部下端回転ヘラケズリ
2	SB1701 No.11個方	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚0.7		—	—		灰	7.5Y4/1	堅緻	精良・緻密 白色砂粒少量	内外面ロクロナデ
3	SB1701 No.11個方	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚0.6		—	—		灰	7.5YR5/1	堅緻	精良・緻密 白色砂粒少量	内外面ロクロナデ
4	SB1701 No.11個方	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚0.7		—	—		灰	10YR5/1	堅緻	精良・緻密 白色砂粒少量	内外面ロクロナデ
5	SB1701 No.11個方	須恵器	甕	底部破片 資料	器厚0.6		—	—		灰	7.5Y4/1	堅緻	精良・緻密 白色砂粒少量	内面:無調整 外面:ロクロナデ
6	142C-B5C P39	須恵器	坏	口縁部55% 底部30%	(12.6)	(7.4)	3.6	(29)	—	灰白	N7/	良好	緻密 砂粒少量	内外面ロクロナデ 底面手持ちヘラケズリ
7	142C-A5C P19	土師器	坏	口縁部18% 底部15%	(13.8)	(7.8)	5.2	(37.7)	56.5	にぶい橙	7.5YR6/3	良好	粗雑 石英,長石,砂粒,赤色粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ヘラナデ、ミガキ	赤ロクロ
8	SB1409 No.6+1	土師器	坏	口縁部～底部	14.0	6.3	4.4	31.4	45	橙	5YR7/6	良好	粗雑 石英,長石,砂粒,赤色粒多量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ 底部～体部下半回転ヘラケズリ	
9	142C-B5C P28	土師器	鉢	口縁部10%	(18.6)	—	(4.9)	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	緻密 石英,金雲母,砂粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ヘラナデ	
10	SB1409 No.1住	土師器	坏	底部1/3	—	6.6	(2.1)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/4	良	緻密 赤色粒多量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,体部下端,底面外周手持ちヘラケズリ,底部回転糸切	底面に墨書。文字不明。
11	SB1409 No.6+C個方	土師器	坏	口縁部破片 資料	—	—	(2.7)	—	—	灰褐	7.5YR6/2	良好	緻密 石英,白色粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ	底面に墨書。文字不明。
12	SB1711個方 No.13個方埋土	須恵器	坏	底部15%	—	(8.7)	(1.2)	—	—	灰	5Y6/1	堅緻	粗雑 石英,長石,砂粒少量	内面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	焼結用か？
13	SB1711No.7	土師器	高台付坏	底部破片 資料	器厚0.5		—	—	—	暗灰	N3/	良好	緻密 石英,白色針状物質	内外面ミガキ,黒色処理	底面に焼成後刻「今」
14	SB1712 No.5A赤ドリ11	土師器	高坏	脚部資料	—	—	(3.7)	—	—	灰白	2.5YR/2	良	粗雑 石英,長石少量	内面:杯部黒色処理 外面:縦位ヘラケズリ	
12	142C-B5C P40	須恵器	坏	口縁部18% 底部50%	(12.6)	7.4	3.1	(25)	(59)	灰白	N7/	良好	精良・緻密 石英,砂礫微量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底面～体部下半回転ヘラケズリ	
16	143C-B5C P19	赤褐土器	形台付坏	台部20%		(8.2)	(2.6)	—	—	橙	5YR7/6	良好	緻密 石英,砂粒,褐色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:体～底台部ロクロナデ 底部回転糸切り	
17	SB1712 No.3B敷盤方	須恵器	甕	体部破片 資料	幅7.2	長5.4	厚1.7	—	—	灰	7.5Y4/1	堅緻	粗雑 石英,長石多量	内面:ロクロナデ後ヘラナデ 外面:平行タタキ	外面紐石に、内面硯に転用
18	142C-A5C P73A住居跡	手焙土器	？	口縁部40% 底部40%	(6.0)	(5.4)	1.6	(27)	90	褐	7.5YR4/4	良	粗雑 金雲母,砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:指ナデ、ヘラナデ 底部ヘラナデ	
19	142C-A5C P15A住居跡	須恵器	甕	体部破片 資料	長6.9幅6.2厚0.9			—	—	灰白	2.5Y7/1	堅緻	粗雑 砂粒少量	内面:整形のため不明 外面:平行タタキ	内面硯転用
20	SA1404 No.3敷方	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚1.1		—	—	—	黄灰	2.5Y5/1	不良	粗雑 砂粒少量	内面:ヘラナデ 外面:平行タタキ	
21	142C-A5C P25	赤褐土器	坏	口縁部23% 底部完存	(11.8)	5.3	3.7	(31)	(45)	にぶい橙	7.5YR7/3	良好	緻密 石英,長石,砂粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕	
22	142C-B5C P18	土師器	坏	口縁部35% 底部40%	(18.8)	(5.0)	5.1	(27.1)	27	明褐灰	7.5YR7/2	良	緻密 白色砂粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,体部下端～ヘラケズリ 底面回転糸切痕	
23	142C-B5A P18	赤褐土器	坏	口縁部10% 底部40%	(12.6)	(7.0)	4.2	-3~.3	56	灰白	10YR8/2	良	粗雑 石英,砂粒,赤色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り後底面ヘラナデ	
24	142C-A5C P25	須恵器	甕	体部破片 資料	長5.5	幅5.5	厚1.9	—	—	灰黄褐	10YR6/2	良好	粗雑 石英,長石,黒色粒少量	内面:当て具痕 外面:平行タタキ	内面硯転用。外面鉢石使用？
25	142C-B5C P18	須恵器	甕	口縁部破片 資料	—	—	(4.2)	—	—	灰	N5/	良好	やや密 石英微量,白色砂粒少量	内外面ロクロナデ	
26	142C-A5C P17	須恵器	甕?	体部破片 資料	長7.6	幅9.2	厚0.9	—	—	灰白	2.5Y7/1	良好	粗雑 長石多量	内面:ロクロナデ後横位ヘラナデ 外面:ロクロナデ	内面を硯転用、外面にも黒板あり

第14図都庁開出土土器②観察表

1	SD14018区	土師器	甕	底部完存	—	8.2	(3.7)	—	—	橙	2.5YR6/6	不良	粗雑 石英,長石,砂礫多量	内面:ヘラケズリ 外面:ヘラナデ、ヘラケズリ 底面に木葉底残す	底部木葉痕
2	SD14018区	須恵器	甕	口縁部破片 資料	—	—	(5.2)	—	—	灰	7.5Y5/1	良好	精良・緻密 白色砂粒少量	内外面ロクロナデ	大戸窯産
3	SD14018区	土師器	不明	把手か	長4.3	幅1.3		—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	粗雑	一部ヘラケズリ	取手が剥離したものか
4	SD1702	土師器	甕	底部完存	—	9.4	(6.5)	—	—	橙	5YR7/6	不良	粗雑 砂粒多量	内面:ヘラナデ,指オサエ 外面:ヘラケズリ 底面摩滅のため不明	
5	SD1412	須恵器	甕	体部破片 資料	長7.8	幅10.4	厚0.9	—	—	灰白	2.5Y8/1	不良	粗雑 石英,砂粒多量	内面:縦心円文当て具痕 外面:平行タタキ	内面硯転用
6	SK1403	土師器	坏	口縁部30% 底部完存	(14.2)	6.2	4.6	(32.4)	(44)	明褐灰	5YR7/2	良	緻密 砂粒、赤色粒多量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ 体部下端～底面手持ちヘラケズリ	
7	SK1403	土師器	坏	口縁部26% 底部70%	(12.6)	5.8	4.2	-3~.3	(46)	にぶい橙	10YR7/4	不良	粗雑 砂粒多量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ 体部下端～底面手持ちヘラケズリ	
8	SK1403	土師器	坏	口縁部50% 底部完存	12.5	5.6	4.4	35.2	45	灰白	10YR8/1	不良	やや密 砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ 体部下端～底面手持ちヘラケズリ	
9	SK1403-CEK	土師器	坏	底部70%	—	5.9	(3.4)	—	—	灰白	7.5YR8/2	良好	粗雑 砂粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ 体部下端～底面手持ちヘラケズリ	底面に墨書「屈」
10	SK1403 (ADXP30)	土師器	高台付坏	台部・底部完存	—	7.2	(2.7)	—	—	灰褐	7.5YR6/2	良好	粗雑 石英,砂粒,赤色粒多量	内面:ミガキ,黒色処理 体～台部ロクロナデ	
11	SK1403 (ADXP30)	土師器	高坏か	脚部資料	—	—	(3.8)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/4	良好	粗雑 石英,砂粒,褐色粒多量	内外面ヘラナデ後に円形を描けいる	脚部円形

第14図都庁敷出土土器②観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量 口径	底径	器高	口縁径	口底径	色調	焼成	胎土	調整	備考
12	SK1403 (AICP30)	赤焼土器	坏	口縁部25% 底部30%	(11.0)	(4.6)	3.8	(34.5)	42	橙	5YR6/3	良好	やや密 砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、体部下端～底部手持ちヘラケズリ
13	SK1403 (AICP30)	赤焼土器	皿	口縁部10% 底部20%	(12.4)	(6.0)	2.2	(18.5)	50	灰白	10YR8/2	良好	粗雑 石英、砂粒、黒色粒、褐色粒少量	内外面ロクロナデ 底面回転糸切痕
14	SK1403 (AICP30)	須恵器	長頸瓶	口縁部20%	(9.8)	—	(6.3)	—	—	青灰	5PB5/4	堅緻	精良・緻密 白色砂粒少量	内外面ロクロナデ
15	SK1403 (AICP30)	赤焼土器	鉢	口縁部15%	(32.8)	—	(5.7)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/4	良	粗雑 石英、長石、金雲母、砂粒、黒色粒多量	内外面ロクロナデ
16	SK1403 (AICP30)	須恵器	甕	口縁部15%	(15.4)	—	(3.6)	—	—	褐灰	10YR6/1	堅緻	精良・緻密 白色砂粒少量	内外面ロクロナデ 大戸窯産
17	SK1403 (AICP30)	須恵器	甕	体部破片 資料	長16.3幅15.5厚2.2		—	—	—	灰	N6/	堅緻	やや密	内面:ロクロナデ、ヘラケズリ 外面:平行タタキ 内面硬質焼用
18	SK1403	土師器	ミニチュア土器	完形品	3.9	—	3.8	116.7	—	にぶい赤橙	2.5YR4/3	良好	粗雑 砂粒多量	内面:指オサエ 外面:指オサエ、指ナデ

第15図都庁敷出土土器③観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量 口径	底径	器高	口縁径	口底径	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	SK1491 (AICP29)	土師器	坏	口縁部25% 底部70%	(14.8)	7.2	4.2	(28.4)	(49)	にぶい赤橙	5YR5/4	好	粗雑 白色砂粒多量、赤色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕
2	SK1491 (AICP29)	赤焼土器	坏	口縁部40% 底部完存	(13.5)	6.4	4.5	-3-.3	(47)	にぶい橙	7.5YR7/4	不良	粗雑 砂粒、白色粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕
3	SK1491 (AICP29)	赤焼土器	皿	口縁部15% 底部完存	(11.4)	5.8	2.2	(19.3)	(51)	灰白	10YR8/1	良	粗雑 砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕
4	SK1491-B トレ	赤焼土器	坏	底部 ほぼ完存	—	5.6	(1.9)	—	—	にぶい橙	2.5YR6/4	良好・堅緻	粗雑 砂粒微量	内面:ロクロナデ 外面:底部回転糸切痕 底部中央焼成前に穿孔
5	SK1491 (AICP29)	土師器	甕	底部50%	—	(6.6)	(3.9)	—	—	灰褐	7.5YR5/2	良好	粗雑 石英、角閃石、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:体部下端前位ヘラケズリ後ヘラナデ、底面ヘラケズリ、一部木葉痕残す。
6	SK1491-B トレ	須恵器	甕	体部破片 資料	長3.5	幅3.3	厚2.1	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好・堅緻	緻密 石英、長石微量	内面:ヘラナデ 外面:平行タタキ 硬石に転用、人為的にけち欠いている
7	SK1492 14次(AICP13)	須恵器	長頸瓶	体部破片 資料	—	—	(6.4)	—	—	青灰	5B5/1	堅緻	精良・緻密 白色砂粒多量、黒色粒、褐色粒少量	内外面ロクロナデ 外面灰5-5Y 大戸窯産
8	SK1494- (BICP17)	土師器	坏	底部完存	—	4.6	(1.8)	—	—	明褐灰	7.5YR7/2	良好	やや密 石英、長石、砂粒、褐色粒微量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 底部回転糸切
9	SK1494- (BICP17)	土師器	坏	底部完存	—	5.4	(1.0)	—	—	明褐灰	7.5YR7/2	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 底部回転糸切
10	SK1494- (BICP17)	赤焼土器	高台付坏	台部50%	—	9.8	(3.2)	—	—	橙	5YR6/6	不良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内面ロクロナデ、高台内面に貼り付け時の強調押圧痕を残す。
11	SK1408	土師器	坏	口縁部30% 底部40%	(13.0)	(7.0)	3.7	(28.5)	54	にぶい黄橙	10YR7/3	良	やや密 石英、長石、砂粒、褐色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕
12	SK1408	赤焼土器	坏	口縁部35% 底部完存	11.6	6.6	3.9	3-.6	57	橙	2.5YR6/6	良	やや密 砂粒微量、赤色粒少量	内面ロクロナデ 底部回転糸切痕
13	SK1408	須恵器	長頸瓶	底部30%	—	(8.9)	(10.4)	—	—	灰	N5/	良好・堅緻	やや密 白色砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、胴部下端回転ヘラケズリ後黄色粘土付け、ロクロナデ
14	SK1414	赤焼土器	皿	口縁部35% 底部45%	(11.6)	(5.6)	2.3	(19.8)	48	にぶい橙	7.5YR7/4	良好・堅緻	粗雑 砂粒微量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕 内底に線状付着
15	SK1415- (BICP1)	赤焼土器	皿	口縁部15% 底部完存	(12.0)	6.0	2.0	(16.7)	(50)	にぶい橙	10YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面ロクロナデ 底部回転糸切痕
16	SK1409-2	土師器	甕	底部85%	—	9.1	(4.5)	—	—	にぶい黄	7.5YR5/4	良	粗雑 石英、角閃石、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:体部前位ヘラケズリ後ヘラナデ、底面ヘラナデ
17	SK1404	須恵器	甕	体部破片 資料	長6.1	幅6.0	厚1.8	—	—	灰白	10Y7/1	良好・堅緻	緻密 石英、長石微量	外面硬質用か?黒斑あり、人為的に打ち欠いている 外面使用か?黒斑
18	14次-P5F	赤焼土器	坏	底部完存	—	5.7	(2.0)	—	—	橙	7.5YR7/6	不良	粗雑 石英、砂粒多量	内面ロクロナデ 底部回転糸切痕
19	14次-P5 F-No.1	赤焼土器	坏	口縁部90% 底部80%	13.4	7.0	4.7	35.1	52	浅黄橙	7.5YR8/3	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕
20	14次-P5	土師器	ミニチュア土器	底部20%	—	(6.6)	(1.4)	—	—	淡赤橙	2.5YR7/2	不良	緻密 白色粒微量	内面:ヘラナデ 外面:ヘラケズリ

第16図都庁敷出土土器③観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量 口径	底径	器高	口縁径	口底径	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	SX1461下層	土師器	甕	口縁部45%	(20.8)	—	(15.7)	75.5	—	灰黄褐	10YR4/2	良	粗雑 砂粒多量	外面:コナデ、ハケ目後ヘラケズリ 内面:コナデ、ヘラナデ
2	SX1461	土師器	甕	底部90%	—	8.6	(21.2)	—	—	にぶい橙	7.5YR5/3	良好	粗雑 砂粒多量	内面:ヘラナデ、胴部下位に横上げ痕残す 外面:ヘラケズリ後ヘラナデ 底面木葉痕
3	SX1461下層	土師器	不明	—	—	—	(2.2)	—	—	灰白	10YR8/2	不良	緻密 石英、白色粒少量	内外面ともロクロナデ。 高坏脚部か?
4	SX1461下層	須恵器	甕	体部破片 資料	長11.6	幅6.5	厚0.8	—	—	灰	N4/	良好・堅緻	緻密 長石、赤色粒少量	外面:平行タタキ 内面:当て具痕 内面硬石転用
5	17次-石敷レキ層&トレンチ)	土師器	高坏	杯一脚部分	—	—	(4.0)	—	—		5YR6/4	不良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内面:坏部ミガキ、内面黒色処理、脚部ヘラナデ 外面:ヘラケズリ後ヘラナデ
6	17次-石敷ベルト2-12	須恵器	坏	底部破片 資料	—	—	—	—	—	灰	5Y6/1	堅緻	精良 白色粒微量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底面ヘラナデ 内面研磨
7	17次-石敷ベルト3-12	須恵器	坏	底部15%	—	—	(2.3)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	堅緻	やや密 砂粒少量	内外面ロクロナデ 内面研磨
8	17次-石敷ベルト3-12	須恵器	長頸瓶	体部破片 資料	—	—	(4.2)	—	—	灰	N7/	堅緻	やや密 砂粒少量	内面:頸部の付け根に指ナデ 外面:ロクロナデ 胴部に浅いロクロ痕、頸部の付け根に弱いろ指
9	17次-石敷ベルト2-12	土師器	高台付坏	台部・底部完存	—	5.9	(2.1)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/4	不良	粗雑 砂粒少量	内面:摩滅 外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕

第17図都庁凱出土土器⑤概察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁指数	口底指数	色調		成形	胎土	調整	備考
1	142ch-AIX SEL II	土師器	坏	口縁部10%	(12.6)	—	(5.2)	—	—	黒褐	7.5YR2/1	良	粗雑 砂粒多量	内面:口縁部ヨコナデ,底面ヘラケズリ又はミガキ 外面:口縁部ヨコナデ,底面ヘラケズリ後ヘラナデ 内外面黒色処理	赤ロクロ,須恵器模倣坏
2	10ch-AIX SEL II	土師器	坏	口縁部5%	(12.6)	—	(4.2)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	良	粗雑 砂粒多量	外面:ヨコナデ 内面:摩滅のため不明	赤ロクロ,須恵器模倣坏
3	162ch-AIX SEL II	土師器	坏	口縁部40% 底部20%	(14.6)	6.0	4.7	(33.6)	(43)	にぶい黄橙	10YR7/2	不良	やや密 砂粒,黒色粒微量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,底面回転糸切とみられる が摩滅のため不鮮明	
4	172ch-AIX SEL II	土師器	坏	口縁部30% 底部球状形	(13.9)	6.4	4.8	(34.5)	(46)	灰黄褐	10YR6/2	良	やや密 砂粒,黒色粒微量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ 底部回転糸切痕	
5	182ch-AIX SEL II	土師器	坏	底部完存	—	5.2	(1.9)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/4	良	粗雑 石英,白色針状物質,砂粒少量,赤色粒多量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,体部下端～底面手持ちヘラケズリ	
6	192ch-AIX SEL II	赤焼土器	坏	口縁部65% 底部完存	12.0	6.5	2.7	30.8	54	明褐灰	7.5YR7/2	不良	粗雑 石英,砂粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
7	142ch-F1-90, 91	赤焼土器	坏	口縁部65% 底部完存	12.4	6.4	3.8	30.6	52	橙	2.5YR7/8	良	やや密 石英,砂粒微量,赤色粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
8	142ch-F1-90, 91	赤焼土器	坏	口縁部10% 底部完存	(14.4)	5.8	4.5	(31.3)	(40)	灰白	7.5YR8/2	不良	粗雑 石英,砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
9	192ch-AIX SEL II	赤焼土器	坏	口縁部30% 底部完存	(11.6)	5.4	3.8	(32.8)	(47)	灰褐	7.5YR6/2	良	粗雑 石英,砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
10	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	坏	口縁部40% 底部50%	(12.4)	6.0	3.8	(30.6)	(48)	にぶい橙	2.5YR6/3	良	粗雑 砂粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
11	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	坏	口縁部28% 底部25%	(13.2)	(6.6)	4.0	(30.3)	50	浅黄橙	7.5YR8/3	良好	やや密 砂粒微量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	内面に煤付着。
12	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	坏	口縁部78% 底部完存	11.4	5.4	3.2	28.1	47	にぶい橙	7.5YR7/3	良	粗雑 石英,砂粒多量,赤色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
13	142ch-F1-90, 91	赤焼土器	坏	口縁部15% 底部80%	(13.8)	6.4	3.3	(23.9)	(46)	にぶい橙	5YR6/4	良	粗雑 石英,砂粒,赤色粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
14	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	坏	口縁部60% 底部完存	11.6	5.5	3.2	27.6	47	橙	5YR6/6	良	やや密 石英,砂粒,赤色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
15	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	坏	口縁部15% 底部完存	(11.9)	5.2	3.4	(28.6)	(44)	明褐灰	7.5YR7/1	良好	やや密 砂粒微量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
16	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	坏	口縁部30% 底部40%	(11.2)	(5.6)	2.9	(25.9)	45	暗灰黄	2.5YR5/2	良	粗雑 石英,長石,砂粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
17	142ch-F1-91 レキ	赤焼土器	坏	底部30%	—	(5.6)	(1.3)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/4	良好・堅緻	やや密 砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切	
18	142ch-F1-92 レキ	赤焼土器	坏	底部20%	—	(6.2)	(1.2)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/3	良好・堅緻	やや密 砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切	
19	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	高台付坏	口縁部15% 底部完存	(15.3)	(9.6)	5.1	(33.3)	59	明赤褐	5YR5/8	不良	粗雑 石英,砂粒少量	坏部ロクロナデ,底部回転糸切離し後,高台貼り付け,ロクロナデ	
20	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	高台付坏	口縁部30% 底部45%	(14.1)	8.8	4.8	(34.0)	(62)	橙	2.5YR6/6	良	やや密 石英,砂粒微量,赤色粒少量	坏部ロクロナデ,底部回転糸切離し後,高台貼り付け,ロクロナデ	底部に焼成時に生じた亀裂あり
21	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	高台付坏	口縁部40% 台部25%	(15.2)	(9.4)	5.3	(34.9)	62	橙	2.5YR6/6	良好・堅緻	やや密 石英,砂粒少量	坏部ロクロナデ,底部回転糸切離し後,高台貼り付け,ロクロナデ	赤色だが堅い須恵質の焼き上がり
22	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	高台付坏	台部55%	—	(8.4)	(4.2)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/3	良好	粗雑 砂粒多量	内外面ロクロナデ	
23	142ch-AIX SEL II	赤焼土器	高台付坏	台部35% 底部完存	—	(9.6)	(3.4)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/3	良好	粗雑 砂粒多量	内外面ロクロナデ	胎土に含まれる小石がはずれ底部中央に穴が開いている

第18図都庁凱出土土器⑥概察表

1	14ch-AIX SEL II	土師器	甕	口縁部20%	(17.2)	—	(8.8)	—	—	明赤褐	2.5YR5/6	良	粗雑 石英,長石,砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:口縁部ロクロナデ,胴部縦位ヘラケズリ	
2	14ch-AIX SEL II	土師器	甕	口縁部25%	(21.6)	—	(8.4)	—	—	灰褐	7.5YR5/2	良	粗雑 石英,長石,砂粒多量	内外面横位ヘラナデ	
3	14ch-AIX SEL II	土師器	鉢	口縁部35%	(11.8)	—	(3.5)	—	—	灰白	10YR8/2	良	粗雑 石英,黒色粒微量	内面:ヘラナデ,ヘラケズリ 外面:口縁端部～口縁部ヘラケズリ,底部ヘラナデ,指頭押圧	
4	14ch-AIX SEL II	須恵器	坏	口縁部25% 底部完存	(11.6)	5.4	(4.6)	—	(47)	灰赤	10R6/2	良好	やや密 石英,砂粒微量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕	焼成時に歪み
5	14ch-AIX SEL II	須恵器	長頸瓶	胴部1/4	—	—	(4.9)	—	—	青灰	5B5/1	良好・堅緻	緻密 白色粒少量	内外面ロクロナデ	胴部内面に絞った上なシワ,大戸窯産
6	14ch-AIX SEL II	須恵器	長頸瓶	体部資料	—	—	(6.3)	—	—	灰褐	5YR5/2	良好・堅緻	緻密 白色粒少量	内外面ロクロナデ	リング状凸帯あり
7	14ch-AIX SEL II	須恵器	長頸瓶	底部35%	—	(9.0)	(5.9)	—	—	青灰	5B5/1	良好・堅緻	精良・緻密 白色粒,赤色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:回転ヘラケズリ後ロクロナデ	体部に有耳痕あり,大戸窯産
8	14ch-AIX SEL II	須恵器	甕	底部20%	—	(13.6)	(9.2)	—	—	灰白	7.5YR7/1	良好	緻密 白色砂粒少量	内面ヘラナデ 外面:縦位ヘラナデ,一部平行タタキ目残す	
9	14ch-F1-90, 91	須恵器	瓶か	体部破片資料	長7.3	幅6.9	厚9.8	—	—	褐灰	10BY6/1	良好・堅緻	緻密 白色粒少量	内外面ロクロナデ	内外面とも硫化に転用
10	14ch-AIX SEL II	須恵器	甕	体部破片資料	長10.2	幅9.2	厚1.2	—	—	灰	N5/	堅緻	やや密 石英少量	内外面ヘラナデ,一部平行タタキ目残す	転用痕,墨痕あり

第19図都庁凱出土土器⑦概察表

1	14ch-AIX SL II	土師器	坏	口縁部35% 底部完存	(15.3)	5.7	4.7	(30.7)	(37)	褐灰	7.5YR5/1	良	粗雑 石英少量,金雲母,砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,体部下端～底面手持ちヘラケズリ,一部回転糸切痕を残す。	
2	14ch-AIX SL II	土師器	高台付坏	底部完存	(13.0)	—	(4.3)	—	—	灰白	7.5YR8/2	不良	粗雑 石英少量,砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,底面回転糸切後,高台貼り付け,ロクロナデ	
3	14ch-AIX SL II	赤焼土器	坏	口縁部20% 底部完存	(13.3)	6.1	4.3	(32.3)	(46)	褐灰	10YR6/1	不良	粗雑 石英,長石,金雲母,砂粒,黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,体部下端～底面手持ちヘラケズリ,一部回転糸切痕を残す。	

第19図都庁貯出土土器芯幅検査

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁径	口底径	色調	焼成	胎土	調整	備考
4	14次~A区 SL II	赤焼土器	坏	口縁部60%底部完存	13.6	6.0	3.9	28.7	44	にぶい橙 7.5YR7/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、体部下端~底面手持ちへラケズリ、一部回転糸切痕を残す。	
5	14次~A区 SL II	赤焼土器	坏	口縁部30%底部完存	(12.6)	5.6	4.2	(33.3)	(44)	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	やや密 砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、体部下端~底面手持ちへラケズリ、一部回転糸切痕を残す。	
6	14次~A区 SL II	赤焼土器	坏	口縁部35%底部85%	(11.6)	5.0	3.7	(31.9)	(43)	橙 5YR6/8	不良	粗雑 砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、体部下端~底面手持ちへラケズリ	
7	14次~A区 SL II	赤焼土器	坏	底部完存	—	6.6	(2.6)	—	—	浅黄橙 7.5YR8/3	不良	粗雑 石英、砂粒、白色粒、赤色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、体部下端~底面手持ちへラケズリ	
8	14次~A区 SL II	赤焼土器	坏	底部完存	—	—	(3.7)	—	—	にぶい橙 7.5YR6/3	不良	粗雑 石英、赤色粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
9	14次~A区 SL II	赤焼土器	坏	口縁部10%台部45%	(11.6)	(6.4)	3.7	(31.9)	55	灰白 10YR8/2	良	粗雑 石英、砂粒、赤色粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
10	14次~A区 SL II	赤焼土器	高台付坏	高台部~底部完存	—	8.6	(3.5)	—	—	灰白 7.5YR8/2	良	粗雑 石英、砂粒、赤色粒少量	内外面:ロクロナデ	
11	14次~A区 SL II	赤焼土器	坏	口縁部破片資料	—	—	(3.9)	—	—	灰黄褐 7.5YR6/2	良	粗雑 石英、金雲母、砂粒、橙色粒少量	内外面:ロクロナデ	口縁部外面に墨書「椿」か
12	14次~A区 SL II	赤焼土器	坏	体部破片資料	器厚0.5			—	—	にぶい黄橙 7.5YR6/3	良	粗雑 石英、金雲母、砂粒、橙色粒少量	内外面:ロクロナデ	体部外面に墨書、文字不明
13	14次~A区 SL II	赤焼土器	瓶胴	口縁部破片資料	—	—	(4.6)	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4	良	粗雑 砂粒、赤色粒多量	内面:ヘラナデ 外面:ヨコナデ、指ナデ、ヘラナデ	
14	14次~A区 SL II	須恵器	円筒	体部破片資料	—	—	(3.4)	—	—	灰白 2.5Y7/1	良好 堅緻	緻密 白色粒少量	内外面:ロクロナデ	脚部外面に痕跡あり
15	14次~A区 SL II	須恵器	甕	体部破片資料	厚1.1 ¢2.3 重8.9g			—	—	黄灰 2.5Y6/1	堅緻	緻密 白色粒少量	外面:平行タタキ 内面:ヘラナデ	須恵器壁片を加工したものか
16	132次~SRL II	土師器	坏	底部30%	—	(6.7)	(1.4)	—	—	にぶい黄橙 10YR6/3	不良	粗雑 石英、金雲母、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端~ヘラナデ、底部回転糸切痕	
17	132次~A区 SRL II	土師器	坏	底部20%	—	(7.6)	(1.3)	—	—	明褐灰 7.5YR7/2	不良	やや密 石英、長石、角閃石、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体~底部ヘラケズリ	
18	132次~A区 SRL II	土師器	高台付坏	底部・高台部70%	—	9.6	(3.3)	—	—	にぶい橙 7.5YR7/3	良	やや密 石英、長石、角閃石、金雲母、白色粒状物、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:台部ロクロナデ、台部内面に貼り付け時の痕跡押圧痕を残す	
19	132次~A区 SRL II	赤焼土器	坏	底部45%	—	(6.3)	(2.6)	—	—	橙 5YR6/8	良	粗雑 石英、白色粒少量、赤色粒多量	内面:ロクロナデ、 外面:ロクロナデ、体部下端~底面手持ちへラケズリ	
20	132次~A区 SRL II	赤焼土器	坏	口縁部30%底部75%	(11.2)	5.8	3.4	(30.4)	(52)	浅黄橙 7.5YR8/4	不良	粗雑 石英、砂粒多量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
21	132次~A区 SRL II	赤焼土器	坏	底部50%	—	(7.4)	(1.3)	—	—	にぶい橙 7.5YR7/4	良好 堅緻	粗雑 砂粒多量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
22	132次~A区 SRL II	赤焼土器	高台付坏	体部破片資料	—	—	(2.4)	—	—	にぶい橙 7.5YR6/3	良好 堅緻	粗雑 砂粒多量	内外面:ロクロナデ	

第20図都庁貯出土土器芯幅検査

1	14次~B区 L II	赤焼土器	坏	口縁部45%底部完存	(13.6)	6.6	3.8	(27.9)	(49)	浅黄橙 7.5YR8/3	良	粗雑 砂粒多量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
2	14次~B区 L II	赤焼土器	坏	口縁部85%底部完存	11.0	5.4	3.2	29.1	49	浅黄橙 7.5YR8/3	良	やや密 砂粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
3	14次~B区 L II	赤焼土器	坏	口縁部45%底部87%	(11.7)	5.2	3.2	(27.4)	(44)	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	やや密 砂粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
4	14次~B区 L II	赤焼土器	坏	底部完存	—	5.3	(3.6)	—	—	灰白 7.5YR8/2	良好	やや密 砂粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
5	14次~B区 L II	赤焼土器	皿	口縁部25%底部75%	(10.8)	5.4	1.8	(16.7)	(50)	灰黄褐 10YR6/2	良	やや密 砂粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
6	14次~B区 L II	赤焼土器	皿	完形品	11.1	4.6	1.8	16.2	41	灰白 10YR8/2	良	やや密 砂粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕、内面中央ロクロのヘソを強く残す。	
7	13次~B区 L II	赤焼土器	皿	底部完形	11.8	2.2	5.3	44.9	19	浅黄橙 7.5YR8/2	良	やや密 砂粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転糸切痕	
8	17次~B区 L II	赤焼土器	高台付坏	台部15%	—	(8.0)	(3.6)	—	—	にぶい橙 10YR7/4	良	粗雑 砂粒少量	内外面:ロクロナデ	
9	13次~B区L II	土師器	鉢?	底部完存	—	4.6	(1.5)	—	—	灰白 10YR8/2	良	粗雑 石英、長石、白色粒、赤色粒少量	内面:黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端~底面手持ちへラケズリ	
10	13次~B区 土集2	ニチュア土器		口~底部55%	4.2		3.6	85.7	0	橙 7.5YR4/2	良好	粗雑 砂粒少量	内面:黒色処理、ヘラナデ 外面:ヨコナデ、ヘラナデ	
11	13次~B区 SRL II	須恵器	坏	底部30%	—	(6.6)	(2.2)	—	—	灰白 2.5Y8/1	良	粗雑 白色粒少量	内外面:ロクロナデ 底部回転~ヘラ切り	
12	14次~B区	須恵器	長頸瓶	体部破片資料	—	—	(7.3)	—	—	オリーブ灰 5GY5/1	良好 堅緻	緻密 白色粒・黒色粒少量	内外面:ロクロナデ	口頸部内面、胴外面に鉄炭、リング状凸帯あり、大沢窯産
13	17次~A区 F1-9714	土師器	坏	口縁部25%	(17.2)	—	(5.4)	—	—	にぶい橙 10YR7/3	不良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内外面:ロクロナデ 内面:黒色処理	煙道のため調整不鮮明
14	SB14ATN-1 ホリーE区	須恵器	蓋	鑢久完存	—	—	(1.5)	—	—	灰 7.5Y6/1	良好	粗雑 砂粒少量	内面:ロクロナデ	内面を硯石に転用
15	SD1403-C区	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(3.9)	—	—	灰白 N7/	堅緻	粗雑 石英、黒色粒少量	内外面:ロクロナデ	
16	14次~E区 L II	須恵器	坏	口縁部~底部1/6	(14.6)	—	(4.3)	—	—	灰白 N8/	良好	やや密 石英粒少量	内外面:ロクロナデ	

第21図都庁院出土土器⑨観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口表測数	口底測数	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	17次-④区①	土師器	坏	口縁部20%	(15.0)	—	(3.7)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良好	やや密 石英少量、白色針状物多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ?
2	2次-AL I	土師器	高杯	脚部破片資料	—	—	(8.2)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/4	良好	粗 石英、白色針状物、褐色粒少量	外面:外面ミガキ、黒色処理 外面:外面ヘラナデ、脚部縦位ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデ
3	14次-表採	土師器	高杯	脚部完存	—	—	(6.5)	—	—	灰白	2.5YR8/1	不良	やや密 石英、白色針状物、砂粒、黒色粒少量	内面:外面ミガキ、黒色処理 外面:脚部縦位ヘラケズリ
4	2次-AL I	土師器	高杯	脚柱部完存	—	9.4	(2.0)	—	—	灰黄褐	10YR5/2	良	粗 石英、白色針状物、砂粒多量	内面:横位ヘラナデ 外面:横位ヘラナデ
5	2次-表土	土師器	坏	底部1/3	—	(10.0)	(1.4)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	やや密 石英、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端～底面回転ヘラケズリ
6	13次-1-TL II	土師器	坏	底部1/10～底部2/3	(9.8)	(8.8)	3.0	(31.6)	61	浅黄橙	10YR8/3	不良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:単線圏者で調整不明
7	13次-4TL I	土師器	坏	底部完存	—	6.4	(2.0)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ底部回転糸切痕
8	13次-8TL I	土師器	鉢	底部2/3	—	5.8	(1.6)	—	—	にぶい橙	7.5YR6/3	良	やや密 石英、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端～ヘラナデ、ヘラケズリ底面静止糸切痕
9	13次-4TL I	土師器	高台付坏	底部4/5	—	—	(2.2)	—	—	橙	5YR6/6	不良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ底部回転糸切り後、高台貼り付け、ロクロナデ調整
10	13次-17LB	土師器	鉢	口縁部1/3	(20.2)	—	(6.3)	31.2	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良好	やや密 石英、角閃石、白色針状物、砂粒、白色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ
11	2次-表採	土師器	甕	口縁部1/10	(15.8)	—	(4.8)	—	—	明赤褐	2.5YR5/6	不良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:横位ハケ目 外面:ヘラナデ
12	3次-表採	土師器	甕	底部1/3	—	(5.8)	(7.6)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/3	不良	粗雑 石英、砂粒少量	内面:ヘラナデ 外面:ヘラナデ、ハケ目
12	14次-AIX F1-23, 24	土師器	甕	底部1/4	—	(6.2)	(2.9)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/4	不良	粗雑 砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:ヘラナデ底部:木葉痕
14	14次-表採	赤褐土器	坏	口縁部1/3～底部完存	(13.0)	5.8	3.5	(26.9)	(45)	橙	7.5YR7/6	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量、赤色粒微量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕
15	14次-表採	赤褐土器	坏		12.9	6.5	3.8	29.5	50	橙	5YR6/6	不良	やや密 石英、角閃石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕
16	14次-表採	土師器	坏	口縁部～底部1/5	(12.0)	(5.0)	2.8	(23.3)	42	にぶい黄橙	10YR7/2	不良	粗雑 石英、砂粒少量	内面:ロクロナデ、ヘラナデ 外面:ロクロナデ底部回転糸切
17	14次-表採	赤褐土器	高台付坏	底部完存、高台大欠損	—	—	(1.6)	—	—	にぶい橙	5YR6/3	不良	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒、赤色粒多量	内面:ロクロナデ高台貼り付け時のヘラによるナデヅケの痕跡が放射状に残る
18	14次-表採	赤褐土器	高台付坏		(14.8)	9.6	4.9	(33.1)	(65)	にぶい黄橙	10YR7/2	不良	粗雑 長石、砂粒多量、赤色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切後高台貼り付け、ロクロナデ調整
19	14次-AIX D1-74	赤褐土器	鉢	口縁部～底部1/5	(13.0)	(8.0)	2.7	(20.8)	62	明褐灰	7.5YR7/2	良好・堅緻	粗雑 砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切痕
20	17次-④区C②	須恵器	壷		—	—	(2.8)	—	—	灰	N5/	堅緻	緻密石英、長石、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:天井部回転ヘラケズリ
21	17次-B-④区E12	須恵器	高台付坏	底部1/10	—	(13.0)	(1.8)	—	—	灰	N5/	堅緻	緻密 石英、長石、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 底部:回転ヘラケズリ後高台貼り付け、ロクロナデ調整
22	2次-AL I	須恵器	壷	口縁部破片資料	—	—	(2.1)	—	—	褐灰	7.5YR5/1	良	緻密 石英微量	内外面ロクロナデ
23	13次-2-TL I	須恵器	壷	口縁部破片資料	—	—	(1.3)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	緻密 石英、黒色粒少量	内外面ロクロナデ
24	14次-AIX F1-93, 04	須恵器	坏	底部1/3	—	(7.0)	(1.8)	—	—	青灰	5PB6/1	良好	粗雑 石英、長石、砂礫多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、回転ヘラケズリ底部回転糸切痕

第22図都庁院出土土器⑩観察表

1	13次-1TL II	須恵器	高台付坏	底部1/8	—	—	(3.3)	—	—	褐灰	5YR5/1	良好・堅緻	緻密 石英、砂粒微量	内外面ロクロナデ 内外面底部すべすべしている、底石に利用か?
2	14次-AIX D1-74 確認面	須恵器	鐘体	底部1/3	—	(11.0)	(2.5)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	緻密 長石、砂粒少量	外面ロクロナデ
3	13次-8TL I	須恵器	長頸瓶		—	—	(5.7)	—	—	灰	N5/	良好・堅緻	精良・緻密 石英、黒色粒、褐色粒少量	内外面ロクロナデ
4	2次-A-21, I	須恵器	円筒	頸部～脚部1/5	(13.0)	5.4	(18.0)	138.5	(42)	黄灰	2.5Y6/1	良好・堅緻	精良・緻密 石英、白色粒微量	硬質・脚端部、脚部内面ロクロナデ、脚部外面に方形の窓を切り開けた後に横位ヘラナデ
5	14次-CIX L皿	須恵器	円筒鐘?・脚台部	脚部破片資料	—	—	(5.4)	—	—	灰白	N7/	良好	やや密 砂粒微量	内外面ロクロナデ
6	2次-AL I	須恵器	円筒鐘	脚部破片資料	器厚9.9			—	—	灰白	N7/	良好	粗雑 石英、砂粒多量	脚面孔のための不明
7	14次-AIX F1-93, 04	須恵器	甕	口縁部1/5	(18.4)	—	(5.5)	—	—	灰赤	2.5YR5/2	良好・堅緻	緻密 石英、砂粒微量	内外面ロクロナデ
8	13次-9TL I	須恵器	甕	口縁部1/4	(17.0)	—	(5.5)	—	—	灰	5Y5/1	良好・堅緻	緻密 長石、砂粒少量	内面:ヘラナデ 外面:平行タタキ後ヘラナデ
9	2次-8TL I	須恵器	甕	口縁部1/6	(22.0)	—	(7.4)	—	—	灰	N4/	良好・堅緻	緻密 砂粒微量	内面:口縁部ロクロナデ見ヘラナデ、体部同心円文で丸棒 外面:ロクロナデ後ヘラナデ、一部平行タタキ目残す
10	2次-AL I	須恵器	鉢	口縁部～底部	(24.4)	—	(6.4)	—	—	灰	N6/	良好	粗雑 石英、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:口縁部ロクロナデ底部回転ヘラケズリ
11	2次-AL I	須恵器	壷	口縁部破片資料	—	—	(4.6)	—	—	灰	5Y6/1	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内外面ロクロナデ

第22図都庁舎出土土器観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁部	口縁部	色調	焼成	胎土	調整	備考
12	132K-表採	縄文系	鉢	口縁部破片 資料	—	—	(3.9)	—	—	青灰	5B5/1	良好・堅緻	雲母・緻密 長石多量	内外面ロクロナデ	大戸窯産
13	22K-AL.Ⅰ	縄文系	ヶ	口縁部か 胴部破片 資料	—	—	(3.8)	—	—	褐灰	7.5YR4/1	良好	緻密 黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,櫛描き波状文	
14	17次-表土 L.I	縄文系	坏	口縁部破片 資料	—	—	(4.2)	—	—	赤灰	2.5YR4/1	良好・堅緻	緻密 長石少量	内外面ロクロナデ	口縁端部が内傾面をもつ
15	18次-表土 L.I	縄文系	坏	口縁部破片 資料	—	—	(3.0)	—	—	灰白	2.5YR7/1	良好	緻密 白色粒,黒色粒微量	内外面ロクロナデ	
16	132K-ST1.Ⅰ	縄文系	長頸瓶	口頸部破片 資料	—	—	(5.8)	—	—	灰	N4/	良好・堅緻	緻密 白色粒微量	内外面ロクロナデ	大戸窯産
17	142K-#区 L.Ⅲ	縄文系	鉢	体部破片 資料	長16.2	幅6.2	厚1.5	—	—	灰	N5/	良好・堅緻	雲母・緻密 長石少量,黒色粒微量	内面:同心円文当て具痕 外面:平行タタキ	硬転用
18	142K-#区 L.Ⅲ	縄文系	甕	体部破片 資料	長6.3	幅10.1	厚1.1	—	—	灰	N6/	良好	緻密 石英,白色粒,黒色粒微量	内面:ヘラナデ 外面:平行タタキ	硬転用
19	142K-#区 L.Ⅲ	縄文系	甕	体部破片 資料	長7.9	幅7.8	厚1.4	—	—	青灰	5B6/1	良好	緻密 砂粒微量	内面:ヘラナデ 外面:平行タタキ	硬転用
20	142K-#区 L.Ⅲ	縄文系	甕	体部破片 資料	長6.2	幅9.0	厚1.1	—	—	灰白	10YR7/1	良好	緻密 石英,白色粒少量	内外面とも調整不明	硬転用
21	17次-表土 L.I	縄文系	甕	体部破片 資料	器厚0.9			—	—	褐灰	10YR5/1	良好	中中密 石英,長石多量	内面:同心円文当て具痕 外面:平行タタキ	
22	142K-aB区 P1-03,04	縄文系	甕	体部破片 資料	器厚1.1			—	—	灰	5Y6/1	良	中中密 石英,黒色粒微量	内面:同心円文当て具痕 外面:斜格子タタキ	

第23図正倉院出土土器②観察表

No.	出土遺構	種別	器種	器 位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁厚	口底厚	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	SB1801 基壇積土	土師器	坏	底部1/5	—	(5.6)	(1.7)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	良	やや密 石英、長石、白色粒少量	内面:ロクロナデ後ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 底部回転糸切り後 体部下端手持ちヘラケズリ	底部に「×」の線状痕 跡残る 大戸遺跡か
2	SD2201 15-1A	土師器	高台付坏	底部1/5	—	(9.2)	(3.3)	—	—	にぶい黄 2.5Y6/4	不良	やや密 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:摩滅のため不明	赤ロクロ
3	SD2201 15-11A	土師器	高台付坏	底部1/6	—	(8.3)	(3.3)	—	—	浅黄 2.5Y7/3	不良	やや密 白色針状物少量	内面:ロクロナデ後、黒色処理 外面:摩滅のため不明	摩滅脆著で調整不明
4	SD1・3 コーナー 15-11A	土師器	坏	底部1/4	—	(7.0)	(1.5)	—	—	灰白 2.5Y8/2	不良	粗雑 石英、チャート、白色針状物、砂粒少量	内面:ロクロナデ後ミガキ、黒色処理 底部回転糸切り	摩滅脆著で調整不明
5	SD2204-3 コーナー-13	土師器	高台付坏	底部1/4	—	(6.2)	(1.6)	—	—	浅黄橙 10YR8/4	不良	粗雑 石英、砂粒少量	内面:ロクロナデ後ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、底部切り離し後、高台貼り付け	摩滅脆著で調整不明
6	SD2204-2 コーナー 85C12C	赤焼土器	高台付坏	口縁部破片 資料	—	—	(3.3)	—	—	浅黄 2.5Y8/3	不良	やや密 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ	
7	SD2204-2 コーナー 85C12C	赤焼土器	高台付坏	底部1/4	—	—	(2.6)	—	—	浅黄 2.5Y8/3	不良	やや密 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ	
8	SD2204 12-2A	赤焼土器	高台付坏	底部3/4	—	4.6	(1.5)	—	—	浅黄橙 10YR8/3	不良	やや密 砂粒微量	内外面ロクロナデ	
9	SD2204-2 コーナー 85C12C-40	須恵器	長頸瓶	底部1/15	—	(11.2)	(9.4)	—	—	灰 N7/	良好	精緻 白色粒、黒色粒含む	内外面ロクロナデ 外面の一部にヘラナデ	
10	SD1902-4T	赤焼土器	坏	底部1/3	—	(6.4)	(3.6)	—	—	橙 7.5YR6/6	不良	やや密 石英、白色粒、砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	内面黒色処理、ミガキの可能性有
11	SD1601-8EC	土師器	坏	口縁部1/5 ～底部完存	14.8	7.8	4.3	29.1	52.7	灰黄 2.5Y7/2	良	やや密 砂粒、赤色粒少量	内面:ロクロナデ後ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端～底面手持ちヘラケズリ	
12	SD1601-8EC サブトレ-3	赤焼土器	坏	口縁部1/2 ～底部完存	11.4	5.6	3.6	31.6	49.1	にぶい黄橙 10YR7/3	良	やや密 砂粒、褐色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
13	SD1902-4T	赤焼土器	坏	底部完存	—	5.4	(2.4)	—	—	明赤褐 2.5YR5/8	良	粗雑 石英、砂粒、白色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
14	SD1601-8EC サブトレ-6	赤焼土器	赤焼土器	底部完存	—	9.4	(3.2)	—	—	浅黄橙 7.5YR8/6	不良	精緻 石英、砂粒、橙色粒少量	内外面ロクロナデ	
15	SD1602-8EC サブトレ2 最下層	須恵器	長頸瓶	肩部1/15	—	—	(6.3)	—	—	灰 N6/	良好	精緻 白色粒、黒色粒含む	外面:ロクロナデ 体部にロクロ圧縮による横痕、櫛状工具使用痕跡 内面:ロクロナデ	
16	SD1601-8EC	土師器	甕	底部完存	—	11.6	(2.5)	—	—	にぶい黄橙 10YR6/3	良	粗雑 砂粒少量	底部木葉痕	
17	SD1601-8EC	赤焼土器	高台付坏	底部1/3	—	(8.4)	(2.9)	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4	良	粗雑 角閃石、砂粒少量	内外面ロクロナデ	
18	SD1601-8EC	土師器	甕	底部完存	—	6.6	(3.6)	—	—	黒 10YR7/1	良	粗雑 石英、長石、チャート、白色針状物、砂粒少量	内面:ヘラナデ 外面:ヘラナデ、底部木葉痕	
19	SD1601-8EC	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚1.0			—	—	暗灰 N3/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ヘラケズリ 外面:平行タタキ	

第24図正倉院出土土器③観察表

No.	出土遺構	種別	器種	器 位	口径	底径	器高	口縁厚	口底厚	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	4EC-10T-6 下層+27調 下層	須恵器	甕	口縁部1/5 ～肩部	(30.8)	—	(8.0)	—	—	暗灰 N3/	良好 堅緻	精緻 長石、砂粒少量	内面:口頸部ロクロナデ、体部無文当て具痕 外面:口頸部ロクロナデ、体部平行タタキ	頸部外面に叩き板の端が当たった圧痕あり
2	4EC-27調 下層	須恵器	長頸瓶	口縁部破片 頸部～肩部 1/5	—	—	(12.5)	—	—	灰赤 2.5YR5/2	良好	精緻 長石、砂粒多量	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ、口頸部と肩部との境界に一部指ナデ 口頸部と肩部との境界に内側、三段構成	口縁部と頸部以下の破片は接合しないが、胎土・色調・焼成の特徴が共通することから同一個体として図化した。
3	SD0401-2T1 上	土師器	高台付椀	ほぼ完形	15.9	8.7	6.8	42.8	54.7	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	やや密 石英、長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ後ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ後横位に粗くヘラナデ、底部回転糸切り後、高台貼り付け、ロクロナデ調整	内面底部中央が摩滅 使用痕か。
4	SD0401-2T	須恵器	高台付坏	底部1/4	—	(16.8)	(2.0)	—	—	灰褐 5YR4/2	良好	粗雑 長石、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ後に高台貼り付け、ロクロナデ調整	内面、底面が摩滅、外面に黒斑あり、転用硯
5	4EC-27調下	須恵器	甕	底部破片 資料	—	—	(6.8)	—	—	灰 N4/	良好	やや密 石英、チャート、砂粒少量	内面:ヘラナデ 外面:平行タタキ、ヘラナデ	
6	SK1611-8EC	須恵器	広口壺	口縁部～ 肩部1/15	(14.4)	—	(6.4)	44.4	—	灰 5Y4/1	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内面:口縁部ロクロナデ、体部ヘラナデ 外面:ロクロナデ	
7	SK1611-8EC	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚1.3			—	—	褐灰 10YR5/2	良好	やや密 長石、砂粒少量	内面:平行タタキ目 外面:無文当て具痕	内面が摩滅、底石等に転用か?
8	SK1601-8EC	土師器	高台付坏	口縁部1/10 ～底部1/2	(16.0)	11.0	5.6	(31.3)	(68.6)	灰 オリーブ 5Y4/2	不良	やや密 石英、白色針状物少量	内外面ミガキ、黒色処理	図版
9	3EC SK2202-29	土師器	甕	底部完存	—	10.6	(2.6)	—	—	明赤褐 2.5YR5/8	良好	粗雑 石英、砂粒少量	内外面:ナデ	
10	SK1611-8EC	赤焼土器	坏	底部完存	—	4.8	(2.1)	—	—	灰黄褐 10YR5/2	不良	粗雑 砂粒微量	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	
11	4EC31-0601	土師器	高坏	坏部1/8～ 脚部完存	17.0	8.4	7.3	42.9	49.4	にぶい橙 5YR7/4	不良	粗雑 石英、長石、砂粒、褐色粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:坏部口縁部ロナデ、底部ヘラケズリ、脚部指ナデ	

第25図正倉院出土土器④観察表

No.	出土遺構	種別	器種	器 位	口径	底径	器高	口縁厚	口底厚	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	SX1601-8EC	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚0.9			—	—	黄灰 2.5Y4/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:ヘラナデ 外面:平行タタキ	内面に墨痕あり。転用硯
2	SX1601-8EC	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚1.4			—	—	灰 7.5Y4/1	良好	やや密 長石、砂粒微量	内面:無文当て具痕 外面:斜格子タタキ	転用硯か?
3	SX1601-8EC 13	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚1.0			—	—	褐灰 10YR5/1	良好	やや密 石英、砂粒少量	内面:同心円文当て具痕 外面:平行タタキ	

第25図 正倉院出土土器②観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁径	口縁厚	色調	焼成	胎土	調整	備考
4	S31601-BIX 13	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.5		—	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英,長石,砂粒少量	内面:同心円文当て具痕 外面:平行タタキ

第26図 正倉院出土土器③観察表

1	S31601-BIX 13	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.7		—	—	灰白	N7/	良好	やや密 石英,長石,黒色粒少量	内面:体部ヘラナデ 外面:体部平行タタキ	刑部に「×」の押印あり
2	S31601-BIX 13	須恵器	鉢か壺	体部破片資料	器厚1.1		—	—	灰	7.5Y4/1	良好	粗雑 石英,長石,チャート,砂粒多量	内外面ロクロナデ	外面やや摩滅
3	42K-28T 下層	土師器	坏	口縁部～底部2/3	14.0	10.2	3.2	22.9	72.9	灰白	10YR8/2	不良	やや密 石英,長石,角閃石,白色針状物,砂粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ,体～底部ヘラケズリ	赤ロクロ
4	12K-7TL II	赤焼土器	皿	口縁部～底部1/10	(12.8)	(6.6)	2.4	(18.8)	51.6	にぶい黄橙	7.5YR6/3	不良	やや密 石英,砂粒少量	内外面ロクロナデ,底部回転糸切り	瓶土中に輝ないしオ質あり
5	12K-7TL II	赤焼土器	高台付坏	底部2/3	—	—	(2.6)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	不良	粗雑 石英,白色粒,赤色粒微量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,高台貼り付け後指ナデ	底部剥離り
6	42K-17TL II	土師器	坏	底部1/3	—	(6.8)	(1.2)	—	—	にぶい褐	7.5YR5/3	良好	粗雑 石英,白色粒少量	内面:ロクロナデ後ミガキ,黒色処理 外面:体部下端～底部回転ヘラケズリ	
7	12K-7TL II	赤焼土器	皿	口縁部1/4	(12.6)	—	(1.7)	14.2	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	緻密 砂粒微量	内外面ロクロナデ	
8	42K-28T 下層	土師器	高台付坏	底部完存	—	11.1	(2.6)	—	—	淡黄	2.5Y8/3	不良	粗雑 石英,角閃石,砂粒少量	焼成不明で摩滅顕著,調整不明,ロクロ整形で外角底ミガキ,黒色処理と推定される。	
9	12K-7TL II	赤焼土器	皿	口縁部1/2～底部完存	11.0	5.6	2.6	23.6	50.9	浅黄橙	10YR8/4	良好	緻密 砂粒微量	内面:ヘラナデか? 外面:ヘラナデ,胴部下端・底部ヘラケズリ	
10	42K-22T	土師器	皿	口縁部～底部完存	—	7.2	(4.6)	—	—	にぶい黄橙	10YR5/3	良	やや密 石英,角閃石,砂粒多量	内面ロクロナデ,底部回転糸切り	
11	42K-19T	ふかけず	皿	口縁部1/2～底部完存	8.2	4.2	2.3	28.0	51.2	にぶい橙	7.5YR6/4	不良	粗雑 石英,白色粒,褐色粒	内外面ロクロナデ,底部回転糸切り	口縁部内外に油煙痕あり,灯明皿
12	12K-4TL I	土師器	甕	底部2/3	—	(6.6)	(1.6)	—	—	橙	2.5YR6/8	良	やや密 石英,白色粒微量	内面:ヘラナデ 底部木葉痕	
13	42K-23T 下層	土師器	鍋	口縁部1/10～胴部・底部完存	22.6	6.8	25.3	111.9	30.1	橙	7.5YR6/6	不良	粗雑 砂粒多量	摩滅顕著で調整不明瞭。 内面:口縁部ヨコナデ,胴部縦位ヘラナデ・ミガキ,下端横位ヘラケズリ 外面:口縁部ヨコナデ,胴部縦位ヘラナデ	
14	12K-7TL II	須恵器	蓋	天井部	—	—	(1.2)	—	—	灰	5Y5/1	良好	やや密 石英,黒色粒少量	外面:回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ	内面に擦痕,転用硯
15	42K-26T	須恵器	蓋	天井部～口端部	—	—	(1.7)	—	—	灰	N5/	良好	やや密 砂粒微量	内面ロクロナデ	かえり蓋
16	42K-24T	須恵器	坏	底部1/4	—	(6.8)	(1.3)	—	—	灰	N6/	良好	粗雑 砂粒少量,黒色粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切	
17	42K-24TL II	須恵器	赤焼土器	口縁部～底部2/3	—	9.2	(4.7)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英,白色粒,砂粒多量	内外面ロクロナデ	内底に擦痕
18	42K-13T	須恵器	鉢	口縁部破片資料	—	—	(5.1)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 砂粒少量	外面:口縁部ヨコナデ,体部平行タタキ 内面:口縁部ヨコナデ,体部同心円当て具痕	

第27図 正倉院出土土器④観察表

1	42K-表層	土師器	坏	口縁部～底部1/6	(16.3)	—	(3.8)	23.3	—	浅黄橙	7.5YR8/3	良	やや密 石英,長石,角閃石,白色針状物,砂粒,黒色粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ,底部ヘラケズリ	素ロクロ,刑部式
2	42K-17TL I	土師器	坏	口縁部～底部1/4	(13.6)	4.0	(6.4)	47.1	(29.4)	灰黄褐	10YR6/2	良	やや密 石英,長石,白色針状物,砂粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,体部下端～底面手持ちヘラケズリ	
3	16K-AIX1.2	土師器	坏	底部1/2	—	(8.6)	(2.3)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	やや良	やや密 長石,砂粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ	摩滅顕著で調整不明。
4	42K-10TB 5-07	土師器	甕	底部1/5	—	(9.4)	(2.5)	—	—	にぶい橙	5YR6/4	良	粗雑 石英,長石,砂粒,赤色粒多量	摩滅のため不明	
5	42K-7T	赤焼土器	坏	口縁部1/10～底部2/3	(12.6)	3.7	5.1	(40.5)	(29.4)	浅黄橙	2.5Y8/3	良好	粗雑 石英,長石,砂粒多量	内外面ロクロナデ,底部回転糸切り	
6	16K-D6-71 L I	赤焼土器	坏	底部完存	—	4.6	(1.9)	—	—	橙	7.5YR6/6	良好	やや密 石英,金雲母,砂粒少量	内外面ロクロナデ,底部回転糸切り	底部外面に煤付着
7	42K-9TL I	赤焼土器	高台付坏	底部4/5	—	7.7	(3.1)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/4	良	粗雑 石英,砂粒,赤色粒少量	内外面ロクロナデ,底部回転糸切り後,高台貼り付け,ロクロナデ調整	
8	22K-11K L I	赤焼土器	坏	底部完存	—	4.4	(1.5)	—	—	灰白	2.5Y8/2	不良	やや密 石英,砂粒多量	内外面ロクロナデ,底部回転糸切り後ヘラナデ	
9	22K-30K L I	赤焼土器	高台付坏	底部1/5	—	—	(2.0)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/3	良好・緻密	粗雑 石英,砂粒少量	内外面ロクロナデ	
10	16K-BGX1.2	須恵器	蓋	つまみ,天井部	—	—	(1.8)	—	—	灰	5Y5/1	良好	精良・緻密 長石,砂粒微量	内面:ロクロナデ 外面:天井部回転ヘラケズリ後つまみ貼り付け,ロクロナデ調整	
11	16K-BGX1.2	須恵器	蓋	つまみ,天井部	—	—	(2.4)	—	—	灰褐	7.5Y5/2	良好	精良・緻密 長石,砂粒,黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:天井部回転ヘラケズリ後つまみ貼り付け,ロクロナデ調整	
12	16K-BGX1.2	須恵器	蓋	口縁部破片資料	—	—	(1.3)	—	—	黄灰	2.5Y4/1	良好	精良・緻密 石英微量	内外面ロクロナデ	
13	16K-BGX1.2	須恵器	蓋	口縁部破片資料	—	—	(1.6)	—	—	褐灰	10YR4/1	良好	精良・緻密 石英,長石微量	内外面ロクロナデ	
14	42K-8T	須恵器	坏	口縁部1/3～底部4/5	(11.0)	5.6	3.5	(31.8)	(50.9)	黄灰	2.5Y6/1	良好	精良・緻密 石英,チャート	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	焼成時の歪みあり
15	22K-B1L II	須恵器	長頸瓶	口縁部1/5	(12.0)		(5.0)	39.1	0.9	灰	N7/	良好	やや密 石英,砂粒少量	内外面ロクロナデ	外面に深緑色の自然釉
16	22K-B6L I.II	須恵器	高台付坏	底部1/5	—	(7.0)	(2.2)	—	—	暗青灰	5PB4/1	良好	精良・緻密 石英,砂粒微量	内外面ロクロナデ	

第27図正倉院出土土器⑮機草表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口唇厚	口底厚	色調	胎成	胎土	調整	備考
17	21次-17L.Ⅰ	須恵器	瓶	底部1/2	—	(9.0)	(2.4)	—	—	灰白	N7/	良好・堅緻	緻良・雲金 石英、白色粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ	内底に自然釉。外底に灰が付着。大戸窯産か
18	45次-47L.Ⅰ	須恵器	長頸瓶	体部完存	—	—	(9.9)	—	—	灰白	N7/	良好・堅緻	粗雑 石英、白色粒、砂粒微量	外面:ロクロナデ調整。頸部の頸部付近に小平行、ロクロ比線による区画と2段の櫛描波状文、体部下半回転ヘラケズリ後高台貼り付け、ロクロナデ調整。 内面:ロクロナデ調整。	口縁部、高台欠損
19	16次-AⅠ L.Ⅰ	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(6.1)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好・堅緻	やや密 石英、砂粒少量	外面:ロクロナデ調整。頸部に櫛描きの波状文と横線文を交互に施文	
20	22次-3EⅠ L.Ⅰ	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(3.8)	—	—	黄灰	2.5Y5/1	良好	やや密 石英、砂粒、黒色粒、褐色粒少量	内外面ロクロナデ	口縁端部が内傾面をもつ。
21	22次-4LⅡ	須恵器	高杯	脚部上半	—	—	(3.8)	—	—	青灰	5PB6/1	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内面:ナデ 外面:横位ナデ	
23	45次-8T	須恵器	甕	体部破片資料	長6.6	幅5.2	厚1.1	—	—	灰	N7/	良好	やや密 石英、長石、白色粒、黒色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:ヘラナデ、指ナデ	内面中央に擦痕・墨痕、硬転用
22	16次-B7-19 L.Ⅰ	須恵器	甕	体部破片資料	長6.5	幅5.1	器厚1.2	—	—	黄褐	10YR5/3	良好	やや密 白色粒微量	外面:平行タタキ 内面:沓状圧痕	内面摩滅。硬転用
24	45次-5T	須恵器	甕	体部破片資料	長14.2	幅10.8	器厚1.4	—	—	灰白	5Y7/1	良好	やや密 白色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:矢羽タタキ	内面中央摩滅・墨痕あり。打ち欠けて成形かう。

第28図正倉院出土土器⑯機草表

1	45次-17TL.Ⅰ	須恵器	鉢	口縁部破片資料	—	—	(5.8)	—	—	灰	N7/	良好・堅緻	やや密 石英、長石、砂粒少量	内面:体部同心円文等で具痕、口縁部ヨコナデ 外面:体部平行タタキ、口縁部ヨコナデ	
2	45次-9TL.Ⅰ	須恵器	鉢	口縁部破片資料	—	—	(4.4)	—	—	灰	N7/	良好・堅緻	やや密 石英、長石、砂粒少量	内面:体部同心円文等で具痕、口縁部ヨコナデ 外面:体部平行タタキ、口縁部ヨコナデ	
3	16次-BEⅠ.2	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.2			—	—	灰	7.5Y6/1	良好	やや密 砂粒微量	内面:同心円文等で具痕 外面:平行タタキ	
4	16次-AEⅠ L.Ⅱ	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.3			—	—	灰	5Y6/1	良好	やや密 砂粒微量	内面:同心円文等で具痕 外面:平行タタキ	内面摩滅。硬転用か。
5	16次-AEⅠ L.Ⅱ	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.7			—	—	灰黄	2.5Y7/2	良好・堅緻	粗雑 石英、角閃石、砂粒少量	内面:同心円文等で具痕 外面:平行タタキ	
6	16次-AEⅠ L.Ⅱ	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.2			—	—	黄灰	2.5Y5/1	良好	粗雑 砂粒少量	内面:同心円文等で具痕 外面:格子タタキ	
7	16次-BEⅠ.2	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.2			—	—	灰	5Y6/1	良好	粗雑 砂粒多量	内面:同心円文等で具痕 外面:格子タタキ	
8	16次-AEⅠ L.Ⅱ	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.0			—	—	灰	N5/	良好	粗雑 砂粒、黒色粒少量	内面:同心円文等で具痕 外面:格子タタキ	
9	42次-16TL.Ⅰ	須恵器	甕	体部破片資料	＃約3.8	器厚1.4		—	—	灰	N4/	良好	粗雑 長石、砂粒少量	内面:同心円文等で具痕 外面:平行タタキ	打ち欠いて円盤状に加工か。
10	16次-B7-19 堀跡	須恵器	甕	体部破片資料	＃約6.5	器厚1.0		—	—	橙	7.5YR7/6	不良・赤褐	粗雑 石英、砂粒、赤色粒少量	内面:同心円文等で具痕 外面:平行タタキ	打ち欠いて円盤状に加工か。
11	42次-17TL.Ⅰ	手捏土器			—	2.3	3.6	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良	粗雑 石英、角閃石、砂粒、赤色粒多量	外面:ヘラナデ 内面:指ナデ 底部本葉痕	
12	42次-17L.Ⅰ	土製品	土錘		径3.6	内径1.4	長5.4	—	—	にぶい橙	7.5YR5/4	良好	粗雑 砂粒多量	外面ナデ調整	

第29図 新岡山土師器①観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	出土量(cm) 口径	底径	器高	口縁厚	口底厚	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	SB0806-P3	須恵器	蓋	口縁部破片資料	—	—	(1.2)	—	—	灰白 N7/	良好	やや密 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ	かえり蓋
2	SB0806-P5	須恵器	瓶	体部破片資料	器厚1.0			—	—	灰白 N7/	良好	精緻 黒色粒少量	内外面ロクロナデ	外面に自然釉付着、胴西縁ヵ
3	SB0807-P99	須恵器	短頸壺	体部破片資料	器厚2.2			—	—	暗青灰 5PB4/1	良好	粗緻 石英、白色粒、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:体部ロクロナデ、体部下半ヘラケズリ	
4	SB0816-P10	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(3.2)	—	—	暗青灰 5PB4/1	良	粗緻 石英、長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ	
5	SB0822-P4	土師器	甕	体部破片資料	器厚0.9			—	—	橙 2.5YR6/6	良好	緻密 石英、角閃石、赤色粒少量	内面:横位ハケ目 外面:縦位ハケ目後ヘラケズリ	
6	SB0830-P10	土師器	蓋	口縁部破片資料	—	—	(1.6)	—	—	黒 N2/	良好	やや密 石英、砂粒少量	内外面ヨコナデ	天井部外面に焼成後線刻「弓」
7	SD0801	須恵器	高台付坏	底部1/4	—	13.1	(2.3)	—	—	灰白 5YR8/1	良	粗緻 砂粒微量	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け、ロクロナデ調整	
8	SD0831	須恵器	高台付坏	口縁部1/10	(14.2)	—	(2.6)	16.3	—	灰 5Y5/1	良好	粗緻 砂粒微少	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	
9	SD0831	須恵器	蓋	口縁部破片資料	—	—	(1.4)	—	—	灰白 N7/	良好	粗緻 砂粒少量	内外面ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ	かえり蓋
10	SD0831	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.0			—	—	にぶい橙 7.5YR6/3	良好	粗緻 石英、長石、砂粒多量	内面:正格子文等で具 外面:平行タタキ目	
11	SD0830	須恵器	鉢ヵ蓋ヵ	脚部	—	—	(3.4)	—	—	灰 7.5Y7/1	良好	粗緻 石英、砂粒少量	全面ヘラケズリ	
12	SD0833	土師器	高坏	脚部/杯底完存	—	(8.0)	(4.3)	—	—	橙 7.5YR7/6	良好	粗緻 石英、長石、砂粒多量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 脚部外面:縦位指ナデ後横位指ナデ、脚部指圧痕押圧、脚部内面横位ヘラナデ	
13	SD0836 (22-31)	須恵器	蓋	口縁部1/7	(16.6)	—	(2.2)	13.3	—	灰褐 5YR5/2	良好	粗緻 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ	かえり部欠損
14	SD0836	須恵器	円筒	脚部	—	—	(4.1)	—	—	灰 N6/	良好	粗緻 砂粒少量	内外面ロクロナデ	脚台部に方形の透かしと縦位の沈線
15	SD0838 (22-81)	土師器	甕	底部完存	—	(9.0)	(2.8)	—	—	灰白 7.5YR8/2	良	やや密 石英、長石、赤色粒少量	摩滅顕著で調整不明、底部木葉痕	
16	SD0838 (A2-21)	須恵器	壺ヵ甕	胴部破片資料	器厚1.1			—	—	灰白 5Y7/1	良好	精良・緻密 砂粒、灰色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:平行タタキ後ロクロナデ	搬入品ヵ
17	SD0865Na1	土師器	坏	口縁部1/3～底部完存	16.2	8.0	4.7	29.0	49.4	にぶい橙 7.5YR7/3	不良	粗緻 石英、砂粒多量、白色鉄状物少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	非ロクロ
18	SD0865 (22-78)	須恵器	円筒	脚部1/4	—	16.6	(2.9)	—	—	暗青灰 5PB4/1	良	粗緻 砂粒少量	内外面ヘラナデ	
19	SD0865	須恵器	円筒ヵ	脚部か	器厚1.1			—	—	青灰 5BG/1	堅緻	粗緻 砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、櫛描波状文	
20	SD0843 (23-54)	須恵器	蓋	天井部	—	—	(1.8)	—	—	明青灰 5PB7/1	良好	粗緻 砂粒、黒色粒少量	内面:ロクロナデ後ヘラナデ	つまみの先端が四方に尖っている、人為的に打ち欠かれたか。
21	SD0843 (23-54)	須恵器	蓋ヵ	体部破片資料	器厚0.9			—	—	灰 5Y6/1	不良	不良	内面:ロクロヘラナデ 外面:ロクロナデ	外面一部鉋石に利用か
22	SD0847 (23-27)	須恵器	長頸瓶ヵ	口縁部破片資料	—	—	(1.9)	—	—	黒灰 5PB/1	良好	やや密 砂粒微量	内外面ロクロナデ	
23	SD0862	須恵器	蓋	口縁部破片資料	—	—	(1.3)	—	—	灰 10YR5/1	良好	粗緻 砂粒多量	内外面ロクロナデ	
24	SD0866 (23-36)	須恵器	円筒	脚部破片資料	—	—	(4.2)	—	—	青灰 5PB6/1	良好	粗緻 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ	突帯欠損
25	SD0873	土師器	坏か椀	口縁部～底部3/4	12.1	—	6.4	52.9	—	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	やや密 石英、白色針状物、白色粒、褐色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ヨコナデ体～底部ヘラケズリ	赤ロクロ
26	SD0873	須恵器	甕	口縁部～胴部1/7	(9.4)	(6.0)	(3.2)	—	63.8	灰 N6/	良好	粗緻 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ	底部摩滅
27	SD0873	須恵器	円筒	脚部1/16	—	(19.7)	(5.4)	—	—	暗青灰 5PB3/1	良好	粗緻 石英、砂粒多量	脚部内面:ロクロナデ後ヘラナデ 外面:ロクロナデ	
28	SD0875	須恵器	蓋	口縁部1/7	(15.0)	—	(2.5)	—	—	灰白 2.5Y8/1	良	やや密 石英、角閃石、砂粒少量	内面ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ	かえり蓋
29	SD0881	須恵器	提瓶	体部破片資料	器厚1.1			—	—	灰白 N7/	良好・堅緻	粗緻 黒色粒、黒色鉱少量	内面:回転ヘラナデ 外面:カキ目	取っ手(ボタン状)が剥離。

第30図 新岡山土師器②観察表

1	SD0100	土師器	甕	口縁部1/4～胴部1/3	(17.9)	(6.8)	17.3	(96.6)	38.0	にぶい黄橙 10YR7/3	不良	粗緻 石英、砂粒多量	内面:口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘラケズリ後斜位ヘラナデ
2	SD0100	土師器	甕	口縁部1/4～底部1/2	(26.4)	7.1	(20.4)	—	(34.8)	暗赤褐 5YR3/2	不良	粗緻 石英、砂粒多量	内面:横位ハケ目 外面:口縁部ヨコナデ、胴部ハケ目状のヘラナデ 底部ヘラナデ
3	SD0100	土師器	甕	口縁部～底部2/3	(19.4)	—	(14.2)	73.2	—	灰褐 7.5YR4/2	不良	粗緻 砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:ヨコナデ、ヘラナデ、ハケ目
4	SD0100Nx2	須恵器	蓋	クマミ欠損以外は完存	(11.2)	—	(1.9)	17.6	—	暗青灰 5PB4/1	良好・堅緻	やや密 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ後、天井部回転ヘラケズリ	かえり蓋
5	SD892	土師器	甕	底部完存	—	8.8	(2.8)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	不良	粗緻 砂粒多量	内面ヘラナデ、外面ナデ、底部不明	
6	SD899	須恵器	甕	胴部破片資料	器厚1.2			—	—	灰褐 5YR5/2	良	やや密 砂粒少量	内面:同心円文当て具痕 外面:平行タタキ後、縦方目状の回転ナデ	
7	SD899	須恵器	円筒	脚部破片資料	—	—	(4.6)	—	—	青灰 5PB5/1	良好	粗緻 石英、砂粒少量	内面:ロクロナデ後ヘラナデ 外面:ロクロナデ	第31土師②観察表92と同一個体か。
8	SD902	須恵器	蓋	口縁部1/5	—	(12.2)	(2.9)	—	—	褐灰 N3/	良好・堅緻	やや密 砂粒、黒色粒微量	内外面ロクロナデ	外面全体に油状・自然釉
9	SD811Na1	土師器	坏	口縁部～底部1/2	(15.3)	—	(4.8)	31.4	—	明褐灰 7.5YR7/1	不良	粗緻 石英、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	外面に巻き上げ痕を残す。
10	SD811 11	須恵器	長頸瓶ヵ	胴部破片資料	器厚1.0			—	—	灰赤 10R4/2	良好	粗緻 石英、砂粒少量	内面:ナデ 外面:ロクロナデ、櫛描波状文	胴部外面に2段の櫛描状文

第30図 鎌倉山土上遺②観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口高指数	口部指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
11	8次-P18	須恵器	壺	天井部	—	—	(1.6)	—	—	黄灰	2.5Y5/1	良	粗雑 石英、長石、白色粒、褐色粒少量	内外面ロクロナデ	天井部外に彼成後線刻
12	8次-P18	須恵器	杯蓋	縁部～胴部 破片資料	器厚 1.2	—	—	—	—	灰	N4/	良好 堅緻	緻密 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ	脚台部に方形？おとげ十字透かし、横位沈線
13	SX080I Z2-39	土師器	高杯	坏部～脚部	—	—	(7.0)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/3	良好	やや密 石英、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 脚部外面：縦位ヘラケズリ、脚部ヨコナデ 脚部内面：ヘラナデ	
14	SX080I Z2-39	土師器	高杯	坏部～脚部	—	(8.4)	(4.8)	—	—	橙	2.5YR6/6	不良	やや密 石英、角閃石、砂粒少量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 脚部外面：縦位ヘラケズリ 脚部内面：横位ヘラナデ	
15	SX080I Z2-39	土師器	甕	口端部1/3	(14.7)	—	(11.1)	—	—	明赤褐	2.5YR5/8	良好	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒少量	内・外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	

第31図 鎌倉山土上遺②観察表

1	SZC-Z3-93 上層	須恵器	蓋	口端部～天井部1/3	(10.6)	4.8	3.4	(34.0)	(48.6)	暗青灰	5PB4/1	良好 堅緻	緻密 砂粒、黒色粒微量	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ	坏H蓋湖西産？
2	S108010a1	土師器	坏	口縁部～底部1/5	(15.5)	—	3.8	(24.5)	—	にぶい橙	7.5YR7/4	不良	粗雑 石英、白色針状物、砂粒、褐色粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ、ヘラナデ、底部ヘラケズリ	非ロクロ
3	S10B01	土師器	甕	口縁部～胴部1/8	(14.8)	—	(8.4)	—	—	赤橙	10YR6/8	不良	粗雑 石英、角閃石、砂粒多量	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ、底位ヘラナデ	
4	S10B02a1	須恵器	蓋	口端部～天井部1/8	(12.4)	—	(2.5)	—	—	灰白	N7/	良好	やや密 石英、白色針状物、砂粒、黒色粒少量	外面：ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	かえり蓋
5	S10B02	須恵器	蓋	口端部1/7	(13.2)	—	(1.8)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	やや密 白色粒少量	外面：ロクロナデ、回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	
6	S10B02	土師器	坏	口縁部～底部1/5	(15.4)	—	(3.1)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/6	不良	粗雑 石英、白色針状物、砂粒少量	摩滅顕著で調整不明瞭。 内面：ミガキ、黒色処理 外面：ヘラケズリ	非ロクロ
7	S10B02	土師器	椀	口縁部～底部1/3	(16.9)	—	(6.7)	—	—	黄橙	10YR8/6	良	やや密 砂粒、褐色粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ	
8	S10B02	土師器	椀	口縁部～底部1/7	(17.4)	—	(6.4)	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	やや密 砂粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 一部ヘラナデ 外面：口縁部ミガキ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ	
9	S10B02	土師器	高台付椀	底部1/2	—	7.8	(2.5)	—	—	明赤褐	2.5YR5/6	不良	粗雑 石英、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 高台部：ヘラナデ	非ロクロ
10	S10B02	土師器	高台付椀	底部完存	—	(9.2)	(2.1)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良好	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	坏内面：ミガキ、黒色処理 外面：高台部～ヘラナデ、底部ヘラケズリ	非ロクロ
11	S10B02	土師器	高台付椀	底部完存	—	7.6	(2.2)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	不良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	坏内面：ミガキ、黒色処理 外面：高台部指ナデ	
12	S10B02a2	土師器	甕		—	8.2	(12.5)	—	—	赤	10R5/6	不良		内外面摩滅のため調整不明	底部木葉痕
13	S10B02	須恵器	無頸壺	底部1/2	(15.8)	—	2.6	(16.5)	—	暗灰	N2/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	底部外面：ロクロナデ後ヘラケズリ、ヘラナデ 内面：ロクロナデ	内面中央に刻線痕あり、刻線面にキザミ、横面摩滅顕著、
14	S10B02	須恵器	円面硯	脚部1/3～脚部1/6	17.4	18.2	6.7	38.5	104.6	暗灰	N2/	良好 堅緻	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ	脚台部に方形透かし、縦位沈線
15	S10B02	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.4		—	—	—	灰	5Y5/1	良好	粗雑 石英、長石、黒色粒少量	内面：同心円文当て具痕 外面：格子タタキ	内・外面および破面が著しく摩滅、破石転用
16	S10B03Ba5	土師器	坏	口縁部1/2～底部完存	14.4	—	3.5	24.3	—	浅黄橙	10YR8/4	良	緻密 石英、白色針状物、赤色粒少量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ	非ロクロ 平底風丸底
17	S10B03Bc9	土師器	坏	口縁部1/5～底部2/3	(14.5)	—	(3.7)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	良	緻密 石英、白色針状物少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ	非ロクロ 平底風丸底
18	S10B03	土師器	坏	口縁部1/20～底部完存	(13.7)	—	3.3	(24.1)	—	灰黄	2.5Y7/2	良	緻密 石英、角閃石、白色針状物、砂粒、褐色粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	非ロクロ
19	S10B03Ba4	土師器	高坏	口縁部1/3～脚部4/5	(13.0)	—	(4.5)	—	—	浅黄橙	10YR8/4	良	粗雑 石英、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	摩滅顕著で調整不明瞭。 坏部内面：ミガキ、黒色処理 外面：脚部ナデ	
20	S10B03	土師器	甕	底部完存	—	6.2	(4.3)	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良	粗雑 石英、砂粒多量	内面：ヘラナデ 外面：指ナデ 底部木葉痕	
21	S10B03Ba2	土師器	小型甕	口縁部～体部1/3	(10.6)	—	(8.8)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/4	やや不良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内外面摩滅のため調整不明	外面に輪積痕残る
22	S10B03Ba6	土師器	甕	口縁部～底部完存	—	8.6	(9.8)	—	—	赤褐	2.5YR4/6	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面：ヘラナデ 外面：ハケ目 底部木葉痕	

第32図 鎌倉山土上遺②観察表

1	S10B07	土師器	坏	口縁部～底部1/2	(18.4)	—	5.2	(33.8)	—	灰白	10YR8/2	良	やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面：ヨコナデ後ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	非ロクロ
2	S10B07Ba2	土師器	甕	口縁部1/10～底部完存	(13.2)	—	13.6	(103.4)	—	赤褐	2.5YR4/6	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面：摩滅のため不明 外面：口縁部横位ヘラナデ、胴部～底部縦位ヘラナデ、ヘラケズリ	
3	S10B07Ba1	土師器	甕	底部完存	—	10.2	(11.1)	—	—	暗赤褐	5YR4/6	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面：横位ヘラナデ 外面：縦位ヘラナデ 底部木葉痕	
4	S10B07	須恵器	円面硯	脚部破片資料	—	—	6.6	—	—	暗灰	N2/	良好 堅緻	やや密 石英、白色粒、黒色粒微量	内外面ロクロナデ 外面：側ハロクロ痕跡	方形透かし
5	S10B04	須恵器	短頸壺	胴部～体部	—	—	(3.9)	—	—	暗青灰	5PB4/1	良好	粗雑 石英、砂粒、白色粒微量	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ後に体部下半ヘラケズリ	胴部に降灰

第32図御殿院出土土器観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁径	底縁径	色調	焼成	胎土	調整	備考
6	SI0804	須恵器	円筒	御殿硬片資料	—	—	(5.1)	—	—	紫灰	良/堅緻	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ	脚部に方形透かし、横位沈線A2と同一個体の破片か?
7	SI0808	土師器	坏	口縁部～底部1/4	(14.0)	—	3.6	(25.7)	—	にぶい橙	良好	粗雑 石英、角閃石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	巻き上げ痕を外面の一部に残す
8	SI0808	土師器	坏	口縁部1/20～底部1/2	(14.8)	—	3.8	(25.7)	—	浅黄橙	10YR4/4	不良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部調整不明	非ロクロ
9	SI0808	土師器	坏	口縁部1/3～底部2/3	(14.9)	—	4.0	(26.6)	—	灰黄	2.5Y7/2	良	粗雑 石英、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	巻き上げ痕を外面の一部に残す
10	SI0808	土師器	甕	口縁部～胴部1/6	(14.6)	—	(8.6)	—	—	浅黄橙	7.5YR6/6	不良	粗雑 砂粒多量	内面:横位ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘケロ	
11	SI0808	土師器	甕	底部2/3	—	(8.0)	(4.7)	—	—	にぶい橙	2.5YR6/3	不良	やや密 石英、長石、白色粒、赤色粒少量	内面:指ナデ、ヘラナデ 外面:指ナデ、ヘラナデ	内面に輪積み痕を残す
12	SI0808の北のピット	土師器	甕	胴部下半～底欠損 以外は完存	15.8	8.1	19.8	125.3	51.3	にぶい橙	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面:口縁部ヨコナデ、横位ヘラナデ、胴部縦位ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘラナデ、底部ヘラケズリ	胴部外面に輪積み痕を押圧して残す。底面に木葉痕をわずかに残す。
13	SI0808	土師器	甕	口縁部1/10～底部4/6	(26.6)	9.4	23.6	(88.7)	(35.3)	灰白	2.5Y8/1	良	やや密 石英、長石、砂粒少量	内面:口縁部横位ヘラナデ、胴部縦位ヘラナデ、下端横位ヘラナデ 外面:ヘラケズリ後ヘラナデ	体部下端に穿孔
14	SI0806	須恵器	甕	肩部～体部破片資料	器厚1.2			—	—	青灰	5B6/1	良好	粗雑 砂粒微量	内面:同心円文当て具痕 外面:格子タタキ	

第33図御殿出土土器観察表

1	SI0809	土師器	坏	口縁部～底部1/3	(17.0)	—	5.1	(30.0)	—	にぶい黄橙	10YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ
2	SI0809	土師器	坏	口縁部3/5～底部完存	15.6	—	4.3	27.6	—	灰黄	2.5Y7/2	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ
3	SI0809	土師器	坏	口縁部～底部1/4	(16.0)	—	(3.8)	—	—	橙	5YR6/6	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ
4	SI0809	土師器	椀	口縁部4/6～底部完存	16.7	—	6.5	34.8	—	にぶい黄橙	10YR7/4	良好	粗雑 石英、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ
5	SI0809	土師器	椀	口縁部～底部1/4	(18.6)	—	(7.7)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	良好	粗雑 石英、角閃石、白色針状物、砂粒、褐色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ヘラケズリ
6	SI0809	土師器	坏	口縁部1/2～底部2/3	13.1	—	5.0	38.2	—	灰白	2.5Y8/2	良好	やや密 石英、白色針状物、白色粒、黒色粒、褐色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:体部ヨコナデ、指頭押圧、底部ヘラケズリ
7	SI0809	土師器	坏	口縁部～底部1/3	(12.6)	(6.2)	3.5	(27.8)	49.2	明赤褐	5YR5/6	良	粗雑 石英、角閃石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量、白色粘土を マーブル状に含む。	内面:ミガキ 外面:摩滅により不明
8	SI0809	土師器	高台付坏	底部完存、高台部一部欠損	—	(6.0)	(3.0)	—	—	赤橙	10R6/6	不良	やや密 石英、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:底部～ヘラケズリ後に高台貼り付け
9	SI0809	土師器	高台付坏	底部完存、高台部一部欠損	—	(9.2)	(2.7)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良好	やや密 石英、白色針状物、白色粒、褐色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後に高台貼り付け、ヘラナデ調整
10	SI0809	土師器	高坏	坏部1/6	(21.0)	—	(5.8)	26.2	—	橙	7.5YR7/6	不良	やや密 石英、砂粒少量	坏内面:ミガキ、黒色処理 外面:摩滅により調整不明、ヘラケズリか
11	SI0809	土師器	高坏	坏部は底完存	(21.6)	—	(4.6)	21.3	—	にぶい橙	5YR7/4	良	やや密 石英、砂粒、赤色粒微量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ヘラナデ、指頭押圧
12	SI0809	土師器	台坏	坏部、脚部一部欠損	—	6.0	(5.2)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/4	不良	粗雑 石英、砂粒、赤色粒多量	坏部内面:黒色処理 脚部外面:ヘラケズリ、ヘラナデ
13	SI0809	土師器	高坏	坏部～脚部	—	(8.4)	(5.2)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良好	粗雑 石英、砂粒、褐色粒少量	坏部内面:黒色処理、ミガキ 脚外面:ヘラケズリ、脚部ヨコナデ 脚内面:ヘラナデ
14	SI0809	土師器	高坏	坏部～脚部	—		(6.2)	—	—	橙	7.5YR6/6	不良	粗雑 石英、砂粒多量	坏内面:黒色処理 脚外面:ヘラケズリ、脚部ヨコナデ 脚内面:ヘラナデ
15	SI0809	土師器	高坏	坏部1/3～脚部先存	—	12.4	(6.8)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/3	不良	やや密 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	全体に摩滅顕著。 坏部内面:ミガキ、黒色処理 脚部内・外面:ヘラナデ 脚内面:指ナデ、ヘラナデ
16	SI0809	土師器	高坏	坏部～脚部	—	—	(4.5)	—	—	明赤褐	2.5YR5/8	不良	粗雑 石英、白色針状物、砂粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 脚外面:ヘラケズリ、指ナデ
17	SI0809	土師器	高坏	坏部～脚部	—	—	(5.8)	—	—	浅黄橙	10YR8/4	良	粗雑 石英、白色針状物、砂粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 脚部外面:ヘラケズリ、ヘラナデ
18	SI0809	土師器	高坏	脚部	—	—	(4.2)	—	—	黒褐	2.5Y3/1	良	緻密 石英、赤色粒少量	脚部外面:ヘラケズリ 内面:ヘラナデ
19	SI0809	土師器	高坏	脚部	—	(9.8)	(6.2)	—	—	橙	2.5YR6/6	良	粗雑 石英、砂粒、赤色粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 脚部外面:ヘラケズリ、脚部内面:ヘラケズリ、指ナデ 脚内面:ヘラナデ
20	SI0809	土師器	鉢	口縁部～底部3/4	12.6	(7.8)	7.2	57.1	(61.9)	にぶい赤褐	10R6/3	良	やや密 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、体部下端指頭押圧
21	SI0809	土師器	甕	口縁部～胴部1/16	(11.6)	—	(8.6)	—	—	にぶい赤褐	2.5YR4/4	不良	粗雑 石英、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:摩滅顕著で調整不明
22	SI0809	土師器	甕	口縁部1/3	(15.0)	—	(6.5)	—	—	にぶい褐	7.5YR6/3	良	粗雑 石英、砂粒、赤色粒多量	内面:ヘラナデ 外面:摩滅顕著、口縁部ヨコナデか

第35図 舘岡出土土器③観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口高指数	口底指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
23	S16809	土師器	甕	口縁部～胴部1/4	(11.2)	—	(6.5)	—	—	赤褐	10R5/3	良	粗雑 石英,砂粒多量	内外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ
24	S16809	土師器	甕	口縁部～胴部1/10	(11.8)	—	(7.1)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/3	良	やや密 砂粒少量	内・外面口縁部ヨコナデ、外面口縁部下横位ヘラナデ、胴部縦位ヘラナデ、内面胴部横位ヘラナデ
25	S16809	土師器	甕	口縁部～胴部1/4	(15.6)	—	(6.0)	—	—	にぶい赤橙	2.5YR4/4	良好	粗雑 石英,砂粒多量	内面:口縁部ヨコナデ、胴部横位ハケ目 外面:口縁部ヨコナデ、胴部縦位ハケ目	2は、S1-97×11、2は土片と接合

第34図 舘岡出土土器②観察表

1	S16809	土師器	鉢形土製品か	口縁部2/3	(15.6)	—	(8.1)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良	粗雑 石英,長石,砂粒多量,赤色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:摩滅により調整不明	内面に輪積み痕を明瞭に残す
2	S19809	土師器	甕	底部1/3	—	(8.4)	(7.8)	—	—	にぶい赤褐	2.5YR5/3	良	粗雑 石英,長石,砂粒,赤色粒少量	内面:胴位ヘラナデ 外面:ヘラナデ、底部ヘラケズリ	
3	S16809	土師器	甕	胴部1/6～底部完存	—	8.2	(10.6)	—	—	赤褐	2.5YR4/6	不良	粗雑 砂粒多量	焼熱により劣化しており調整不明。 内面:ヘラナデ 外面:一部縦位ハケ目	底部本葉痕
4	S19809	土師器	甕	底部3/4	—	7.8	(4.6)	—	—	赤灰	2.5YR4/1	不良	粗雑 砂粒多量	焼熱により劣化しており調整不明瞭。 内外面ヘラナデ	
5	S19809	土師器	甕	底部完存	—	7.3	(7.0)	—	—	にぶい赤褐	2.5YR5/4	不良	粗雑 砂粒多量	内面:横位ヘラナデ 外面:胴部下端横位ヘラケズリ	
6	S19809	土師器	甕	底部3/4	—	8.7	(8.3)	—	—	橙	7.5YR6/6	不良	粗雑 砂粒多量	内外面摩滅	底部本葉痕
7	S19809	土師器	甕	底部完存	—	8.9	(4.6)	—	—	明黄褐	10YR7/6	良	粗雑 砂粒多量	内外面ヘラナデ	外面に一部輪積み痕を残す
8	S19809	土師器	甕	底部完存	—	8.4	(2.4)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	粗雑 砂粒多量	内面:摩滅し不明 外面:ヘラナデ	底部本葉痕
9	S19809	土師器	甕	胴部～底部4/5	—	8.4	(18.5)	—	—	にぶい褐	5YR6/3	良好	粗雑 石英,砂粒,赤色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:縦位ヘラケズリ後ヘラナデ	
10	S19809	土師器	甕	胴部1/4	—	(6.0)	(21.0)	—	—	赤	10R5/6	良好	やや密 石英,白色針状物,砂粒少量	内面:普通のヘラナデ後に単位の細いヘラナデ 外面:縦位ヘラケズリ後ヘラナデ、内・外面とも下端は横位ヘラケズリ	
11	S19809	須恵器	坏	口縁部1/2～底部完存	15.2	10.8	4.2	27.6	71.1	白灰	5Y7/1	良好	粗雑 砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	底面に後底後縁剪「男」
12	S19809	須恵器	高台付坏	口縁部1/4～底部完存、高台剥離	(14.0)	—	(4.5)	—	—	黄灰	5Y5/1	良好・堅緻	やや密 石英,砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部ヘラ切り後に外周回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ロクロナデ調整	高台剥離
13	S19809	須恵器	蓋か	天井部1/3	(11.9)	—	(2.9)	—	—	黄灰	2.5Y4/1	良	粗雑 石英,砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、橫轉放射状	外面天井部中央に円形の変色あり、内面は赤焼き。
14	S19809	須恵器	蓋か	口縁部破片資料	—	—	(2.4)	—	—	黄灰	2.5Y4/1	良	粗雑 石英,砂粒少量	内面:ロクロナデ、 外面:ロクロナデ後橫轉文	内面には赤焼き。
15	S19809	須恵器	高台付坏	底部1/4	—	(13.2)	(3.1)	—	—	青灰	5PB6/1	良好	粗雑 石英,白色針状物,砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:底部回転ヘラケズリ後に高台貼り付け、ロクロナデ調整	

第36図 舘岡出土土器③観察表

1	S26-Z1-19 L1	土師器	壺	天井部	—	—	(2.1)	—	—	灰褐	7.5YR5/2	良	粗雑 石英,長石,雲母,砂粒、赤色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、ヅマベラはケズリ出しか。	内外面漆付着。
2	S26-Z3-81 L皿	土師器	坏	口縁部～底部1/10	(16.6)	—	(4.4)	27.5	—	にぶい黄橙	10YR7/4	不良	やや密 石英,白色針状物,砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:底部ヘラケズリ	栗囲式
3	S26-A1	土師器	坏	口縁部～底部1/6	(15.2)	—	(4.3)	28.3	—	灰黄	2.5Y7/2	不良	粗雑 石英,長石,白色針状物,砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	外面に巻き上げ痕を残す。
4	S26-A3-10 L皿	土師器	坏	口縁部～底部1/3	(15.2)	—	(4.8)	31.6	—	にぶい黄橙	10YR7/4	良好	やや密 石英,白色針状物,砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	井口C
5	S26-Z3-92 L皿	土師器	高台付坏	底部1/4	—	(10.2)	(2.7)	—	—	明褐灰	7.5YR7/2	良	粗雑 石英,白色針状物,砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ヘラナデ	井口C
6	S26-A3-62 L皿	土師器	高台付坏	底部完存	—	7.6	(2.6)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良好	やや密 石英,長石,白色針状物,砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:底部～高台間縦位ヘラケズリ、高台内面横位ヘラナデ	井口C
7	S26-Z3-93 L皿	土師器	高台付坏	底部1/2	—	(4.8)	(2.6)	—	—	浅黄橙	10YR8/4	不良	やや密 石英,砂粒少量	内面:黒色処理 外面:縦位・橫位指ナデ	井口C
8	S26-Z3-81 L皿	土師器	鉢	底部2/3	—	9.0	(6.7)	—	—	にぶい橙	5YR7/4	良	粗雑 石英,長石,砂粒,赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:体部縦位ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	
9	S26-Z3-63 L皿	土師器	高坏	坏部～脚部、脚部欠損	—	—	(7.8)	—	—	淡赤橙	2.5YR7/3	良	やや密 砂粒多量	坏部内面:ミガキ 坏部～脚部外面:ヘラケズリ	
10	S26-Y2-92 L I	土師器	高坏	坏部1/3～脚部、脚部欠損	—	—	(4.6)	—	—	にぶい黄橙	10YR5/4	良	やや密 石英,長石,砂粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 外面:ヘラケズリ	脚部部本一周割り痕又で使用を繰返した可能性あり
11	S26-Z2-18 L皿	土師器	高坏	坏部～脚部1/4	—	(8.4)	(5.3)	—	—	橙	7.5YR7/6	良	やや密 石英,角閃石,白色粒、赤色粒少量	坏部内面:黒色処理 外面:坏部ナデ、脚部縦位ヘラケズリ 端部ヨコナデ、脚部外面ヘラケズリ	
12	S26-Z3-82 L皿	土師器	鉢	底部1/2	—	7.6	(3.8)	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良	粗雑 石英,長石,砂粒,赤色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:縦位ヘラナデ	底面に本葉痕跡
13	S26-Z3-63 L皿	土師器	甕	胴部1/2～底部完存	—	7.4	(11.6)	—	—	にぶい橙	5YR6/4	良	粗雑 石英,長石,角閃石,砂粒多量,赤色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:縦位ヘラナデ 底面ヘラケズリ	
14	S26-Z2-78 L I	土師器	甕	底部完存	—	6.0	(3.5)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/4	良	やや密 砂粒少量	摩滅顕著で調整不明瞭。内外面ヘラナデと思われる	
15	S26-Z3-82 L皿	土師器	甕	体部破片資料	器厚1.4					灰褐	7.5YR5/2	良	やや密 白色粒多量	内面:同心円文状で真横 外面:格子タタキ	叩き整形の甕

第35図 館岡出土土器①概察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁厚	口頸厚	色調	焼成	胎土	調整	備考
16	SK07-Z3-52 L.Ⅱ	土師器	鉢	体部下端 1/5	—	(8.2)	(4.1)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良	やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面:横位ヘラナデ 外面:縦位ヘラケズリ後ヘラナデ
17	SK07-Z3-71 L.Ⅲ	土師器	鉢	体部下端 1/5	—	(8.8)	(3.9)	—	—	にぶい橙	10YR7/4	良好	やや密 角閃石、白色針状物、砂粒少量	内面:単位の細いヘラナデ、下端横位ヘラケズリ 外面:ヘラナデ
18	SK07-Z3-71 L.Ⅲ	土師器	鉢	体部下端 1/6	—	(9.2)	(3.6)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内面:単位の細いヘラナデ、下端横位ヘラケズリ 外面:ヘラナデ
19	SK07-Z3-81 L.Ⅲ	土師器	鉢	体部下端 1/5	—	(7.2)	(6.1)	—	—	明赤褐	2.5YR5/6	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ヘラナデ、下端横位ヘラケズリ 外面:縦位~横位ヘラケズリ
20	SK07-Z3-80 L.Ⅲ	土師器	手捏土器	口縁部1/3 ~底部完存	(5.8)	5.0	2.2	(27.9)	(86.2)	橙	7.5YR5/6	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:指オサエ、ヘラナデ 外面:ヘラナデ	底面に木葉痕
21	SK07-A3-12 L.Ⅲ	土師器	手捏土器	口縁部~底部1/3	(5.2)	(4.6)	1.8	(34.6)	88.5	にぶい橙	10YR7/4	良	粗雑 石英、砂粒、赤色粒少量	内面:指オサエ、ヘラナデ 外面:ヘラナデ 底部木葉痕
22	SK07-A3-12 L.Ⅲ	土師器	手捏土器	口縁部~底部1/6	(5.4)	(5.6)	2.5	(46.3)	103.7	にぶい橙	7.5YR6/3	良好	粗雑 石英、砂粒、赤色粒少量	内面:指オサエ、ヘラナデ 外面:ヘラナデ 底部木葉痕
23	SK07-A1-44 L.Ⅲ	土師器	手捏土器	口縁部~底部1/5	(7.0)	(7.2)	2.1	(20.6)	102.9	橙	5YR6/6	良好	粗雑 砂粒、白色粒少量	内面:指オサエ、ヘラナデ 外面:ヘラナデ	底面に木葉痕

第36図 館岡出土土器②概察表

1	SD7-A1	須恵器	蓋	天井部	—	—	(3.7)	—	—	褐灰	10YR6/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒微量	内面:ロクロナデ後一部ヘラナデ 外面:ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付け後ロクロナデ
2	SD7-A3-03 L.Ⅲ	須恵器	蓋	天井部	—	—	(3.6)	—	—	青灰	5PB5/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ロクロナデ後ヘラナデ 外面:ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付け後ロクロナデ
3	SD7-Z2-62 L.Ⅰ	須恵器	蓋	天井部	—	—	(3.8)	—	—	灰	N7/	良好~堅緻	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付け後ロクロナデ
4	SD7-Z3-71 L.Ⅲ	須恵器	蓋	口端部~天井部1/10	—	(12.8)	(2.6)	—	—	灰	N6/	良好~堅緻	緻密 石英、砂粒、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ	かえり蓋
5	SD7-A2-02 L.Ⅲ	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(2.6)	—	—	灰	10YR5/1	良好	粗雑 石英、チャート、白色針状物、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ	かえり蓋
6	SD8014以東	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(2.0)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ	
7	SD7-Z3-02 L.Ⅲ	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(1.8)	—	—	褐灰	7.5YR5/1	良好	やや密 石英、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ	
8	SD7-Z3-73 L.Ⅲ	須恵器	坏	口縁部~底部1/4	(13.3)	(7.4)	(3.8)	28.6	55.6	暗灰	N3/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後ヘラナデ	
9	8次表採	須恵器	高台付坏	口縁部~底部1/5	(13.6)	—	(3.8)	27.9	—	灰白	N7/	良好	粗雑 砂粒微量、黒色粒少量	内外面ロクロナデ	湖西産か
10	SD7-A2-31 L.Ⅰ	須恵器	長頸瓶	底部1/2	—	(6.9)	(1.7)	—	—	灰	N6/	良好~堅緻	緻密 黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:体~底部回転ヘラケズリ	搬入品か
11	SD7-Z2-33 L.Ⅰ	須恵器	長頸瓶	口縁部1/4	(10.3)	—	(1.4)	13.6	—	明青灰	5PB7/1	良好~堅緻	緻密 砂粒微量	内外面ロクロナデ	
12	SD7-Z3-79 L.Ⅲ	須恵器	高台付坏	高台部のみ 1/6	—	(10.6)	(1.4)	—	—	青灰	5PB6/1	良好	やや密 石英、白色針状物、砂粒、黒色粒少量	ロクロナデ	貼り付け高台
13	SD7-A3-02 L.Ⅲ	須恵器	高台付坏	底部1/6	—	(7.8)	(1.6)	—	—	暗青灰	5PB4/1	良好	粗雑 長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ロクロナデ	
14	SD7-A1-46 L.Ⅲ	須恵器	短頸壺	口縁部1/4 ~底部完存	(6.1)	6.3	7.1	(116.4)	(101.1)	暗青灰	5PB4/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、体部下半~底面回転ヘラケズリ後ヘラナデ	須恵と体部の境界にロクロ痕。 須恵に降灰
15	SD7-Z3-83 L.Ⅲ	須恵器	長頸瓶	頸部1/4	—	—	(3.6)	—	—	灰	N6/	良好~堅緻	緻密 白色粒、黒色粒	内外面ロクロナデ	須恵に自然釉、黒釉状水。
16	SD7-A3-02 L.Ⅲ	須恵器	長頸瓶	頸部~体部1/4	—	—	(10.9)	—	—	灰白	N7/	良好	やや密 石英、黒色粒少量	内面:頸部指オサエ、指ナデ、ロクロナデ 外面:ロクロナデ、体部下端ヘラケズリ 頸部内面に輪積み痕、頸部と肩部の接合痕残す	肩部に櫛歯状工具による列点文2段、その下にロクロ比痕2条巡文。
17	SD7-Z3-82 L.Ⅲ	須恵器	長頸瓶	頸部破片資料	器厚0.8				—	青灰	5BG/1	良好	やや密 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ 外面:櫛描波状文、沈線	肩部にロクロ比痕と櫛描波状文を交互に施文
18	SD816-F10	須恵器	壺か	口縁部破片資料	器厚0.9				—	暗青灰	5PB4/1	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内外面ロクロナデ 外面に櫛描波状文	肩部に櫛歯状工具による列点文2段、その下に波状文。
19	SD7-A1	須恵器	甕	頸部~肩部1/4	—	—	(7.4)	—	—	青灰	5PB5/1	良好	粗雑 石英、砂粒、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:平行タタキ後ロクロナデ	外面肩部摩滅、破石に転用
20	SD7-Z3-92 L.Ⅲ	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(3.1)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ 外面:櫛描波状文2段	
21	SD7-A1	須恵器	甕	頸部~肩部破片資料	器厚1.1				—	黄灰	2.5Y6/1	良好	やや密 石英、長石、白色粒、黒色粒少量	内面:頸部~肩部ロクロナデ、体部無文当て具痕 外面:平行タタキ後ロクロナデ	頸部の粗面や肩部外面が摩滅、破石に再用。
22	SD7-A1	須恵器	甕	肩部破片資料	器厚0.7				—	灰	N7/	良好	やや密 石英、砂粒少量	内面:ロクロナデ、ヘラナデ 外面:ロクロナデ、撫で目	肩部に降灰
23	SD7-Z3-30 L.Ⅲ	須恵器	壺か	頸部破片資料	器厚0.9				—	青灰	5PB5/1	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内外面ロクロナデ 外面に櫛描波状文3段	
24	SD7-A3-12 L.Ⅲ	須恵器	壺か(ミニチュア品)	口縁部破片資料	—	—	(5.1)	—	—	灰	N4/	良好	やや密 砂粒微量	内外面ロクロナデ	外面に自然釉
25	SD7-Z3-42 L.Ⅲ	須恵器	壺か	体部破片資料	器厚0.8				—	オリーブ黒	10Y3/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:格子タタキ 外面:ナデ	外面は平行タタキか
26	SD7-Y2-82 L.Ⅰ	須恵器	壺か	体部破片資料	器厚1.0				—	灰白	5Y7/1	良好	粗雑 石英、砂粒少量	内面:格子タタキ 外面:平行タタキ	

第36図 飯能出土土器⑨観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口角度	口径指数	色調		焼成	胎土	調整		備考
27	92区-A2	須恵器	碗か	底部破片資料	器厚0.8		—	—	—	灰	N5/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	ナデ、ヘラナデ		外面摩滅

第37図 飯能出土土器⑩観察表

1	6次-64T	土師器	坏	口縁部～底部1/5	(15.0)	—	(3.3)	—	—	灰白	2.5YR/2	良好	粗雑 白色粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	栗囲式	
2	6次-15～17T	土師器	坏	口縁部～底部1/4	(15.0)	—	(4.7)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良好	粗雑 白色粒少量、石英、角閃石、白色粒、赤色粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	非ロクロ	
3	6次-67TLⅡC	土師器	Ⅱ	口縁部～底部1/2	(12.2)	7.2	4.4	(36.1)	(59.6)	灰白	2.5YR/2	良好	緻密 石英、チャート多量、赤色粒少量	内面：黒色処理 外面：ロクロナデ 体部下端～底部回転ヘラケズリ		
4	6次-16TⅡ	土師器	高坏	脚部のうち性状図完存、裾部一部欠損	—	(9.6)	(7.0)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、角閃石、褐色粒少量	内面：坏部黒色処理 外面：脚部ヘラナデ、裾部ヨコナデ		
5	6次-76T	土師器	高坏	脚部のうち性状図完存、裾部一部欠損	—	—	(8.4)	—	—	にぶい黄橙	5YR7/3	良	粗雑 石英、長石、赤色粒少量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 脚部外面：縦位ヘラケズリ、裾部ヨコナデ 脚部内面：ヘラナデ		
6	6次-69TLⅡC	土師器	高坏	脚部1/3	—	(6.8)	(5.7)	—	—	橙	5YR6/6	良好	粗雑 石英、砂粒、赤色粒少量	坏部内面：黒色処理 脚部外面：ヘラケズリ 脚内面：ヘラナデ		
7	6次-69T SD1中	土師器	高坏	脚部のうち性状図完存、脚部一部欠損	—	(7.8)	(7.0)	—	—	橙	7.5YR6/6	良	粗雑 石英、角閃石、長石、赤色粒少量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 脚外面：縦位ヘラケズリ、裾部ヨコナデ	横転のものを芯にして脚部を成形	
8	6次-15～17T	土師器	甕	底部完存	—	12.8	(6.6)	—	—	橙	2.5YR6/6	良	粗雑 石英、長石、角閃石、褐色粒多量	内面：ヘラナデ 外面：ヘラケズリ	底部木葉痕	
9	6次-15～17T	土師器	甕	底部2/3	—	9.0	(3.1)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/4	良	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒多量	外面：ハケ目状の縦位ヘラナデ後横位ヘラナデ 内面：ヘラナデ	底部木葉痕	
10	6次-21TⅡ	土師器	甕	底部完存	—	8.4	(3.7)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒少量	内面：ヘラナデ 外面：縦位ヘラナデ、横位ヘラナデ	木葉痕	
11	6次-70TLⅡ	土師器	甕	底部完存	—	8.4	(6.4)	—	—	にぶい黄橙	7.5YR10/3	良	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒多量	内面：ヘラナデ 外面：ヘラナデ、底部摩滅により不明		
12	6次-14TⅡ	土師器	甕か	口縁部破片資料	—	—	(2.1)	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	粗雑 石英、白色針状物少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ヘラナデ		内面・外面・破面に漆と思われる付着物あり。 角組か。
13	6次-69TLⅡC	手捏土器		口縁部～底部1/2	(5.0)	(4.4)	2.8	(66.6)	88.0	にぶい黄橙	10YR6/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内外面指ナデ ヨ	底部木葉痕	
14	6次-69TLⅡC	手捏土器		口縁部～底部1/2	(6.3)	5.8	(2.5)	—	(92.1)	橙	5YR6/6	良好	粗雑 石英、角閃石、砂粒多量	内外面ヘラナデ	底部木葉痕	
15	6次-69TLⅡC	手捏土器		口縁部～底部1/4	(7.0)	(6.6)	2.5	(25.7)	94.3	橙	5YR6/6	不良	粗雑 石英、砂粒微量	内面：ヘラナデ 外面：ナデ	内面に漆と思われる付着物あり	
16	6次-70TLⅡ	手捏土器		口縁部～底部1/2	(5.2)	(3.8)	2.9	(55.8)	73.1	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内外面ヘラナデ		
17	SB601P15	須恵器	蓋	口縁部欠損	—	—	(2.2)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	不良	粗雑 石英、長石、赤色粒多量	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付け、ロクロナデ調整		
18	6次-46TⅡ	須恵器	蓋	口縁部～天井部2/3	(15.6)	1.8	—	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ		
19	6次-15～17T	須恵器	坏	口縁部破片資料	—	—	(3.8)	—	—	灰白	5YR5/2	良好	粗雑 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ		
20	10G01 南-69T	須恵器	高台付坏	口縁部～底部1/3	(12.6)	(10.1)	3.8	(30.2)	80.2	灰白	2.5Y7/1	良	粗雑 石英、砂粒多量	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	ケズリ出し高台	
21	6次-50TLⅡC	須恵器	坏	底部1/2	—	—	(1.1)	—	—	灰	N6/	良好	粗雑 石英、黒色粒少量	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後ヘラナデ		
22	6次-15～17T	須恵器	平瓶	脚部1/5	—	(16.8)	(4.5)	—	—	黒灰	5PB6/1	良好	粗雑 石英、砂粒微量	内外面ロクロナデ		
23	6次-15～17T	須恵器	甕	体部破片資料	—	—	(6.0)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	緻密 石英微量	内面：無文当て具痕 外面：平行タタキ及びロクロ沈線	内面摩滅 転用硯	
24	6次-15～17T	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.1		—	—	—	灰白	2.5Y7/1	良好	緻密 石英、黒色粒少量	内面：無文当て具痕 外面：平行タタキ	内面摩滅 転用硯	
25	6次-15～17T	須恵器	甕	体部破片資料	器厚1.1		—	—	—	灰白	N7/	良好	粗雑 石英、灰色粒少量	内・外面同心円文当て具痕		
26	6次-15～17T	須恵器	甕	口縁部破片資料	器厚0.9		—	—	—	灰	5Y5/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、櫛描波状文		
27	6次-15～17T	須恵器	長頸瓶	胴部破片資料	器厚1.0		—	—	—	灰	N6/	良好	緻密 石英、砂粒微量	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、櫛状工具による列点文		
28	6次-15～17T	須恵器	長頸瓶	底部完存、高台欠損	—	—	(8.8)	—	—	灰	5Y4/1	良好	緻密 石英、長石、赤色粒少量	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、体部下端～底部回転ヘラケズリ、接合部にキザミ後高台貼り付け、ロクロナデ調整		
29	6次-15～17T	須恵器	提鉢	底部1/4	—	(13.6)	(2.7)	—	—	オリーブ灰	2.5GY5/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ	底面に刺突穴6個残存。	

第38図 飯能出土土器⑪観察表

1	SE2001Sa7 脚方-IT区	土師器	坏	口縁部～底部1/6	(12.8)	—	3.4	(26.6)	—	橙	7.5YR6/6	やや不良	粗雑 石英、長石、白色針状物、赤粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ		
2	SI2001 カマドIG-9	須恵器	坏	口縁部～底部1/5	(10.1)	—	(3.0)	29.7	—	灰	N7/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ		
3	SI2001⑩ カマド	土師器	甕	口縁部1/4	(19.0)	—	(7.1)	37.4	—	橙	7.5YR6/6	やや不良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	摩滅顕著、胴部外面縦位ヘラケズリ後ヘラナデか		

第38図 鉄製出土土器観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁径	口底径	色調	焼成	胎土	調整	備考
4	S12001 カマ下L8	土師器	鉢	口縁部1/3～底部完存	(17.4)	9.5	8.8	(50.6)	(54.4)	赤橙	やや不良	粗雑 石英,長石,砂粒多量	摩滅により不明	被熱が著しい
5	S12005	土師器	甕	口縁部欠,胴部の一部～底部欠損	(17.8)	—	(20.3)	—	—	明赤褐	やや不良	粗雑 石英,長石,砂粒多量	摩滅顕著, 内面:ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ	被熱が著しい
6	20次-3T1-24	土師器	甕	口縁部～胴部破片 資料	—	—	(14.8)	—	—	褐	7.5YR5/6	やや不良	粗雑 石英,長石,砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:擬似ハケ目
7	S12007-5T	土師器	甕	口縁部破片 資料	—	—	(6.3)	—	—	橙	7.5YR6/6	やや不良	粗雑 石英,長石,砂粒,褐色粒少量	摩滅のため不明
8	S12010L1-5	土師器	甕	口縁部破片 資料	—	—	(7.9)	—	—	橙	2.5YR5/6	良	粗雑 石英,長石,砂粒,褐色粒,赤色粒少量	摩滅顕著, 内面:ヘラナデ 外面:輪積痕を残す
9	S12012-4T	土師器	甕	底部1/2	—	12.6	(4.1)	—	—	橙	2.5YR6/6	やや不良	粗雑 石英,長石,砂粒多量	器面荒れのため不明瞭, 内面:ヘラナデ	底部木葉痕
10	S20006-4T	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚 1.4	—	—	—	—	黄灰	2.5YR5/1	良好	粗雑 石英,砂粒,白色粒多量	内面:同心円文当て具痕 外面:格子タタキ
11	S20006-4T	須恵器	長頸瓶	頸部1/3	—	—	(3.6)	—	—	灰黄	2.5Y7/2	良好	緻密 黒色粒微量	内外面ロクロナデ
12	S20006-4T	須恵器	長頸瓶	体部～底部1/3	—	10.6	(7.8)	—	—	灰	10Y7/1	良好	緻密 石英,長石,黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後一部ヘラナデ	貼り付け高台
13	S20006-4T	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚 3.3	—	—	—	—	オリーブ灰	10Y3/2	良好	やや密 石英,長石,砂粒少量	内面:同心円文当て具痕 外面:降灰が付着	外面に他の個体の体部や砂粒が部着
14	S20010-4T	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚 1.6	—	—	—	—	灰	N7/	不良	粗雑 石英,長石,砂粒少量	内面:同心円文当て具痕 外面:摩滅のため不明	

第39図 鉄製出土土器観察表

1	20次-2T 包含層 16 1-19	土師器	高坏	脚部先端	—	9.7	(7.3)	—	—	橙	7.5YR7/6	不良	やや密 石英,長石,角閃石,砂粒少量	坏部内面:ミガキ,黒色処理 脚部外面:ヘラケズリ,脚部ヨコナデ, 脚部内面:ヘラナデ
2	20次-2T 包含層12	土師器	甕	口縁部～胴部上半 1/3	(11.6)	—	(6.4)	55.2	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良	やや密 石英,長石,角閃石,赤色粒微量	内面:ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ,胴部:ヘラナデ
3	20次-2T 包含層サブトレ内一括	須恵器	蓋	天井部	—	—	(1.9)	—	—	灰	N6/	良好	粗雑 石英,砂粒少量	内外面ロクロナデ
4	20次-3T2-1 (3T包含層)	かわらけ	小皿	口縁部1/3～胴部上半 1/2	9.5	1.6	5.6	58.9	16.8	にぶい橙	5YR6/4	良好	やや密 長石,白色針状物,砂粒少量	内面ロクロナデ 底部糸切痕
5	20次-2T1-5	土師器	坏	口縁部1/6～底部完存	(17.7)	—	5.2	(29.4)	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良	粗雑 石英,長石,白色針状物,砂粒少量	内面:ミガキ,黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ,体部下半～底部ヘラケズリ
6	20次-3T-22, 23	須恵器	甕	体部破片 資料	器厚0.7			—	—	灰黄	2.5Y6/2	良好	やや密 白色粒,黒色粒少量	内面:同心円文当て具痕 外面:平行タタキ
7	20次-2T カクラン	須恵器	瓶類	脚部破片 資料	—	—	(4.0)	—	—	灰	5Y4/1	良好	緻密 石英,長石,砂粒少量	内外面ともロクロナデ後ヘラナデ 外面:櫛状の沈線
8	20次-1T北L1	土師器	甕	底部1/4	—	(10.4)	(7.4)	—	—	橙	2.5YR6/6	良	粗雑 石英,長石,白色針状物,砂粒少量	内面:ヘラナデ 外面:櫛状ナデ,指ナデ	下端に輪積み痕残す

第40図町地区出土土師器観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	出土量(cm) 口径	底径	器高	口唇厚	口底厚	色調		焼成	胎土	調整	備考
1	SX0301	土師器	皿	口縁部～完存	20.4	—	(2.6)	—	—	黄橙	黒褐	良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内・外面：ミガキ、黒色処理	つまみ部欠損
2	SX0301	土師器	皿	口縁部1/4	21.4	—	(2.1)	(9.8)	—	黄橙	黒褐	良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内・外面：ミガキ、黒色処理	つまみ部欠損
3	SX0301	土師器	坏	完形	13.0	8.0	3.6	27.7	61.5	にぶい黄橙	10YR7/2	良好	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ	外・内面に油煙付着、灯明皿
4	SX0301	土師器	坏	口縁部3/4～底部完存	15.6	10.0	4.8	30.8	64.1	にぶい黄橙	10YR7/2	良	やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口～体部ロクロナデ 体部下端～底部回転ヘラケズリ	
5	SX0301	土師器	坏	口縁部4/5～底部完存	12.4	5.8	4.3	34.7	46.8	明褐灰	7.5YR7/2	不良	やや密 石英、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ 体部下端～底部回転ヘラケズリ	
6	SX0301	土師器	高台付坏	底部1/4	—	9.4	(3.3)	—	—	黄橙	黒褐	良好	やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒微量	内・外面：ミガキ、黒色処理	
7	SX0301	土師器	高坏	脚部	—	7.8	(4.2)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	不良	粗密 石英、長石、白色針状物、砂粒微量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 脚部内面：～ヘラナデ 外面：～ヘラケズリ	
8	SX0301	土師器	甕	口縁部2/3～底部完存	21.0	11.0	25.1	110.5	52.4	にぶい黄橙	7.5YR7/3	良	粗密 石英、長石、砂粒少量	内面：口縁部ヨコナデ 胴部～底部横位ヘラナデ 外面：胴部最位のヘラ目状の粗いヘラナデ 口～体部ヨコナデ、胴部下端ヘラケズリ	底部木葉痕。内面に輪積み痕残す。外面に煤付着。
9	SX0301	土師器	甕	口縁部～胴部1/5	11.5	—	(7.8)	(67.8)	—	浅黄橙	10YR8/4	不良	やや密 石英、長石、砂粒少量	内面：～ヘラナデ 外面：口～体部鉄分分着のため不明、ナデか	内面に輪積み痕残す。
10	SX0301	土師器	甕	底部1/2	—	8.8	(3.9)	—	—	灰白	2.5YR8/2	良	粗密 石英、砂粒少量	摩滅顕著。 内面：～ヘラナデ 外面：ケズリ	外面に油煙付着
11	SX0301	土師器	甕	底部完存	—	11.4	(4.4)	—	—	浅黄橙	10YR8/4	不良	粗密 石英、長石、砂粒多量	内面：調整不明 外面：～ヘラナデ	内面全面が黒く煤けている。
12	SX0301	土師器	高台付坏	底部3/4	—	9.6	(3.2)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	不良	緻密 白色針状物、黒色粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ	
13	SX0301	須恵器	甕	口縁部～体部	21.8	—	(13.8)	—	—	黄灰	2.5Y5/1	良好	粗密 石英、長石、砂粒少量	内面：口縁部ロクロナデ 体部指頭調圧か無文当て具痕 外面：口縁部ロクロナデ 体部平行タタキ	

第41図町地区出土土師器観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	口径	底径	器高	口唇厚	口底厚	色調		焼成	胎土	調整	備考
1	SB0301	土師器	皿	天井部1/4	—	—	(1.3)	—	—	黄橙	黒褐	良	やや密 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒少量	内・外面：ミガキ、黒色処理	
2	SB0301	土師器	坏	口縁部1/4～底部2/3	15.6	—	5.4	34.6	—	浅黄橙	10YR8/3	良	粗密 石英、砂粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	黒斑式
3	SB0301	土師器	高坏	坏部1/6～脚部（脚部欠損）	15.0	—	(6.0)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	粗密 石英、白色針状物、砂粒少量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 坏部外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 脚部内面：～ヘラナデ	
4	SB0301	土師器	高坏	坏部1/6～脚部（脚部欠損）	—	—	—	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	粗密 石英、長石、砂粒少量	坏部外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 脚部内面：～ヘラナデ 脚部外面：縦位ヘラケズリ	赤内黒、表面剥離ヵ
5	SB0301	土師器	高坏	脚部	—	—	(7.9)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	良好	やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒少量	坏部内面：ミガキ、黒色処理 脚部外面：縦位ヘラケズリ	
6	SB0301	土師器	甕	底部完存	—	6.8	(7.3)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/4	良	粗密 石英、砂粒多量	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体～底部ヘラケズリ	
7	SB0301	土師器	甕	底部完存	—	9.0	(5.6)	—	—	にぶい黄橙	7.5YR7/3	良	やや密 石英、砂粒少量	内面：～ヘラナデ 外面：胴部最位ハケ目後ヘラナデ 底部：木葉痕	底面に木葉痕残す。
8	SB0319	土師器	坏	底部完存	—	11.4	(1.6)	—	—			良		内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ、体部下端～底部回転ヘラケズリ	
9	SB0321	土師器	坏	口縁部1/4～底部完存	13.6	5.4	(4.7)	—	39.7	灰白	10YR8/2	良	やや密 石英、長石、白色針状物、橙色粒少量	内面：ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ロクロナデ、体部下端～底部手持ちヘラケズリ 油煙付	内面に煤付着残す。
10	SB0321	土師器	坏	底部完存	—	5.6	(3.1)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	粗密 石英、長石、角閃石、白色針状物、赤色	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ、体部下端～底部手持ちヘラケズリ	
11	SB0321	土師器	坏		—	5.2	(1.6)	—	—					内面：体～底部ミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部糸切り	
12	SB0321	須恵器	坏	底部1/2	—	7.0	(3.1)	—	—	灰白	10YR8/1	不良	やや密 石英、灰色粒、褐色粒少量	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ 底部ヘラ切り後ヘラナデ	
13	SB0336	須恵器	坏	底部1/5	—	7.6	(2.5)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	粗密 石英、長石、砂粒多量	内面：ロクロナデ 外面：体部下端～底部回転ヘラケズリ	
14	SB0337	赤焼土器	坏	口縁部2/3～底部完存	12.0	6.0	5.1	42.5	50.0	灰白	10YR8/2	不良	緻密 赤色粒微量	摩滅顕著で調整不明瞭。 内外面：ロクロナデ 外面：体部下端～底部手持ちヘラケズリ	
15	SB0337	土師器	坏	口縁部1/2～底部完存	12.6	7.8	3.7	29.4	61.9	浅黄橙	7.5YR8/3	不良	緻密 白色粒、橙色粒微量	摩滅顕著で調整不明瞭。 内外面：ロクロナデ 外面：体部下端～底部回転ヘラケズリ	

第42図町地区出土土師器観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	口径	底径	器高	口唇厚	口底厚	色調		焼成	胎土	調整	備考
1	SX0701	須恵器	横瓶	口縁部～底部	15.0	—	(35.7)	—	—			良好		口頸部ロクロナデ、胴部外面格子叩き、内面同心円文当て具痕	叩き
2	SX0701	須恵器	横瓶	口縁部～胴部	14.8	—	(11.8)	—	—			良好		口頸部ロクロナデ、胴部外面格子叩き、内面同心円文当て具痕	叩き

第42図町地区出土土器②観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口高指数	底径指数	色調	成或	胎土	調整	備考
3	SX0701	須恵器	壺	口縁部～底部	22.0	—	(43.1)	—	—		良好		口縁部ロクロナデ、胴部外面平行叩き、内面縦心円文当て具痕	

第43図町地区出土土器①観察表

1	SD0710	土師器	高坏	坏部～脚部(口縁部、脚部欠損)	—	—	(7.0)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、橙色粒少量	坏部内面:ミガキ 坏部～脚部外面:縦位ヘラケズリ 脚部内面:横位ヘラナデ
2	SD0710	土師器	甕	口縁部～脚部1/5	11.9	—	(4.3)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:口縁部～胴部横位ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ
3	SD0710	土師器	甕	口縁部～脚部1/4	13.6	—	(8.6)	—	—	明褐	7.5YR5/6	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:口縁部～胴部横位ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、胴部縦位ハケ目
4	SD0710	土師器	甕	胴部1/4～底部3/4	—	—	7.0	(7.0)	—	にぶい黄橙	10YR6/4	良	粗雑 長石、金雲母、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:胴部ヘラナデ、底部ヘラナデ、底部木葉痕有
5	SD0710	土師器	甕	口縁部2/3～胴部1/4	16.7	—	(12.2)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内・外面:口縁部ヨコナデ、外面胴部縦位ヘラナデ、内面胴部横位～斜位ヘラナデ
6	SD0711	土師器	高坏	脚部ほぼ完存	—	—	(8.8)	—	—	明赤褐	5YR5/6	良	石英、長石、角閃石、砂粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 脚部外面:縦位ヘラケズリ 脚部内面:横位ヘラケズリ
7	SD0711	土師器	甕	胴部～底部3/4	—	7.0	(7.0)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良	やや密 石英、白色針状物、赤色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:胴部ヘラナデ、底部ヘラケズリ
8	SD0711	土師器	甕	底部完存	—	8.6	(2.3)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:底部ヘラナデ 外面:胴部下端～底部ヘラナデ
9	SD0712	土師器	甕	口縁部～胴部1/3	—	—	(20.0)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:口縁部横位ハケ目、胴部横位ヘラナデ 外面:口縁部～胴部縦位ハケ目
10	SD0705L2	赤褐土器	高台付坏	底部1/3	—	7.8	(2.2)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ
11	SD0709底面	須恵器	高坏	坏部ほぼ完存～脚部(脚部欠損)	14.6	—	(11.1)		—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、灰色粒少量	坏部内外面:ロクロナデ 脚部内外面:ロクロナデ 坏部外面の底部は、脚部接合面に封板ヘラケズリ 長脚2段透かし(三角形)
12	SD0705	須恵器	盤	口縁部破片資料	—	—	(2.1)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内面:ロクロナデ後底面のみヘラナデ 外面:ロクロナデ、底部のみカキ目か回転によるヘラナデ
13	SK0709	土師器	坏	口縁部1/10	13.6	—	(2.9)	—	—	にぶい橙	7.5YR5/4	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ、口縁部に巻き上げ痕残す。
14	SK0709	土師器	坏	口縁部1/10	14.1	—	(2.5)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/3	良	粗雑 石英、白色針状物、砂粒微量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ、口縁部に巻き上げ痕残す。
15	SK0709	土師器	高坏	坏部～脚部(口縁部、脚部欠損)	—	—	(7.0)	—	—	浅黄橙	10YR8/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、橙色粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 坏部～脚部外面:縦位ヘラケズリ 脚部内面:横位ヘラナデ
16	SK0709	かわらけ	坏	口縁部1/5～底部3/4	10.1	6.8	1.9	18.8	67.3	にぶい黄橙	10YR6/3	良好	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部糸切り
17	SK0709	かわらけ	皿	底部完存	—	4.4	(1.3)	—	—	淡橙	5YR6/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部糸切り

第44図町地区出土土器②観察表

1	SX0712	土師器	高坏	坏部1/10～脚部4/4	11.6	8.8	(8.6)	—	75.9	浅黄橙	10YR8/3	良	やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 坏部外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 脚部外面:柱状部縦位ヘラケズリ、裾部ヨコナデ、脚部内面横位ヘラナデ
2	SX0717	土師器	高坏	坏部～脚部	—	10.7	(8.1)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 脚部外面:柱状部縦位ヘラケズリ、裾部ヨコナデ、 脚部内面:柱状部縦位ヘラナデ、裾部横位ヘラナデ
3	SX0717	須恵器	蓋	口縁部破片資料	—	12.7	(2.9)	—	—	灰	7.5Y5/1	良好	粗雑 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ
4	SX0729	土師器	鉢か鉢	底部	—	8.5	(4.9)	—	—	橙	7.5YR7/6	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:体～底部ミガキ、黒色処理 外面:体～底部ヘラケズリ
5	SX0723	土師器	甕	口縁部	20.1	—	(3.3)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/4	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、褐色粒多量	内面:口縁部横位ハケ目 外面:口縁部縦位～斜位ハケ目
6	SX0723	土師器	甕	底部完存	—	7.5	(3.8)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:胴部縦位ヘラナデ 底部ヘラナデ
7	SX0725	須恵器	ハソウ	口縁部1/5	9.3	—	(2.7)	—	—	灰	5Y4/1	良好	やや密 砂粒、黒色粒微量	内外面ロクロナデ
8	SX0728	土師器	高坏	脚部1/5	11.3	—	(3.6)	—	—	橙	7.5YR6/6	良好	粗雑 石英、角閃石、金雲母、砂粒少量	脚部内面:ヨコナデ 外面:縦位ヘラケズリ後ヨコナデ
9	SX0729	土師器	甕	口縁部破片資料	20.0	—	(5.9)	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:口縁部ヨコナデ、体部横位ヘラナデ 外面:口縁ヨコナデ、体部縦位ハケ目
10	SX0725	土師器	鉢	口縁部	19.1	—	(4.7)	—	—	明赤褐	5YR5/6	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:口縁部横位ハケ目 外面:口縁部横位ハケ目後縦位ハケ目
11	SB0731P6	須恵器	鉢か	体部～底部1/2	—	6.0	(5.0)	—	—	灰白	10YR7/1	良好	緻密 黒色粒微量	内面:体～底部ロクロナデ 外面:体部下端～底部手持ちヘラケズリ
12	SD0726	土師器	高坏	脚部(脚部欠損)	—	—	(4.6)	—	—	橙	7.5YR6/6	良	粗雑 石英、角閃石、白色針状物、砂粒、赤色粒多量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 脚部外面:縦位ヘラケズリ、半月形透かしと長方形透かし

第44図町地区出土土器①観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁指数	底部指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
13	SB0732P12	土師器	坏	口縁部～底部1/3	15.8	—	(3.8)	—	—	灰黄褐 10YR6/2	良好	粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒少量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	須恵式
14	SB0732P6	土師器	坏	口縁部～底部1/2	13.8	—	(3.2)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	粗雑 砂粒、白色針状物少量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラナデ	
15	SB0734P6	土師器	甕	胴部破片資料	—	—	(3.5)	—	—	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	やや密 石英、砂粒、赤色粒少量	内面：横位ハケ目、ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦位ハケ目	須恵式

第45図町地区出土土器②観察表

1	SD0901L1	土師器	鉢	口縁部1/10	21.4	—	(2.6)	—	—	灰黒	良好	やや密 石英、砂粒少量	内・外面：ミガキ、黑色処理	灰黑
2	SD0901	土師器	坏	口縁部1/3	21.4	—	(5.7)	—	—	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	粗雑 石英、白色針状物、砂粒少量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ	
3	SD0901L4	土師器	椀	口縁部～底部1/4	17.0	—	8.7	51.2	—	にぶい黄橙 10YR7/3	良	粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒少量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ後ヘラナデ	内面の黑色処理の除雪が一部残っている。
4	SD0901	土師器	椀か坏	口縁部1/4	16.3	—	(5.1)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒少量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口～体部ヘラナデ	
5	SD0901L4	土師器	坏	口縁部2/5～底部完存	14.6	—	(4.5)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	不良	粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ヘラナデ	
6	SD0901L1	土師器	坏	口縁部1/4	15.1	—	(3.5)	—	—	灰黄褐 10YR5/2	不良	やや密 白色針状物、砂粒微量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ、ヘラケズリ	
7	SD0901L2	土師器	坏	口縁部1/2	15.1	—	(3.1)	—	—	にぶい橙 7.5YR7/3	良好	粗雑 石英、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデか	
8	SD0901L1	土師器	坏	口縁部1/4	14.6	—	(3.2)	—	—	にぶい黄橙 10YR6/3	不良	やや密 白色針状物、砂粒微量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデか	
9	SD0901L1	土師器	坏	口縁部2/5	12.8	—	(3.4)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	良	やや密 石英、白色針状物、砂粒微量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ	
10	SD0901	土師器	坏	口縁部1/4	14.7	5.5	(3.0)	—	37.4	灰黄褐 10YR6/2	良	粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒少量	内面：ミガキ 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	井内墨
11	SD0901L1	土師器	坏	口縁部1/5	17.1	—	(3.2)	—	—	明赤褐 2.5YR5/6	不良	粗雑 白色針状物、砂粒少量	内面：調整不明 外面：口縁部～底部ヘラケズリ後ヘラナデか	井内墨だが、2次的な被熱による赤化がみられ、底表が煤んだが、内面に墨付着。
12	SD0901L1	土師器	坏	底部2/5	—	9.0	(2.5)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	不良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒少量	内面：ミガキ、黑色処理 外面：ロクロナデ、体部下端～底部回転ヘラケズリ	
13	SD0901	土師器	高坏	脚柱部のみ1/4	—	9.2	(2.8)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	脚部内面：横位ヘラナデ 脚部外面：ヨコナデ後に縦位ヘラケズリ	
14	SD0901	土師器	高坏	脚部1/4	—	8.4	(5.6)	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、橙色粒少量	内面：脚裾部～柱状部横位ヘラナデ 外面：脚裾部ヨコナデ、柱状部ナデ	
15	SD0901L4	土師器	甕	口縁部2/3～底部完存	16.4	7.5	25.5	166.6	48.7	にぶい黄橙 10YR7/3	良	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒	内面：口縁部ヨコナデ、胴部高原横位ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦位ハケ目、胴部下端横位ヘラケズリ、底部木葉痕	底部木葉痕、胴部の1/3正全面が煤けている。
16	SD0901L4	土師器	甕	口縁部～胴部1/3	15.2	—	(6.6)	—	—	灰褐 7.5YR6/2	良	粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面：口縁部～胴部横位ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘラナデ	
17	SD0901L1	土師器	甕	口縁部～胴部1/4	21.7	—	(9.1)	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	良	粗雑 石英、長石、金雲母、砂粒、赤色粒少量	内面：口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横位ヘラナデ、内面に輪積み痕を残す。	

第46図町地区出土土器②観察表

1	SD0901L4	土師器	甕	口縁部～底部ほぼ完存、胴部の一部欠損	15.4	8.4	15.3	99.4	54.5	明褐灰 7.5YR7/2	良	粗雑 長石、白色針状物、砂粒少量	内面：口縁部ヨコナデ、胴部～底部横位ヘラナデ 外面：口縁部ヘラによるヨコナデ 胴部横位～最位の丸棒なヘラナデ～指輪痕を残す。	被熱による赤化、黑斑が底部全体から口縁部の一部におよぶ。
2	SD0901L4	土師器	甕	口縁部～胴部1/5	19.9	—	(14.1)	—	—	灰黄褐 10YR6/2	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面：口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦位ヘラナデ	胴部中位に煤付着
3	SD0901L6	土師器	甕	底部完存	—	8.9	(4.0)	—	—	浅黄橙 10YR8/3	良	石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒、赤色粒多量	内面：ヘラナデ 外面：胴部下端～ケズリ後ヘラナデ、底部に木葉痕残す。	
4	SD0901L4	土師器	甕	底部完存	—	7.4	(2.5)	—	—	にぶい黄橙 10YR6/3	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面：ヘラナデ 外面：胴部下端～底部ヘラケズリ	
5	SD0901L4	土師器	甕	底部1/2	—	8.2	(3.2)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面：ヘラナデ 外面：胴部下端ヘラケズリ 底部木葉痕	
6	SD0901L2	土師器	甕	底部1/2	—	8.6	(6.4)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	良	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒多量	内面：ヘラナデ 外面：胴部～底部ヘラナデ	
7	SD0901L6	土師器	甕	底部2/5	—	7.1	(2.9)	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	良	粗雑 石英、砂粒少量	内面：ヘラナデ 外面：胴部下端ヘラナデ 底部木葉痕	
8	SD0901L4	土師器	甕	底部完存	—	6.7	(2.6)	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	良	粗雑 石英、角閃石、砂粒少量	内面：ヘラナデ 外面：胴部下端～底部外周ヘラナデ、一部木葉痕残す	
9	SD0901L1	土師器	甕	底部2/5	—	8.0	(3.6)	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面：ヘラナデ 外面：胴部下端ヘラナデ 底部に木葉痕残す	

第46図町地区出土土器①観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁指数	口底指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
10	SD0901L1	土師器	甕	底部完存	—	8.0	(2.4)	—	—	浅黄橙	10YR6/3	良	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒、鳥色粒少量	内面:ヘラナデ 外面:胴部下端～ヘラケズリ後ヘラナデ 底面木葉痕
11	SD0901L1	赤焼土器	坏	底部3/4	—	6.0	(1.9)	—	—	橙	5YR7/6	不良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部糸切り
12	SD0901L1	赤焼土器	高台付坏	底部1/4	—	9.3	(2.7)	—	—	橙	5YR6/6	不良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内外面ロクロナデ
13	SD0901L1	赤焼土器	台付坏	底部1/2	—	—	(2.4)	—	—	にぶい橙	2.5YR7/3	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ
14	SD0901L4	須恵器	蓋	口縁部1/3～天井部端在存	19.0	—	3.2	16.8	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付け後ロクロナデ調整
15	SD0901L6	須恵器	蓋	口縁部1/3	—	17.8	(1.6)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ
16	SD0901L4	須恵器	蓋	口縁部1/4	—	18.7	(1.5)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ
17	SD0901L4	須恵器	蓋	口縁部1/4	—	18.9	(1.3)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ
18	SD0901L1	須恵器	高台付坏	ほぼ完形	15.2	10.6	4.6	30.3	69.7	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 体～底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け、ロクロナデ調整	底面に墨状後漆剤で「男」
19	SD0901	須恵器	高台付坏	口縁部1/20～底部1/3、高台測欠	16.6	—	(3.7)	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け、ロクロナデ調整	焼化墨痕成。
20	SD0901L4	須恵器	高台付坏	口縁部1/3～底部1/4	16.6	10.6	3.8	22.9	63.9	灰	5Y5/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け、ロクロナデ調整	
21	SD0901L1	須恵器	坏	口縁部1/10	16.8	—	(2.6)	—	—	褐灰	10YR4/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ	
22	SD0901L4	須恵器	甑	口縁部1/2	12.4	—	(8.7)	—	—	褐灰	10YR5/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ	
23	SD0901L2	須恵器	平瓶	口縁部のみ完存	8.6	—	(6.2)	—	—	暗灰	N3/	良好	やや密 石英、砂粒、砂粒微量	内外面ロクロナデ	内外面漆付着。

第47図町地区出土土器②観察表

1	SK0961	かわらけ	坏	底部完存	—	5.9	(1.3)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/3	良	粗雑 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部糸切り	
2	SK0906	土師器	高坏	脚部	—	—	(4.1)	—	—	灰白	10YR8/2	良	粗雑 石英、角閃石、砂粒多量	外部内面:ミガキ、黒色処理 脚部外面:縦位ヘラケズリ、脚部内面:横位ヘラケズリ	
3	SK0908	土師器	坏	底部1/2	—	6.8	(1.2)	—	—	浅黄橙	10YR8/3	良	石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端～底部回転ヘラケズリ	
4	SK0908	赤焼土器	高台付坏	底部1/4	—	6.0	(2.2)	—	—	浅黄橙	7.5YR8/3	良好	やや密 石英、長石、角閃石、赤色粒微少量	内面:ロクロナデ 外面:底部本切痕、高台貼り付け、ロクロナデ調整	
5	SK0913L9	土師器	鍋か鉢	底部	16.7	7.5	4.7	28.1	44.9	灰褐	7.5YR5/2	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ナデ、体～底部ヘラケズリ後に粗いハケナデ	丸底
6	SK0913L9	土師器	坏	口縁部2/3～底部4/5	14.5	9.6	2.8	19.3	62.1	にぶい黄	7.5YR6/3	良好	やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部～体部ヨコナデ、体部下端～底部ヘラケズリ	平底底丸底
7	SK0913L9	土師器	坏	口縁部～底部1/2	13.4	—	4.5	29.2	—			良好	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、褐色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 口縁部と底部の境界に巻き上げ痕残す。	
8	SK0913L9	土師器	坏	口縁部1/5	13.6	5.5	(3.1)	—	40.4	にぶい橙	5.YR7/3	良	粗雑 石英、砂粒、赤色粒多量	内面:口縁部付近横位ミガキ 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	赤内黒、開東系ヵ
9	SK0913L9	土師器	坏	口縁部1/3	14.1	6.5	(3.5)	—	46.1	浅黄橙	7.5YR8/3	良好	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒多量	内面:ミガキ 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	赤内黒、開東系ヵ
10	SK0913L9	土師器	坏	口縁部1/6	14.1	—	(4.0)	—	—	灰白	10YR8/2	良	粗雑 石英、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	赤内黒、開東系ヵ
11	SK0913L9	土師器	坏	口縁部1/6	11.7	—	(3.3)	—	—	にぶい橙	7.5YR7/3	良	粗雑 石英、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ	赤内黒、開東系ヵ
12	SK0913L9	土師器	坏	口縁部1/5	16.3	—	(2.6)	—	—	明褐灰	7.5YR7/2	不良	粗雑 石英、砂粒少量	内面:ナデ 外面:ヘラナデか。	赤内黒、開東系ヵ
13	SK0913L9	土師器	坏	体部	—	—	(5.4)	—	—	褐灰	5YR5/1	良	粗雑 石英、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	
14	SK0913L3	土師器	鉢	口～底部	16.5	6.5	4.9	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4			内面:体～底部ミガキ、黒色処理 外面:体～底部ヘラケズリ	
15	SK0913L8	土師器	壷か鉢	口縁部1/4	19.1	—	(4.6)	—	—	にぶい赤褐	5YR5/3	不良	粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒、赤色粒多量	内面:口縁部ヨコナデ 外面:口縁部横位～ヘラナデ、一部縦横痕残す。体部横位ヘラケズリ	
16	SK0914	土師器	甕	胴部～底部2/3	—	8.5	(6.8)	—	—	橙	5YR6/6	不良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:胴部～底部横位ヘラナデ 外面:胴部～底部縦位ヘラケズリ	ロクロ使用の懸ヵ
17	SX0901L1	土師器	鉢	口縁部1/6～底部完存	20.2	10.0	(8.2)	—	49.5	にぶい橙	5.YR6/2	不良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:摩滅のため不明。ヘラケズリ後ヘラナデか。外面に巻き上げ痕残す。	
18	SX0901L1	土師器	甕	口縁部1/10	26.8	—	(3.7)	—	—	橙	5YR6/6	不良	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒、赤色粒多量	内外面ロクロナデ	

第47図町地区出土土器③観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁指数	口底指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
19	S30901L1	弧底器	壺	口縁部1/10	27.0	—	(2.6)	—	—	にぶい赤橙 5YR5/3	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ	酸化焔焼成。
20	表土	土師器	鉢	胴部下端1/4	—	10.6	(10.5)	—	—	にぶい橙 7.5YR7/3	良	緻密 石英、砂粒、赤色粒少量	内面:横方向ミガキ、胴部下端横位ヘラケズリ後横位ミガキ 外面:横方向ミガキ、胴部下端ヘラケズリ後ヘラナデ	
21	表土	弧底器	平鉢	体部破片 資料	—	—	(4.0)	—	—		良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 体部下端回転ヘラケズリ	内面の全面と外面、底面に一部に黒付着。

第48図町地区出土土器②観察表

1	G13-27	土師器	壺	つまみ～天井部	—	—	(2.0)	—	—	灰黒	良	やや密 白色針状物、砂粒少量	内・外面:ミガキ、黒色処理	リング状つまみ
2	G13-67	土師器	壺	つまみ～天井部	—	—	(2.1)	—	—	灰黒	良	やや密 石英、針状物、砂粒少量	内・外面:ミガキ、黒色処理	リング状つまみ
3	G13-47	土師器	壺	つまみ～天井部	—	—	(2.0)	—	—	灰黒	良	やや密 石英、針状物、砂粒少量	内・外面:ミガキ、黒色処理	リング状つまみ。つまみ部中央に線刻あり。
4	G13-57	土師器	壺	口縁部～天井部1/4	—	22.0	(4.0)	—	—	灰黒	良好	やや密 石英、針状物、砂粒多量	内・外面:ミガキ、黒色処理	
5	G13-63	土師器	坏	口縁部1/3～底部完存	14.4	9.2	4.5	31.3	63.9	浅黄橙 10YR8/3	良	粗雑 石英、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	
6	G13-53	土師器	坏	口縁部～底部1/4	14.2	—	(4.5)	—	—	灰白 10YR8/2	良	やや密 石英、白色針状物少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	外面に巻き上げ痕残す。
7	–	土師器	坏	口縁部～底部2/3	12.8	7.4	4.2	32.8	57.8	灰黄褐 10YR6/2	良	やや密 石英、砂粒微量	内面:ミガキ 外面:口縁部ヨコナデ、体部指頭押圧、体部下端～底部ヘラケズリ	内面全体煤付着
8	G13-67	土師器	坏	口縁部～底部1/3	12.2	—	(4.3)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	
9	–	土師器	坏	ほぼ完形	14.8	7.8	4.3	29.1	52.7		良	やや密 石英、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、体部～ヘラナデ、底部ヘラケズリ	内面に漆付着
10	G13-51	土師器	坏	口縁部1/3～底部1/2	13.6	6.8	4.3	31.6	50.0	にぶい黄橙 10YR7/3 不良		やや密 石英、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 体部下端～底面手持ちヘラケズリ	
11	G13-30	土師器	坏	口縁部1/6～底部完存	12.8	5.8	4.6	35.9	45.3	灰白 10YR8/1 不良		粗雑 石英、砂粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 底部ヘラ切り後、静止下端～底部ヘラナデ	
12	G13-30	土師器	坏	口縁部1/2～底部完存	13.0	6.6	3.9	30.0	50.8	灰白 10YR8/2 不良		粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 底部摩滅のため不明、ヘラナデか	
13	G13-63	土師器	坏	口縁部1/29～底部完存	14.4	6.0	4.7	32.6	41.7	浅黄橙 7.5YR8/3 不良		粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、橙色粒少量	摩滅顕著で調整不明瞭。 内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 体部下端～底部ヘラケズリか	
14	G13-52	土師器	坏	口縁部1/29～底部完存	12.0	6.0	3.6	30.0	50.0	浅黄橙 7.5YR8/3 不良		やや密 石英、砂粒、赤色粒少量	摩滅顕著で調整不明瞭。 内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ体部下端～底部ヘラケズリか	
15	G13-54	土師器	坏	口縁部～底部2/3	13.9	8.6	3.2	23.0	61.9	浅黄橙 10YR8/3 不良		やや密 砂粒少量	摩滅顕著で調整不明瞭。 内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端～底部回転ヘラケズリ	
16	G13-53	土師器	鉢	底部完存	—	8.4	(4.0)	—	—	灰白 10YR8/2 不良		やや密 石英、砂粒少量	摩滅顕著で調整不明瞭。 内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 体部下端～底面ヘラケズリか	
17	G13-57	土師器	椀	底部4/5	—	7.4	(1.9)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2 不良		やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ、体部下端～底面回転ヘラケズリ	
18	G13-69	土師器	椀	底部1/2	—	9.0	(3.2)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2 良		粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 底部糸切り後、体部下端～底部外周回転ヘラケズリ	
19	G13-67	土師器	高台付坏	底部1/6	—	8.8	(3.4)	—	—	浅黄橙 10YR8/3 不良		粗雑 石英、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:底部ヘラケズリ後、高台貼り付	非ロクロ
20	G13-61	土師器	高台付坏	底部1/2	—	7.8	(2.9)	—	—	浅黄橙 10YR8/3 不良		粗雑 石英、長石、白色針状物、赤色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ	
21	G13-83	土師器	高坏	坏部1/20～脚部1/3完存	16.8	10.8	10.9	64.9	64.3	浅黄橙 10YR8/3 良好		粗雑 石英、長石、白色針状物、赤色粒少量	坏部内面:ミガキ、黒色処理 坏部外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 脚部外面:脚部付状部縦位ヘラケズリ、脚部横ナデ 脚部内面ヘラナデ	
22	G13-44	土師器	高坏	脚部1/2	—	10.6	(3.0)	—	—	灰黄褐 10YR5/2 良		粗雑 石英、白色針状物、砂粒少量	外面:脚部縦位ヘラナデ、柱状部付近はヘラケズリ 脚部内面ヘラナデ	
23	G13-44	赤焼土器	坏	口縁部1/2～底部完存	13.9	5.6	4.0	28.8	40.3	灰白 10YR8/2 不良		粗雑 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ 底面ヘラナデ	
24	G13-51	赤焼土器	坏	口縁部1/3	13.0		(3.4)		0.0	浅黄橙 7.5YR8/3 良		粗雑 石英、砂粒少量	内外面ヨコナデ	
25	G13-44	赤焼土器	高台付坏	口縁部1/6～底部4/5	14.8	8.4	5.9	39.9	56.8	橙 5YR7/6 良		粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内外面ロクロナデ	
26	G13-53	赤焼土器	高台付坏	底部完存～高台1/2	—	8.4	(2.6)	—	—	にぶい橙 5YR6/4 良好		粗雑 石英、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台貼り付け、ロクロナデ調整	
27	G12-55	赤焼土器	皿	口縁部～底部2/3	9.4	5.0	1.8	19.1	53.2	灰白 7.5YR8/2 不良		粗雑 赤色粒少量	内外面ロクロナデ 底面ヘラナデ	

第49図町地区出土土器③観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁厚	口底厚	色調	焼成	胎土	調整	備考
28	G13-52	赤焼土器	坏	口縁部1/4～底部近存	8.2	5.8	2.1	25.6	70.7	にぶい橙	不良	粗雑 石英、白色砂状物、砂粒多量、赤色粒少量	内外面ロクロナデ 外面体部下端ヘラナデ 底部糸切り

第50図町地区出土土器⑩観察表

1	G13-54	須恵器	蓋	つまみ～天井部	3.0	—	(2.8)	—	—	灰	N6/	良好	精良・緻密 長石、灰色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後、天井部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ロクロナデ調整
2	G13-33	須恵器	蓋	つまみ～天井部	3.0	—	(1.7)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	やや密 長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後、天井部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ロクロナデ調整
3	G13-63	須恵器	蓋	つまみ～天井部	3.8	—	(2.7)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	やや密 石英、長石、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後、天井部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ロクロナデ調整
4	G13-54	須恵器	蓋	つまみ	4.0	—	(1.3)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 長石、砂粒少量	ロクロナデ 刻雑面に黒巻き状のキザミ	つまみのみ刻雑
5	G13-38	須恵器	蓋	口縁部～天井部1/4	—	16.6	(1.5)	—	—	明褐灰	7.5YR7/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ	瀬西産a
6	G13-53	須恵器	蓋	天井部	—		(2.0)	—	—	灰白	10YR7/1	良好	粗雑 石英、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ	天井部にヘラ記号「×」a
7	G13-57	須恵器	坏	口縁部1/4	—	16.0	(3.0)	—	—	灰白	10YR7/1	良好	緻密 白色粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ	高台付か
8	G13-54	須恵器	坏	口縁部～底部1/4	13.8	—	3.2	23.2	—	灰	N6/	良好	やや密 石英、長石、砂粒多量	内外面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部糸切り	
9	G13-44	須恵器	坏	底部1/3	—	6.6	(1.4)	—	—	灰	7.5Y5/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、底部切り離し後(ヘラ削り)a)底面ヘラナデ	
10	G13-50	須恵器	坏	底部1/3	—	8.4	(2.7)	—	—	灰白	N7/	良好	やや密 石英、長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、底部ヘラ切り後、底面ヘラナデ	
11	G9-8	須恵器	坏	底部1/3	—	6.0	(2.4)	—	—	灰	7.5Y5/1	良好	粗雑 砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、底部切り離し(ヘラ切り)a)後底面ヘラナデ	
12	G13-65	須恵器	横瓶	口縁部～体部1/6	15.8	—	(5.0)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良	やや密 長石、白色針状物少量	内外面ロクロナデ	
13	G13-66	須恵器	坏	底部1/3	—	9.8	(1.4)	—	—	灰白	10YR7/1	不良	粗雑 石英、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、底部切り離し後、体部下端～底面回転ヘラケズリ	
14	G13-53	須恵器	坏	底部1/6	—	9.2	(3.8)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 長石、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、体部下端～底面手持ちヘラケズリ	内面に漆とみられる付着物あり。
15	G13-68	須恵器	高台付坏	口縁部1/20 底部1/5	12.6	11.0	4.1	32.8	87.3	灰	5Y5/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ	
16	G13-54	須恵器	高台坏	底部1/4	—	8.4	(3.6)	—	—	褐灰	10YR4/1	良好	緻密 長石、砂粒、黒色粒少量	内面:体～底部ロクロナデ 外面:体部ロクロナデ、底面回転ヘラケズリ	
17	G13-56	須恵器	長頸瓶	底部1/4	—	8.0	(3.6)	—	—	灰	5Y4/1	良好	緻密 砂粒微量	内外面ロクロナデ	
18	G13-55	須恵器	長頸瓶	口縁部～肩部1/4	16.0	—	(9.7)	(97.6)	—	褐灰	5YR6/1	良好	やや密 砂粒微量	内～肩部ロクロナデ 外面:口～体部ロクロナデ	口縁部に暗緑色の自然釉
19	G13-63	須恵器	長壺	底部	—	—	(3.2)	—	—	暗灰	N3/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ後、体部下端～底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け、ロクロナデ調整	内面摩滅、擬胎か。
20	G13-42	須恵器	鉢	体部～底部1/3	—	11.0	(5.1)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	緻密 長石、黒色粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底面ヘラナデ	
21	G13-62	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(3.7)	—	—	灰白	2.5Y7/1	良	やや密 長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ調整	
22	G13-34	須恵器	鉢	口縁部破片資料	—	—	(4.2)	—	—	褐灰	10YR6/1	良好	粗雑 砂粒少量	内外面ロクロナデ調整	
23	G13-34	須恵器	長頸瓶	口縁部破片資料	—	—	(4.8)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	やや密 長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ調整	
24	G13-40	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(2.8)	—	—	褐灰	10YR6/1	良好	やや密 長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ調整	内面および破面の一部に自然釉
25	G13-58	須恵器	形面紙	破面1/3	14.4	—	(2.8)	—	—	灰	N5/	良好	緻密 石英、長石微量	内面:ロクロナデ後一部ヘラナデ 外面:ロクロナデ	押部に十字透かし、破面外周にヘラ掻きでは形文。破面に擦痕。
27	G12-59L	須恵器	風字紙	破面1/4	長さ9.6		厚さ1.0	—	—	褐灰	10YR6/1	良好	緻密 黒色砂粒多量	破面:ナデ 裏面:ヘラケズリ	破面が摩滅。

第50図町地区出土土器⑪観察表

1	5T	土師器	坏	口縁部1/2～底部1/3	15.5	—	3.9	25.2	—	灰黄褐	10YR6/2	良好	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	柴田式
2	6T	土師器	坏	底部1/6	—	6.8	(1.9)	—	—	灰黄褐	10YR5/2	良	やや密 石英、長石、白色針状物	内面:ミガキ、黒色処理 外面:ロクロナデ 底面糸切り	底部墨書(文字不明)
3	6T	土師器	坏	口縁部～底部1/6	17.0	—	(3.3)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良好	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒、赤色砂少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ、口縁部と底部の境界ナデ	
4	6T	土師器	坏	口縁部～底部1/6	11.8	5.2	3.4	28.8	44.1	にぶい橙	7.5YR6/4	良	やや密 石英、角閃石、白色針状物、赤色砂少量	内面:ミガキ(黒色処理?) 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	非内黒の可能性あり
5	6T	土師器	蓋	口縁部1/10	9.8	—	—	—	—	にぶい黄橙	10YR7/4	不良	やや密 石英、砂粒少量	内外面ロクロナデ	

第50図町地区出土土器⑩属性表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁指数	口底指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
6	6T	土師器	坏・小椀	口縁部～底部1/5	12.4	—	(4.1)	—	—	浅黄橙	10YR8/4	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:ヨコナデ 外面:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ、口縁部外面に輪積痕残す。
7	6T	土師器	甕	口縁部～胴部1/10	16.2	—	(2.3)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/4	不良	粗雑 石英、砂粒多量	内面:口縁部～胴部ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ
8	G8-84 ピット群Ⅱ	土師器	壺	口縁部～胴部1/5	—	—	(6.2)	—	—	明赤褐	5YR5/6	良	粗雑 石英、砂粒少量	内面:口縁部横位ヘラナデ、胴部ヘラナデ 外面:口縁部ヨコナデ、胴部縦位～斜位ハケ目
9	5T	土師器	甕	底部1/4	—	9.5	(5.7)	—	—	にぶい橙	5YR6/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:ハケ目後ヘラナデ 底部木葉痕 底部木葉痕 残す。
11	G9-35	土師器	甕	底部完存	—	7.5	(5.5)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ヘラナデ 外面:胴部下端ヘラナデ、底部ヘラケズリ
12	6T	須恵器	蓋	口端部1/10	—	8.2	(1.6)	—	—	褐灰	10YR4/1	良好	粗雑 長石、砂粒微量	内外面:ロクロナデ
13	6T	須恵器	蓋	口端部1/5	—	9.3	(1.7)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ
14	6T	須恵器	蓋	つまみ～天井部	—	—	(2.0)	—	—	褐灰	10YR5/1	良	粗雑 長石、砂粒少量	内外面:ロクロナデ
15	G9-58	須恵器	坏	口辺完形	9.1	3.4	5.6	61.5	36.8	褐灰	10YR5/1	良好	粗雑 長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ
16	7T	須恵器	坏	口縁部～底部1/2	8.2	—	3.1	37.8	—	灰	N4/	良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、底部外周回転ヘラケズリ、ヘラナデ
17	表採	須恵器	高坏	脚部(裾部欠損)	—	—	(5.7)	—	—	灰	N4/	不良	やや密 砂粒微量	脚部内面:ヘラナデ、脚部が外面ロクロナデ、長脚2段透かし(2方向、三角形)。 17・18は同一個体か
18	6T	須恵器	高坏	脚部1/6	—	10.6	(3.2)	—	—	灰	N4/	不良	やや密 砂粒微量	内外面ロクロナデ
19	蔵屋4区	須恵器	鉢ヵ	口縁部～底部1/3	16.9	—	(7.7)	—	—	灰	5Y5/1	良好	やや密 長石、砂粒少量	内面:ロクロナデ 外面:体部下端回転ヘラケズリ後ロクロナデ 底部内面に自然釉。
20	6T	須恵器	鉢ヵ	口縁部1/10	19.6	—	(3.4)	—	—	灰黄褐	10YR6/2	良好	粗雑	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、ロクロ沈線2条
21	蔵屋4区	須恵器	長頸瓶	頸部～肩部1/2	—	—	(6.0)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/3	良好	緻密 長石、石英、黒色粒微量	内面:体部ロクロナデ 外面:体部ロクロナデ
22	B11-28L1	土師器	坏	口辺完形	14.8	9.0	5.0	33.8	60.8	浅黄橙	10YR8/3	不良	粗雑 石英、長石、砂粒多量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 底部ヘラケズリ	栗囲式
23	B11-00表土	土師器	坏	口縁部1/6～底部1/10	15.7	7.0	(4.4)	—	44.6	にぶい黄橙	10YR6/3	良	粗雑 石英、砂粒、黒色粒少量	内面:ミガキ、黒色処理 外面:口縁部横位ヘラケズリ後ヨコナデ、底部ヘラケズリ	栗囲式
24	G19-88L2	須恵器	円筒埴	胴部～脚部1/5	—	—	(5.0)	—	—	褐灰	10YR6/1	良好	緻密 長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ、脚部にヘラ描き山形文ヵ	複面摩滅。
25		須恵器	円筒	脚部										
26	B11-00表土	かわらけ	坏	口縁部～底部1/5	13.4	8.4	2.9	21.6	62.7	灰黄褐	10YR6/2	良	粗雑 石英、角閃石、砂粒少量	内外面ロクロナデ 底面手持ちヘラケズリ
27	B11-00表土	かわらけ	坏	口縁部～底部1/5	11.9	7.2	3.1	26.2	60.8	にぶい黄橙	10YR6/3	良	粗雑 砂粒少量	内外面ロクロナデ 底面赤切り

第51図船前地区出土土器①観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口径指数	口底指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	S12401 壁溝直内	赤褐土器	坏	完形	10.5		3.2			浅黄橙	10YR8/4	不良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒	内外面ロクロナデ、底部糸切り 内面に麻縄付着、灯明皿
2	S12401 第2次 カマド	土師器	坏	口縁部～底部						浅黄橙	10YR8/4	不良	やや密 石英、長石、白色針状物、砂粒	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ 体部下端～底部回転ヘラケズリ
3	S12401床直	土師器	坏	底部										内外面ロクロナデ、埋納調整。
4	3TL3	土師器	坏	底部1/4	—	8.0	(2.5)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/4	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ、体部下端～底面手持ちヘラケズリ
5	4TL3	土師器	坏	底部2/3	—	6.2	(1.2)	—	—	明黄褐	10YR6/6	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ、体部下端～底面手持ちヘラケズリ、一部糸切り痕残す。
6	4TL3	土師器	坏	底部2/3	—	7.0	(1.7)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/4	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ、体部下端～底面手持ちヘラケズリ
7	2TL3	土師器	坏	底部1/3	—	7.6	(1.9)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒	内面：ミガキ、黒色処理 外面：ロクロナデ 体部下端～底面手持ちヘラケズリ
8	5TL2	土師器	高坏	脚部	—	—	(5.0)	—	—	明黄褐	10YR6/6	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内面：坏部ミガキ、黒色処理、脚部ヘラナデ 外面：脚部最位ヘラケズリ
9	27TSD1003	土師器	高坏	脚部	—	—	(5.7)	—	—	にぶい黄橙	10YR6/4	良	粗雑 石英、長石、赤色粒多量	内面：坏部ミガキ、黒色処理、脚部ヘラナデ 外面：脚部最位ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ、脚端ヘラナデ、脚者の端界を横位ヘラケズリ 外面：口縁部ヨコナデ、脚部最位ハケ目後最位ヘラケズリ	柱状部にヘラ状工具による側突が貫通
10	SK1001-ST	土師器	甕	口縁部1/6	14.2	—	(13.6)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	良	粗雑 石英、長石、角閃石、砂粒、赤色粒少量	
11	SK1001-ST	土師器	鉢	脚部～底部3/4	—	9.0	16.9	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	外面：ヘラケズリ後ヘラナデ 外面：ヘラケズリ後ヘラナデ

第52図船前地区出土土器②観察表

1	2TL3	須恵器	蓋	天井部～口端部1/4	14.0	—	(2.5)	—	—	褐灰	10YR5/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
2	2TL3	須恵器	蓋	天井部～口端部1/4	16.2	—	(2.5)	—	—	にぶい赤褐	5YR4/3	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
3	14TSK1001-11	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(2.4)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ
4	5TP1 推積土	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(1.8)	—	—	黄灰	2.5Y5/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
5	6TL2	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(3.2)	—	—	黄灰	2.5Y5/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
6	2TL2	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(1.7)	—	—	褐灰	5YR4/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
7	6TL2	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(1.5)	—	—	褐灰	10YR6/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ
8	2TL2	須恵器	蓋	口端部破片資料	—	—	(1.5)	—	—	褐灰	10YR6/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ
9	7TL1	須恵器	坏	口縁部1/4～底部2/3	13.6	7.8	4.1	30.1	55.1	黄灰	2.5Y6/1	良好	緻密 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部ヘラ切り後ヘラナデ
10	3TL3	須恵器	坏	底部1/5	—	6.8	(2.0)			黄灰	2.5Y5/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ 底部糸切り
11	2TL3	須恵器	坏	底部2/5	—	6.8	(1.4)	—	—	灰白	10YR7/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、灰色粒少量	内外面ロクロナデ 外面体部下端～底部回転ヘラケズリ
12	1TL2	須恵器	高台付坏	口縁部～底部破片資料	—	—	(3.9)	—	—	灰	N5/	不良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ 外面底部回転ヘラケズリ 体部外面に2条のロクロ沈線
13	1TL1	須恵器	鐘状～底部	体部～底部2/3	11.0	—	(8.8)	—	—	灰	N4/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒多量	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、底面ヘラナデ 底部一部剥離。内面摩滅
14	2TL3	須恵器	鉢	口縁部破片資料	—	—	(6.0)	—	—	褐灰	10YR5/1	良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ
15	3TL3中	須恵器	鉢	口縁部破片資料	—	—	(6.2)	—	—	褐灰	10YR5/1	良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ
16	4TL3	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(4.9)	—	—	黄灰	2.5Y6/1	良好	緻密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ 内面に自然釉付着。
17	1TL2	須恵器	甕	口縁部破片資料	—	—	(3.0)	—	—	褐灰	10YR5/1	良好	緻密 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ
18	2TL3	須恵器	ヘラ	口縁部破片資料	—	—	(3.3)	—	—	黄灰	2.5Y5/1	良	緻密 長石、黒色粒微量	内外面ロクロナデ 搬入品か
19	2TL3	須恵器	甕	頸～体部	—	—	(3.3)	—	—	赤灰	2.5YR4/1			外面：ロクロナデ、平行タタキ後ナデ
20	6TSD5-11	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.1			—	—	灰	N6/	良好	粗雑 石英、砂粒多量	外面：平行タタキ 内面：同心円文当て具痕
21	6TSD5-11	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.2			—	—	暗青灰	5PB5/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒少量	外面：平行タタキ 内面：同心円文当て具痕
22	3TP34-11	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.3			—	—	灰赤	2.5YR5/2	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	外面：平行タタキ 内面：櫛状文当て具痕
23	4TL3	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.2			—	—	灰黒	7.5YR5/2	良	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	外面：平行タタキ 内面：同心円文当て具痕

第53図船前地区出土土器③観察表

1	11TハイドB中	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.1			—	—	明褐灰	7.5YR7/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	外面：平行タタキ 内面：楕円形同心円文当て具痕
2	4TL2,3	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.3			—	—	灰赤	2.5YR6/2	良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	外面：平行タタキ 内面：櫛状文当て具痕
3	2TP3-11	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ0.8			—	—	オリーブ黒	5Y3/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	外面：撚り糸文タタキ 内面：同心円文当て具痕
4	3TL3	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.2			—	—	黄灰	2.5Y5/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	外面：平行タタキ 内面：平行文当て具痕

第82図船前地区出土土器②観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口高指数	底高指数	色調	焼成	胎土	調整	備考
5	3TハイドP	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.1			—	—	灰 N7/	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	外面:変形平行タタキ 内面:無文当て具痕	
6	4TL3	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.1			—	—	暗青灰 5PB4/1	良好	やや密 石英、長石、角閃石、砂粒少量	外面:格子目タタキ 内面:同心円文当て具痕	
7	2TL3	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.1			—	—	褐灰 10YR5/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	外面:格り出文タタキ 内面:同心円文当て具痕	
8	6TL2	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ0.8			—	—	にぶい橙 7.5YR7/4	良	粗雑 砂粒、黒色粒微量	外面:平行タタキ 内面:同心円文当て具痕	

第84図船前地区出土土器③観察表

1	SB1003-5T	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ0.9			—	—	灰 N6/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	外面:平行タタキ目 内面:無文当て具痕	内面摩滅、現転用か
2	6TSD5-12	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.1			—	—	褐灰 10YR5/1	良好	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒多量	外面:ヘラナデ 内面:ヘラナデ	内面摩滅、現転用か
3	6TSD5-11	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.1			—	—	灰 N5/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	外面:平行タタキ 内面:同心円文当て具痕	外面・内面・破面が摩滅、底不転用
4	4TL3	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.6			—	—	暗灰 N3/	良好	粗雑 石英、長石、砂粒少量	外面:平行タタキ 内面:ヘラナデ	内面摩滅、現転用か
5	4TL3	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ0.9			—	—	赤灰 2.5YR4/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	外面:格子タタキ 内面:同心円文当て具痕	外面・内面・破面が摩滅、底不転用
6	3TL3	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.1			—	—	灰 N4/	良好	緻密 石英、長石、砂粒少量	外面:平行タタキ 内面:同心円文当て具痕	外面が摩滅、底不転用か
7	4TL1	須恵器	甕	体部破片資料	厚さ1.7			—	—	黄灰 2.5Y6/1	良好	緻密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	外面:平行タタキ 内面:同心円文当て具痕	内面摩滅、現転用か

第85図船前地区出土土器⑤観察表

1	10Q6-2T L1	かわらけ	小皿	口縁部1/3～底部1/2							良	粗雑 石英、長石、角閃石、白色針状物、砂粒少量	手づくね成形。内面全面～口縁部外面ヨコナデ、底部外面指頭調整。	
2	10Q5-4T	かわらけ	小皿	口縁部1/8～底部1/4	5.6	3.8	3.4	60.7	67.9	浅黄橙 10YR8/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	
3	10Q5-3T	かわらけ	小皿	口縁部1/20～底部3/4	13.7	8.4	3.4	24.8	61.3	にぶい橙 7.5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り、見込みに渦巻き状のヘラナデ	
4	10Q5-1T	かわらけ	小皿	底部3/4	12.0	8.0	3.7	30.8	66.7	にぶい橙 10YR7/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り、見込みに渦巻き状のヘラナデ	
5	10Q5-1T	かわらけ	小皿	口縁部1/6	5.9	—	—	—	—	にぶい橙 7.5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ	
6	10Q5-1T	かわらけ	小皿	口縁部1/6	6.2	—	—	—	—	にぶい橙 7.5YR6/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ	
7	10Q5-2T	かわらけ	小皿	底部4/5	—	7.4	—	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	良	粗雑 石英、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り、見込みに渦巻き状のヘラナデ	
8	SD1005-6T	かわらけ	小皿	底部1/3	—	7.8	—	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り、見込みに渦巻き状のヘラナデ	
9	10Q5-1T	かわらけ	小皿	底部完存	—	7.0	(1.3)	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り、見込みに渦巻き状のヘラナデ	
10	10Q5-1T	かわらけ	小皿	底部完存	—	7.2	(2.0)	—	—	浅黄橙 10YR8/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内外面ロクロナデ、底部糸切り、見込みに不明瞭な渦巻き状のヘラナデ	
11	10Q5-1T	かわらけ	小皿	底部3/4	—	7.0	(2.1)	—	—	にぶい橙 5YR6/4	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒多量	内外面ロクロナデ、底部糸切り、見込みに不明瞭な渦巻き状のヘラナデ	
12	10Q5-1T	かわらけ	小皿	口縁部1/20～底部完存	9.0	5.7	1.8	20.0	63.3	灰褐 7.5YR6/2	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	口縁部に油煙付着。灯明皿
13	10Q5-1T	かわらけ	小皿	口縁部2/3～底部完存	8.6	5.8	2.1	24.4	67.4	にぶい橙 5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、褐色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	
14	10Q5-3T	かわらけ	小皿	口縁部2/5～底部完存	8.9	5.4	1.7	21.3	67.5	にぶい橙 5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	
15	10Q5-1T	かわらけ	小皿	口縁部4/5～底部完存	8.2	5.2	2.3	28.0	63.4	にぶい橙 7.5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	
16	10Q5-4T	かわらけ	小皿	口縁部2/5～底部完存	8.9	5.6	1.9	23.8	76.0	にぶい橙 5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	口縁部に油煙付着。灯明皿
17	10Q5-1T	かわらけ	小皿	口縁部3/4～底部完存	8.4	6.1	1.9	22.6	72.6	にぶい橙 7.5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	
18	10Q5-2T	かわらけ	小皿	口縁部1/5～底部4/5	7.8	5.6	2.0	25.6	71.8	にぶい橙 7.5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	
19	10Q5-1T	かわらけ	小皿	口縁部～底部1/3	8.6	6.6	2.0	23.3	76.7	にぶい橙 7.5YR7/4	良	粗雑 石英、長石、白色針状物、砂粒、赤色粒少量	内外面ロクロナデ、底部糸切り	
20	10Q5-3T	かわらけ	小皿	口縁部1/10～底部1/4	8.8	6.6	2.2	25.1	75.0	にぶい橙 7.5YR6/3	良	粗雑 石英、長石、砂粒、赤色粒多量	内外面ロクロナデ、体部下端～底部手持ちヘラケズリ	

第86図船前地区出土土器⑥観察表

1	10Q5-6T	白磁	皿	底部1/4	—	3.8	(1.3)	—	—	灰白 10YR7/1	良好	緻密 黒色粒少量	ロクロ成形、削り出し高台。釉存部では內面のみに施釉	中国産14～15c
2	10Q5-2T	青白磁	合子	身の口縁部～底部破片資料	—	—	(2.5)	—	—	明青灰 5BG7/1	良好	緻密 黒色粒微量	ロクロナデ、外面の蓋の受けの部分から內面全面に施釉。外面底部無釉	中国産(龍泉窯)12c～13c、2次的な窯熱あり
3	10Q5-2T	青白磁	合子	蓋の口端部破片資料	—	—	(1.5)	—	—	灰白 N7/	良好	緻密 黒色粒微量	外面天井部に施釉。外面の口端部～內面無釉。外面に型押しによる文様。型づくり	中国産、12c後～13c。公的な窯熱あり
4	10Q5-3T	青磁	鉢	口縁部破片資料	—	—	(3.0)	—	—	黄褐 2.5Y5/4	良好	緻密 灰色の粒土に黒色粒混	內・外面に施釉。外面に片切り彫りによる蓮弁文	中国産(龍泉窯)13c
5	10Q5-2T	緑釉	瓶	体部破片資料	—	—	(2.4)	—	—	明褐と濃い赤色 7.5YR5/8	良好	やや密 明褐色の粒土に褐色粒少量	ロクロナデ。內面にロクロ調整痕明瞭。外面に箆削による施文。緑釉。もしくは一部に褐釉がみられるため三彩の施釉。內面無釉	中国産、鐘倉時代？6、7と同一個体か
6	10Q5-2T	緑釉	瓶	体部破片資料	—	—	(2.8)	—	—	明褐と濃い赤色 7.5YR5/8	良好	やや密 明褐色の粒土に褐色粒少量	ロクロナデ。內面にロクロ調整痕明瞭。外面に箆削による施文。緑釉。もしくは一部に褐釉がみられるため三彩の施釉。內面無釉	中国産、鐘倉時代？5、7と同一個体か

第56図館前地区出土器印観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口高部径	口底部径	色調	焼成	胎土	調整	備考
7	10次-3T	縄地	甕	体部破片資料	—	—	(7.6)	—	—	明褐と濃い紺色	良好	7.5YR5/8	ロクロナデ,内面にロクロ調整痕明瞭,縄地,もしくは一部に粗縄かみとれたのち二部の施釉,内面無釉	ロクロナデ,内面にロクロ調整痕明瞭,縄地,もしくは一部に粗縄かみとれたのち二部の施釉,内面無釉
8	SD1001-4T	古瀬戸	平椀	体部破片資料	—	—	(5.3)	—	—	やや密 オリーブ	良好	5Y6/2	やや密 灰色の胎土に白色粒,黒色粒少量	ロクロナデ,内面全面一外面体部上半に灰釉を施釉,底部近くは無釉
9	10次-3T	古瀬戸	鉄鉢	口縁部1/5	17.8	—	(4.2)	—	—	黒褐 灰白	良好	2.5Y3/1 2.5Y7/1	やや密 灰色の胎土に石英,黒色粒少量	ロクロナデ,内・外面とも灰釉を施釉,外面の部分は無釉
10	10次	古瀬戸	卸皿	口縁部破片資料	—	—	(2.8)	—	—	灰白	良好	5Y7/2	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,内・外面とも灰釉を施釉,残存部に片口あり。
11	10次-3T	古瀬戸	卸皿	口縁部破片資料	—	—	(3.3)	—	—	暗褐赤褐	良好	5YR2/3	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,内・外面とも灰釉を施釉
12	10次-16T	古瀬戸	卸皿	口縁部破片資料	—	—	(3.1)	—	—	灰 オリーブ	良好	5Y6/2	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,内・外面とも灰釉を施釉。
13	10次-17	古瀬戸	卸皿	口縁部破片資料	—	—	(2.7)	—	—	灰白	良好	2.5Y7/1	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,内・外面とも灰釉を施釉。
14	10次-6T ハイド	古瀬戸	折縁深皿	口縁部破片資料	—	—	(2.3)	—	—	灰 オリーブ	良好	5Y6/2	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,内・外面に灰釉を施釉。
15	10次-7T	古瀬戸	折縁深皿	口縁部破片資料	—	—	(2.1)	—	—	にぶい黄橙	良好	10YR7/2	やや密 灰色の胎土に黒色粒微微量	ロクロナデ,内・外面に灰釉を施釉,ただ外的な装飾で調整。
16	10次-6T	古瀬戸	灰釉皿	口縁部1/6	9.6	—	(2.0)	—	—	オリーブ黄	良好	7.5Y6/3	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,内・外面に灰釉を施釉。
17	10次-6T	古瀬戸	灰釉皿	口縁部破片資料	—	5.8	(1.8)	—	—	オリーブ黄	良好	7.5Y6/3	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,内・外面に灰釉を施釉。
18	10次-6T ハイド	古瀬戸	灰釉皿	底部1/8	—	6.0	(2.0)	—	—	オリーブ黄	良好	7.5Y6/3	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,削り出し高台,内・外面体部に灰釉を施釉,底面・見込
19	10次-6T ハイド	古瀬戸	灰釉皿	底部1/6	—	—	(2.0)	—	—	オリーブ黄	良好	5Y6/3	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,削り出し高台,外面の底台一内面全面に灰釉を施釉,外面底部のみ無釉
20	10次-2T	古瀬戸	緑釉小皿	口縁部～底部破片資料	—	—	(3.2)	—	—	上:暗灰黄 下:明黄褐	良好	2.5Y5/2 5Y7/6	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,底部糸切り,内外面とも口縁部のみに灰釉を施釉,体部一底部は無釉
21	10次-2T	古瀬戸	灰釉壺	口縁部1/10	20.0	—	(3.5)	—	—	灰白	良好	5Y7/1	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,内・外面に灰釉を施釉。
22	SD1005-6T	古瀬戸	瓶子	体部破片資料	—	—	(9.0)	—	—	オリーブ	良好	5Y5/4	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,外面に灰釉を施釉,内面無釉。
23	SD1005-6T	古瀬戸	瓶子	体部破片資料	—	—	(12.0)	—	—	オリーブ	良好	5Y5/4	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	ロクロナデ,外面に灰釉を施釉,内面無釉。
24	10次-3T	古瀬戸	瓶子	胴部破片資料	—	—	(5.5)	—	—	灰白	良好	10Y7/2	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	外面胴部に3条のロクロ沈線,内面ナデ,外面に灰釉,内面に無釉。
25	10次-1T	古瀬戸	花瓶	口縁部1/4	4.4	—	(3.4)	—	—	褐暗赤褐	良好	5YR2/3	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	内外面ロクロナデ,外面全面～口縁部内面の幅1.5cm程どまでに鉄釉を施釉
26	10次-3T	古瀬戸	入子	口縁部1/5～底部1/2	7.9	5.0	2.1	36.0	71.4	にぶい黄橙	良好	10YR7/2	やや密 灰色の胎土に黒色粒微量	内外面ロクロナデ,見込みに指ナデ,底面手持ちヘラケズリ,外面口縁部～内面全面にハケヌリで薄く灰釉を施釉。
27	10次-2T	古瀬戸	入子	底部1/4	—	4.0	(1.8)	—	—	にぶい黄橙	良好	10YR7/3	微密 灰黄褐色の胎土に黒色粒微微量	内外面ロクロナデ,見込みに指ナデ,底部糸切り,内面にハケヌリで薄く灰釉を施釉。
28	10次-2T	古瀬戸	入子	底部完存	—	6.0	(1.6)	—	—	褐灰	良好	7.5YR7/1	微密 淡黄灰色の胎土に黒色粒微微量	内外面ロクロナデ,見込みに指ナデ,底面手持ちヘラケズリ,内面にハケヌリで薄く灰釉を施釉。
29	10次-9T	瀬戸	天目茶椀	体部～底部1/5	—	5.2	(2.7)	—	—	暗赤灰	良好	2.5YR1/3	粗緻 淡灰褐色の胎土に黒色粒微微量	内外面ロクロナデ,外面体部下端～底面を残し,全面に鉄釉を施釉。
30	10次-7T	瀬戸	天目茶椀	口縁部破片資料	—	—	(3.2)	—	—	紫黒	良好	5RP4/7.1	やや密 淡灰褐色の胎土に黒色粒少量	内外面ロクロナデ,外面に厚く鉄釉を施釉。
31	10次-4T	瀬戸	鉄鉢椀	底部1/4	—	5.8	(2.1)	—	—	にぶい橙	良好	5YR6/4	やや密 淡灰褐色の胎土に黒色粒少量	内外面ロクロナデ,底部糸切り,内面全面に鉄釉を施釉,外面体部～底部にも一部鉄釉
32	10次-8T	瀬戸a	瓶子	胴部破片資料	—	—	(4.5)	—	—	にぶい黄橙	良好	10YR7/3	やや密 淡灰黄色の胎土に黒色粒少量	内外面ロクロナデ,外面全面に白釉,肩部に鉄絵で3本の横線
33	10次-6T	瀬戸a	鉄鉢	口縁部1/10～底部2/5	11.4	6.8	2.2	19.3	59.6	灰黄	良好	2.5Y7/2	粗緻 淡灰褐色の胎土	内外面ロクロナデ,削り出し高台,全面に白釉,見込みに鉄絵
34	10次東斜面表採	瀬戸	灰釉丸皿	口縁部～底部1/2	12.4	6.6	2.4	19.4	53.2	灰 オリーブ	良好	5Y6/2	粗緻 淡灰褐色の胎土	内面ロクロナデ,削り出し高台,外面底部中央を除く全面に鉄釉を施釉
35	10次-2T	瀬戸	鉄鉢皿	底部1/4	—	7.6	(1.3)	—	—	灰褐橙	10YR6/1 10YR3/3	良好	やや密 灰白色の胎土	内外面ロクロナデ,全面に鉄釉と赤褐釉(長石釉)を半分ずつ施釉
36	10次 表採	初期伊万里	染付椀	口縁部破片資料	—	4.2	(2.0)	—	—	灰白	10YR8/1	良好	微密 白色の胎土に黒色粒微微量	外面に染付け
37	10次-2T ハイド	初期伊万里	染付椀	底部1/2	—	4.4	(2.7)	—	—	灰白	5GY8/1	良好	微密 白色の胎土に黒色粒少量	内外面ロクロナデ,削り出し高台,内面に染付
38	10次-4T	初期伊万里	青白磁椀	底部1/4	—	5.8	(2.1)	—	—	にぶい橙	良好	5YR6/4	微密 白色の胎土に黒色粒微微量	内外面ロクロナデ,削り出し高台,高台・外面底部を残し内面全面一外面体部に施釉
39	10次-7T	志野	皿	口縁部破片資料	—	—	(1.8)	—	—	灰白	10YR7/1	良好	粗緻 淡灰褐色の胎土に黒色粒・赤色粒	内・外面に長石釉を施釉
40	10次-2T,7T	志野	？	体部破片資料	—	—	(2.8)	—	—	灰白	10YR7/1	良好	粗緻 淡灰褐色の胎土	内・外面に長石釉を施釉
41	10次-6T 表採	唐津	輪小皿	底部1/5	—	—	(1.9)	—	—	灰褐	7.5YR6/2	良好	粗緻 暗灰褐色の胎土,砂粒,白色粒少量	内外面ロクロナデ,削り出し高台,内面全面に土灰釉？施釉,見込みに鉄絵か,外面の一部に釉付着

第37図館前地区出土土器①観察表

No.	出土遺構	種別	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁径	口底径	色調	焼成	胎土	調整	備考
1	SK1001-14T	常滑	甕	口頸部1/5	20.8	—	(9.4)	(45.2)	—	灰赤 10R4/2	良好	粗鐵 石英、長石多量	内・外面口頸部ヨコナデ、肩部内面に指頭押圧痕。	外面の口頸部、内面口縁部に降灰
2	SK1002-14T	常滑	甕	口頸部1/10	22.0	—	(9.5)	(43.2)	—	灰 N4/	良好	粗鐵 石英、長石多量	内・外面口頸部ヨコナデ、肩部内面に指頭押圧痕。	外面の口頸部、内面口縁部に降灰
3	10次-4T	常滑	甕	口頸部1/10	24.4	—	(6.1)	(25.0)	—	黒 5YR7/1	良好	粗鐵 石英、長石多量	内・外面ヨコナデ。	外面口頸部～内面口縁部にかけて自然釉付着。
4	10次-4T	常滑	甕	口縁部破片資料	—	—	(6.4)	—	—	灰褐 7.5YR4/2	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内・外面にヨコナデ。	13～14c
5	10次-6T	常滑	甕	口縁部破片資料	—	—	(4.3)	—	—	灰 5Y4/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内・外面ヨコナデ。	外面口頸部に自然釉、内面口縁部に降灰
6	10次-4T	常滑	甕	体部破片資料	—	—	(7.2)	—	—	褐灰 7.5YR4/1	良好	やや密 石英、長石、砂粒、黒色粒少量	内に ヨコナデ、外面に並行沿板子叩き目を残す。	
7	SK1002-14T	常滑	甕	底部1/5	—	14.6	(6.5)	—	—	灰褐 7.5YR5/2	良好	粗鐵 石英、長石、黒色粒、赤色粒少量	外面ヘラナデ、内面自然釉付着のため調整不明。	内面に自然釉付着
8	10次-4T	常滑	片口鉢	口縁部破片資料	—	—	(10.8)	—	—	灰 N6/	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒少量	内面口縁部～外面口縁部ロクロナデ、外面体部指頭押圧、内面体部擦滅	灰色の焼き上がり
9	10次-4T	常滑	片口鉢	底部1/10	—	16.8	(6.4)	—	—	赤灰 2.5YR5/1	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒、黒色粒多量	外面ヘラナデ、指頭押圧、内面擦滅	
10	10次-4T	常滑	片口鉢	口縁部破片資料	—	—	(6.5)	—	—	赤褐 10R5/3	良好	粗鐵 石英、長石多量	内外面ロクロナデ	口縁端部に降灰
11	10次-3L 4T	常滑	片口鉢	口縁部破片資料	—	—	(4.7)	—	—	灰褐 7.5YR5/2	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ	口縁端部に降灰
12	10次-4T	常滑	片口鉢	底部1/10	—	7.6	(11.6)	—	—	灰褐 7.5YR5/2	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ、付け高台。内面体部擦滅	灰色の焼き上がり
13	10次-3T	常滑	こね鉢	底部1/6	—	—	(5.2)	—	—	暗灰 5PB/1	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒、鳴色粒多量	内外面ロクロナデ、体部下端にヘラケズリ後、付け高台。内面擦滅	灰色の焼き上がり 山茶碗系
14	10次-4T L2	常滑	壺	肩部破片資料	—	—	(4.3)	—	—		良好	粗鐵 石英、長石、黒色粒多量	外面：ロクロナデ 内面：指頭押圧、横分強残す。	肩部と胴部との境界にツブ状の突起

第38図館前地区出土土器②観察表

1	10次-7T	在地系陶器	甕	口縁部破片資料	—	—	(7.3)	—	—	赤褐 10R5/4	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒少量	内・外面ヨコナデ	赤色の胎土に白色の胎土がマーブル状に混ざる。
2	10次-2T	在地系陶器	甕	口縁部破片資料	—	—	(5.1)	—	—	にぶい赤褐 2.5YR4/4	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒少量	内・外面ヨコナデ	1と同一個体か
3	10次-12T	在地系陶器	鉢	肩部破片資料	—	—	(16.1)	—	—	にぶい赤褐 2.5YR4/3	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒少量	内・外面ヘラナデ、口縁部付近はヨコナデ	
4	10次-4T	在地系陶器	鉢	口縁部破片資料	—	—	(3.8)	—	—	赤橙 10R6/6	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒少量	内・外面口縁部ヨコナデ、外面体部ヘラナデ、内面体部擦滅	
5	10次-2T	常滑か在地系陶器	擂鉢	口縁部破片資料	—	—	(4.5)	—	—	鳴灰 10YR5/1	良好	粗鐵 石英、長石、砂粒多量	内外面ロクロナデ、内面におろし目	岸源
6	10次-2T	在地系陶器	擂鉢	口縁部破片資料	—	—	(3.5)	—	—	にぶい赤橙 2.5YR6/4	良好	粗鐵 石英、白色粒少量	内・外面ヘラナデ、内面におろし目	岸源

報 告 書 抄 録

ふりがな	いずみかんがいせき
書　　名	泉官衙遺跡
副 書 名	陸奥国行方郡家出土土器・木簡の報告
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第20集
編著者名	堀　耕平・荒　淑人・藤木　海
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化財課
所 在 地	〒975-0051　福島県南相馬市原町区牛来字出口194　電話0244-24-5284
発行年月日	西暦2012（平成24年）３月30日

所収遺跡	所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
泉官衙遺跡（泉廃寺跡）	南相馬市原町区泉字寺家前、宮前、町池、町、舘前	07206 00097	37° 39′ 50″	141° 00′ 50″	19941201 ～ 20090316	66,652	各種開発事業及び保存目的のための確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物	特記事項
泉官衙遺跡（泉廃寺跡）	官衙	奈良・平安	正倉院、郡庁院、館院、掘立柱建物跡、礎石建物跡、竪穴住居跡、運河状遺構	土師器、須恵器、瓦、木簡、柱	陸奥国行方郡家跡 平成22年２月22日 国史跡指定

印　刷　平成24年３月30日
発　行　平成24年３月30日

南相馬市埋蔵文化財調査報告書第20集

泉官衙遺跡

－陸奥国行方郡家出土土器・木管の報告－

編　集　南相馬市教育委員会文化財課
〒975-0012　福島県南相馬市原町区牛来字出口194
電話 0244－24－5284

発　行　南相馬市教育委員会

印　刷　株式会社　こはた印刷所
〒975-0002　福島県南相馬市原町区東町二丁目99番地